

陳情第 8号

養生所/(長崎)医学校等遺跡の  
保存・保護・整備・公開に関する陳情書 XVI

(旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)

長崎奉行所西役所等遺跡群の  
調査・保存・活用・公開・整備に関する陳情書 VII

(サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)

2020年(令和2年)6月5日 金曜日

長崎市議会議長 佐藤正洋 様

陳情人

〒852-8127

長崎県長崎市大手二丁目十七-四十六-一〇二

養生所を考える会 代表 池知和恭



内 容

第一部 原遺跡計画、並びに

否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成

I. 原遺跡計画

II. 否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成

第二部 遺跡について

第三部 遺跡

I. 遺跡

II. 遺跡と風土と文明、又、私達人類の公共と私達人類の選択、又人類の分断

III. 遺跡、その存在の性格と関連事象について

IV. 遺跡たる事象

V. 日本地域について

VI. 長崎地域とその遺跡について

VII. 私達 当会より、皆様への、提案と要望について

VIII. 長崎地域の遺跡への提案と要望

IX. 長崎地域の特定の個別の遺跡群について

一. 長崎地域の浦上地区遺跡群について

二. 長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について

三. 長崎地域の桜町地区遺跡群について

四. 養生所/(長崎)医学校等遺跡(“佐古の丘の地形”、“中核区域”、“運用区域”、“関連区域”)について

五. 『長崎市歴史的風致維持向上計画』並びに『国土交通省長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化』並びに『長崎県松が枝地区再開発構想 ～港湾整備と一体となったまちづくり～』について

X. その他

XI. 添付資料

## 第一部 原遺跡計画、並びに

否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成

### 1. 原遺跡計画

私達 当会は、皆様に、以下に記す『原遺跡計画』の実現を提案し要望します。

私達 当会は、宇宙、並びに、地球上に現生人類が出現する以前と以降の地球の自然、並びに、地球上に現生人類が出現して以降の、現生人類の活動の痕跡、即ち、時に自然と人工に対する改変、即ち、活動の結果、即ち、遺跡、について、過去、現在、未来の私達 人類の存在上の根源的な存在であり、且つ、蓄積としての事象である、と理解します。

私達 当会は、宇宙、並びに、地球上に現生人類が出現する以前と以降の地球の自然、並びに、遺跡、について、その在り得る総体を「原遺跡」と呼称し認識します。

私達 当会は、私達 人類について、宇宙、並びに、地球上に現生人類が出現する以前と以降の地球の自然、並びに、地球上に現生人類が出現して以降、逐次、蓄積された遺跡に関して、共時的通時的に、且つ、その関係性に於いて、体系的に、認識し、把握し得る、と認識します。

私達 当会は、私達 人類によって、体系的に把握され得る、宇宙、並びに、人類出現以前以降の地球の自然、並びに、逐次蓄積された遺跡、について、之を、その存在の在り方として、且つ、可視的・可聴的・可香的・可触的・可味のな実態として、宇宙の空間に顕現し、且つ、私達 人類の活動の空間、又、私達 人類の身近な活動の空間に於いて、着実に効果的な空間概念並びに体積を以って、顕現すること、を提案し要望します。

私達 当会は、私達 人類について、過去たる宇宙、並びに、過去たる自然、並びに、人類の過去たる事象、その存在を、任意に、且つ、常に又身近に、体験し、感知することで、人類に関する事象の過去から現在そして未来への変化の方向性と関係性を身体的に感知し認識し、依って、私達 人類の意図に於いて、安全で、安定し、多様かつ豊かな人類の社会を形成し得る、基礎的な能力を醸成し得る、と理解します。

私達 当会は、「原遺跡」を保全し又は回復して担保する「計画」を『原遺跡担保計画』、「原遺跡」を私達 人類の活動の空間に顕現する「計画」を『原遺跡応用計画』、その総体を『原遺跡計画』として、之を、認識し、皆様に、当該計画を、提案します。

私達 当会は、皆様に、当該の『原遺跡計画』を計画し実行する事、を提案し要望します。

私達 当会は、当該の『原遺跡計画』について、私達 人類が成し得る、遺跡の保全と活用に関する、最終的な形態、又は、最終的な形態への概念、同時に、遺産に与えられる人々の生活の中での機能としての概念、である、と認識します。

## II. 否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成

### 1. フランスのラスコー洞窟の遺跡について

ラスコー洞窟(仏:Grotte de Lascaux)は、フランスの西南部ドルドーニュ県、ヴェゼール渓谷のモンティニャックの南東の丘の上に位置する洞窟である。先史時代(オーリニャック文化)の洞窟壁画で有名である。

ラスコー洞窟の壁画は、アルタミラ洞窟壁画と並ぶ先史時代(フランコ・カンタブリア美術)の美術作品である。これは1940年9月12日、モンティニャック村の少年が、穴に落ちた飼い犬を友達3人と救出した際に発見された。……これらは20,000年前の後期旧石器時代のクロマニヨン人によって描かれていた。炭酸カルシウム形成が壁画の保存効果を高めた「天然のフレスコ画」と言うことができる。

……現在は壁画修復が進む一方、1日に数名の研究者らに応募させ入場・鑑賞させているほかは、ラスコーの壁画は1963年4月20日に非公開とされている。……(Wikipedia「ラスコー洞窟」最終更新 2020年3月31日(火)13:38)

---

### 『ヴェゼール渓谷の先史的景観と装飾洞窟群』[世界遺産]

フランスを代表する世界遺産の一つ、ヴェゼール渓谷の先史的景観と装飾洞窟群。フランス南西部モンティニャックを中心とする広大なエリアに点在する、2万年ほどの歴史をもつ遺跡群は、他の世界遺産にはない美しさや荘厳さを放っています。

中でも1940年にモンティニャックの子どもたちに偶然発見されたラスコー洞窟は、フランスだけに留まらず世界中の注目を集めるほど大人気です。

(ヴェゼール渓谷の先史的景観と装飾洞窟群(英語名:Prehistoric Site and Decorated Caves of the Vézère Valley)は、1979年にユネスコの世界遺産に登録された、フランスの文化遺産物件の名称(2006年に改称)。ヴェゼール渓谷(Vézère Valley,ドルドーニュ県のレゼイジ=ドゥ=タイヤック=シルイユからモンティニャックにかけての40kmほどの間に広がっている地域)に点在する先史時代遺跡群のうち、ユネスコによって選定された重要性の高い物件の総称である。

概要 鮮やかな洞窟壁画で有名なラスコー洞窟や、クロマニヨン人の骨が発見されたアブリ・ドゥ・クロ=マニヨン(クロ=マニヨン岩陰遺跡、仏:Abri de Cro-Magnon、英:Rock shelter of Cro-Magnon)、ネアンデルタール人が担ったムスティエ文化のアブリ・デュ・ムスティエ(ムスティエ岩陰遺跡群、仏:Les abris du Moustier)などが含まれる。

……  
登録基準 …… ・(1)人類の創造的才能を表現する傑作 ・(3)現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠

登録リスト 洞窟壁画のある遺跡群 ・アブリ・デュ・ポワソン(fr:Abri du Poisson) ・フォン=ドゥ=ゴーム洞窟(fr:Grotte de Font-de-Gaume/en:Font de Gaume) ・ムート洞窟(fr:Grotte de la Vache) ・コンバレル洞窟(fr:Grotte des Combarelles) ・アブリ・ドゥ・カプ・ブラン(fr:Abri de Cap Blanc) ・ラスコー洞窟(fr:Grotte de Lascaux/en:Lascaux) ・ルーフィニャック洞窟(fr:Grotte de Rouffignac) ・ロック・ドゥ・サン=シルク(fr:Roc de Saint-Cirq) 洞窟壁画のない遺跡群 ・アブリ・ドゥ・クロ=マニヨン(fr:Abri de Cro-Magnon/en:Rock shelter of Cro-Magnon) ・ミコック(fr:La Micoque) ・ロジュリー=バス(fr:Lauerie-Basse) ・ロジュリー=オート(fr:Lauerie-Haute) ・グラン・ロック洞窟(fr:Grotte du Grand Roc) ・アブリ・デュ・ムスティエ(fr:Les abris du Moustier/en:Le Moustier) ・アブリ・ドゥ・ラ・マドレーヌ(fr:Abri de la Madeleine) (Wikipedia「ヴェゼール渓谷の先史的景観と装飾洞窟群」最終更新 2020年3月31日(火)13:30)

---

私達 当会は、ラスコー洞窟の壁画の絵画としての20,000年前の現生人類であるクロマニヨン人の再現性、描画に於いて、視覚情報の取得、その認知、解釈としての認識、材料の作成、道具の作成、その用法、行為する身体能力、骨格や筋肉の構成等、即ち、生物種としての知性、肉体の存在の双方ともに、20,000年後の現代の現生人類である日本人の私達のそれと有意な差異はなく、全ては同じである、と仮定します。

私達 当会のこの仮定は、私達 人類にとっての地球上の20,000年の時空を超えて、私達 現生人類に、生物種としての知性、肉体の存在に、人類存在上の有意な変化や進化がないこと、を示唆します。

2. 2020年(令和2年)4月掲載の日本経済新聞の連載特集記事『コロナと世界』より

(1) 2020年(令和2年)4月9日 木曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-1-

『コロナと世界 テクノロジーが権力に』 仏経済学者 ジャック・アタリ 氏  
Jacques Attali 1943年生まれ。仏国立行政大学院卒。  
81~91年、ミッテラン大統領の特別顧問を務めた。91~93年、欧州復興開発銀行の初代総裁。  
著書に『21世紀の歴史』など。

新型コロナウイルスの感染拡大は人類にとって歴史的な危機になりつつある。世界は今後どう変わっていくのか。人類はコロナとどう闘っていけばよいのか。

—新型コロナは世界経済をどう変えますか。

「危機が示したのは命を守る分野の経済価値の高さだ。健康、食品、衛生、デジタル、物流、クリーンエネルギー、教育、文化、研究などが該当する。これらを合計すると、各国の国内総生産(GDP)の5~6割を占めるが、危機を機に割合を高めるべきだ」「経済の非常事態は長く続く。これらの分野を犠牲にした企業の救済策を作るべきではない。そして、企業はこれらと関係のある事業を探していかなければいけない」

—世界経済を立て直すのに必要なことは。

「誰も第1の優先事項とは考えていないようだが、ワクチンと治療薬に極めて多額の資金を充てることだ。いくつか支援策は発表されているが、ばかっているとかわざるを得ないほど少額だ。この問題はワクチンや治療薬があれば解決し、なければ解決しない。それにより危機は3カ月で終わるかもしれない、3年続くかもしれない。」

—人類学的に見て新型コロナはどんな意味を持つのでしょうか。

「権力の変容が起こるとみている。歴史上、大きな感染症は権力の変容を生んできた。例えば15世紀ごろにはペストの発生を機に教会から政治に権力が移った。政治が感染者を隔離するなどの力を持ったからだ」「その後の感染症で人々は科学が問題を解決すると考えるようになった。政治から科学への権力の移転だ。これまで我々はこの段階にいた。新型コロナの対策ではテクノロジーが力を持っている。問題はテクノロジーを全体主義の道具とするか、利他的かつ他者と共感する手段とすべきかだ。私が答える『明日の民主主義』は後者だ」

—中国では経済活動が再開しつつあります。危機を乗り越えた勝者となるのでしょうか。

「そうは思わない。技術を持った国としての存在感は高まるが内政で大きな問題を抱える。米国内が分断を続け、欧州が中国によるアフリカなどへのコロナ支援を黙認する。この2つの“失敗”が起こらない限り、中国が世界の中心にのし上がることはない。中国という国の透明性のなさに、世界からはますます不信の目が向けられる」

—コロナで大衆迎合主義(ポピュリズム)は勢いを増しませんか。

「当初はドイツ、オランダ、チェコなどで(国境封鎖といった)自国優先の動きがあったが、今は金融でも産業でも欧州の結束が強まっている。結束できないと『各国がバラバラに行動した方がうまくいく』と喝える勢力は力を伸ばすが、私は悲観的ではない」

—日本はどうか危機から脱するでしょうか。

「日本は危機対応に必要な要素、すなわち国の結束、知力、技術力、慎重さを全て持った国だ。島国で出入国を管理しやすく、対応も他国に比べると容易だ。危機が終わったとき日本は国力を高めているだろう」(聞き手はパリ=白石透彦)

(2) 2020年(令和2年)4月10日 金曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-2-

『コロナと世界 脅威は続く科学は途上』 京都大特別教授 本庶 佑 氏  
ほんじょ・たすく 分子生物学者で2018年、「免疫抑制の阻害によるがん療法の発見」でノーベル賞を受賞した。  
新型コロナ対策で検査の大幅な拡充などを提言している。

—新型コロナウィルスの災禍をどうみますか。

「今は緊急事態、非常事態で最大の困難だ。多くの人命が失われ、世界中の経済が大打撃を受けている。重大なものはどれだけ備を減らすか、ぬかるみにはまったようなものだから、いかにして脱出するか。そのために何が出来るか知恵を絞る。どの国がいち早く抜け出せられるかの競争になる。そのためにウイルス感染をコントロールする。感染者の急増と、それに伴う医療崩壊は絶対に避けたい」「人々がパニックになるのは死ぬからだ。死亡者を少なくするには治療薬がある。中国からなる報告を生かす。推奨している薬はほとんど使わず。超法規的に保険適用。あるいは集める措置を政府がとるべきだ」

—感染症の脅威から人類はなぜ逃れられないのですか。

「医学は20年前に比べても格段に進歩したが新しいウイルスがでてきたら新しい手立てが要る。物理・化学は論理的で全体の姿が確立しているが生命科学はわからないことが多い未熟な学問だ。たった一つの変ったウイルスが出てきて世界がひっくり返るようになる。なんでだと思える人はたくさんいるだろうが、これが現実だ。」「感染症とがんとはまったく違う。感染症は伝播してあとという間に患者が増える。一方、がんは発症率はほとんど変わらない。治療率もほぼ同じ。安定した医学的知見が積み重なっている」「免疫学と一体的で感染症研究を進めなければならぬ。ウイルスだけをみていても意味がなくなる人間がどう反応するかを探る必要がある」

—コロナ後の世界はどうなるのでしょうか。

「新型コロナの大流行が起こったからといって人の動きを永遠に止めることはできない。グローバル化の流れが逆戻りするとはみていない」「中国の動向が大きい。中国発の病気が、一番早く経済復興にたどりつくに違いない。中国の力がさらに強くなるのか、逆に世界中から冷たくあしらわれるのか。予想できないが、中国の立ち位置、各国の中国を見る目が影響を受けるだろうし、国際秩序が変わる可能性はある」

—日本の課題は何ですか。

「感染症対策は一種の戦争のようなところがある。いざというときには社会システムをコントロールして、かなり強い権限をもって対応する。専門家が平時から政策提言し、行政が実行に移していかなければならないが、日本はそうっていない。疾病対策センター(CDC)のように常に目を光らせて、研究と行政との接点みたいなことをやる。医学における自衛隊のような仕組みがないのはよくない」「IT戦略の遅れ、いかに社会実装されていないかがあらわになった。台湾の取組みはとても参考になる。マイナンバーが一つのカードで個人の医療情報もわかるようになっている。教育だってオンラインの方が先生と生徒の1対1感が強まる。40人の教室で孤独感を味わわずにすむ。どんどんやったらいい」(聞き手は編集委員 矢野寿彦)

(3) 2020年(令和2年)4月11日 土曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-3-

『コロナと世界 市民の良識、未来を左右』 科学史家 村上 陽一郎 氏  
むらかみ・よういちろう 1936年東京生まれ。62年東大教授卒。  
科学史、科学思想史が専門。東大・国際基督教大学名誉教授。著作に「ペスト大流行」「安全学」など。

—新型コロナはスペイン風邪やペストなど歴史的な感染症に匹敵するとの見方もあります。

「人によっては生死にかかわるのに軽症や無症状のひととたくさんいる。宿主となった感染者がすぐに死んでしまうとウイルスは広がれないが、歩き回れる宿主も多い新型コロナは拡散しやすい。その点では戦略的に『賢いウイルス』といえる」「人の行動範囲はかつてと比べて格段に広がったので、ウイルスの広がるスピードが上がり、感染の連鎖を断ち切るのが難しい。治療法やワクチンがない現状では、他人との接触を強制的に断つしかない。医療のキャパシティを上回ると、重症度に応じた感染者の隔離も必要だ。人がとれる対策は中世や近世とさほど変わらない」「都市封鎖の手法も古くから使われてきた。14世紀にペストが流行した欧州では、警察や軍隊が出動して隔離し、社会をコントロールした。それでも約3000万人が死んだと推計されている」

—今日も感染症対策のため、やむをえず国民の自由を制約する動きが世界中で出ています。

「中国のように強権的な政権や独裁政治のほうが果敢な措置を取りやすいのは確かだ。一方の日本では首相が緊急事態宣言を出すのにも時間がかかった。危機を前にして人権を尊重する社会は脆弱ともいえるが、国家主義や全体主義の台頭は許してはいけない」「感染症対策という視点でみれば、対策が遅くなるほど感染者は増える。民主主義、自由主義の国家は国民ひとりひとりが自ら良識を備え、合理的に判断して行動するのを理想としている。しかし、いくら情報化が進んで対策を周知しても、すべての人間に実行を徹底させるのは難しい。その結びが、感染症を防ぐ上では障害となる」

—科学に携わる者の役割は何でしょうか。

「人は危機的な状況に陥ると正確な情報に飛びつきやすい。不安や怒りに駆られ、ものごとを即断してしまいがちだ。科学者には、社会の普通の人々が普通の感覚で抱く疑問に対し、分かりやすく丁寧に説明する姿勢が求められる」「感染症対策を喝める専門家への不信、デマの流布がみられる。私が研究した中世の欧州ペスト流行時にも、病人と視線を合わせると感染するといったデマが横行した。ネットの上には真偽の不確かな情報があふれており専門家と人々をつなぐ科学ジャーナリズムや科学コミュニケーターの役割がより重要になる」

—情報を受け取る個人に必要な心構えはありますか。

「一部の権威ある人々がすべてを決定した時代と異なり、今は社会にとって何が合理的なのかを最終的に判断するのは市民だ。個人の良識や常識、健全な思考に私たちの未来はかかっていると再認識すべきだ」「日本の場合、近代の科学技術が導入された明治期から、実践に役立つ『技術』を重視する傾向が強かったが、今こそ『科学的な思想と態度』を身に付けるときだ。自然の疑や『分からないこと』と真剣に向き合い、問い続ける。その継続によって良識は養われる」(聞き手は編集委員 山川公生)

(4) 2020年(令和2年)4月14日 火曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-5-

『コロナと世界 争いの時代 協調こそ解』 生物地理学者 ジャレド・ダイヤモンド 氏  
Jared Diamond 1937年生まれ。  
カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授。  
1万3000年に及ぶ人類史を描いた『銃・病原菌・鉄』でピューリッツァー賞を受賞した。近著に「危機と人類」。

—人類は過去に多くの危機に直面してきました。新型コロナウイルスの感染拡大をどう位置付けますか。

「14世紀の黒死病(ペスト)では欧州の人口の約3分の1が死亡し、経済が回復するまでに1世紀の期間を要した。世界恐慌は回復までには10~12年かかったが、今回はより短いだろう。それでも誰もが認める危機であり、若い人たちはもっとも深刻と感じるはずだ。」「黒死病は影響が大きかったものの、感染が広がったのはユーラシア大陸だけだった。1918年のスペイン風邪は致死率は11%と新型コロナの2%よりも高かったが、感染拡大のペースは緩やかだった。一方、(輸送)技術の発達で不利に働き、今回は4カ月ほどでパンデミック(世界的な大流行)

となった」

一備えは十分だったといえますか。

「不十分だった。過去60年にわたりエイズや重症急性呼吸器症候群(SARS)、中東呼吸器症候群(MERS)といった新たな疾病と向き合ってきたにもかかわらず、米国政府は担当機関を解散してしまった。十分な数量のマスクを用意していたフィンランドのような例外はあるものの、多くの国は準備不足だ」「SARSは野生動物が感染源となり、中国の動物市場から広がった。市場を閉鎖すべきだったが中国政府は見送り、同じパターンで新型コロナが拡大した。中国は伝統的な医療のために野生動物の利用を続けている。このままでは確実にパンデミックが再発する」

一歴史にどのような影響を及ぼしますか。

「新型コロナの封じ込めは世界各国が足並みをそろえないと困難だ。戦いに勝つには国際的な協力体制が要る。世界的な問題を解決するモデルになり、核や気候変動、水産資源の保護といった課題に国際社会が協調して取り組む契機になるのが最良のシナリオだ」

一楽観的すぎませんか。

「不足している人工呼吸器やマスクの購入で複数の国が争うなど悲観的になる理由はたくさんある。一方、ワクチンの開発などで世界中の科学者が連携し、米国と中国も多くの分野で手を携えるなど協力の兆候もある。世界的な問題が解決される可能性は51%と主張してきたが、新型コロナはもっと高いはずだ」

一中国が影響力を強める契機となるとの指摘もあります。

「状況は変わらない。中国は意思決定は早いものの、2000年以上続く独裁的な政治体制は誤った決断を下すリスクを内包している。市民は批判したり、選挙で意志を示したりできない。新型コロナも当初は存在を認めず、公の議論を禁止した」

一日本の現状をどうみますか。

「自国だけは例外と考えることが危機を乗り越える障害となる。米国に加えて日本もこうした傾向がある。都市封鎖や感染経路の追跡にそれほど前向きではないように感じるが、中国や米国と同様に感染者や死者が増えるリスクがある。重篤な症状に陥りやすい高齢者の割合が世界で最も高いことを考慮すべきだ」(聞き手はシリコンバレー=奥平和行)

(5) 2020年(令和2年)4月15日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-6-

『コロナと世界「集まる自由」問い直す』哲学者 東浩紀氏  
あずま・ひろき 1971年東京生まれ。東大院博士課程修了。  
現情報社会についての議論を活発に発信する。著書に「一般意志2.0」「ゲンロン0 観光客の哲学」など多数。

一新型コロナウィルスは人々の意識をどのように変えましたか。

「人と人がコミュニケーションを取り、移動し集まるのが『善』だった時代が、大きな節目を迎えている。2010年代の世界はSNS(交流サイト)とデモのニュースでもちぎりであった。つい最近までメディアをにぎわした香港の民主化要求デモを思い浮かべれば分りやすい。ところが今や、集まること自体がリスクだと感じられる事態になってしまった」「いざ危機が来たら、人々は移動や集会の自由の制限をむしろ進んで望むようになった。その事実を目の当たりにして驚いている。中国だけではなく、自由や平等、民主主義に高い価値を置いているはずの米欧の市民社会でも状況は同じだ。新型コロナが収束して日常生活が見かけの上で元に戻ったとしても、経験はトラウマのように残る」

一通信インフラが強いテレワークが広がれば、互いに実際に会わなくても社会は回っていくのではないですか。

「決まった作業や訓練であれば、オンラインで替わりは利くだろう。だが、新しいビジネスに挑戦するといった創造的な仕事がテレワークだけで成立するだろうか。ネット空間は自分に似た考え方の者ばかりが集まり、創造的な行為に欠かせない異質な存在や意見を排除しがちだ。そもそも通信回線がパンクすればオンラインを前提にした仕組は崩れてしまう。1つのテクノロジーに依存しすぎると、そのプラットフォーム(運営者)に操作されることになりかねない」「移動して直接集まる自由が保障されていれば人は何にも頼らず自力で他人とコミュニケーションできる。人間の歴史の中で育ててきた数ある自由のうち最も根底的なものといえる。移動や集会が制限されている今だからこそ、コロナ後を見据えて、人が集まることの価値を説く理論武装をすべきだ。通信の自由がいくら進んでも、集会の自由の替わりにならない。」

一グローバリズムも見直しを迫られますか。

「いままら国境を閉ざして自給自足やブロック経済に戻るわけにはいかないが、これまでは楽観的に過ぎたかもしれない。いざとなればどこにでも移動できるし、誰かが助けてくれる、それがグローバリズムの恩恵だと思っていた。現実には、クルーズ船は受け入れ港が見つからず洋上を漂い、海外移住者は争って本国に戻ろうとしている。危機の時に人々がグローバルなサポートを受けられる恩恵を、法律や技術など様々な面で再構築する必要があるだろう」

一大震災や原子力発電所事故の経験に学ぶべきことはありますか。

「専門家の意見を聞いているだけでは百パーセントの真実に到達することはできない点だ。放射性物質の影響も感染症も、科学的事実と人々の生活の現実、心理とは必ずしも利害が一致しない。感染症の専門家も人どうしの接触を避けろと言う。一方で、人が人と会わなければ社会は成り立たない。双方の折り合いをつける必要がある。落としどころを探る役目を担うのは本来なら政治のはずだ」(聞き手は郷原直之)

(7) 2020年(令和2年)4月20日 月曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-8-

『コロナと世界 薬開発競争より結束を』京都大iPS細胞研究所長 中山伸弥氏  
やまなか・しんや 1962年大阪生まれ。大阪市立大で医学博士取得。  
2012年iPS細胞の作製でノーベル生理学・医学賞受賞。新型コロナの情報を「個人として」ネットで発信中。

一世界的な感染の広がりを予想しましたか。

「油断していた。重症急性呼吸器症候群(SARS)にせよ、中東呼吸器症候群(MERS)にせよ、流行範囲は限られていた。新型コロナウィルス感染症に関しては私自身、2月中旬の段階では大丈夫だろうと思い、いつも通り京都マラソンにも出場していた。」「米ニューヨークの人たちも2月末まで他国の感染拡大を人ごとのように見ていたと聞くと、わずかに数週間前感染者は急増した。日本だけ特別に感染が広がらない理由があったらうれしいが、楽観的すぎるだろう。」

一感染を食い止めるために私権を制限する動きも広がっています。

「普段、私たちは気付かないうちに社会システムに守られ、研究や移動などの自由を謳歌している。今のような公衆衛生上の危機に直面した場合には、いつか自由な行動を我慢してでも社会を守らなければならない」「中国や武漢やイタリア、スペインのような状況では罰則を伴う強硬な措置もやむを得ない。そうならないために一人ひとりが自らの行動を変える必要があるがメッセージが届かない人もいいる」「非常時に限定する厳密な条件付きなら、IT(情報技術)を使って人々の動きを追うのも効果的だ。すでにネットの利用歴などを通して私たちの行動はかなり企業に把握されている。技術の乱用は防がなければならないが、何でもかんでもダメでは前へ進めない」

一武漢の封鎖は解除されましたか。

「都市を封鎖し人を家に閉じ込め、ドローンで監視しても感染者が減るのに2カ月半かかった。行動制限を緩めたらどうなるか心配だ。外出を厳しく制限した米国でも、死者が大きく減るまでに3カ月かかるという。ウィルスの性質を考えると、途中で対策をやめればピークは再び表れる。」「ほとんどの人は感染拡大の最初の山を超えたら安心してしまおうだが、その根拠はない。有効なワクチンや治療薬が開発されるか集団免疫ができるまで、対策を続けなければならない」

一治療薬の候補がいくつか出てきましたか。

「まず既存薬の中から使えそうなものを探すが、臨床試験を実施し本当に症状が改善するか統計的に確認する必要がある。過度の期待はよくない。新型コロナに合わせた新薬も開発しているかもしれない。」「我々もiPS細胞で貢献する。肺や心臓の細胞を大量に作りウィルスを感染させる実験を始めている。感染の仕方や薬の効き方の違いを調べられ、これまでにないデータが得られるだろう。」

一国際研究協力の重要性も高まっていますか。

「生命科学の分野は非常に競争が激しく、特許競争がありデータを隠す場合も多い。成果を出してから論文の発表までに1、2年かかることもある。しかし、お金も上げを目的とせず気持ちを一つにすることが大切な。国の研究費も競争に勝つよりもデータを早く公開し、他と協力した研究者を評価する仕組みがほしい。そうでなければパンデミック(世界的な大流行)に立ち向かえない」(聞き手は編集委員 安藤洋)

(8) 2020年(令和2年)4月22日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-10-

『コロナと世界 科学信託「非常態」に備え』WHOシニアアドバイザー 進藤宗邦氏  
しんどう・なほこ 1990年東京慈恵会医科大学、国立感染症研究所主任研究官を経て、02年からWHOで勤務。新型インフルエンザやエボラ出血熱など感染症の危機管理を指揮。

一中国はロックダウン(都市封鎖)で新型コロナウィルスの感染を抑制しましたが、イタリアは失敗しました。

「中国はSARS(重症急性呼吸器症候群)以来、患者急増時の対応や集中治療室(ICU)の強化など対策を進めた。武漢市には4万人の医療関係者が駆けつけた。シンガポールや韓国などアジアの国に共通するが感染症の経験値があった。欧州は当初は対岸の火事のように見ていた」

一収束への道筋は見えますか。

「新型コロナは機熱などの発症当日にウィルスの量が最も多く、感染に気づかずに人が動くので感染が一気に拡大した。患者が殺到して医療機関が限界に近づけば、助けられる人から助ける、という倫理的に厳しい判断が迫られる。新型コロナとそれ以外の病気に対応する病院を分ける役割分担や、応援要員の準備も重要だ。」「欧州は厳しい外出規制などの効果が出て安定してきた。世界保健機関(WHO)は日常生活に戻すための判断基準を作成した。世界全体ではいつかは感染が落ち着く時期がある。大事なのは次の波をどう抑えるかで、そのためには国際協力が欠かせない。挑戦は受けるし、こちらも自信を持って説明する」

一経済活動の再開の手段として感染歴を調べる抗体検査に乗り出した国もあります。

「抗体検査の信頼性はまだ確立していない。抗体をもっていることがどれだけ免疫防御になるのか、有効期間はどの程度なのかなど分からない点が多い。抗体検査の結果で外出制限を緩和するのは時期尚早だ」

一日本がコロナを抑えるのに必要なことは。

「緊急事態宣言はメッセージ性はあるが、規制内容は弱い。感染者の接触歴を徹底的に調査することが最も大事だ。日本は恥の文化が強いので接触調査で正直に答えられない人も多い。誹謗(ひぼう)中傷しないで、職場や学校が受け入れることが大切だ。日本人は衛生観念がしっかりしているので、個人が自覚を持って行動して皆で協力すれば必ず乗り越えられる」

一トランプ米大統領がWHOの資金供出の停止を表明しました。

「米国がWHOの根本的な対策を疑っているのか、感染が拡大したからスケープゴート(いけにえ)として攻撃しているのかは分からない。ただ、WHOを潰せば問題が解決するかといえば、それは違うだろう」

—新型コロナの教訓は何でしょう。

「21世紀に入って経済や社会活動は点から線に、線から面に、面から立体になっている。今までと物事のスピードが圧倒的に速い、感染症も瞬時に拡大する。新型コロナは異常事態ではなく、『ニューノーマル(新常态)』ととらえて対策を打たなければならない」「対策の根本は科学を信じること。科学に基づく準備がいかにできているかが、流行を抑制できるかの分かれ目になる。政治家の強いリーダーシップも必要だ。最終的には一人ひとりの行動にかかっているため政府・企業と個人とのコミュニケーションが重要になる」(聞き手はジュネーブ=細川倫太郎)

(9) 2020年(令和2年)4月24日 金曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと世界』-11-

【コロナと世界 危機管理あり方総点検】内閣官房長官 菅義偉氏  
すがよしひで 1948年生まれ。  
第2次安倍内閣が発足した2012年12月から官房長官を務める。在任日数は歴代最長。  
危機管理を担い、新型コロナの対応に奔走する。

—新型コロナウィルスのような感染症危機を予想していましたか。

「どの国も予想していなかったでしょうね。第2次世界大戦以来、最大の危機だという人もいます。ヒト、モノの流れが完全に止まっている。そして恐怖がある。治すことのできる薬ができていない初の経験だ」「まずは欧米のような爆発的な感染拡大を絶対に防ぎ、国民の命と健康を守る。一刻も早く収束させることに全力をあげている。国民には最低限の経済活動を営みながらできる、ぎりぎりのお願い、大変な辛抱をお願いしている。」

—海外との人の往来が減り、内向き志向に陥る懸念はありませんか。

「一時的には内外の人の動きが完全にストップしている。しかし、日本経済が今後成長するには海外の成長力を取り込んでいくのは不可欠だ」「マスクひとつとっても7~8割が中国で生産している製品や素材を特定の国に極度に依存せず、生活に必要なものは国内に生産拠点を戻したり、複数の国に分散したりする必要が。危機管理を考えるうえでも重要な体験だった」

—行政体制に欠けていたものが浮き彫りになったのではないですか。

「権限に大事なものはやはり危機管理だ。裁が閣の官僚は優秀な人が圧倒的に多いが、弱点は縦割りだ。裁が閣全体で取り組まないと危機管理はできない。新型コロナは厚生労働省だけでは絶対にかばれない。経済産業省、国土交通省や自衛隊、海上保安庁なども含めて一度に、一挙に動かすことが大事だ」「クルーズ船のダイヤモンド・プリンセスの沈没は英国で運営会社は米国、船長はイタリア人、乗客・乗員の出身国・地域は56に及んだ。複雑な状況でウィルスがまん延し、対応を迫られた。一段落したら様々な検証をしなければいけない」

—グローバル化のなかでは中国に限らず海外発の感染症が日本に持ち込まれるリスクはこれからもあります。

「日本政府に求められているのは世界全ての国の経験や英知を集めて迅速に対応することだ。中国は大きな経験をした。中国を含め収束に向けて国際的な連携を深めて対応していく必要がある。」「習近平(シー・ジンピン)国家主席の来日は中が責任を果たしていくことを内外に示す機会として非常に大事だ。また人のない意見交換ができる関係を維持するのが、アジアだけでなく世界経済の発展や安全保障に極めて大きなことだ」

—収束後の日本は。

「日本はいろんな意味で世界に打って出ている可能性がある。大企業にも中小企業にも真面目な人材がそろっているのに能力ある人材を活用できていない。留々の組織、会社にとどまらず外に目を向けてこなかった。能力をフル活用できる仕組みが必要だ」「四の基本は自助、共助、公助だ。自分でできることはまずは自分でやってみる。その次に、地域が共助で助け合う。それでもどうしようもなくなったら国が必ず責任をもって対応してくれると国民から信頼される国をつくるのが大事だ」(聞き手は重田俊介)

(10) 2020年(令和2年)4月28日 火曜日 日本経済新聞 第3面【総合2】連載特集記事『コロナと世界』-14-

【コロナと世界 個々の備え、病の芽摘む】北里大学特別栄誉教授 大村 智氏  
おおむらとみし 1935年山梨県生まれ。山梨大卒。東京理科大学大学院修了。  
米ウエスレーヤン大客員研究教授、北里研究所長など歴任。2016年ノーベル生理学・医学賞受賞。

—世界で感染が拡大し続けています。

「インフルエンザと違い、新型コロナウィルス感染症は季節性がないと考えられている。気温が高いアフリカなどで感染が増えているのを見てもそれがわかる。長期戦になるのではないかと心配している」「最初に患者が出た中国で、すぐに感染拡大を防ぐための手が打たれなかったのが一番の失敗だろう。感染症の情報は隠してはいけない。素早い公開がその後の対策を進めるうえでとても大切なことだ」「これまでの状況を見て、米国やイタリアなどで死者の割合が高いのが気になる。ただ、これはウィルスの性質によるというよりも、一定の人口比を占める貧しい層が犠牲になっているのではないかと」

—なぜでしょう。

「こうした人たちは往々にして、健康状態がよくない。感染を防ぐための知識が不十分で、行動も変えようとしにくい。体調が悪くても費用の問題からなかなか医師にかからないため、感染すると悪化しやすい。国民皆保険で誰もが同じような診療を受けられる日本とは、明らかに違う」「結局、抵抗力がある人は生き延び、弱い人が淘汰される。過去の感染症で繰り返されてきたようなことが、また起きているのかもしれない」

—期待できる治療薬の候補も出てきましたか。

「話題になっている抗ウイルス薬以外にも、使えそうなものがある。我々が開発し、ノーベル賞の受賞理由にもなったインペルメクテンという物質が、ウィルス感染を抑え治療効果を示すことがわかってきた。分野横断的なチームをつくり外部の研究者の協力も得ながら、化学構造の似た数百の物質を片っ端から調べて最適なものを探している」「これらは天然に存在する土壌微生物が作り出す物質がもとになっている。役に立たなそうなものでも、決して捨てずに保存してきた。それが恩恵とて生きている」

—人類の英知で危機は乗り切れますか。

「治療薬はいづれできるが、それで感染症の脅威を切り抜けるかと考えるのは甘い。世の中には突に多くの感染症がある。新型コロナを克服できても、またきっと新たな感染症が発生し、国境を越えて広がるだろう」「現代人は感染症を避けようと、便利な製品や技術に依存してきた。たとえば除菌剤を多用し、至る所を抗菌処理して安心しきっていた。それが通用しないことが、国々も明らかになった」

—では、どうすればよいと。

「薬が必要な状態になる前に、病気の芽を摘むようにするための科学が重視されるべきだ。そのうえで、感染症の基本に立ち返り一人ひとりが先回りして自ら備えをしておく。北里栄三郎先生が唱えた予防医学の考え方も一致する」「特別に難しいことではない。身近なところでは、生活のリズムをあらためる。きちんと食事して栄養をとり、体力をつける。体調が悪いのに無理に仕事に出かけることはしない。そんな当たり前のことが大切にされる社会に、少しでも近づくと期待したい」(聞き手は編集委員 安藤洋)

(11) 2020年(令和2年)5月6日 水曜日 日本経済新聞 第3面【総合・経済】連載特集記事『コロナと世界』-15-

【コロナと世界 ゲノム医療で創薬早く】日本製薬工業協会会長(第一三共会長) 中山 譲治氏  
なかやまじょうじ 1950年大阪府生まれ。76年阪大院修了。  
10年第一三共の社長兼最高経営責任者(CEO)、17年会長兼CEO、19年から会長。18年日本製薬工業協会会長就任。

—新型コロナウィルスは人類に様々な課題を投げかけています。

「感染症は人類を何度も脅かしてきた。今後も必ず、何回も起きるだろう。今回の世界的なまん延はグローバル化の進展が要因だ。」「非常時になると、科学的な見地からの判断を政治の場に生かしていくことが重要だ。今回、それがわかった。科学をベースに行政にアドバイスできるチームを作り、維持する必要がある」

—政府や行政の対応が後手に回っています。

「経済的な対策は大切だが、まずは医療現場と使える薬剤をどうそろえるかが最大の要件になる。そういうアドバイスができる人をそろえなくてはならない。政府には非常時の体制やあるべき機能を平時から作る覚悟を決めていただきたい」「薬の開発はもちろん大切だが、薬だけでは全てを解決できない。国内の管理や各国における国境管理の問題といったフレームをもう一度、作らなければならない」

—新型コロナ感染症の治療薬に「レムデシビル」の国内の製造販売の承認を週内に、「アビガン」の薬承認を月内に目指す方針です。

「既存の治療薬が使えない。既存薬の転用でも開発だけで6か月、審査期間がつけば2年くらいかかる。今回は早く使えるよう、行政も超法規的な措置をやってくれている。官民が一体になって取り組まねばならない」「臨床試験(治験)は時間がかかるが、新薬の開発期間を短くする光も見えつつある。ゲノム情報をベースとした医療に切り替えることだ。英国をはじめ各国がアプローチしている。将来、使えるようになれば治験の期間が短くなる可能性がある」「一過性の感染症に対する医薬品の開発を一企業が担うのは難しい。開発できても、流行が収束すれば売れなくなってしまったため。例えば、米国では(需要の少ない)希少患者の薬を生み出せばほかの新薬の審査を加速できる。助成金以外のこんな支援の方法もある」

—今回、医薬品の安定供給への不安も顕在化しました。

「各社が在庫の備蓄を手厚くしている。だが特許の切れた医薬品は大量生産でコストを下げる価格競争に陥るため、中国やインドに依存する形になる。こうした国でのトラブルの影響を防ぐには製品を備蓄しておくのが一番安全な方法だが、限界がある。この製品だけは必ず守るという製品を医療系の学会のガイドラインなどを基に選んで、それだけは十分に備蓄するか、日本での生産体制を整えて確保するしかない」

—新型コロナの流行収束は見通せません。

「6月で感染拡大がある程度収まるというのがベストシナリオだが、判断は許さない。ウィルスへの抗体はどのくらい機能しているか、感染しても人々に抗体が十分でない恐れがある。そうならば、症状がなくなった人を数週間たっても解放できず、現場の医療体制も変えざるを得ない」「今は皆で協力し、楽観シナリオに近づけるように努力するしかない。同時に、爆発的に患者数が増える懸念の時も想定した準備も必要だ」(聞き手は高城裕太)

(12) 2020年(令和2年)5月10日 日曜日 日本経済新聞 第3面【総合2】連載特集記事『コロナと世界』-16-

【コロナと世界 移動制限、革新後押し】日立製作所社長 東原 昭昭氏  
ひがしはらとしあき 1956年徳島県生まれ。米ボストン大院修了。

—新型コロナウイルスの感染拡大は働き方など企業のあり方を変えています。

「突然の外出自粛要請で、企業は強制的に在宅勤務を迫られた。日立でも国内の約7割の従業員が今は在宅勤務になり、課題も浮き彫りになった。労働時間の管理は特に難しい。深夜残業を禁止しようにも、休校などで深夜しか仕事できないとの声もある。職場ならわかる社員の顔色も、ビデオ会議では判然としない。しっかり健康管理する仕組みが必要だ」「コロナ収束後も振り子は元に戻らない。多くの企業で、テレワークが前提になる。在宅と対面と、業務の線引きが必要だ。大きな方針や計画の策定には意見を直接言い合うことも欠かせないが、資料作成など一人の方が効率的な業務もある」

—企業も対応を求められます。

「業務のプロセスをテレワークに応じた形に大きく見直さなければならぬ。目標の成果を得るために、離れた環境で個人が何にどう取り組むべきか。業務範囲や責任をあらかじめ厳密に規定した上で、最適なプロセスを考える。リーダーの役割はより重要になる」「職務定義書(ジョブディスクリプション)」で職務を明示する米国などに比べ、日本の職場ではこの点が非常に曖昧だ。責任外の仕事をすることや、それに対面がないことも当たり前。そんなやり方はそもそも日本以外では通用しない」

—働き方が変われば、賃金のあり方も変えなくてはなりません。

「製造業では工場勤務が賃金の議論の根拠にあった。工場では労働時間が生産量に直結し、会社の売上高や利益も増えた。だが今は違う。サービスが主体となり、成果はアイデアがどう評価されるかだ。時間が結果につながるわけではない」「従業員と会社との契約や評価の仕組みも変わる。日本は、「明日から来なくていい」とドライに解雇する米国のように当面はならないだろうが、報酬はより成果を反映した形になる。」

—景気減速でリーマン・ショック後以上の雇用危機も懸念されます。日立は世界に30万人の従業員を抱えます。

「今回は、都市封鎖や外出自粛によって需要を(人為的に)抑え込んだ点がリーマンとは異なる。ワクチンや特効薬ができれば需要が急回復するかもしれない。技術のある人材を解雇してしまつたら、もう急には集められないため、雇用は極力維持する。仕事がなければ忙しい拠点に人を回すから(部門などで)個別には判断するなど指示している」

—新型コロナは人の行動を激変させました。

「これからは人間の行動の変化が、技術革新をリードする時代になっていこう。テレワーク普及の背景にある移動制限が、仮想現実(VR)や拡張現実(AR)の進化を促す。視覚と聴覚だけでなく、触覚や嗅覚、味覚にまで広がれば、仕事ももっと変わるだろう。技術先行でスマートフォンが人の生活を変えたのとは逆の人間中心の動きが始まる。今後は倫理観が今以上に問われるようになるだろう」(聞き手は中村元)

(13) 2020年(令和2年)5月17日 日曜日 日本経済新聞 第2面【総合1】 連載特集記事『コロナと世界』—17—

『コロナと世界「変えられぬ社会」変革』日本文学研究者 ロバート・キャンベル 氏

Robert Campbell 米ハーバード大大学院修了。

東大大学院教授などを経て2017年から国文学研究資料館館長。専門は江戸、明治期の文学。

テレビ番組のコメントーターも務める。

—新型コロナウイルスは市民にどんな影響を与えたと見えますか。

「感染症拡大を防ぐため、卒業式や送別会、入社式、研修といった通常であれば踏んでいく階段のうち、2、3段が完全に抜け落ちてしまった」「儀礼的な部分もあるが、自身がこれまで帰属していた母体から離れることを一つづつ実感を持って確認する意味合いもある。そうした本来通るべき地点がスコンと抜けることは、それぞれに緊張感やインパクトを与える。かなりこたえると思う。局地的な災害と違い、新型コロナは全国の多くの人に同じ経験をもたらしている」

—危惧的な状況は社会を変える契機にもなりそうです。

「大規模災害など非常時のさなかや直後には、一時的に連帯感や高揚感が高まってモラルも向上し、今後の社会をより良くしようという意欲が湧くことされる。実際、東日本大震災の直後には、たくさんの方がボランティアにぞんざい」「新型コロナが終息したとき、私たちは社会に何を残せるのだろうか。パンデミックの状況にある今から手を離れておかないと、赤字を過ぎれば赤字を忘れよう。社会のどこをどう良くしたいと感じたか。不便や不安を極めた状況で、どんな種を見いだして意識や制度を変えていくのか。尊い命が失われ、経済的にも大変な価値が損なわれた。人々の努力に応え、喪失感を埋めるためにも、1つでも2つでも変えるきっかけが生まれればよい」

—どのような社会変革につながることを期待しますか。

「ダイバーシティ(多様性)の実現など課題は色々あるが、例えば一つは若者の投票だ。選挙権年齢が18歳以上に引き下げられたが、今も若者の投票率は低く、高齢世代は高い。このままでは何も変えられない社会の再生産が繰り返される」「感染拡大が繰り返されて、現在の日本の政治や仕組みが一歩ひとりとって良いのかどうかを考え、投票で自分の結論を表現するのは若者にとって大事なことだ。主権者としての喜びを感じてもらえるよう、いかに投票意欲をたきつけられるかが求められている」「若者の芽を摘むことのない社会づくりも大切だろう。社会的な課題の解決を目指し、起業に関心を持つ人が育つようにする必要がある。パンデミックでは社会が揺さぶられた中で、起業の機会はいかに分野や情報系など私が想像するだけでもいくつも生まれている」

—そのために必要なものは、

「起業には失敗が付きものだが、日本は失敗しても復活しやすい社会ではない。新卒至上主義の企業文化も続いている。就職せずに起業するのはリスクがある。しかし、パンデミックの中から生まれたイノベーションを基に起業し、展開し続けられる環境を整えなければならない」「若者は『内向きだ』『意欲がない』などと言われるが、芽が育ちにくいのはそれらが問題なのではない。環境をつくることこそがじゅうようなのだ」(聞き手は酒井愛美)

(14) 2020年(令和2年)5月18日 月曜日 日本経済新聞 第3面【総合・経済】 連載特集記事『コロナと世界』—18—

『コロナと世界 アビガンで立ち向かう』富士フイルムホールディングス会長兼CEO 古森 重隆 氏

こもりしげたか 1939年生まれ。63年東大経卒、富士写真フイルム(現富士フイルムホールディングス)入社。

00年社長、03年最高経営責任者(CEO)兼務。12年から会長兼CEO。

—新型コロナウイルスの治療薬として自社生産するアビガンに注目が集まっています。

「歴史を振り返ると、ペストやスペイン風邪など世界では何度も感染症が発生してきた。現在は人やモノの移動が活発になっており、あっという間に大問題になる。今後は別の感染症が起こる可能性があり、感染症対策は人類の重要なテーマであり続ける」「アビガンを開発した富士化学工業(現富士フイルム富士化学)を2008年に買収したのは感染症分野に強かったことが理由の一つだ。新型コロナでは弊社として感染の有無を検査する試薬や診断に使う検査装置なども手掛けている。デジタルカメラの普及で需要が急減した写真フイルムに代わり、医薬品などのライフサイエンス分野を強化する一環だった」

—アビガンの増産を進めています。

「7月に月10万人分、9月に30万人分生産する。さらに生産計画を上積みしないといけないだろう。多くの国でアビガンの物質特許は切れている。だが製造するための特許は有効だ。海外の企業に生産を委託したり、特許を供与したりする可能性がある」「アビガンは体内でのウイルス増殖を抑える。そのためウイルスの変異などには左右されにくい。感染拡大が一旦収束しても、再び感染が広がる可能性があるほか、次の感染症も懸念される。そうした事態に備えアビガンを備蓄するという国が出てくる。引き合いもすでにある。ただ、アビガンにも副作用があり、妊娠中の人も服用できない人もいる」

—近く国内でアビガンの承認を申請する見込みです。

「今、治験など承認申請に向けた準備を進めている」

—写真フイルム市場の消滅やリーマン・ショックがありました。

「リーマンの時は金融システムが崩壊するかもしれない、世界経済がどうなるのかと底知れない恐怖感があった。主力事業の月次売上高が計画の2割にも満たず、絶望的な気持ちになった」「今回の新型コロナでも、カメラなどの消費者向け事業は影響を受けている。企業向けは在宅勤務の拡大で事務機器が打撃を受けるといわれているが、いまのところは大きな影響は出ていない。新型コロナでは治療薬候補が出てきた。感染拡大が収束すれば経済も徐々に回復するのではないかと」

—今回、グローバル経済の負の側面を指摘する声も聞かれます。

「グローバル化の進展で感染が広がった側面はある。ただ、後戻りさせることは弊害が大きく、現実的ではない。一方で中国依存の見直しの動きはでてくるだろう。企業は安い労働力や部材を求め、中国への依存に気づいた。グローバル化を止めるのではなく、国際社会で新型コロナの発生原因を検証し、封じ込めなどのマニュアルを作るようにすべきだ」

—アビガンを生産しているため海外からの出資を巡り、改正外為法の事前審査の対象になりました。

「1つの国が世界中の企業を買収するといった極端な独占は問題。何でも自由というわけにはいかない。必要な措置だと思う」(聞き手は花田幸典)

3. 2020年(令和2年)4月—5月掲載の日本経済新聞の連載特集記事『コロナと資本主義—1—』より

(1) 2020年(令和2年)4月29日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと資本主義—1—』

『想定外 備えはあるか ROE偏重経営 もろさ露呈 コロナと資本主義—1—』

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、企業や市場のもろさが次々とあらわになっている。短期的な成果ばかりを重視してきた企業は経営悪化に苦しみ、マスクや生活必需品の不足は「市場の限界」にも見える。想定外のパンデミック(世界的大流行)を乗り越え、資本主義は本来の強さを取り戻せるだろうか。

「毎日6000万ドル(65億円)以上の現金が流出してしまう」(エド・バステヤン最高経営責任者)。米デルタ航空は手元の現金(2019年度で約28億ドル)が約1カ月半で干上がってしまふほどの苦境に耐えかね、14日に54億ドルの政府支援の受け入れを決めた。アメリカン航空とユナイテッド航空もそれぞれ58億ドルの支援を求め、米政府が航空業界のために用意した250億ドルは瞬く間に使い切られようとしている。【資本メインスに】世界的に旅費需要が激減、大量の雇用喪失を防ぐには政府支援は必要な措置だ。ただ、米国勢が真っ先に白旗をあげるようになったのは、1970年代以降に広がった、株主を絶対視するひずんだ資本主義にとらわれていたからだ。その象徴である自己資本利益率(ROE、3面きょうのことば)を追い、異常な低金利のなかで負債に依存するレバレッジ経営にのめり込んでいた。……【長期の成長に影】ただ、想定外の感染症の拡大がいみじくも示したように、この世界は不確実性に満ちている。損失の緩衝材となる自己資本が過小だと財務の耐久力は衰え、長期の成長力にも響いてしまう。データを分析すれば明らかだ。1999年当時自己資本が総資産に対してどれだけあったか(=自己資本比率)で世界の上場企業を5分類し、その後20年の利益の伸びを比較した。利益の伸びが3.4倍と最も見劣りするが、自己資本比率が20%未満の企業だ。少しのショックでも経営がぐらつき、競争力を高める機会を逃しやす。一方、自己資本比率が60%以上~80%未満と比較的厚い企業は利益の伸びが6.5倍と最も大きい。不況の際にも

経営は揺るがず、むしろ大規模な投資でシェアを拡大するといった攻めの一手を打つためだ。半導体受託生産の世界最大手、台湾積層回路製造(TSMC)が好例だ。金融危機直後の2009年、今後のスマートフォン需要の拡大を見越した創業者、張忠謀(モリス・チャン)氏の号令で設備投資を加速させた。この決断を支えたのが一貫して70%前後を保つ高い自己資本比率だ。同業他社を突き放し、19年度の純利益は20年前の約14倍に拡大した。金融機関の過剰なレバレッジが08年のリーマン・ショックを招き、金融規制の強化につながった。その後、規制の外の事業会社が負債を膨らませ、ウイルス禍に足をすくわれた。そんな近視眼的な経営に対して機関投資家の目も厳しくなっている。企業は利益を稼ぐ、成長をけん引する使命を負う。そのためには回り道にみえても、人を育て、研究開発や設備投資を積み重ねて次のイノベーションの種をまき、そして想定外の事態まで見据えて財務的な厚みも保っておく必要がある。「持続可能な経営」という原点に企業が立ち返れば、資本主義がこの試練を乗り越え大きな力となる。

- 米航空会社が相次ぎ政府支援に駆け込んでいる(3月米アラバマ州)＝ロイター(写真)
- 経営の耐久性が長期の成長力を左右する(折れ線グラフ:自己資本比率=20%、20~40%、40~60%、60~80%、80%~1999年-2019年)

(関連記事5面に)

(2) 2020年(令和2年)4月30日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと資本主義 -2-』

【危機が問う市場の質さ マネー暴走、未曾有の乱高下 コロナと資本主義 -2-】

「なるほど、その手があったか」。3月上旬、短文投稿サイト、ツイッターである写真が話題をさらった。マスク売り場の値札に「1点目まで298円、2点目以降は999円になります」と書かれている。ディスカウント店「ドン・キホーテ」での風景だ。【価格で無差別調整】……自由な取引のなかで、需要と供給が適切に調整されていく……。……だが、新型コロナウイルスが欧米にも広がったショックから、世界の金融市場は2月下旬以降、異常な動きを繰り返した。【「プレーキ役」弱く】「顧客企業が年度末に決済できなくなる恐怖があった」。国内大手銀行の為替ディーラーはこう明かす。「金融の血液」である米ドルが世界的に入手困難になり、邦銀の調達コストも11年ぶりの水準にまではね上がった。景気悪化を警戒した各国の企業や家計がいっせいに現金確保に走り、金融市場から資金が急速に流出したためだ。その余波で株式や債券は未曾有の乱高下に陥った。底流には市場の「考える力」の衰えがある。例えば、経済や企業をたんねんに調査し、割安と判断すれば急落局面でも買いに動くアクティブ運用。「市場のプレーキ役」ともいえる存在なのに、手数料の高さが嫌気されて地盤沈下が続いてきた。米国株を組み入れる投資信託でみると、1990年代半ばには90%を超えていたシェアが足元では50%を割り込んでいる。その穴は金絡柄に一律に投資し、手数料が安いパッシブ運用や、コンピュータプログラムに沿った機械取引が取り替わった。こうした「考えないマネー」が今や株式取引の85%前後を占める米JPモルガンでは試算している。この構造変化によって市場は一方に動きやすくなり、ショックが格好のたまたま暴走するようになった。だが、そんな荒波のなかでも、本物の投資家は静かに買いの機会を探っているはずだ。振り返れば2008年の危機時には米著名投資家ウォーレン・バフェット氏が米ゼネラル・エレクトリックと米ゴールドマン・サックスの大規模増資を引き受け、市場の不安を鎮めた。並外れた運用成績で「賢人」との異名を取るバフェット氏。「独力で考えなければ成功しない」と語ったことがある。無数の参加者が知恵を絞り、大量の情報を処理していく。この効率性こそが市場メカニズムの強みだと、自由主義経済の大きな支柱であるフリードリヒ・ハイエクは説いた。資金の最適配分を促し成長を支えるはずの市場が膨張とともに暴走し、实体经济を振り回すようになった。市場本来の「質さ」をどう取り戻すかが問われている。

- マスクは転売目的の大量購入などですぐ売り切れてしまう(東京都内)(写真)

(3) 2020年(令和2年)5月2日 土曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと資本主義 -3-』

【逆境が決める未来の形 短期志向の憂をこえて コロナと資本主義 -3-】

今年の報酬は1万ドル(約107万円)しかもらいません。米アウトドア用品大手、ロンビア・スポーツウエアのティム・ボイル最高経営責任者(CEO)は3月、こんな決断をした。2018年分の報酬比と減額率は約99%だ。他の役員も報酬を15%自発的に減らし、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて営業を停止している米米店舗の従業員約3500人に賞金を支払うための原資にあてる。苦しい局面で従業員を生活を支えれば、企業としての信頼が高まり、今後長きにわたって消費者を引きつけ、優秀な人材も採用しやすくなるだろう。長期の目線で経営を進められるか……。当たり前のように聞こえて、実は資本主義の歴史に絡む問題だ。【企業は永続が前提】15~17世紀の大航海時代、欧州で大規模な貿易会社が設立されるようになった。当初は航海が終わるたびに会社を解散するのが普通で、その活動は1回限りの冒険に近かった。1602年にオランダ東インド会社が誕生し、時代の歯車は動いた。世界初の株式会社である同社は必要に応じて資本を増やし、事業を継続する。企業は永続を前提とする存在へと進化し、経営には時間軸の概念が取り込まれた。新型コロナウイルスの感染拡大がきっかけで「アピガン」は、実は「長期の目線」がなければ消えていたかもしれない曲折の歴史を持つ。1990年ごろからアピガンの源流となる抗ウイルス薬の研究を富山化学工業が始め、同社を08年に富士フイルムホールディングスが買収した。14年に条件付きで国内で製造・販売が承認されたが、副作用が強く、当初想定していたインフルエンザ薬としては主流にはならなかった。【アピガン苦節第30年】それでも、富士フイルムは「企業は今すぐ役に立たなくても未来のために投資しないといけない」(古森重隆会長兼CEO)とあきらめなかった。研究開始からおよそ30年、アピガンは新型コロナウイルスに挑もうとしている。経営が未来を見据えれば、重宝を生み出す力は強まる。米マッキンゼーが米上場企業を対象に投資の安定度などから「長期志向」の企業を抽出し、経営成績(01~14年の類型)を調べたところ、他の企業の平均より売上高が47%、利益が36%多いことが分かった。四半期ごとの利益ばかりを重視する「短期」志向の「わな」に陥る企業も多い。だが、それを促してきた投資家も変わり始めた。欧米の機関投資家は今回のコロナ危機の中で記出より雇用維持を重視するよう求め、製薬会社にも早期のワクチンや治療薬の開発に向けて競争より協調を訴えている。「未知なる未来のために、現在の資源を使うことが、本来の意味における企業家に特有の機能である」。経営学の権威、ピーター・ドラッカーはこう語った。ウイルス禍で需要が激減し、存亡の危機におびえる企業。この苦境をどう乗り越えるのか、それが資本主義の未来を形作ることになる。

- 「アピガン」は新型コロナウイルス薬として臨床試験が始まった(写真)

(関連記事5面に)

(4) 2020年(令和2年)5月3日 日曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナと資本主義 -4-』

【企業、公益担ってこそ ステークホルダーと歩む コロナと資本主義 -4-】

「公金を株主に回すのか」。独アディダスは強い批判にさらされ、配当の撤回を余儀なくされた。新型コロナウイルスの影響で業績が悪化し、4月1日から従業員約1200人を、政府支援を受けて雇用を維持する「クルツアルバイト(短時間労働)」という制度の対象とした。企業が労働時間を減らす一方、落ち込む賞金の一部を政府に補填してもらう仕組みだ。アディダスは10億ユーロ(1200億円弱)の自社株買いは撤回した一方、配当は予定通りの増額を採った。しかし、業績への逆風はさらに強まり、政府系金融機関から融資を受けるまでに追い込まれた。その際に無配を条件とされ、「政府支援のもとでの株主還元」は封じられた。【求められる配慮】利益を追い、株主に頼る……。平時には当たり前の企業のこんな行動も、危機においては変化を迫られる。求められるのは、国家や社会、従業員など幅広いステークホルダー(利害関係者)に配慮する姿勢だ。コロナ危機が欧米で深刻さを増すわずか2カ月ほど前、世界経済フォーラム(WEF)の年次総会(ダボス会議)では、行き過ぎた株主に上乗せするステークホルダー資本主義に移行すべきだと多くの企業が賛同した。その決意がいままでに試みられている。米国ではゼネラル・モーターズ(GM)やフォード・モーター、電気自動車(EV)大手のテスラの人工呼吸器の増産を急ぐ。米JPモルガン・チェースなど大手8行は自社株買いを停止して、個人や中小向けの融資に資金を振り向ける。【ブラダが防護服】欧州でも高級ブランド、ブラダがイタリアで医療用防護服とマスクの生産に乗り出し、フランスではLVMHモエヘネシー・ルイ・ヴィトン(LVMH)が香水などの生産ラインを変更して消毒剤を作り始めた。米エデルマンによる世界12カ国の消費者を対象にした調査では、「公共より自社の利益を優先する企業は永遠に信頼しない」との問いに対して「そう思う」との回答が71%にのぼった。リーマン危機時の苦い経験があるからだ。金融機関が暴走した結果、景気は底割れした。多くの人が職や持ち家を奪われる一方で、金融機関は政府に救済され、トップは多額の退職金を得たことで資本主義への反発が一気に強まった。これを契機に機関投資家も姿勢を転換し、「有事に対応する能力は企業価値の長期的な増大に不可欠だ(ブラックロック・ジャパンの利吉明副マネージングディレクター)との声がある。米経営学部のパーリとミーンズは1932年の著書「近代株式会社と私有財産」で、企業は「公共政策的立場から所得の一部分を割り当て、株主だけでなく社会全体や従業員などの利害にも広く目配りする存在に変わるべきだと訴えた。当時世界恐慌、今回は新たな感染症と理由こそ違えど、企業の社会的責任が重みを増す点で状況は似通う。コロナ危機克服への貢献を願う欧米企業。世界のために何が出来るか。日本企業もまたその決意を問われている。

- LVMHは香水の製造ラインで消毒剤を作り病院に無料で配る(写真)

(関連記事7面) =この項おわり

4. 2020年(令和2年)5月掲載の日本経済新聞の連載特集記事『コロナ 出口は見えるか』より

(1) 2020年(令和2年)5月6日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『コロナ 出口は見えるか 1』

【コロナ 出口は見えるか 1 新常態へ適応力試す 制限緩和でも感染抑止優先 「水面下」経済 長期化も】

新型コロナウイルスの感染拡大で世界は大恐慌(3面きょうのことば)以来の危機の淵に立つ。日本は4日、緊急事態宣言の5月未までの延長を決めた。海外では移動制限を緩め出口を探る動きもあるが、経済は当面は以前の水準に届かず「水面下」の低空飛行が恒久公算が大変だ。医療体制の整備などでウイルスへの耐性を高めつつ活力を取り戻す工夫がある。ニューノーマル(新常態)への適応力が問われる。新型コロナウイルスの感染者数は世界で350万人を超えた。治療薬やワクチンの開発は急ピッチだが、なお途上だ。今は移動制限しかほぼほぼ封じ込めの手段がない。しかし感染抑制と引き換えに経済の首根っこを押さえる「ロックダウン(都市封鎖)」のような対策に頼り続けるわけにはいかない。各国は出口に向けて試行錯誤する。見えてきたのは感染の再拡大を防ぐための封鎖の解除後も人々の生活や経済活動に一定の制約を求める新常態だ。……【第2派に警戒も】国際通貨基金のゲオルギエフ専務理事が「大恐慌以来、最悪の不況」と語るコロナ危機。どこの国の経済もしばらく水面下に沈むことは避けられそうにない。欧州中央銀行(ECB)は欧州の四半期のGDPが危機前の水準に戻るのには21~22年になるとみる。三菱UFJモルガン・スタンレー証券の試算でも日米欧のGDPは向こう1年程度は前年比でマイナス成長が続く。そもそもワクチンなどの有効打が出てくるまでは感染が再拡大する恐れがくすぶる。米ミネソタ大は過去のインフルエンザのパンデミックの経験から第2波の方が大きくなるリスクもあると警鐘を鳴らす。自らも感染した英国のジョンソン首相は「第2波のリスクを認識しなければいけない」と外出禁止の緩和を慎重に探る。経済を正常軌道に近づけるにはまず検査の強化で感染再拡大のリスクを最小限に抑えなければならぬ。米国は検査数を5月中旬に週200万件と1カ月で増やせる目標だ。それでも十分との見方もある。ロックダウン一時的には週2千万~3千万件の検査を提案。医療施設の拡充で医療崩壊を防ぐバックアップ体制を築く必要もある。日本はこれまでのところ中国や欧州ほどの感染拡大には至らずに済んでいるが、足元は極めて脆弱だ。検査能力や集中治療室などの医療資源は主要国の間で劣る。……【遠のくV字回復】ほぼ停止状態にある企業活動を少しずつでも出口に近づけていかなければ、経済は底割れしかねない。……感染抑制に時間がかかり、経済の収縮が長引けば復元力が損なわれる恐れもある。危機を乗り越えたとし、株主だけでなく社会全体や従業員などの利害にも広く目配りする存在に変わるべきだと訴えた。当時世界恐慌、今回は新たな感染症と理由こそ違えど、企業の社会的責任が重みを増す点で状況は似通う。コロナ危機克服への貢献を願う欧米企業。世界のために何が出来るか。日本企業もまたその決意を問われている。

- 中国はいち早く回復に向かうが…… 中国、日本、米国 / 生産、消費(折れ線グラフ) / 新規感染者数(棒グラフ) / 習近平国家主席:「(新型コロナウイルス)基本的に抑え込んだ」(3月10日、武漢市視察) = 4月に入って武漢の封鎖解除、米副首相:「感染者の減少が十分なレベル」とは言えない(5月4日、記者会見) = 緊急事態宣言を5月未まで延長、トランプ大統領:「経済を維持させなければいけない」(4月16日、記者会見) = 感染者の少ない地域から移動制限緩和へ(一瞥)





けた。第1次世界大戦下、当時の勲型インフルであるスペイン風邪が大流行し、若い兵士が次々と病に倒れ戦線を早めた。UICパンデミックは時代や社会を大きく変える力がある。飢饉や侵略、戦争といった混乱に乗じて感染症が勢いを増し、大変革の時計を早回しするものかもしれない。新型コロナウイルスでも世界のひずみがあらわになったといえないか。トランプ政権は失政への批判をかわすため中国たたきをエスカレートする。欧州では差別や偏見が助長され分断の流れが加速した。貿易戦争や格差問題、ポピュリズム(大衆迎合主義)といった世界が直面する課題は新型コロナウイルス出現の前から起きていた。社会や人々が不安の淵に追いやり「潜在」から「顕在」に変化した。4月上旬メーベル賞学者の本庄祐さんにインタビューした。その時の言葉がとても印象的だった。「どこの国がめぐるかみらい早く出てくるかの競争だ」。コロナとの戦いをどう制するかが、コロナ後の世界の政治、経済、社会の行方を左右するに違いない。台湾はパンデミック前から当局が情報収集し、デジタル技術を上手に使いこなして流行を食い止めた。韓国政府は中東呼吸器症候群(MERS)の教訓から統制的きいた対策で封じ込め、国民の信頼を勝ち取った。官民協力による検査を徹底したのがアイスランド。人口あたりの感染者数は世界でずば抜けて多いが、死亡者数は極めて少ない。陽性者の半分が無症状であることを突き止めた。都市封鎖を免れた。〇〇〇 日本への対応はどうだろう。数字だけみると、今とこの感染爆発には至っていないが、感染者は徐々に増えており、現状を半分は肯定しているのか疑問だ。検査の不徹底や硬直的な医療体制の方にも不安の目が向く。緊急事態宣言についても、政府は何がどうなれば解除するか判断基準をはっきり示していない。有事の今だからこそ、情緒と思惑ではなくデータに基づく科学的な議論を経て決断すべきだ。あらゆるデータは透明性をもってみなに開示されなければならない。ドイツは流行を見るキーワードにもなった「再生産数(1人の感染者から何人に感染したかの値)」を制限解除の判断に使った。一貫性があり、わかりやすい。宣言の発令以降、政府は「3密」を選ばないため、人と人との接触を「最低でも7割、できれば9割」減らすよう国民に行動変容を求めてきた。しかし、その政府はデータを有効に活用できず、縛り意識にとらわれ、場当たり的な対応に終始する。統治システムを合理性あるものに置き換えなければ、変化の早いウイルスによる災禍を乗り越えるのは難しいだろう。

□都市封鎖で閉鎖とす(写真) □類型感染者の増加ペース(米、中国、日本、韓国)(相関図) □有史以来、いくつもの感染症が人類を脅かしてきた(天然痘、ペスト、コレラ、インフルエンザ)(叙述)

8. 2020年(令和2年)4月29日 水曜日 日本経済新聞 第6面【オピニオン】 【FINANCIAL TIMES --- Opinion】 【【中外時評】 3つのウイルスと世界大戦】 客員論説委員 土屋 大洋

2020年3月24日、太平洋上で米海軍の空母セオドア・ルーズベルトの乗組員複数人が、新型コロナウイルスに感染していることが分かった。軍隊は濃厚接触の機会が多く感染症に弱い。1918年から20年にかけて猛疫を振った「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザは、まず米国や欧州、そして日本の軍隊で流行がみられた。いったん収まりかけたとしても、免疫を持っていない新兵が入隊する時期になると新兵に多く感染者が出た。18年まで続いた第1次世界大戦の終結に一役買ったともいわれている。スペイン風邪の頃は目に見えないウイルスが突いていなかったので、治療も予防も難しかった。しかし経験から、手洗いやうがい、濃厚接触を避ける手法が採られた。学校の閉鎖も行われている。歴史人口学者の遠水融は、スペイン風邪が世界中で多くの人の命を奪ったことから、人類とウイルスの第1次世界大戦だと名付けた。現在の新型コロナウイルス拡大は第2次大戦といえるだろう。致死性ではコンピューターウイルスよりも、生物(かどうかが議論が分かれるが)ウイルスのほうがはるかに危険だ。コンピューターウイルスで死ぬのは人間ではなく、コンピューターである。世界的な問題となった新型コロナウイルスの起源ははっきりしない。しかし、コンピューターウイルスのほとんどは人為的に作られている。やがて人工知能(AI)によって作られる種類も出てくるだろうが、今のところは誰かが意図を持って作っている。問題はどちらのウイルスも環境に応じて進化していくことだ。進化は必ずしも高度になることではなく、環境の中で生存しやすくなることだ。そして、もうひとつ、私たちの社会を襲いつつあるのが情報のウイルスである。こちらの拡散はおそろしく速く、そして、尾ひれが付き、人々を信じやすくさせるという変化の速度も極めて速い。世界保健機関(WHO)は新型コロナウイルスに伴う作り話を否定するためのウェブページを作っている。例えば次世代通信規格5Gのネットワークが新型コロナウイルスをばらまくことはない。そのネットワーク上をコンピューターウイルスが通ることはあり得るにせよ。しかし、わざわざそれが記載されているところを見ると、そうした誤解があるのだろう。情報のウイルスには、人々が誤解することによる誤情報(ミスインフォメーション)と、誰かが他者をだますために出す偽情報(ディスインフォメーション)がある。新型コロナウイルスの出所に関する議論は、まさに情報戦である。中国は武漢での感染死者数を低く発表していたことを認め、50%増にした。米国政府はまだ中国が情報を隠しているに疑っており、トランプ大統領は、新型コロナウイルスの出所が武漢の研究所の疑いがあると告げ始めた。私たちの社会は、新型コロナウイルス、コンピューターウイルス、そして情報ウイルスの3つに対して十分な免疫を獲得していない。新型コロナウイルスに関連したサイバー攻撃が増えているとされている。しかし実質的には、今まで様々な形で人々をだましてコンピューターウイルスに感染させようとしてきた手口が、新型コロナウイルスを口実にしたものに置き換わっているだけだ。それでも世界中でテレワークが進み、脆弱な端々とネットワークが使われているのでシステム侵入の入り口が増加していることは間違いない。金銭目的のサイバー犯罪者だけでなく、他国の政府職員をターゲットにし、政府の機密情報を狙う動きも見える。そして他国の混乱を引き起こすような偽情報を出す国家機関の存在も見えてきている。我々は、人類とウイルスの第2次世界大戦のなかにも、情報世界大戦にも入りつつある。情報の自由な流通と公開こそが、民主主義の前提とされてきた。その価値を握るが勢力との対決が始まっている。 ◇ 慶応大学教授。月1回掲載します。

9. 2020年(令和2年)4月30日 木曜日 日本経済新聞 第5面【オピニオン2】 【Deep Insight --- Opinion】 【<グローバルオピニオン> 危機でも変わらない世界】 米ハーバード大学教授 ダニ・ロドリック氏 トルコ生まれ。プリンストン大博士。著書に「グローバル化、国家主義、民主主義が同時に成り立たないと主張する「グローバルバージョン・パラドクス」ほか。

危機には2つのタイプがある。誰も予測していなかったため備えられなかった危機と、実は予想されていたが備えられなかった危機だ。トランプ米大統領が責任を逃れるために何と云おうか、新型コロナウイルスの感染拡大は後者の部類に入るだろう。こうしたパンデミック(世界的流行)が起こる可能性が高いことは、専門家の間ではよく知られていた。重症急性呼吸器症候群(SARS)や「H1N1型インフルエンザ」、中東呼吸器症候群(MERS)といった感染症の流行は、十分な警告があった。世界保健機関(WHO)は2005年、09年のSARSの流行などを踏まえ、感染症対策の国際ルールの改正を決断した。米当局は19年末に中国湖北省武漢市で新型コロナウイルスの感染が確認されるより前、約100年前に多数の死者を出した「スペインかぜ」に匹敵する拡大の可能性を、ホワイトハウスで報告していたと一部の報道もあるほどだ。気候変動問題と同様、起こるべくして起きた危機だった。米国の対応は特に粗末といえる。トランプ氏はばらくの間の、危機の大きさを軽視した。感染者が入院患者が急増したところには、人工呼吸器などの医療物資が深刻なほど不足する事態となった。州当局や医療機関が医療物資の争奪戦を繰り広げる結果を招いた。検査やロックダウン(都市封鎖)が遅れた代償は欧州でも高くつき、イタリアやスペイン、フランスなどは犠牲を払っている。一方、韓国や台湾といったアジアの一部の国・地域は検査と感染経路の追跡などにより、感染拡大を克服しようとしている。大半の場合、危機は、各国の既存の統治スタイルから予想できる通りの展開となっている。自身を過大評価するトランプ氏の危機管理の手法が、多大な被害を及ぼしかねないのは想像できた。トランプ氏同様、虚栄心が強く気まぐれに見えるブラジルのボルソナロ大統領も案の定、リスクを軽視し続けた。中国の対応は、いかにも中国らしかった。ウイルスのまん延についての情報を隠蔽しようとしたが、いったん脅威が明らかになると資源を総動員した。ハンガリー議会は、強権を振るオルバン首相の権限を、期限を定めずに大幅に拡大する法案を可決した。オルバン氏はコロナ危機に乗り出し、権限強化に乗り出している。コロナ危機は、それぞれ国の政治の主な特徴を一段と際立たせているともいえる。各国は、本来の姿をデフォルメした状態になっている。こうした状況は、今回の危機が世界の政治経済の転換点にならない可能性を示す。世界の軌道が変わるところか、既存の潮流が強まり、固定化することになりそうだ。重大な事態が起きると、自らに都合の良い情報を集めがちな「確証バイアス」が生じやすい。政府の権限強化を求める人々も、政府の役割に懐疑的な人々も、自分たちの見方が裏付けられたと感じるだろう。国際統治の強化を求める層から、もっと強力な国際衛生の体制があれば、パンデミックを軽減できた主張するはずだ。強力な国家を求める層であれば、WHOが対応を誤ったようにみえる点を指摘する。コロナ危機は、以前から明らかだった傾向を覆すどころか、変えることさえないだろう。ポピュリズム(大衆迎合主義)は、さらに強硬主義の色合いを帯びる。グローバルバージョンは、国家主義に対し守勢に立たされる。米中の衝突は続く。国家主義的な国では少数の支配層、権威好きのポピュリスト、国際派の対立が激化する。左派は左で、多くの有権者がアビールする策を編み出すことや必死にもがくだろう。(©Project Syndicate)

脆弱性の克服 人類と新型コロナウイルスとの戦いは「コロナ世界大戦(World War C)」と呼ばれる。開戦を境とする「ビフォー・コロナ(BC)」と「アフター・コロナ(AC)」で、世界のありようも劇的に変わりつつある。未知の疫病が各国の政治や経済、社会に与えた衝撃の大きさを、決して過小評価することはできない。もともと、グローバル化や民主主義の後退はBCの時代に始まっていた。強権的排他的指導者の台頭と、彼らに共鳴する民意の高まりが連動した結果だ。こうした世界病が「AC」の時代に悪化し、手の施しようがなくなるのではないかと、ロドリック氏が懸念するのも無理はない。いまは、強力な感染防止策や迅速な経済支援策をとりやすい権威主義国家が優位にみられがちだ。安全保障の観点から自給自足経済への回帰を説く者さえいる。私たちは疫病を封じ込めるだけでなく、グローバル化や民主主義の脆弱性も克服したい。コロナ大戦は人命を救う戦いであると同時に、大きな秩序や価値を守る戦いでもあるのだ。(編纂委員 小竹洋之)

10. 2020年(令和2年)4月11日 土曜日 長崎新聞 第17面【解説】 <NEWS 論点> 『合うことを奪われる苦悩 新型コロナと文明』 作家 池澤 夏樹

いげざわ・なつき 1945年北海道帯広市生まれ。87年の小説「スティール・ライフ」で芥川賞。その後の作品に「母なる自然のおっぱい」(読売文学賞)、「マシマス・ギリの失脚」(谷崎潤一郎賞)、「美しい終末」(伊藤整文学賞)など。2007年から「池澤夏樹=個人編集」として「世界文学全集」全30巻を刊行、今年「日本文学全集」全30巻が完結した。

新型コロナウイルスが、世界で猛疫を振っている。人の動きが止まり、各国で経済状況も激変した。私たちは一体何に見舞われているのか。文明や歴史の視点から新型コロナウイルス禍を読み解いていく。初回は作家の池澤夏樹さんが思索を巡らせた。

全世界的な恐怖の現象を、どのレベルで考えていいかわからない。もともと身近なのは、たった今の自分の体温であり体調である。最大限の枠を意図して考えるなら、この数十億年の生物の進化史である。これが一続きにつながっている。家を出て、人に出て、仕事をするという普通の生活の形が壊れてしまった。子供のころ、悪いことを押し入れに閉じ込められた。今、監禁が刑罰として効果があることが世界中の人々が実感している。家から出られないだけでなく、国からも出られない。ぼくの身内の一人はパリで、もう一人はパリのサンティアゴで閉閉に近い日々を送っている。米国のアトランタから久しぶりに帰国するはずだった縁者にも会えなくなった。老いた彼女から昔話を聞く大事な機会が遠のいた。日本中の誰もが同じ思いなのだろうが、まずもって先が見えないのがつらい。予定していた行事が次々と中止される。ぼくの場合ならば講演がなくなり、関わっていた展覧会は半年先に延期され、国内の取材旅行も難しくなった。仕事の枠組みがずぶずぶと液状化するよう、次の悪しき展開をただ待っているばかり。もともと作家はテレワークが本来の姿である。世界のどこにいても執筆はできる。人に出ての打ち合わせは最低で済ませられる。だからこの事態の影響も少ないはずなのに、なんとも鬱々感が湧かない。ピッチャーとしてマウンドに立ってボールを投げようとしても18メートル先にバッテリーはいない。振り返って周囲を見れば野手も観客もいない。短い散歩くらいはいいだろうと思って外に出ると、なぜか景色が特別に美しいのだ。ぼくが住んでいる札幌は平野にいきなり造られた町だから、道が広くて空も広い。その空がきらきらと輝いて見える。動物の輪郭がきりきりとしていて、行き交う人たちが凛々しい。【群れでの弱さ】 生物は個体として生きる。雲や霧のように境界なく広がった生物はあり得ない。膜の中に液体があるというのが細胞の基本構造で、それが集まって身体となる。その一方で個体の境界を超えるために生物は群れをつくることを覚えた。それが我々が望んでいる生き物の姿だ。木は林になり森になる。鳥は群れて飛ぶ鳥は群れて泳ぐ。「群」という字に「羊」が入っているのはそのためだ(1頭でいざば「美」が「大きな羊」であるのは人間の欲望がそのまま現れているようにほほ笑ましい)。群れは強い。ばらばらでは捕食されたらそれっきりだが30頭いれば対抗できる。1頭は犠牲に

して他は生き延びられる(また文字を読み解け「種」も「性」も「牛」なのだ。神にさざけられた牛)。しかし群れであることが弱さにつながることもある。肉食獣に対する単食獣という構図ならば群れは有利な戦略だが、細菌やウイルスなどが相手となると、集団生活に危険が生じる。つい去年、国内で拡大した豚熱(CSF、豚コレラ)はほくほく行く加賀山中のイノシシにまで広がった先日現地で聞いた。ハマチなどの養殖の初期には大量の抗生物質が使われて問題になった。仕込みの時期の社長は納豆を食べないという。納豆菌は強いので腹に害を与えて菌造ができなくなるからだ。生物どうしはそのような相互作用を介して生きている。【閉じに生きる】ヒトは特別に大きな集団をつつた。類人猿は群れをつくってもせいぜい100頭ほどだ。そのくらいが互いに顔を見て個体識別ができる限界で、別のグループの者が紛れ込んでも排除できる。ところがヒトは神とか国家などという抽象概念を用いて億単位の集団をつつた。これが文明と呼ばれるもの。他の動物が対抗できるはずがないからヒトは今の世界に君臨しているように見える。体重×個体数を考えれば我々より繁栄している哺乳類はいないと思われる。しかし我々は無敵ではない。ウイルスがいるのだ。抗生物質によって細菌には勝つた人類は考えがたかたかかもしれないが、ウイルスに抗生物質は効かない。そもそも種と種の間で勝ち負けなどあるものだろうか。生存に有利な場を見つけて身内を増やすこと以外に生物の欲望はない。ある種のウイルスにとつてホモサピエンスの身体は使い勝手のいい生活環境なのだろう。都会ではヒトの生息密度は高い。広く動き回し、免疫が機能するまでには時間が掛かる。この事態をウイルスの立場から見るとはついにいかにも思えないが、突き放して考えればそういうことだ。これが非人間的な思考だとしても、この世界は人間のためにつくられたわけではない。ヒトが、人間が、どれほど多くの種を絶滅に追い込んできたか、という論法はこの場合は意味がない。これは、報復ではないし、そこには誰の意思もない。ウイルスはものを考えない。起こっているのはただの自然現象である。東日本大震災の時に、これは日本人への天罰だと言った政治家がいたが、天は人間に罰を与えてくれるほど親切ではない。自然は人間に対してただただ無関心である。津波は「襲ってきた」のではなく「起こった」のだ。あの時の三陸地方ではまだ行動できた。何か手が貸せるかと走り回ることができた。死者は場らなきに避難所に生活物資を届けることには手応えがあった。今回はそれがない。人は人に会ってはいけないと言われ、互いに会わずに、それを生きていることと告げるのか？生物は個体、ときどきほど書いたら、実は人間は違う。人と人の「間」に生きるのが人間である。誰にでも、いつでも、会いたい相手がたくさんいる。それを奪われることの苦悶が黒い染みのように世界に広がっている。イタリア人たちは、よく笑って、大声でしゃべって、抱き合っ、両の頬にキスして、食べて歌って笑って。マンジャーレ！カンターレ！アモーレ！それがあの国での病氣蔓延の理由だとしたら、人間が生きている意味はどこにあるのか？今、我々の前にあるのはそこまで複層的な問いである。思わぬが笑わせてくれる時代は終わった。これからしばらくは彼がいなくて笑うことなく生きなければならない。【随時掲載します】

11. 2020年(令和2年)4月18日 土曜日 長崎新聞 第17面【解説】<NEWS 論点>

【原発事故の教訓生かせ 新型コロナと文明】長崎大教授 鈴木 達治郎  
すずき たつじろう 1951年大阪府生まれ。米マサチューセッツ工科大修士課程修了。東大で博士号。長崎大教授。原子力、核軍縮・不拡散が専門。原子力委員会委員長代理や長崎大核兵器廃絶研究センター(RECNA)長を歴任。

「デジャヴ(既視感)・・・。新型コロナウイルス感染症の拡大と政府の対応や世論の動き、社会の反応を見て、どうしても東京電力福島第1原発事故時の対応が重なって見える。私は感染症専門家ではないので感染症対策の是非を論じることはできない。ただ2011年当時、政府の一員として原発事故を経験した者として「あの時の教訓が生かされているのか」との視点から、現下の危機への示唆を考察してみたい。

▽教訓1「命を守る」を最優先に

いまでも大事なこと何かな。危機に際し、国民の命を守ることの重要性は何よりも優先されるべきだ。これは国民あるいは社会全体への「リスクを最小化する」と言い換えることもできる。問題は、あるリスクを最小化させる施策が、別のリスクを高めることにつながる可能性がある点だ。その結果「リスクのトレードオフ」は価値観の差異や、政治力学が作用するため、政策決定者の判断が揺らぎがちな。国民よりも「経済を守る」、まして「政権を守る」といった関連した基準で危機管理対策を取られては、何をかいいわんやだ。具体的には、命を守る対策の経済コストに配慮して対策の実施を引き延ばしたり、その実効性を担保するためのコスト負担をためらったりしてはならない。例えば、今回のように事業者や住民に自費負担を要するのであれば、その影響に対する「補償」はセットで考えなければいけない。「経済対策」ではなく、命を守るためのコストとして考えるべきだ。原発事故対応の時も、汚染水処理に見るように、最もリスクを下げるよりも当面のコストを最小化する案が採用されることがしばしばあった。そうした対策が結果的に、リスク最小化にならなかった反省が生かされていないのではないかな。

▽教訓2「代替案」を検討せよ

安倍晋三首相は新型コロナウイルスに対処する改正特別措置法に基づき、緊急事態宣言を出したが、これがあたかも「最後の切り札」のような印象を与えた。しかし、緊急事態宣言はあくまでウイルス対策を有効に進める「手段」であって「解決策」そのものではない。果たして今回の緊急事態宣言で示されたさまざまな施策について、同じ目的を達成することの代替案は十分に検討されたのだろうか。2月末に首相が突然表明した一斉休校要請も代替案を検討した気配だ。危機管理に追われる中で代替案の検討は本当に難しい。時間的余裕がない状態で意思決定を迫られる「実現可能な案」から実行していくしかない面もある。だが、今回の緊急事態宣言まで時間的猶予は十分あった。原発事故の際もさまざまな制約条件の下、代替案の検討がおろそかになることがあったが、その反省が生きていないというのが実態だ。

▽教訓3「世界の英知」を活用せよ

新型コロナ対策は一国だけで解決しようとしても無理だ。感染症対策には世界の英知と国際協力が必須だからだ。各国の事情が異なる点を考慮しても他国の対策が参考になることは多いだろう。原発事故の対応で私が最も重要と感じたのが、世界の英知を集めることだ。実際、世界の専門家や産業界から日本に対し多くの助言や援助の申し出があった。ところが「日本の問題は日本で解決すべきだ」といった心理が働いたのか、産界の措置も真に世界の英知を活用できる体制が構築できたとは思えない。新型コロナ対策も同様だ。PCR検査が日本では海外に比べ極端に少ない。本来なら検査数を増やすことが原則であり、世界保健機関(WHO)もそう勧告していた。世界で検査をかなりのスピードで実施している国々の知見から学ぶこともできたはずだ。日本の特殊な事情があるからといって、PCR検査の数を抑制すれば、結果的に守るべき命が守られなくなる。リスク最小化や代替案の比較の教訓とともに、ぜひ、世界の英知を活用してもらいたい。

▽教訓4「科学顧問組織」設置を

危機に際してはなおのこと、政策には科学的根拠が不可欠だ。多様な選択肢の中でどれを選ぶべきか。その根拠となる科学的知見が欠けていると、政策の実効性は保証されない。そのためには、専門知を政策に有効に反映させる体制が鍵となる。新型コロナ対策で政府が設置した専門家会議は、その独立性と権限が担保されていないように見える。原発事故の時、参考として紹介されたのが、英国の「緊急時科学顧問会議」だ。これは英国が中核輸送事故(BSE)事件の後、科学と政策の関係を改善するために設置した機関だ。首席科学顧問が危機に際して最も有用と思える専門家を集め、独立した立場から政府に助言を行う。日本も独立した権限を持つ同様の科学顧問組織を早急に設置すべきだ。

▽教訓5「透明性と信頼性」の確保を

最後に最も大切なのが、政策決定の透明性と信頼性だ。原発事故時に私が痛感したのは、原子力政策に対する「信頼の喪失」だった。国民の信頼が得られなければ、どんなに良い政策でも実効性は乏しい。だからこそ、意思決定プロセスの透明化、そのための徹底した情報公開、市民やマスメディアの質問に丁寧に答える双方向の「リスクコミュニケーション」が絶対的に重要なのだ。そして代替案や科学的根拠を明示し、専門家の知見を反映させる意思決定プロセスが不可欠となる。政府の施策に対し、客観的に検証する「第三者機関」の設置も欠かせない。危機時に第三者機関が客観的評価を行う時間的余裕はないかもしれない。その場合、危機終息後に政策の検証ができるよう、全ての記録を保存する必要があることは言うまでもない。会議の議事録や提出資料、データなどを保存しておかなければ、政策の検証は不可能だ。今回の対応で、この点がおろそかになっているのではないかと不安を覚える。

以上、福島事故の教訓から、今回の新型コロナ対策を俯瞰してみた。失敗しないようにすることは大事だが、失敗から学ぶことがもっと大事だ。今こそ原発事故の教訓を生かしてもらいたい。そして、1954年のビキニ水爆実験後に核兵器と戦争の根絶を訴えた「ラッセル・アインシュタイン宣言」の有名な一節を想起してもらいたい。「人間性を忘るな。他のすべてを忘るても」【随時掲載します】

12. 2020年(令和2年)4月25日 土曜日 長崎新聞 第18面【解説】<NEWS 論点>

【「合理性」の時代終わる 新型コロナと文明】法政大教授 水野 和夫  
みずの かずお 1953年、愛知県瀬戸市生まれ。早稲田大学大学院修了。三菱UFJモルガン・スタンレー証券チーフエコノミスト、内閣官房内閣審議官、日本大教授を経て2016年4月から現職。著書「資本主義の終焉と歴史の危機」はベストセラーに。他に「閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済」など。

昨年末に中国・武漢で発生した新型コロナウイルスは数カ月のうちに、ユーラシア大陸を横断し、大西洋を飛び越えニューヨークにたどり着いた。マルクスが「市民社会の本来の任務は、世界市場を作り出すことであり、世界はまるいので中国と日本の開国で終結するように見える」と指摘したようにウイルスもグローバル化を追い掛けて地球を回る。グローバル化が深化すればするほど、ウイルスは活性化化する。

▽本質

今回の感染症は20世紀初頭のスペイン風邪に匹敵するとか、株菌の急落を1929年に端を発した世界恐慌になぞらえたいとするが、そうではない。このように考えたいのは、技術の進歩で変えられた近代社会は揺るがないという深層心理があるからだ。今回の新型コロナウイルスはグローバル化の極限で起きたという点で過去とは異なる。

過去のグローバル化は「開拓」を伴っていたが、今回のそれは火屋くらしか。20世紀の初めはアメリカがアジアへ進出する時期とちょうど重なり、いったん頓挫したが、第2次大戦後、再びアジアへ進出し、1990年代には社会主義国が崩壊し市場は一気に拡大した。

今回の新型コロナが何をもちたのかについては、グローバル化の本質を見極め、起源をたどる必要がある。その本質は「蒐集」(コレクション)である。コレクターの第一号はノアの箱舟であるから、蒐集の歴史はキリスト教ともある。対象は、土地(古代)、ついで靈魂(中世)と資本(近代)である。「蒐集」の目的は世界の救済であり、将来の危機に備えた貯蓄である。コレクションとSAVE(救う、貯蓄する)はどちらも結語は同じであるから、キリスト教と資本主義は表裏一体である。

社会システムは最も効率的に「蒐集」できるように構築される。そのシステムを超えて蒐集しようとする秩序が崩壊する。比較すべき最近の事例は6世紀半前の1348年にヨーロッパを中心にインドからアイスランドにわたる地域を襲ったペスト(黒死病)である。その後半世紀の間に10~15年の間隔で大流行しヨーロッパ人の半分が死亡した。多くの人は葬儀もできず可哀ならみられることもなく、「これぞ世の終わりだ」と嘆いた。

当時は教会の大分裂(1378~1417年)や英仏間の百年戦争(1337~1453年)も重なり、教会は秩序を維持できず権威は失墜していった。宗教改革の端緒を開いたイギリスのウィクリフが「救済」を教会から個人に移そうとした。いわゆる近代への移行がここから始まったのである。こうした事情はタックマンの「遠い鏡」に詳しい。遠い鏡こそが危機の時代を映し出している。中世のペストを映す鏡にはローマ末期の絶望的状況が見える。「ローマでは疫病で人々が死んでいく。死んだ死骸を動物でさえも避けて運んでいる」(今道友信「ダンテ『神曲』撰義」)。当時の多神教が過剰となり、「信仰が迷信に化して」(前掲書)いった。不安な人々の心をとらえたのが一神教のキリスト教だった。21世紀の新型コロナと同様に歴史的災厄は常に弱者を襲う。

▽行動

近代において、ローマの多神教、中世のキリスト教に相当するのは、「技術進歩教」(カール・シュミット)である。しかし、3・11で東京電力福島第1原発事故に近代技術は必ずしもなかつた。今回の新型コロナウイルスに対しても同様だ。技術進歩教は経済成長に寄与することだけに関心がある。だから、構造改革路線で人々の健康は二の次とされ医療費が削減され今の非常事態を抱いた。

こうした事態にブラウン元首相は「一時的な世界政府」構想を唱えるが、それでは何の解決にもならない。世界政府はグローバル化を前提としているからだ。世界政府をつくって仮に今回の感染症を抑制できたとしても、グローバル化を止めなければ、従来ならば風土病で収まったはずの感染症に再び襲われ、タックマンがいう14世紀＝「災厄の世紀」に21世紀も名を連ねることになる。

近代の理念を持ち出しても解決にはならないどころか事態は悪化する。近代は経済成長を善としそのために徹底的に合理化を要求し資本の「寛容」を最優先する。「より速く、より速く」が進歩だと信じて疑わない人間の行動にウイルスがついて回る。21世紀の行動原理は「より近く、よりゆっくり」で理念は「寛容」でなければならない。

#### ▽支援

新型コロナウイルス対策に「合理性」精神を持ち出すと自棄論はするが休業補償はできないという理屈になる。「寛容」の精神で臨めば救済できる。6世紀半の危機こそが、まさかの事態である。企業経営者はその時に備えて人員費を削減し、本来利潤と比例するはずの利権費を抑え内部留保を積み上げてきた。

……これに反対するような資本家がいれば、マルクスのいうように、資本の自己増殖運動が止まるのは地球が太陽に吸い込まれる確率と同じ程度しかなく、まず期待できないことになり、「洪水は我なき後に来れ」と宣言しているに等しい。

シュミットのいう例外が本質を暴くとすれば、今回あらわになったのは、資本家の出自はギャングと海賊だということだ。「これぞ世界の終わりで、これを回避するには、ケインズのいう「貨幣受」禁止令だ。【随時掲載します】

### 13. 2020年(令和2年)5月2日 土曜日 長崎新聞 第17面【企画】 <<NEWS 論点>>

『最悪を想定しない国民性 新型コロナと文明』思想家 内田樹  
うちだ・たつる 1950年、東京都生まれ。  
神戸女学院大名誉教授。専門はフランス現代思想など。合気道道場「凱風館」を主宰する武道家でもある。  
著書に「日本辺境論」「街場の戦争論」「街場の共同体論」など多数。

危機管理というのは、「最も明るい見通し」から「最悪の事態」まで何種類かの未来について、それに対応するシナリオを用意しておくことである。どれかのシナリオが「当たる」とそれ以外のシナリオは「外れる」。そのための準備はすべて無駄になる。そういう「無駄」が嫌だという人は危機管理に向かない。リスクヘッジというのは「丁と半の両方に張っておく」ことだからである。「それじゃ儲かないじゃないか」と口を尖らせる人間がいるのだが、その通りである。危機管理は「儲ける」ためではなく、生き延びるためである。エコノミストはこれを「スラック(余裕、ゆとり)」と呼ぶ。スラックのあるシステムはそうでないシステムよりも危機耐性が高い。例えば、感染症用の医療機器や病床は感染症が流行するとき以外は使っていない。「病床の稼働率を上げる。医療資源を無駄なく使え」とうるさく言い立てると(実際にそうしたわけだが)、感染症用の資材も病床も削減される。そして、いざパンデミックになると、ばたばたと人が死ぬ。そういう危機管理の基本がわかっていない人が日本では政策決定を行っている。先の戦争指導部はそうだった。「わが軍の作戦がすべて成功して、敵の作戦がすべて失敗すれば、皇室大勝利」という「希望的観測」だけで續かれた作戦を起案する参謀が重用され、「作戦が失敗した場合、被害を最小化するためにどうしたらいいの？」というタイプの思考をする人間は嫌われた。私自身がそうだからよくわかる。私は心配性なので、「最悪の事態」を想定することが習慣化している。大学在学中も「これがダメだったらどうしますか？」という口に出して不興を買ったことが事態にどう対処するか?という問いを前にすると、日本人は思考能力が一気に低下する。これは国民性と言ってよい。「プランAが失敗したら」いう仮定そのものを一種の「呪い」のようにみなして、忌避するのである。「言葉の幸はふ国(ことだまのさきはくに)」においては、言葉には現実変換力があると思われている。呪言を免れば吉事が起こり、不吉な言葉を免れば凶事が起こると信じられている。それゆえ、日本では「プランAがダメだったら」という仮定は「凶事を招く」不吉なふるまいとして排斥される。そんな国で危機管理ができるはずがない。それを嘆いてもしょうがない。そういう国民性なのである。経済が低迷したら、五輪だ、万博だ、カジノだ、リニアだ、クールジャパンだものに愚かたようにわめき散らしたのとは、あれは主観的には「祝言」をなしていたのである。未来を祝福して、吉事が到来するように必死に祈っていたのである。別にビジネスライクな計算に基づいていただけでもない。あれは「祈り」なのである。「言葉の力」で現実を変えようとしていたのである。勘違いしてほしくないが、私は「それが悪い」と言っているのではない。日本人というのは「そういう生き物だ」という事実を指摘しているだけである。それを改めろと言っているわけではない。日本社会における危機管理を論じる場合には、「日本人には危機管理ができない心性が標準装備されている」という事実を勘定に入れる必要があると言っているのである。「日本人はふつうに危機管理ができる」と思い込んでいるからリスク計算を間違える。「日本人は危機管理ができない」ということを条件として危機管理については考える必要がある。別にそれほど難しいことではない。文字が読めない子どもにだって文字は教えられる。それに驚いたり、怒ったりしていたら、文字は教えられない。知らないことを前置しているから、教えられる。それと同じである。今回の新型コロナウイルスによるパンデミックでも、日本人は「感染は日本では広がらないだろう」という疫学的に無根拠なことを信じ、広言していたが、それを「嘘をついた」というべきではない。あれは「言葉」だったのである。同じように、感染拡大を食い止めるべく、最初には和牛や旅行券、次は、一世帯にマスク2枚の配布、やと出てきた現金給付も対象を過剰に絞ろうとして批判された。これまでも緊急事態法案を強引に成立させるなどしてきた安倍政権が、真の危機の瞬間に、対応の先延ばしを繰り返すのは滑稽でさえある。だが、危機の瞬間に、政府が現金給付を嫌がって、国民を救おうとしないというのは、端的に恐ろしい。×× PCR検査数も増えず、補償も不十分。人々は「何のための税金だ」「それで生活できない」と正しく、憤っている。そして怒りの声が、政治を動かしつつある。英国は、集団免疫戦略をやめたばかりでない。巨額の財政出動を約束し、国債発行で、個人の生活補償に踏み出そうとしている。日本も遅きに失したとはいえ、10万円給付を決断した。政府は、この数十年間にわたって支配的だった新自由主義の緊縮政策からの決別をついに迫られるようになっているのである。この間、政府は新自由主義以外の代替案はないとして、無駄の削減を目指して改革を推し進めてきた。なかでも医療は緊縮政策の格好のターゲットであった。保健福祉体制の解体・縮小である。日本でも保健所の体制が弱められ、新型肺炎患者による医療崩壊を現実の脅威としている。つまり、非常事態に噴出した医療崩壊や貧困といった社会問題は、非常事態だから発生したのではなく、日常では不可視化されていた矛盾や不平等が可視化されたにすぎない。だが、ここには、新しい社会を作り出す好機がある。日常の秩序が崩れる中で、今まで普通だと受け入れてきたことの不合理さに多くの人が気づきつづけた。その結果、消費税ゼロや、家賃不払い運動のような、今までは非現実的だみなされてきた発想が日本でも支持を集めつつある。スペインでは病院が国有化され、政府が最低限必要なお金を全国民に配る「ベーシックインカム」も検討されているという。もちろん、これらの政策が実行され、良い結果となる保証はない。危機が過ぎ去ったあとに、どんな未来になるかはまだ開かれた状態で、様々な競争や交渉が道路を決めることになる。今はその「分岐点」だ。×× 例えば、これから、かなり大規模な財政出動が行われる可能性が高い。経済をV字回復させるためだ。だが、そのお金を何に使うべきだろうか? ここで思い起こすべきは、世界はコロナ禍の前にも深刻な危機に直面していたという事実である。気候変動の危機だ。興味深いことに、今回の世界的な危機は、気候変動と共通点が多い。まず、どちらもグローバル化の産物である。先進国の増え続ける需要を賄うために、森林伐採し、大規模農場経営を行う。だが、自然の深く人間がどこまで入り込んでいけば、未知のウイルスとの接触機会は増える。現代モノカルチャー、自然の複雑な生態系と異なり、ウイルスを抑え込むことができない。そして、それがグローバル化した人物の流れに乗って世界中に爆発的に広がる。他方で、経済成長を優先した地球規模での開発と破壊が、深刻な気候変動を引き起こしている。根は同じ問題なのだ。ところが、コロナ禍後に景気回復が最優先され、気候変動対策は大幅に遅れてしまわなければならない。ここで人命が、経済か、という同じジレンマに直面し、行き過ぎた対策は景気を悪くするという理由で先延ばしにされる。だが、気候変動対策を遅らせるほど、より大きな経済損失が出る。これも同じ構図である。だからこそ、気候変動を今回と同じ結果にしないように、コロナ禍から学ばなくてはならない。まず、景気回復のための財政出動を気候変動対策に使うことだ。危機を防ぐための、持続可能な経済に移行するためのインフラ改革に向けた大規模投資だ。また、働き方の見直しもチャンスである。テレワークの拡大という話ではない。むしろ、医療、保育、介護といったケア労働や、配送業やゴミ回収など、社会にとって本当に役立つ仕事は何か、危険な中で私たちの生活を支えてくれるのは何かな、と問うてみる。だが、そういうサービス業の仕事ほど、機械化が難しいために、これほど社会に寄与しているのに生産性が「低い」とされ、低賃金・長時間労働を迫られている。そのため、危機の時に必要な仕事は、慢性的な人手不足となり、現場の疲弊を生んでいる。他方で、人類学やデビッド・グレーバーが指摘するように、仕事を行っている本人でさえ、社会にとっては意味のないとわかっていて、いわゆる「ブルジョア」ほど、高給取りなのである。挑発的に言えば、投資家、マーケティング、コンサルタントといったテレワーク向きの仕事は、危機の瞬間に何の役にたてない。ケアの仕事をもっと評価する大転換が必要だ。コロナ禍は、何が社会に本質的なのかを見直すきっかけになる。大転換の際には、もちろん補償は必要であるが、現金を配ることで以上に想像力を広げべきである。例えば、米国の歴史家マイク・デービスが言うように、人命に関わるワクチンや治療薬は、製薬会社の金もうけの道具であってはならず、人類全体の共有財として、無償化されるべきである。ウイルスに立ち向かうことは、このような世界規模の問題には、自分の国さよればいよいよというナショナリズムの発想は悪く、人間が完全に支配しようとする試みは傲慢だと教えてくれる。新型コロナウイルス禍は、気候変動の時代に向けて、人類の運命と自然との共生のための教訓を与えてくれているのだと考えるべきであろう。【随時掲載します】

### 14. 2020年(令和2年)5月9日 土曜日 長崎新聞 第17面【解説】 <<NEWS 論点>>

『社会の本質見直す契機 新型コロナと文明』哲学者 斎藤幸平  
さいとうこうへい 1987年東京都生まれ。大阪市立大准教授。  
ドイツ・フンボルト大で博士課程修了。経済思想史、経済学が専門。地球環境問題にも詳しい。  
優れたマルクス研究に贈られる「ドイッチャー記念賞」を2018年、日本人初、史上最年少で受賞。  
著書に「大洪水の前に」、編著に「未来への大分岐」。

人命か、経済か? 新型コロナウイルスが突き付けるジレンマ、「トロツキ問題」はこうだ。新型コロナウイルスの対策をやり過ぎれば、景気が悪化して大勢の人が命を落とすかもしれない。だが、ウイルスも放っておけば、多くの死者を生むことになる。どちらを選んでも犠牲者が出るのは避けられない。とはいえ、最終的に被害を小さく収めるのは、どうやら早い段階で徹底した対策をとるとするのが正しい選択らしい。対策が遅れば、人命も犠牲となり、さらに経済も悪化する。だが、まだ大きな人的被害が出ていない中、経済活動にブレーキをかけたくないというのが政治家の本音だ。ブラジルのボルソナロ大統領は「ちよとした風邪だ」と言い放ち、英国のジョンソン首相も、日常生活を続けて、集団免疫を獲得することでウイルスに立ち向かうとした。日本政府の対応も揺れている。経済への悪影響を恐れ、休業命令など強引な規制に踏み込むことができず、最初には和牛や旅行券、次は、一世帯にマスク2枚の配布、やと出てきた現金給付も対象を過剰に絞ろうとして批判された。これまでも緊急事態法案を強引に成立させるなどしてきた安倍政権が、真の危機の瞬間に、対応の先延ばしを繰り返すのは滑稽でさえある。だが、危機の瞬間に、政府が現金給付を嫌がって、国民を救おうとしないというのは、端的に恐ろしい。×× PCR検査数も増えず、補償も不十分。人々は「何のための税金だ」「それで生活できない」と正しく、憤っている。そして怒りの声が、政治を動かしつつある。英国は、集団免疫戦略をやめたばかりでない。巨額の財政出動を約束し、国債発行で、個人の生活補償に踏み出そうとしている。日本も遅きに失したとはいえ、10万円給付を決断した。政府は、この数十年間にわたって支配的だった新自由主義の緊縮政策からの決別をついに迫られるようになっているのである。この間、政府は新自由主義以外の代替案はないとして、無駄の削減を目指して改革を推し進めてきた。なかでも医療は緊縮政策の格好のターゲットであった。保健福祉体制の解体・縮小である。日本でも保健所の体制が弱められ、新型肺炎患者による医療崩壊を現実の脅威としている。つまり、非常事態に噴出した医療崩壊や貧困といった社会問題は、非常事態だから発生したのではなく、日常では不可視化されていた矛盾や不平等が可視化されたにすぎない。だが、ここには、新しい社会を作り出す好機がある。日常の秩序が崩れる中で、今まで普通だと受け入れてきたことの不合理さに多くの人が気づきつづけた。その結果、消費税ゼロや、家賃不払い運動のような、今までは非現実的だみなされてきた発想が日本でも支持を集めつつある。スペインでは病院が国有化され、政府が最低限必要なお金を全国民に配る「ベーシックインカム」も検討されているという。もちろん、これらの政策が実行され、良い結果となる保証はない。危機が過ぎ去ったあとに、どんな未来になるかはまだ開かれた状態で、様々な競争や交渉が道路を決めることになる。今はその「分岐点」だ。×× 例えば、これから、かなり大規模な財政出動が行われる可能性が高い。経済をV字回復させるためだ。だが、そのお金を何に使うべきだろうか? ここで思い起こすべきは、世界はコロナ禍の前にも深刻な危機に直面していたという事実である。気候変動の危機だ。興味深いことに、今回の世界的な危機は、気候変動と共通点が多い。まず、どちらもグローバル化の産物である。先進国の増え続ける需要を賄うために、森林伐採し、大規模農場経営を行う。だが、自然の深く人間がどこまで入り込んでいけば、未知のウイルスとの接触機会は増える。現代モノカルチャー、自然の複雑な生態系と異なり、ウイルスを抑え込むことができない。そして、それがグローバル化した人物の流れに乗って世界中に爆発的に広がる。他方で、経済成長を優先した地球規模での開発と破壊が、深刻な気候変動を引き起こしている。根は同じ問題なのだ。ところが、コロナ禍後に景気回復が最優先され、気候変動対策は大幅に遅れてしまわなければならない。ここで人命が、経済か、という同じジレンマに直面し、行き過ぎた対策は景気を悪くするという理由で先延ばしにされる。だが、気候変動対策を遅らせるほど、より大きな経済損失が出る。これも同じ構図である。だからこそ、気候変動を今回と同じ結果にしないように、コロナ禍から学ばなくてはならない。まず、景気回復のための財政出動を気候変動対策に使うことだ。危機を防ぐための、持続可能な経済に移行するためのインフラ改革に向けた大規模投資だ。また、働き方の見直しもチャンスである。テレワークの拡大という話ではない。むしろ、医療、保育、介護といったケア労働や、配送業やゴミ回収など、社会にとって本当に役立つ仕事は何か、危険な中で私たちの生活を支えてくれるのは何かな、と問うてみる。だが、そういうサービス業の仕事ほど、機械化が難しいために、これほど社会に寄与しているのに生産性が「低い」とされ、低賃金・長時間労働を迫られている。そのため、危機の時に必要な仕事は、慢性的な人手不足となり、現場の疲弊を生んでいる。他方で、人類学やデビッド・グレーバーが指摘するように、仕事を行っている本人でさえ、社会にとっては意味のないとわかっていて、いわゆる「ブルジョア」ほど、高給取りなのである。挑発的に言えば、投資家、マーケティング、コンサルタントといったテレワーク向きの仕事は、危機の瞬間に何の役にたてない。ケアの仕事をもっと評価する大転換が必要だ。コロナ禍は、何が社会に本質的なのかを見直すきっかけになる。大転換の際には、もちろん補償は必要であるが、現金を配ることで以上に想像力を広げべきである。例えば、米国の歴史家マイク・デービスが言うように、人命に関わるワクチンや治療薬は、製薬会社の金もうけの道具であってはならず、人類全体の共有財として、無償化されるべきである。ウイルスに立ち向かうことは、このような世界規模の問題には、自分の国さよればいよいよというナショナリズムの発想は悪く、人間が完全に支配しようとする試みは傲慢だと教えてくれる。新型コロナウイルス禍は、気候変動の時代に向けて、人類の運命と自然との共生のための教訓を与えてくれているのだと考えるべきであろう。【随時掲載します】

### 15. 2020年(令和2年)4月28日 水曜日 - 5月1日 金曜日 日本経済新聞 連載特集記事『コロナ時代の仕事論』

一橋大学教授 楠木 達兵

(1) 2020年(令和2年)4月28日 火曜日 日本経済新聞 第5面【経済】 連載特集記事『コロナ時代の仕事論』上

コントロールできないものをコントロールしようとする。ここに不幸の始まりがある。コントロールできないことについてはジタバタしないに限る。世の中には「どうしようもないこと」というがある。新型コロナウイルスはその最たるものだ。普通の人ができることは限られている。手洗いやマスク着用など公衆衛生のための基本動作を徹底する。不要不急の外出をせず社会的距離を確保する。リモートワークに切り替える。個人情報保護的に提供する。できりこはこれぐらいで、あとはどうしようもない。今日のわれわれは人類史上空前の「無道社会」に生きている。昔と比べて世の中の「理不尽」は明らかに少なくなっている。それはそれで社会の進歩だ。しかし、いつの間にか「何でもかんでもコントロールできる」と思い上がったのかもしれない。世の中はコントロールできないものがばかりではない。コロナ騒動はこの当たり前のことを再認識し、生き方を内省する好機だと思う。戦争や疫病と無縁な平時でも、思い通りにならないのが人の世。仕事やキャリアも例外ではない。仕事に限って言えば、自己評価には意味がなく「お客」の詳細がすべて。「お客」をコントロールすることはできない。つまり仕事というのは、定義からして思い通りにならないものなのだ。競争戦略の分野で仕事をしているので「ストーリー」としてのキャリア戦略を話してというリクエストを受ける。「計画無用。戦略不要」としかいいようがない。仕事生活は長く続く。若い人であれば、10年、20年後に自分が何をもちてお客に価値を与えられるかわかるわけがない。キャリアは清った転んだの経験の中から事後的に見えてくるものだ。だとしたら、ときどきの自然な流れに逆らわず、流れに乗っていく。キャリアとはそういうものだ。空白ひびりいなく「川の流れのように」。テレサ・テンいわく「時の流れに身をまかせ」。合成すると「川の流れに身をまかせ」。ただし、川の流れに身をまかせるとしても「良い流れ方」というものがある。目の前にお客をきっちり満足させ、できれば期待以上の驚きを与える。これを日々繰り返すうちに積み重ねていく。これが良い流れ方だと思う。もちろん、すぐにはうまくいかない。流れていく過程で思い通りにならないことも多い。だが自分の主眼でいい仕事をして、お客にそれをどうしても欲しいと思わせることが実績となり、信用となり、自信となる。この3つさえあれば、他はどうでもいい。◇ 新型コロナウイルスの感染拡大で経済活動が制約される不自由な時代、仕事にどう向き合えばいいのか。一橋大学の橋本達教授が要諦を説く。

(2) 2020年(令和2年)4月29日 水曜日 日本経済新聞 第5面【経済】連載特集記事『コロナ時代の仕事論』中 『絶対悲観主義の勧め』 一橋大学教授 橋本達氏

仕事にはコントロールできることとできないことがあり、コントロールできないことを無理やりコントロールしようとするのはロクなことにならない。だとすると、ここから2つのポイントが見えてくる。第1に、何をどこまでコントロールできると考えるか。仕事の中身やそれを取り巻く状況、能力や持ち味に合わせ、どこまでコントロールでき、どこを所与の条件として受け入れるか。この見極めに個性や仕事のセンスが如実に表れる。仕事上での重要な成長のひとつは、見極めが早くなるということ。自分でコントロールできると目標を持つ領域が大きくなることもまた成長である。第2に、仕事ではその人に固有の哲学が問われる。仕事はお客(自分以外の他者)に対する価値提供に他ならない。ところがお客さんばかりはコントロールできない。哲学が何のを言うのか、コントロールできないことに直面したときだ。僕の仕事哲学を一言でいうと「絶対悲観主義」。物事が自分の思い通りにうまくいくという期待をなるべく持たないようにする。何事においても「ま、うまくいかないだろうな……(でも、ちょっとやってみるか)」と構えておく。こういうマインドセットを絶対悲観主義と呼んでいる。ペルナル・フオンテネル(フランスの思想家)はうまくいこう。「幸福の最も大きな障害は、過大な幸福を期待することである」。これだけ多くの人がそれなりに利害をかかえ自由意志で動いている。自分の思い通りにならないのが当たり前で、思い通りになることがあったとしたらそれは例外だ。いくら経験を重ねても勝率はたいして上がらない。それでも負け方は確実にうまくなくていく。年季の入った人には負け方が実にキレイな人がある。僕はこういう人を僱用する。「負け戦。ニヤリと笑って受け止める」。これが本当のプロだ。絶対悲観主義が優れているのはその運用が著しくシンプルなこと。やるべきことは、マインドセットのツマミを悲観方向に回しておくだけ。事前に成功を前提とするからリスクを感じるのであり、絶対悲観主義に立てばリスクから解放される。主観的にはリスクがないからフルスイングできる。で、だいたい空振りする。それでもバットを振らないことには始まらない。邪魔になるのはプライドだ。プライドは大敵だが、それはある程度の成果を出し実績を積んでからの話。「自分はまだ何物でもない」という認識からスタートすることはない。若者にこそ絶対悲観主義の構えを勧めたい。気軽にフルスイングし、どんどん空振りする。若者の特徴はこれから先が長くある」ではなく「まだ何もない」ということにある。

(3) 2020年(令和2年)5月1日 金曜日 日本経済新聞 第5面【経済】連載特集記事『コロナ時代の仕事論』下

和田英「富岡日記」という名著がある。明治6年、15歳で富岡製紙工場の伝習女工となった著者が、当時の富岡での生活と思索と行動を約30年後に回想した記録。彼女は長野県松代出身で、政家の娘として筋金入りの教育を受けた女性だった。明治維新の真っただ中、伝習女工には製糸業の指導者としての役割が期待されていた。「天下のおため」を自覚した英は(厳かぶり)を決して松代から富岡に。国を背負い発展に力を尽くすという気遣いに満ち満ちている。新型コロナウイルスで「未曾有の危機」と大騒ぎだが、富岡日記を読むと我々がどれだけの豊かで平和な時代を生きているかと再認識させられる。さて、この10年ほどでよく使われるようになったフレーズに「イラッとすること」がある。いまの時代を悪い意味で象徴する言葉だ。何を象徴しているかという大人の幼児化。当時の和田英は「いまなら子どもだが、現代の大人よりずっと大人である。幼児性の中身には以下の3つがある。1つ目は世の中に対する基本的な構えの問題だ。子どもは身の回りのことがすべて自分の思い通りになるという前提で生きる。だが仕事で大切なのは「世の中は自分の思い通りにならない」という前提だ。本来は独立した個人の「好き嫌い」の問題を「良い悪い」にすり替えてわあわあ言う。これが幼児性の2つ目だ。「好き嫌い」にすぎないことを勝手に良い悪いの問題にするから、妙な批判や意見を言いたくなる。第3に大人の子どもの他人のことに関心があるというより、自分の不満や不足感の埋め合わせという面が大きいのではないかと。「出る杭(い)は打たれる」。世の中そういうこともあるが、出る杭か出さざるという問題は周囲と比較しての差分を問題にしている。比較してばかりの人は嫉妬にさいなまれる。子どもが「イラッとすること」も嫉妬であることが少なくない。人はそれぞれ自分の価値基準で生きている。人は人、自分は自分。ほとんどの場合、比較には意味がない。仕事ができる人ほど出来合いの物産で他人と自分を比較しない。本心にスゴイ人は他人との差分で感傷がない。自分のダメなところ弱みと自覚し、自分の強みはあくまでも条件つきで全面的に優れているわけではないことをわきまえている。だから感傷がない。自分一人ですべてに秀でる必要はない。世の中にはいろいろな不得不得手人がいる。そうした人々の相互補完的な関係が仕事を成り立たせている。それが社会の良いところだ。他人を気にせず自分と比べず、いいとき悪いときも自らの仕事に集中し向き合う。それが大人というのだ。

16. 2020年(令和2年)4月2日 木曜日 日本経済新聞 第19面【マーケット総合2】 【大機小機】

今回のパンデミックが経済活動に与える影響は、その終息までに出外・営業の自粛、学校の休校などがどの程度広範囲に、長期間にわたり必要になるかに依存している。経済学者として可能性の高いシナリオを提示してみた。1918年から20年にかけて発生したスペイン風邪の場合は、世界人口の2%、3900万人が死亡し、日本でも人口の1%弱が犠牲になった。最近の疫学研究によれば、各国の国内総生産(GDP)は6~8%低下したと推定されている。パンデミックについては以下のシナリオを想定する。各国は厳しさの異なる換気対策を行うことで、異なるペースでパンデミックを抑え込んでいる。感染者は高齢者を中心に1~3%程度が死亡するが、大半の人は回復し経済活動に復帰する。1度感染した人は数年程度の免疫を得るので徐々に社会活動は正常化する。有効なワクチンや治療薬が1~2年程度で実用化されている。それにより、3~5年程度で新型コロナウイルスは「非常に激しいインフルエンザ」程度の疾患として認識されるようになる。このシナリオではここ1~2年は厳しい換気、ロックダウンなどが必要になり、世界経済は重大な悪影響を免れられない。マクロ経済としては、飲食店、旅行会社、宿泊業などサービス業の縮小、旅客を中心とした航空会社、鉄道会社、バスサービスなどが大きな影響を受け、多数の企業の破綻、雇用の大幅な減少は避けられない。海外経済の落ち込みも輸出を相当減少させる。この結果、日本経済はリーマン・ショックをかなり上回る悪影響を受ける。当時の実質GDPの落ち込み幅は09年第1四半期が前年比8.8%だった。今回はこれを上回り、四半期GDPで見た前年伸び率は10%から20%程度のマイナス成長が発生する。しかし、最悪期は1~2四半期程度しか続かないため、年ベースのGDPの低下幅はそれほど大きくない。産業構造としては、外食産業から家庭内消費へのシフトに伴う食品スーパーの拡大、宅配や動画配信サービスの拡大、海外旅行から国内旅行へのシフトが生じる。換気の緩和は徐々にしか進まないため、観光やビジネスによる海外旅行は相当長期間にわたって低水準を続ける。(山河)

17. 2020年(令和2年)4月8日 水曜日 日本経済新聞 第17面【マーケット総合2】 【大機小機】

安倍首相は新型コロナウイルスについて緊急事態宣言を実施した。緊急事態という言葉に仕組みをよく知らないゆえの誤解もみられる。→欧米のようなロックダウン(都市封鎖)に踏み切るのではない。答えは「否」。欧米におけるロックダウンのように強制的に罰則を伴う都市の閉鎖は生じません。「都道府県知事により外出自粛要請、施設の使用制限に係る要請・指示・公表等ができるようになります」と内閣官房ホームページはいう。→外出が禁止されるのではない。禁止なら、「医療機関への通院、生活必需品の買い物、必要不可欠な職場への出勤、健康維持のための散歩やジョギングなど生活の維持に必要な場合には外出できます」という。あくまでも要請がベースなのである。今回の緊急事態宣言の大きな狙いは、人々の行動変容である。人と人との接触を減らすことで、新型コロナの感染拡大の防止を目指しているといってもよい。西浦博北大教授の試算によれば、人と人の接触を制限しなければ、感染者数の増加は止まらなからず、増加のペースを数日遅らせるだけ。接触を8割減らしてこそ、新規の感染者数を抑制できる。それまで毎日10人と会っていたなら、それを2人に減らさないとはいけない。企業に求められるのは、従業員の出勤を抑制し、在宅勤務を推進することである。在宅勤務が難しい中小企業などには勤務のシフトを更変し、時差通勤することを急ぐべきだろう。感染拡大の場とされる夜の街に、営業の自粛を求めているのは当然である。密閉、密集、密接という3密の場となる施設についても、営業の自粛が求められる。その結果、生じる営業の損失は従業員の所得減少につながる。国などが補填する仕組みが急がれる。手厚い営業・所得補填は、店を閉かさないことには固定費も削減できない中小事業者が、休業に応じてくれることへの見返りである。企業のコロナ倒産の続出を防ぐことは、雇用悪化に伴う社会不安を食い止めるうえでも欠かせない。コロナの抑制と経済活動の維持。2つの目標のうち、今はコロナの抑制を最優先すると。欧米のような医療崩壊を招いてしまうと、経済の再生に要するコストは法外なものとなる。(和悦)

18. 2020年(令和2年)4月14日 水曜日 日本経済新聞 第17面【マーケット総合2】 【大機小機】

明治時代中期(1888年)、警視總監在任中に53歳で地界した薩摩出身の三島通庸は山形、福島、栃木の県令(知事)を歴任し「鬼県令」とよばれた。自由民権運動を弾圧したからといわれている。だが、改めて彼の生涯を振り返ると、地方自治の突進家・三島像が見えてくる。栃木県令に就任して3ヵ月後、県庁を、発足以来の伝統ある栃木町から宇都宮町に移してしまふ。栃木が地理的に県南に偏し、人口が宇都宮の4分の1、高取引が10分の1という現実を踏まえての決断だった。職事とされた福島・山形県境の菓子山運道(ずいどう)の運送をけん引し、東北地方開発に大きな足跡を残した。那須野が原の開拓や疎水事業でも足跡を残した。警視總監に就くや、内閣直轄の臨時運送局副局長を兼任、疫病や地震の多い東京からの首都移転を考える。首都機能を上州(群馬)、武州(埼玉北部)のいずれかに移し、東京は離宮に……。この企画は彼の死とともに霧消するが、長期的な視野に立ったの発案だった。近刊の郷土史「明治維新150年 栃木県誕生の系譜」(下野新聞社編集局)などを読むと、練行行政官の姿が浮かび上がってくる。地方創生が叫ばれて久しい。しかし現実、逆方向への流れが加速するばかりだ。東京一極集中が進むからだけではなく、地方の側が、中央の指示待ち、ガバナンス不在に陥ったままだからだろう。地元を最もよく知る、地方議会などが、自ら考え自ら

動こうとしない。そう指摘する識者は少なくない。結果、地方の活力は低下の一途をたどっている。令和のいま、三島に学ぶことがあるのではない。新型コロナウイルスの発生で、巨大都市への根拠し草的な人口集中がはらみ脆弱性が突露された。そんな中で独自に考えて動く地方が出てきた。徳島県では史上最年少の女性市長が誕生した。地方あっての日本である。6年前に亡くなった世界的数理経済学者、宇沢弘文は「社会的共通資本」の大切さを訴えていた。自然環境や、道路・水道などのインフラ、教育・医療などの制度資本はいずれも、地方行政に深く関わるテーマである。管理の難しい不確実性に柔軟に対処する国土づくりのためにも、日本社会に多様性や落ち着きを取り戻すためにも、地方自治の復活が待たれる。(一傑)

19. 2020年(令和2年)4月16日 水曜日 日本経済新聞 第17面【マーケット総合2】 【大機小機】

『検査と隔離は公共事業だ』

経済学者や経済専門家が新型コロナウイルス感染症の検査や隔離の問題を論じることは少ない。PCR検査や抗体検査は高度に医学的、疫学的知識を要する問題なので、経済系の間が何か言おうと現実にはバッシングが飛んでくる。自分の専門外だからと自己規制して沈黙する人が多い。しかし、考えれば明らかのように、様々な問題を引き起こしている外出自粛や休業などの「経済抑制」は、「検査と隔離」という医療政策の不完全な代替物である。感染拡大を防ぐうえで「自粛や休業で人同士の接触を8割減らす」という政府目標と同じかそれ以上の効果を、大規模な検査と隔離で達成できる。検査で感染者の8割を検出できるなら、日本の全人口を1回検査して陽性者を隔離すれば、外出自粛などで接触を8割減らすのと同じ感染防止効果がある。感染者の6割しか検出できない検査精度だとしても、全人口を2回検査して1回でも陽性になった人を隔離すれば、接触が8割減るよりも大きな効果がある。もちろんこれは空想的な思考実験だ。しかし数字の上では、検査体制を拡充するためのコストは自粛や休業の経済損失よりはるかに小さいかもしれない。国内総生産(GDP)が10%下がれば経済損失は50兆円になる。これに比べれば、国民1億3千万人が検査を受け、陽性者を全員隔離する施設を準備するコストは1人平均20万円と過大に見積もっても総額26兆円である。経済抑制と検査・隔離のどちらか一方を取るのではなく、両方うまく組み合わせることで最適な政策を作ることが必要だ。独ハール経済研究所のオリバー・ホルテンミュラー教授は、先週発表した論文で、感染症を組み込んだ経済モデルを分析し、短期間(数カ月)の経済抑制と長期間(年単位)の検査・隔離を併行することが最適な政策である、と結論付けている。コロナの長期戦において、自粛などを長く続けると大量の倒産と失業が発生する。検査と隔離を徹底し、経済抑制を緩和するのが世界の流れになるだろう。我が国も効果的な検査と隔離を長期間続ける仕組みづくりを急ぐべきだ。検査人材の育成、検査場所と器具の拡充、10万人規模の隔離場所確保の方策や財源を、医療界というより国全体で進める公共事業として議論すべきだ。(風韻)

20. 2020年(令和2年)4月22日 水曜日 日本経済新聞 第17面【マーケット総合2】 【大機小機】

『見えざる敵を見える敵に』

医療崩壊が迫るなか新型コロナウイルス感染者が1万人を突破した。それでも米国の75万人、欧州各国の十数万人に比べるとはるかに少ない。トランプ米大統領は「峠は越えつつある」と言う。眉につばをつけたくなる発言だが、欧州各国からも似たような声がかんてくる。一方、日本の厚生労働省クラスター対策班の西浦博氏は試算で、今後何も対策をとらなければ重篤者は85万人になると警告する。さて私たちは今どこにいるのだろうか。実は足元の本当の感染者数がわかっていない。感染把握の有力手段と書かれてきたPCR検査がこれまで極めて低調だった。「検査が少ないから発表感染者数も少なく、過少申告」という批判は内情にある。町では無症状の感染者が歩き回り、統計に出ない死者もいるという指摘もある。検査を広げるべきだという素朴な声は早くからあった。だが、かなりの医療専門家は医療崩壊の危険を指摘。「希望者すべて検査すればよい」というのは素人の妄想。パニックになるだけ」と一蹴、検査は抑圧衝動に推移してきた。確かに医療崩壊阻止は今も最優先課題である。では感染者がいるのを知りつつ病院外に野放しにするのをどう考えるのか。検査の精度に限界があるとの声も出たが、では検査をしない方がよいのだろうか。素朴な疑問である。30年近く前、日本が金融危機に遭遇した時、似たようなことがあった。巨額の不良債権を前に金融当局は突如説明を先送りした。表面は素朴なパニックになる。預金取り付けが短き世界恐慌に伝播しかねない、と遠慮し続けた。若らむべし、知らむべしからずとの考えが働いた。プロがしばしば陥る罠である。医師や看護師、検査用のマスクや防護服の不足はなお深刻である。ただ、ここへきて抗体検査の活用や検査所の開設、感染者の収容施設のすみわけなど体制整備も進んできた。他方、経路不明の感染者が増えている。感染者集団を個別にたたくクラスター・アプローチではもはや限界である。全体像はどうなっているのか。全数検査が難しいなら無作為抽出検査はどうか。検査が増えれば公表感染者数も当然増えるだろう。経済・社会崩壊との戦いもある。国民の協力も欠かさない。見えざる敵を見える敵にしてこそ戦いになる。(横やり)

21. 2020年(令和2年)4月29日 水曜日 日本経済新聞 第19面【マーケット総合2】 【大機小機】

『変わりゆく「暗黙知」の価値』

野中郁次郎一橋大学名誉教授が提案した「暗黙知」と「形式知」という概念がある。筆者なりに、この概念を経済社会全体に適用してみたい。我々が創出、伝達、入手する知識や情報を、形式知と暗黙知に分けてきた。形式知は活字や映像で伝達可能なものであり、暗黙知はフェードアウトとフェースで対話・議論することによって生み出され、伝達されるものである。これらについて筆者は次のように考えてきた。情報通信技術の普及により形式知は全国どこでもインターネットを通じて安価に入手できるようになった。その結果、暗黙知の相対的な価値が上がる。すると業績の利益が高まる。暗黙知を入手するには対面で情報交換する必要がある。多くの企業が東京に本社機能を集中させ、大学や研究機関が都市に集まるのも暗黙知が得られやすいからである。今回のコロナショックは、この暗黙知と形式知の境界を大きく変えつつある。人々はテレワークを強いられる中で、対面での会議が意外に不必要だということに気が付いた。酒を酌み交わしてこそ、お互いに腹を割った付き合いができておもしろいと思っていた。ウェブ上の親睦会でも結構楽しいことが分かってきた。もちろん暗黙知の領域は残るが、それは本当に対面が必要なものに限定されていく。すると、暗黙知と形式知の間に「形式知ではないが、ネット上で創生・伝達が可能」という「中間知」とも言うべき領域が広がる。中間知の存在を認識した組織・人々はもう元には戻らない。それは単なる情報伝達にとどまらぬ。前述の理屈を反転させると、中間知の拡大は業績の価値を弱め、東京一極集中を減らすきっかけになるかもしれない。動き方も大きく変わるだろう。中間知の伝達のために自分のポジションや、伝えたい情報・知識を明確に表現することが求められるから、人間関係、経験、勘といったあいまいな領域の存在価値は大きく変わるだろう。長い間日本の課題といわれてきた、ホワイトカラーの生産性向上にも寄与するのではないかと。コロナショックは我々の経済社会に不可逆的な変質を迫っている。これを、よりスマートな経済社会へと組み替えていっていかなくてはならない。(岡田川)

22. 2020年(令和2年)5月1日 金曜日 日本経済新聞 第19面【マーケット総合2】 【大機小機】

『狭くなった世界への警鐘』

新型コロナ問題は、グローバル化で世界の国内総生産(GDP)が人類史上最高の成長を続けていた中で、その歯車を逆転させた未曾有の事態を生んだ。医療崩壊や金融危機など、人類史に残る大恐慌となる懸念さえよき。ソーシャル・ディスタンスが行動基準になれば、これまで急成長してきた事業分野が最も深刻な影響を受ける。航空・レジャー、旅行、飲食などのサービス分野に限らず、関連する自動車や航空機などの製造業は規模と裾野が大きいだけに受容差の影響は甚大だ。石油価格暴落も世界のエネルギー事情を根底から覆し、地政学的バランス改革への発展も懸念される。世界的なサプライチェーンの中国依存を生んだ原因はコスト引き下げである。低コスト志向は反面では、中国国内で環境汚染や劣悪な労働環境、賃金格差を生み、大気・水質汚染や水不足など国際的な環境問題を引き起こしている。世界が狭くなった現在ではもはや外部性は消滅し、一國の環境問題は世界の環境と直結している。個別企業の低コスト志向は、地球規模での膨大な損失につながった。国内の格差改善や人権保護よりも、一帯一路や軍事強国化に予算をつぎ込む中国の政策の影響は、中国国内だけにとどまらぬという点だ。半面、石油消費の激減は温暖化など地球環境問題の改善には劇的な効果があるだろう。国連が提唱するSDGs(持続可能な開発目標)は誰一人取り残されない社会だが、取り残された人々の存在は全人類の課題として跳ね返ってくる。重症急性呼吸器症候群(SARS)やエボラ出血熱などを含め、近年の疫病が中国や途上国発であるのが典型例である。コロナ問題は天が人類に与えた警鐘かもしれない。全世界がそう考えて対応すべき人類史的課題である。1世紀単位で見ると、この規模の課題は戦争を含めて百年間に何度か起こっている。いわゆる百年企業はそのような試練を何度も乗り越えてきた組織であり、経営者の真面目が問われるときでもある。長い歴史の中で人の一生はあまりに短い。その時々技術や流行だけに依存した事業は時代の変化と共に消滅する。世代を超えて目、何かおかしという鋭敏な嗅覚は無私の精神に由来する。天が何を示しているのかを考える時である。(鏡亭)

23. 2020年(令和2年)5月2日 土曜日 日本経済新聞 第15面【マーケット総合2】 【大機小機】

『インベンション復興の時代』

大恐慌研究の第一人者であるキンドルバーガー教授から「これからの国際機関で重要なのは世界保健機関(WHO)だ」という説を聞いたことがある。30年も前である。予言は的中した。新型コロナウイルスの感染大流行でWHOの役割が見直され世界経済は大恐慌以来の危機に直面した。コロナ発の地球危機を教授はどうみただろう。なぜ人類はこんな危機に陥ったのか。発生源である中国の発信の遅れは決定的だ。WHOも中国寄り過ぎた。過信が対応が遅れた米・中国でも医療崩壊を招いた。背景には莫大の富もあった。問題の本質は世界中が安易な利益至上主義に走り、人間の尊厳を守る基礎的な科学技術を疎かにしたところにある。イノベーションがもてはやされ、その核にある肝心のインベンション(発明)は軽視された。シュンペーターはイノベーションにあたる新結合について、新製品の創造、新生産方式、新市場の開拓、新材料獲得、新産業組織の5分野をあげ、企業家の革新が経済発展を生むと説いた。しかし行き着く先は巨大IT(情報技術)企業の独占化だった。発明明に既存技術の組み合わせで稼いだ経営者もいる。新興企業買収で技術革新の芽を摘んだ。100年に1度の感染症大流行に資金と時間と人材をかけるより、気の利いた革新で稼ぐ方が賢いという風潮を生んだ。ここは、インベンション復興に世界をあげて取り組むしかない。新型コロナの医療とワクチン開発にすべての資源を投入する。データを共有し国際共同開発を急ぐ。それを世界中のすべての人々に提供する。分断の時代を超えて国際協力が試される。WHOをめぐって米中対立を続けている場合ではない。コロナ危機後の世界は皮肉にもデジタル資本主義が勢いを増すだろう。しかし監視社会の危険をはらむイノベーションにばかり身を委ねるべきではない。コロナ危機の教訓は命の重さである。問われるのは、何のための科学技術かである。本源的な生命科学を軸にインベンションこそ最優先すべきである。音楽の世界ではパッパの「インベンション」が基本中の基本とされる。イノベーションの時代からインベンションの時代へ。人類は原点回帰への転換点にある。(無垢)

24. 2020年(令和2年)5月8日 金曜日 日本経済新聞 第17面【マーケット総合2】 【大機小機】

『「利病的症候群」の危うさ』

新型コロナウィルスに世界が苦悩している。多くの識者が指摘するように、このウィルスの恐ろしいところは、無症状でも感染力が強いこと、重症化するも短期間に死に至るケースもあることだ。感染すると隔離を余儀なくされ、誰とも会うことはできない。現状ではワクチンが存在せず、既成の薬や点滴、人工呼吸器が活用されるが、究極的には自らの免疫力に依存せざるを得ないという懸念だ。危険にさらされながらも使命感で奮闘している医療従事者に対し、感謝の意を伝える心遣いが世界各地で紹介されている。その一方で、死への恐怖感から、今食ければいい、ここだけ食ければいい、自分さえ良ければいい、という意識が多くの人たちに芽生えつつあるとも伝えられる。まさに「今だけ、ここだけ、自分だけ」症候群といえる。こうした利病的な意識が蔓延すれば、いずれは我々の命を脅かすことになる。自覚は重要だが、

判断的な感傷が煽情が回らまじり延びれば明るい展望は見えにくい。恐らく近い将来は経済問題に深刻化する。国際通貨基金(IMF)のグローバル・マクロ・経済学は90年前の恐慌以来の不安定に感嘆を懐かし、日本についても歴史的なマイナス成長に陥るとした。歴史を振り返っても深刻な経済問題は多くの国々を致命的、精神的な危機に陥れる。皮肉なことにコロナ発生前の中国は例外で、マイナス成長は回避できるとの見立てである。そもそも今回の感染症拡大は中国・武漢から始まった。世界の人々を死の恐怖に陥れ、大恐慌以来の経済不況を引き起こしつつあるだけに、中国政府の初期が情報開示を含め適切だったかどうか検証されていくべきだろう。翻って大國のもう一方の極である米国はどうか。トランプ大統領からはアメリカファーストの理念のもと、感染症に関しては米疾病対策センター(CDC)の存在もあり、強気の発言が繰り返されてきた。しかし現実には、世界最大の感染者数に見舞われ、極端な格差社会を背景に多くの弱者が命を落としている。中国も米国も「今だけ、ここだけ、自分だけ」という謙虚さを欠いた視野の狭い政策運営になってはいないか、そう感じ取っている識者は多い。コロナを契機とした人々の判断的疫症群は、実は米国、中国という二大國家の反映とも考えられる。世界の連帯と強調が求められるときだけに突に危うい。(自律)

25. 2020年(令和2年)5月15日 日経新聞 第21面【マーケット総合2】【大機小機】

『「失われた5年」再びか』

「感染拡大が収束すれば、経済活動はただちに正常化する」といった当初の楽観論は影を薄めた感がある。2008年のリーマン・ショックと今回のコロナショックとは背景は大きく異なるが、日本経済の後退感を長引かせやすいという点では似た面がある。リーマン・ショック時には実質国内総生産(GDP)のマイナス成長は1年間続いた。今回も同様だろう。リーマン・ショック時には実質GDPが元の水準に戻るまでに5年と14四半期かかった。今回も同様の経路をたどり、我々が元の生活水準を取り戻すまでに5年程度を要すると見込まれる。再び「失われた5年」に見舞われるのである。今後は外出や休業などの規制は段階的に緩和されていくだろうが、それでも3つの要因から経済が元の姿に戻るまでにかなりの時間がかかる。第1は人々の行動様式が変わってしまうことだ。他人との物理的な距離を空ける、多くの人が集まる場所に行かない、といった行動は、感染収束後も長く続き、人々の行動様式に根付いていくだろう。第2に、自動車や家具などの耐久消費財であれば、感染拡大が収束すれば控えていた需要が顕在化する「ベントアップデマ」が生じやすい。しかし、今回最も大きな打撃を受けているエンターテインメント、外食のようなサービス消費については、それは難しい。自粛期間中に失われた消費は、永久に戻ってこないであろう。第3に、現在は企業と労働者が休業を強いられるという供給側の要因が経済活動を制約している。ただし、失業、労働時間短縮などで所得が減った労働者は消費を切り詰め、それによって売り上げが減った企業は、さらに生産の縮小を余儀なくされる。つまり、需要と供給がスパイラル(相乗)的に悪化する局面に陥りかねない。さらに、失業率は去年には6%台と戦後最悪となり、向こう5年間の経済の需給関係は、コロナの後退感から年平均で4.5%下振れすると見込まれる。これは消費者物価上昇率を毎年平均で1.1%程度下振れさせる。その結果、金融政策の正常化は遠のき、超低金利環境のさらなる長期化は必至だ。コロナショックは経済・金融環境に対して、一時的にとどまらない大きな構造変化をもたらしてしまうのである。(神羊)

26. 2020年(令和2年)5月20日 日経新聞 第19面【マーケット総合2】【大機小機】

『コロナと東京一極集中』

緊急事態宣言は39県で解除されたものの首都圏などは続いている。自粛ムードに慣れきたとはいえ、さすがに閉塞感が増してきた。欧米で経済再開の動きが見られる中、わが国でも地域によっては様々な活動や学校再開が決まるなど少しずつはあるが新たな模索が始まった。「100年に1度」級といえるウイルスとの闘いは長期戦になるという想定の下、政府の専門家会議は「新しい生活様式」を提言した。現在のところ、現在のような緊急時には必要であるにしても、社会のあり方として、長期的に受け入れられるのか心もとない内容もある。ここでは日常の生活様式についてではなく、「東京への一極集中」というマクロの問題を考えることにしたい。毎日発表される全国各地の感染者数を見ると、東京都の数字の大きさに改めて驚かされる。東京都の感染者数は5月18日時点で5065人と日本全体の総数(16160人)の31%を占める。東京都の人口は約1392万人で日本の総人口に対する比率は11%だ。一方、今も感染者ゼロを維持する岩手県の場合、人口は少ないとはいえ122万人で、総人口の1%を占める。人類の歴史とともに古いパンデミックは人口密集、つまり、大都市の問題であった。1665年からロンドンではペストにより約10万の命が失われた。猛毒(しよけつ)をきわめる感染症をもたらした株は「ロビンソン・クルーソー」の著者ダニエル・デフォー(1722年)で克明に描いた。大都市は生命にとり危険なところだといふ20世紀初頭までの常識を、われわれはいつのまにか忘れていたのではないだろうか。巨大地震のリスクに加えて、感染症リスクの深刻さを新型コロナウイルスは突きつけた。関東大震災(1923年)の後、生粋の江戸っ子だった谷崎潤一郎は関西に「ターン」した。日本列島の上には人ほどのように住まうのか。19世紀末に始まり、戦後に加速した「東京への一極集中」は今なお続く。これを是正すべく政府が力を尽くすのは、いま一つだ。しかし、強いられる異常な環境下で急速に進む「オンライン化」と、大都市の感染症リスクへの再認識は、やがて新たな歴史的リターンを生み出すかもしれない。(与次郎)

27. 2020年(令和2年)4月掲載の日経新聞の連載特集『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ』より

(1) 2020年(令和2年)4月15日 日経新聞 第28面【社会】連載特集

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 上』

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 上 出征軍から世界拡散 100年前死者最大1億人』

およそ100年前、人類は史上最悪といわれる感染症パンデミックを経験した。“スペイン風邪”とも呼ばれた新型コロナウイルスだ。世界人口の3分の1から半数近くが感染。死者は5000万〜8000万人。最大で1億人という説もある。この「ウイルスとの世界大戦」の歴史は、いま猛威を振るう新型コロナウイルスに対処するにあたり、多くの示唆を与えてくれるのではないだろうか。◇ それは1918年3月、米国カンザス州の陸軍基地で始まった。インフルエンザの症状を訴える兵士が続出。「3月だけで233名の肺炎患者が出、うち48名が死亡していた」(アルフレッド・W・クロスビー「史上最悪のインフルエンザ」)。だが、この出来事は特設注目されることはなかった。ところが、その後米国各地の兵舎、学校、工場などで集団感染が発生した。春には世界各地でも同様の感染が見られた。第1波といわれる感染爆発が、真の発生源は米国以外の可能性もあり、不明のまま。ときは第1次世界大戦のさなか。米国から毎月数十万人の兵士が欧州に渡っており、感染者をきむ軍隊は「ウイルスの運び屋」となった。大人数が密集する兵員輸送船、軍壕(さんこう)や兵舎は格好のウイルス培養の場となり、5月ごろから西部戦線、夏には欧州全域で感染が広がった。感染はアジア、アフリカ、南半球に飛び火し、秋以降に世界的なパンデミックとなる。第2波である。軽症者の多かった第1波より格段に致死率が高かった。「病性多くは重症にして殊(こと)に肺炎等の合併症多く、又(また)時に電撃的なあり(内務省衛生局編「流行性感冒」)。僅かになり、各地で棺おけが足りなくなった。欧州戦線では対峙していた兵士の半数以上が感染。「軍隊にありては其(そ)の戦闘力の殆(ほとんど)を失ひたるものあり(同)という惨状で、米軍では大戦で戦死した約10万人の半数近くがインフルエンザによる病死だった。大戦の総戦死者の6割(約1000万人)が戦病死で、その3分の1がインフルエンザが原因とされており、戦争の終結を早めたといわれている。交戦国は感染爆発を秘匿し、中立国のスペインに関する報道が先行したため、「スペイン・インフルエンザ(日本では一部新聞が風邪と表記)と呼ばれた。第2波は12月には収束したが、1919年初頭から春にかけて第3波が襲いかかり、世界をなめ尽くした。各地の死者は欧州で230万人、インド1850万人、米国68万人、アフリカ238万人、中国400万〜950万人、日本39万〜45万人といわれている。「人類史上これまでに大発生したいかなる病気よりも多くの人々を死に至らした(ジョン・ハリー「グレート・インフルエンザ」)。高齢者よりも18歳から30歳代後半までの若年、壮年層の犠牲者が多いのが特徴だった。著名人ではドイツの社会学者ウェーバー、フランスの詩人アポリネール、オーストリアの画家クリムトらが命を落とした。パンデミックは翌20年まで続いたが、感染者数と致死率は格段に縮小し、季節性のインフルエンザとなった。当時はウイルスを抑え込む特效薬もワクチンもなく、終息は多くの人が一定程度の免疫を獲得したためといわれているが、確かなことはよく分かっていない。

□ 大野豊に並んだベッドで治療を受けるインフルエンザ患者(1918年、米オークランド)＝AP (写真)

(編集委員 井上亮)

(2) 2020年(令和2年)4月16日 日経新聞 第26面【社会】連載特集

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 中』

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 中 出征軍から世界拡散 100年前死者最大1億人』

「流行性感冒と診断され、直ちに御仮床にお就きになり、以後十五日間の御床臥まで安静に過ごされる。」1918年11月3日の昭和天皇実録の記述だ。「スペイン・インフルエンザ」は「流行性感冒」といわれ、皇太子だった17歳の昭和天皇も患った。皇室では感染した竹田宮恒久王が19年4月に肺炎で死去している。欧米の大流行から4か月ほどたった18年10月ごろから日本でも本格的な流行が始まった。国内では2度の感染爆発を迎えることになるが、「前流行」と呼ばれる時期だ。22年刊行の内務省衛生局編「流行性感冒」は「交通頻繁なる都市に発し(これ)より放射状に其(そ)の周囲村を侵襲するを常とせり」と記述している。「スペイン風邪」を主題にした国内唯一の書籍、速水融「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」によると、感染はほぼ3週間全国に広がったという。新聞はさかんに「流行性感冒猖獗(しようけつ＝猛威)」と報じ、東京では「各病院は満杯となり、新たな入院は皆お断り」の始末であった(前掲書)。死者の急増で各地の火葬場は大混乱となった。同書によると、医療体制の整っていない地方はとくに悲惨で、患者の半数以上は治療を受けられない村(青森県北津軽郡)や人口約1000人中970人が感染して70人が死亡、「一村全滅」(福井県の山岡郡)と報じられた地域もあった。医療従事者の感染も深刻で、「医者という医者がほとんど風邪で寝込んでしまつて動きができず、まだ壮年の医者が相次いで亡くなった。」(熊本崇「新宇土市史」)。海外と同様、若年壮年層の犠牲者が多かった。著名人では評論家の島村抱月が感染で亡くなり、女優の松井須磨子が後遺自殺する悲劇が起きた。前流行は翌19年夏には収束した。内務省の記録では患者は約2117万人、死者は25万7000人。当時の国民の4割が感染し、死亡率は1.2%だった。そして同年秋から「後流行」が始まった。毎年12月1日は徴兵された新兵の入営日で、そこから感染が爆発的に広がる。「この軍隊における罹患(りかん)こそ、本格的な「後流行」の点火剤となった」(「日本を襲った」) 密閉・密集・密接環境の軍隊は感染の温床で、20年1月の新聞は陸軍の内外の患者約2万6000人、死者約1300人、死亡率5.2%と伝えている。海軍でも前流行期に軍艦「矢野(やはぎ)」で乗員469人中306人が感染、48人が死亡する惨事があった。後流行は20年夏に収束。患者は約241万人、死者は約12万8000人だった。感染が前流行の1割に激減したのは多くの人が免疫を獲得したためといわれている。一方、死亡率は5.29%と4倍以上に跳ね上がった。内務省の記録では全流行期間の総感染者約2380万人、死者約38万9000人、死亡率1.63%とされている。速水融氏はこれを過小とみて、死者は約45万3000人と試算している。

□ 「スペイン・インフルエンザ」の感染防止のため、マスクを着用した女子学生 =ゲッティイメージズ提供 (写真)

(編集委員 井上亮)

(3) 2020年(令和2年)4月17日 日経新聞 第30面【社会】連載特集

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 下』

『忘れられたパンデミック “スペイン”インフルエンザ 下 第2波への備えを 過去を知ることが教訓』

「どんな疫病だろうが戦争だろうが飢饉(ききん)だろうが、これほど多くの人間が、これほど短期間に亡くなった例はない」米国の「スペイン・インフルエンザ」被害を詳細にまとめた名著といわれる「史上最悪のインフルエンザ」で、著者の歴史学者アルフレッド・W・クロスビーはこう述べている。だが、この本の原題は「アメリカの忘れられたパンデミック」である。戦争も自然災害も上ト回す」の被害者を出し、かゝるかゝるの犠牲者を出して、それによって、それは日本も同様だった。「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」は、その中で人口増の激しい時、日本

でも出る人の数をいかに減らさなければならぬ。それは何年か後に、スペイン・インフルエンザで苦しんだスペイン人の遺体は、驚くべきことに、このスペイン・インフルエンザについて、(これまで)日本では一冊の著書もなく、論文すらごく少数あるに過ぎないと語っている。忘れられた理由として、同時期の第1次世界大戦、日本では数年後の関東大震災により記憶の片隅に追いやられたと指摘されている。さらに大きな要因として、インフルエンザの致死率が低かったことも影響しているという。「スペイン・インフルエンザ」の流行期を通じての致死率は2%程度だった。21世紀に出現した重症急性呼吸器症候群(SARS=約10%)、中東呼吸器症候群(MERS=30%超)と比べても格段に低い。クロスビーは「概して狭くは、死亡率は低いけれども、感染者の数が多ければ死者の絶対数は多くなる」と警告する。致死率が高く、すぐに重篤になる場合は患者は動き回れず、感染は簡単に広がらない。大半が軽症ですむ感染症こそ警戒すべきだ。現在、世界を苦しめている新型コロナウイルスと類似した面は多い。では、私たちは100年前のパンデミックから何を学ぶべきなのか。西村氏は「驚かすほどのことが、パンデミックは第2波がありえる。冬に来ると被害が大きい。為政者、行政は腹をくくって医療体制などの準備を進めておくべきだ。いまはそのための時間をもらっていることがいい」と語る。そして、「コロナという一次被害を防ぐのは大事だが、それによる経済的な二次被害で死者を出しては元も子もない。貧困者などの手当ての大切さも教訓」と言う。速水氏は著書で、日本はパンデミックから「何も学ばず、45万人の生命を無駄にした」と突き放している。そして学ばなかったこと自体を教訓として、被害の実際を知り、人々がどう対処したかを知ることが重要だと説いている。なぜなら、人類とウイルスの戦いは「両者が存在する限り永久に繰り返される」からだ。

口「スペイン・インフルエンザ」流行当時の予防啓発ポスター(内務省衛生局編「流行性感冒」より) (図版)

(編集委員 井上亮)

## 28. 2020年(令和2年)5月掲載の日本経済新聞の連載特集記事『続・忘れられたパンデミック』より

### (1) 2020年(令和2年)5月5日 火曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『続・忘れられたパンデミック』上

『続・忘れられたパンデミック 100年前の問いかけ 上 恐怖と不安こそ敵 正しい知識 議論し普及を』

インフルエンザ、そして現在猛威を振るう新型コロナウイルスの大きさは100ナノメートル。1ミリメートルの1万分の1で、電子顕微鏡を使わないと確認できない。「スペイン・インフルエンザ」が出現した1918年は光学顕微鏡もなく、ウイルスは人類にとって正体不明の敵だった。それゆえワクチン、治療薬もない。その恐怖は現代以上に大きかったとみられるが、人々は試行錯誤しながら見えざる敵と懸命に戦った。「病人やせきをする者に近寄ってはならぬ」「たくさんの人を乗っている所に立ち入るな」「病人の部屋はなるべく別にして、看護人のほかはその部屋に入れてはならぬ」1919年内務省衛生局が作成した「流行性感冒(はしかぜ)予防心得」だ。経験則から考え出された予防法だが、現在行われていることと変わらない。米国では3つのC(クリーンな口、肌、衣服)が強調された。学校、劇場、教会、映画館など人の集まる場所は閉鎖。ニューヨークでは口を覆わずにせきやくしゃみをする1年間投獄と罰金500ドルが科せられたという。サンフランシスコではマスク着用条例が施行され、違反者は警官に逮捕された。日本ではこのような強制は行われず、主にマスクとうがいが行われた。ただ、現在と同様にマスクの供給が滞った。……様々なワクチン接種も行われたが、ウイルスの正体が解明されていないため有効ではなかった。日本では神徳での神頼み、米国では怪しい民間療法、詐欺的な治療が横行した。同国では第1次大戦の敵国ドイツが害を敷布したという陰謀説が流布した。早めに各施設を閉鎖して被害を抑えたセントルイスと対策が遅れて被害甚大だったフィラデルフィアの教訓が日本ではよく語られるが、米国の歴史家はまったく言及していない。アルフレッド・W・クロスビーは閉鎖命令を厳しく適用した地域とそうでなかった地域に差はなかったとしている。ジョン・バリは流行の時期が明暗を分けたと見ている。フィラデルフィアは早くから東部、セントルイスは遅くから中部に位置していた。もちろん、早期の対策は有効だが、被害の軽重は運に左右された面もあるとバリは語っている。より教訓とすべきは、病氣よりも恐怖や不安が人々の触れ合いを壊し、社会をバラバラにしかねなかったことだと言う。感染を恐れ、家族や社会的弱者を見捨てざるを得ない事態が生じた。移民、貧困層が打撃を受けた。仙台医療センターの西村秀一ウイルスセンター長は「100年前よりも人々のつながりが希薄になっていることが心配。一方で、ネットやSNSなどで知識の伝達は容易になっている。正しい知識についてもっと議論し、普及させていくことが危機を乗り越えるために必要なことだと思う」と話している。

口インフルエンザ流行でマスクをする米シアトルの警察官(1918年)＝ゲッティイメージズ提供 (写真)

(編集委員 井上亮)

### (2) 2020年(令和2年)5月6日 水曜日 日本経済新聞 第1面 連載特集記事『続・忘れられたパンデミック』下

『続・忘れられたパンデミック 100年前の問いかけ 下 災いから何を得るか 世界が助け合う契機に』

ウイルスによる症状、感染の広がり、社会の反応など、100年前の「スペイン・インフルエンザ」禍と現在の新型コロナウイルス禍は類似した面が多い。「新型」の治療は対症療法しかなく、医師よりも看護する人間の数が求められる。100年前、看護人が不足していた地方では1カ所に張り付くのではなく、各所を回る巡回看護を実施していた。医師のいない山村には府県が「救療班」を組織して派遣した。命を救おうと懸命に務めた人々の望みは、現在の危機においても様々な示唆を与えてくれる。では、100年前の歴史を汲み、今後の展開もある程度予測できるのか。それほど単純なものではないだろう。ウイルス自体別物であり、同じような規模で第2、第3波が襲くことと断定はできない。大きな違いは経済が受けつつあるダメージである。「インフル」禍「当時」は感染を抑え込むために現在ほど経済を犠牲にしなかった。今の状況は1930年代の世界恐慌に近いものかもしれない。インフル禍で緊急援助を指示した米国赤十字社幹部は「未亡人、孤児、寄るべのない老人がそのまま放置されている。これらの家族の多くは貧困という苦境に追い込まれ、その惨状の広がり、米国本土とあらゆる階層に及んでいる」と語っている(ジョン・バリ「グレート・インフルエンザ」)。日本でも一家の大黒柱を失った家族が悲観して自殺する悲劇が起きている。二次被害である「経済禍」の被害者をいかに救済するか。現代ではより大きな課題だ。そのヒントも乏しいながらも歴史の中にある。100年前、日本では貧困で治療費を払えない患者のために治療所の設置が行われていた。一次のウイルス禍、二次の経済禍で社会はどれほど疲弊するのか。暗たんたる気持ちにもなるが、希望の光を歴史に見いだすことは可能だ。インフル禍から「日本は学ばなかった」と手厳しい歴史人口学者の速水融氏は「強いて言えば」のただし付きながら、その打撃を機に国民病といわれた結核対策が本格化し、乳幼児の保護・育成への関心が高まったことで死者の死亡者数が減少したことが「学習効果」とみている。米国ではインフルエンザと肺炎研究の延長線上でDNAが遺伝物質であるという発見がなされた。パンデミック後に何かが生み出され、世界が望ましい方向に進むこともありえる。米国の日本現代史研究者ケネス・ルオフ氏は「日本を含め各国が格差を広げてきた新自由主義から離れ、『共通善の輪』が広がることを期待している」と話す。「パンデミックは70億人以上の人々がこの地球上に暮らしていることに改めて気づかせてくれた。だから、世界保健機関(WHO)などの国際機関を強化する方向に進んでほしい」歴史家のジョン・バリもインフル禍の遺産は国際協定と公衆衛生への取り組みが再構築されたことだと述べている。そして、残された教訓は権威ある地位にいる人々が選挙感をなくするようなパンニックを抑えることだとも言う。「各人が自己本位に走れば、社会は成り立たない。文字どおり、文明は生き延びられない」

口新型コロナウイルスのパンデミック後、世界は世界大恐慌時のような分断時代を迎えるのか(ニューヨークの銀行の前に集まった預金者、1931年)＝AP (写真)

(編集委員 井上亮)

## 29. 2020年(令和2年)5月4日 月曜日 日本経済新聞 第24面【文化】【文化】連載特集『疫病の文明論』

『疫病の文明論 ① 描かれた恐怖 災厄が問う表現の根源 骸骨姿の「死」平等主義に民衆驚き』 中野京子

新型コロナウイルスが世界で蔓延し、社会を混乱に陥れている。繰り返し人類を襲ってきた疫病は、文明のあり方に根源的な問いを突きつけてきた。私たちはこの災厄の経緯から何を学ぶのか。人文・社会科学の有識者による論考を連載する。

真白な翼をもつ天使が正義の証の長剣を握り、悪魔を従えてローマの町に舞い立った。とある邸の前で天使は悪魔に命じ、翼を叩かせる。1つ2つ3つ、いや、もっともっと――その数だけ、中にいる人間が死んでゆく。19世紀フランスの歴史家ドローネーが描いた衝撃的な「ローマのペスト」は、聖者列伝「黄金伝説」(13世紀刊)をもとにしている。それによれば、中世初期のイタリアでペストが蔓延(しようけつ)をきわめた時、天使が悪魔をあやつって死者数を決めていく光景を、実際に何人かがその目で見たのだという(本作には建物の屋上にいる目撃者が描き込まれている)。◆ ペストはヨーロッパの、いわばトラウマだ。6世紀から18世紀にかけて繰り返し、繰り返して、津波のように無慈悲に襲いかかり、屍の山を築いた。その最大のパンデミックは14世紀で、ヨーロッパ人口のおよそ3分の1を減らしたとされている。中世から連続と、はなはだしい数の「死の舞踏」や「メント・モリ(死を想え)」の図像が生み出された。そこに表現されたのは、地上の神たる王侯や神に近い聖職者さえも寿命ではなく疫病で、一挙に容赦なく墓塚へ導く骸骨姿の「死」であった。堅固な階級社会に慣らされた素朴な民衆は、死の「平等主義」にどんなにか驚かされたことだろう。ドローネーの絵にもとある、この時代にもうの大規模な流行は収まっていた。だが当時はそれに代わってコレラが蔓延し、フランスでは首相ペリエ、ドイツでは哲学者ヘーゲルが命を落としており、人々はこの疫病がペスト化するのではと心底恐れていたのだ。つまり「ローマのペスト」は、遠い過去の疫病と眼前の疫病の恐怖を重ね合わせた作品なのだ。またペストやコレラのように急激な死ではないものの、長い潜伏期間を経て多くの人を死に至らしめる慢性感染症に被害がある。18世紀イギリスの画家ホガースの版画「ジン横丁」がよく知られている(2017年開催「怖い絵」展にも出品され、以外にも若者に支持された)。当時のロンドンはイーストエンドが貧民街だった。第2次回入り込みで土地を奪われた農民、各地から流入してきた移民など、その日暮らしの極貧の人々が、生きる希望をなくして安楽死に溺れる姿が活写される。画面中央には、泥酔しながら赤子に授乳する美しくも苦悶するヒロイン。我が子を下の子の運命へ落したのも気づかない。この哀れな子持の隣に、はきり履の履き物も描き込まれている。「ジン横丁」の少し後、18世紀後半から産業革命の時代だ。どこよりも先に革命を推進したイギリスで結核のトップランナーとなる。人口過密と悪化した環境から、ロンドンでは5人に1人が結核で死んだという。やがて工業化が他国へ波及するとともに、結核もまた世界中に広く深く浸透してゆく。ペストは内出血で皮膚が赤黒くなるので「黒死病」の異名をとったが、それと対する形で結核は「白いペスト」と呼ばれた。発熱初期に肌が白くなるように白くなるため、結核は白ペストと文学や文芸と結びついた死病ともなった。詩人バイロンなどはこの邪険を羨し、羨し、結核を我が事とする。画家の切ない眼差しから来る。病床の蒼白い顔の少女は、悲しみにくれる介護者をむしる懇め、慈愛の心で包む。彼女はもう半ばこの世の人ではない。ムンクはこのシーンを思い出しながら描いたのだ。15歳で亡くなったムンクの最愛の姉のからだ。付き添うのは叔母。母親はすでにこの10年前に、同じ結核がもとで亡くなっていた。コッホが結核菌を発見し、20世紀前半には抗生物質が見つかり、やがてBCGワクチンが接種されるようになって、白いペストの記憶は薄れていく。それでも疫病は姿を変えて襲ってくる。現在、新型コロナという恐ろしい疫病に対し、BCGが有効かもしれないとの研究が始まっているようだ。新薬の開発も進められている。今後、画家たちはこのパンデミックを、どのように描くのだろうか。

口ドローネー「ローマのペスト」Artothek/アフロ提供 (絵画)

口ムンク「病める子」Bridgeman, Images/アフロ提供 (絵画)

(なかの・きょうこ＝作家・ドイツ文学者)

## 30. 2020年(令和2年)5月5日 火曜日 日本経済新聞 第24面【文化】【文化】連載特集『疫病の文明論』

『疫病の文明論 ② 文壇の火 社会を揺るがす「死」の必然性』 沼野幸雄

感染症の流行は、古来人間社会を繰り返し襲ってきては大きな爪痕を残して現代に至っている。古代ギリシアのトゥキュディデスによる『歴史』は、紀元前5世紀のペロポネソス戦争を扱った歴史書だが、ここにも、当時アテナイの町を襲って膨大な死者を出した疫病が詳細に記録されている。トゥキュディデスはいかにも歴史家らしく客観的に、感染した人々の症状を描き出す。罹病者が孤立し、絶望に突き落とされる様子は、現代でも変わらず、真に迫る。感染症流行の影響は戦争などよりも大きく、人類の歴史の流れにしばしば決定的な影響を与えてきた。それを鮮やかに提示し、疫病との戦いの意味を何よりも雄弁に語ってくれるのは、じつは文学作品ではないか。20世紀の文学に限って見れば、最も重要なのはカミュの長編『ペスト』(1947年)だろう。アルジェリアの港町を舞台に、まず多くのネズミが死んでいき、やがてその疫病が人々を襲ってペストだと判明し、死者がどんどん増え、町がロックダウンされる。そして閉じ込められた人々の苦悶と戦いが、医師による緻密な記録を通じて眼前に繰り広げられる。疫病という「不条理」に直面したときこそ、人間性があぶりだされるのだ。しかし、疫病と戦う医師は込み込み外れたヒーローとして美化されるわけではない。医師が一番大事なのは自分の仕事を果たす「誠実さ」だと語り、その言葉は私たちの心を打つ。これこそ今の日本の政治に一番欠けているものではないか。とどめ難いパンデミックはグローバルな視野から見れば、もっと別の政治的意味合いを帯びた、いわば隠喩(メタファー)として機能することもある。たとえばデュークの作家カレル・チャペックによる『白い病』(37年)という戯曲があるが、これは体に白い斑点がでる、急遽に全体が腐っていく、やがて死に至るという奇病が蔓延して、世界がパンデミックに陥るという前提に基づいている。しかし、単なる架空のSF的設定ではない。戦争直前の緊張した国際情勢の中、「熱病にかかったように」軍備が進められている世界で、いかにして独裁者を倒し、世界平和を実現できるかという、作者の切実な思いが込められている。疫病のウイルスは「生物学兵器」として使われる可能性もある。そのアイデアを利用して書かれた長編が、日本を代表するSF作家の巨匠、小松左京による『復活の日』だった。たまたま漏れ出した殺人ウイルスがあったという間に世界中に広がり、人類のほぼ全部が滅亡する。残ったのはウイルスが活動できない極寒の南極の基地に滞在する一連りの人々だけ、という破局ものSFだが、ここでは疫病と並行して、東西冷戦下の世界で現実的なものとなった核ミサイルによる人類終末の危機が描かれている。小松左京が示してくれたのは、どんなに科学技術を発展させても、どんなに強力な兵器で武装しても、病気に冒されたらひとたまりもない人間の肉体的な弱さである。疫病を描いたこれらの作品をいま読むと、これまで空想するのようじゃかと思えなかつたことが急に現実味を帯びたものに見えてくる。そして、感染症流行という困難な状況に直面したとき、人間はそれにどう立ち向かうべきなのか、そのために必要な勇気とモラルとは何なのか、教えられる。これこそが優れた文学作品の力であろう。

□『ペスト』を書いたカミュはノーベル文学賞を受けた(1957年) ©Roger-Viollet/アマナイメーجز提供 (写真)

(めまのみつよし=スラブ文学者)

31. 2020年(令和2年)5月5日 火曜日 日本経済新聞 第24面【文化】 【文化】 連載特集『疫病の文明論』  
『疫病の文明論』③ 緊急時の社会学 問われる公益性と補償 必要な措置 政府のみ可能 橋爪大三郎

ヨーロッパの人にもたず疫病に新大陸の人びとは苦しんだ。ラス・カサス「インディアスの破壊についての簡潔な報告」(岩波文庫)は、400年前の壊滅的な被害を記録する。レヴィー・ストロース「恐ろしい熱帯」(中公クラシック)も、感染症の恐怖を描く。パンデミックは繰り返す。100年前はスペイン風邪。その再来が新型コロナウイルス。当時より医療も情報も整っている。どう戦うか。政府の役割が大きい。人員と予算と権限がある。必要な措置がとれる唯一の組織だ。コロナウイルス自体は自然現象だ。科学や医療が扱う。それに対し、ヒートビートの感染は社会現象。公衆衛生の問題で、政府の介入が有効だ。新型コロナウイルス感染は緊急事態だ。市民を守るため政府は行動する。その優先順位は何か? まず、人命だ。救える命を一人でも多く救う。社会的距離をとり、外出を厳しく規制し、医療の態勢も整える。これらは痛みを伴う。商店を閉じ工場を止め、私権も制限する。でも実行する。公益のためだ。公益(人命を救う)→措置(政府の介入)→損害(コスト)。損害の一部に集中しがちだ。公益のために生じた損害を、社会全体で負担しよう。つまり補償だ。それが正義で感染防止のキ。政府はこれを柱にすべきだ。緊急事態に政府が必要な行動をとるの、国家緊急事態である。法の定めによる場合も、法を超える場合もある。伊藤博文は「憲法裁判」(岩波文庫)で、緊急命令と憲法の関係を明確にのべている。帝国憲法には緊急時の規定があった。パンデミックは緊急事態。でも地震や戦争とは違う。電気・水道・ガス・電話などライフラインは無償だ。住居も物流も確保できている。戦いは軍に出ているだけでよい。企業や学校が休みでもひたすら我慢だ。接触を削減し、マスクを、マスクは9割減以上でないと8割にならない。でも働かないと、生計が立たない。そこで所得を補償して家にいても、政府の措置でうまれた損失だから。補償は、景気対策でも経済の話でもない。公益のために払ったコストへの埋め戻しにすぎない。そして補償はすぐ払うべきだ。ただ財源を、税金で集めている暇がない。ならば赤字国債でまかなおう。巨額でも仕方ない。それで生活でき、企業が破産しなければ、将来の回復への道筋がつく。こんなことは経済学の教科書のどこにも書いてない。でも欧米各国は、こうした政策を素早く打ち出した。わが国も市民に説明もした。パンデミックにどう対応し、措置を取るのか、日頃から研究済みだった。補償は正しいのか、戦争被害は保証しない。自然災害も補償しない。古代からの慣習法だ。だが外出制限は政府が決定したから政府の責任だ。公益のために憲法上の権利を制限し、損害もある。補償するのが正しい。政府には感染症や経済の専門家がいる。でも専門家も補償は専門家がわからない。政府は感染症と経済を両方踏まえつつ、公益を守る。日頃の哲学の素養がものを言う。財政規律が大事で赤字国債はよくない。平時の原則である。緊急時は別だ。市民と企業が生き延びなければ明日はない。外出制限は厳格なほど短くてすむ。補償もする。経済の話はその後だ。

□ 100年前にはスペイン風邪が流行した =Newscom/アフロ提供 (写真)

(はしづめ・だいさぶろう=社会学者)

32. 2020年(令和2年)5月8日 金曜日 日本経済新聞 第32面【文化】 【文化】 連載特集『疫病の文明論』  
『疫病の文明論』④ 病の表象を見る「政府」統治の危機 生政治・生権力の進化を目標 石田英敬

「この世はひとつの病院であり、患者もどきの各々はベッドを移ることをひたすら願うばかり」と喝破したのは『パリの憂鬱』(1869年)の詩人ボードレールだった。近代の産業資本主義世界の病院化を促進した。哲学者ミシェル・フーコーが「生政治」と呼んだ統治の技術が、経済的イデオロギイと社会国家の原動力となったからである。生政治とは、人びとの生に、出生・育児・健康・事故・老後・死にわたって関与し、社会生産のために生かしてゆく「政府による統治」をいう。個人や家族の生に働きかけると同時に、社会をマクロな人口動態において捉えて統計的に働きかける。ヨーロッパで発達した近代の医学や生物学、統計学、経済学は、こうした統治の発達と切り離せない。いまコロナ危機で私たちが目撃しているのは、近代がとてつきた「政府」というガバナンスの仕組みもとつて統治の危機なのである。人類の半数に及ぶ人口が外出禁止状態に置かれている。国境は閉ざされ、世界中に散らばっていた人びとはいっせいに帰国し、都市から田舎への大規模な人口移動が起きている。グローバル化する世界の動きが急に逆回転しているかのようだ。各国で、医学、遺伝子学、生物学、感染症学、統計学、等々の専門家が動員される。人口全体にかかわる一般措置が策定され、外出禁止期間や都市のロックダウンが決まられ、住民への補助と支援が打ち出される。人びとの移動はデータで捕捉され、出入率を計算し、感染率を予測して、何パーセントまで感染させればよいかを割り出して人口が誘導される。私たちはいま、21世紀の生政治・生権力が進化していくのを目撃しているのだから。人びとは、各自の住居に隔離される(自己隔離)。自ら快進して体調を管理する。マスクをして外出する。他人との距離を指定される。コロナウイルスのような種を超えた感染は人々の文明による環境破壊の結果である。生物学的な危機が経済危機を誘発して世界史を逆回転させている。地球温暖化が示すように人類に脅された時間は少ない。私たちは、いま不意に訪れたこの世界の停止を、グローバル化を進めてきた経済とテクノロジーの運動をいかに根源的に考え直すための、現象学がどのような意味での、エペケー(本質的反省のための停止)の機会と捉えるべきではないのか。生物の生のための環境は人間の経済にとっては「外部性」とされてきた。しかし、生政治も環境も政治も、本當の意味での生物政治、地球政治へと次元を上げることが求められている。それを可能にするのは国民国家を超えた人類の世界政府でなければならぬはずだ。

□ 世界中で外出禁止令が敷かれ、人は家に閉じこもっている(パリ、3月下旬) =ロイター (写真)

(いだい・ひでたか=記号学者)

33. 2020年(令和2年)5月11日 金曜日 日本経済新聞 第28面【文化】 【文化】 連載特集『疫病の文明論』  
『疫病の文明論』⑤ 西洋史に学ぶ 不可逆な変化 傾向を加速 経済停滞と社会構造の破壊 池上俊一

ポッカッチョの『デカメロン』の冒頭には、フィレンツェを襲ったペストの猛威が描き出されている。人々は昼夜を分かたず畜舎のように道端や耕作地や家の中で死んでいき、親は子を、妻は夫を捨て、死者を扱う習慣もなくなった。このヨーロッパ史上最大の疫病は1347年、ジェノヴァ人の船によって黒海沿岸からメシーナ、マルセイユなどに持ち込まれ、翌年にはヨーロッパ中に蔓延した。媒介介となつたのは、地中海の港や船を乗り継いでいた鼠と疫である。ペストに罹ると、腋の下や鼠の付け根にリンゴや葡萄くらいの腫瘍が現れ、また身体のおちこちが黒い斑点に覆われる。3日以内、いや数時間死んでいくこともあった。鼠の媒介する腺ペスト以上に、咳、痰液で人から人へと伝染しいきなり肺を襲う肺ペストが恐ろしかった。最近の研究では、47~48年の「黒死病」によりヨーロッパの人口のじつに6割が死んだとされる。ヨーロッパではこの最初の流行の後、1720年までほぼ4世紀にわたって、10~12年ごとにペストが再発した。そして大気汚染を嫌った人々には、バラの花びらを部屋に散らしたり、香料を燻蒸したりするくらいに対抗手段はなかった。黒死病は、伝染力があまりに強烈であったため、「死ぬまで叫ぶ」とか叫び声を立ててユダヤ人をスケープゴートにしたほか、鞭打りや拷問をうけるように「嫉妬な神」を畏怖する心が広まった。ヨーロッパではペスト以外に繰り返してパンデミックが流行し、それだけ異なる心性をもたらした。中世に最初に襲った大規模な流行病は、「聖なる火」と呼ばれた炭疽性炭疽で、10世紀半ばに発生して4万人が犠牲になったという。11~13世紀に広まったハンセン病は、当時、伝染力が強い不治の病と恐れられ、淫乱の罪への神罰と目される半面、罪の贖いと天国での栄光に導くとのイメージもあった。2つの病とも、聖なる世界と結びつけられ、慈善施設設立や病を癒す念入りにして隆々たる儀礼の繰り上げなど、宗教的・社会的な慣習がそれなりに可能であったのは、ペストとの大きな違いである。近代に入ると、結核が産業革命後の経済人の負の側面を象徴するとともに、生の開花期を迎えた若者たちを追い打ちすることから、ロマン主義文学に格好の題材を与えた。さらにコレラや梅毒は、品位を貶める下等な病気、あるいは汚れた者、酒に溺れた者、堕落した者への報いであると考えた。1980年代から90年代に広まり記憶に新しいエイズは、非法な薬品、異常セックス、制度転換、文明崩壊のグロテスクな空想をかきたてた。だが病気には本来、道徳的な意味などないはずだ。またどんな恐ろしい疫病も、文化や社会が不可逆的に歩んでいくべき道を行き止めたという考えもある。黒死病に於ては、経済活動の停滞をもたらした。伝統的な社会・家族構造を破壊し、キリスト教世界のモラルをくづかさせたが、それはすでに兆していた動向を加速しただけなのかもしれない。ペストの猛威を冒頭で描写した『デカメロン』でも、本文は打って変わって愉快と機知に溢れた会話が満載で、明るくルネサンスの気分を先取りしているのである。

□ 死者は墓掘り人が埋葬した。14世紀半ばには欧州人口の6割が黒死病で死んだとされる(ジル・ル・ミュジジ「トルネーの黒死病」) =Bridgeman Images/アマナイメーجز提供 (図版)

(いけがみ・しゅんいち=歴史学者)

34. 2020年(令和2年)5月12日 火曜日 日本経済新聞 第34面【文化】 【文化】 連載特集『疫病の文明論』  
『疫病の文明論』⑥ 変わる価値観 空気の汚れ 書物と読者の関係 衛生と読者の関係 五十嵐大輔

日本にとっては横浜港に停泊したクルーズ船の集団感染がプロローグとなり、今や列島全体がクルーズ船と化した。2月に報道を見ながら思いついたのが、18世紀から19世紀にかけて、イギリスの川岸や海岸に係留された監獄船である。監獄に囚人があふれ、廃船を活用したが、衛生状況が悪く、多数の死者が出たという。クルーズ船は横断し、超高層ビルよりも大きい乗り物だ。が、空母でも感染が発生したように、一度、閉鎖された環境で感染が始まると、手に負えない。一方で陸地との隔離や機動性ゆえに、病院船も注目されている。実は空気の流れが、病院建築の重要な課題として認識されたのも、衛生観が変化した18世紀に遡る。ウイルス学の登場前だが、開放した空気は害を及ぼすと考えられたからだ。その結果、18世紀末には呼吸する機械としての病院デザインが、建築家によって提案されている。白色を好み、「衛生陶器」と銘打たれたモダニズムの建築も、健康を重視した。例えば、ル・コルビュジエの有名なサヴォア邸は、本体を持ち上げるピロティが、じめじめした地面と切り離すことで風通しを良くし、塵埃を復興させるような貢献はできない。ただし、被災直後の避難所や仮設建築の方法論は使えないだろう。中国・武漢で瞬時のうちに建設された巨大な仮設病院も記憶に新しい。日本では、圧倒的な病床不足を解消すべく、すでに軽症者をホテルで受け入れたり、幕張メッセなどの大規模施設を臨時病院に転用することが検討されている。横浜の武道館に収容されたネットカフェ難民に対し、飛沫感染予防をかねて、坂道は災害時に活躍した縦管の間仕切りシステムを持ち込んだ。これらから台風や地震が発生した場合にも問題になることが、避難所でも人が密集できないのが、新型コロナウイルスの厄介なところだろう。従来、人が集まるのは、良い建築である、無条件で考えられていた。しかし、その前提が完全に覆ったのである。新しい空間モデルとして想起されるのが、2003年の藤本壮介の安中環境アートフォーラムのコンペ最優秀案だ。これはアメーバのような輪郭の建築であり、空間の形式として説明すると、多方向に突きだすびだ状の空間が並ぶが、それぞれは中央に向けて開く。ゆえに、隣の空間とは壁で仕切られているが、対面する空間は通い、つまり、集まりながら、同時に離れている。これは実際に住宅で応用されたように、スケールを変えたり、かたちを調整することで、様々な汎用できる空間モデルのように思われる。

口 犯罪者を乗せてオーストラリア行きを持つ英国の監獄船(19世紀初頭、木版画) = GRANGER.COM / アプロ提供 (図版)

(いがらしたろう=建築評論家)

35. 2020年(令和2年)5月12日 火曜日 日本経済新聞 第36面【文化】 【文化】連載特集『疫病の文明論』

『疫病の文明論』⑦ 中国の歴史 聖邪逆疫 犠牲覚悟の「戦争」 大人数動員、本質は変わらず 加藤敏

「疫は役なり」。古代中国人にとって、疫病は、天が人民に均等に割り当てる苦役であり、戦役だった。中国最古の字書『説文解字』に「疫、民皆疾也」とある。疫病とは、天下の人民がみな猛スピードで病気になること。中国数千年の歴史は、疫病に対する戦役の繰り返りだった。「疾」の字源は、病気が矢のような速さで進行すること。「病」は、患者の手足がこわばり横にピンと張り出す(丙はそのさまを示す形)ほど重篤な状態。「役」は古代の武器「矢」(たてほこ)を手に入れた者が運送すること。「疫」には遠くまで広がるイメージがある。海外の医療前線の現場の映像はすさまじい。集中治療室のベッドに横たわる重症患者たち。防護服に身を固め懸命に動き回る医師・看護師たち。「疫」「疾」「病」の字源をさがしながら読んでいく。昔の中国人は、病気が不景気は、それぞれ身体内部や社会の「気」の流れが乱れることから起きると考えた。個人レベルでは、鍼灸でツボを刺激し、体操で体を動かして気の体内循環を整える。社会レベルでは、邪気や病気を力づくで外部に追い払う「聖邪逆疫」の祭祀儀礼を行う。大人数を動員し、爆竹をバンバン鳴らし、銅鑼や太鼓をガングン叩く。京剧など中国の芝居が騒々しいのも、伝統的な葬式でチャルメラや太鼓をにぎやかに奏でるのも、聖邪逆疫の発想による。内省的で静かな祈りとはほど遠いが、民衆の士気を鼓舞し、社会の沈滞感を打破する精神的効果はあった。中国の伝統医学のレベルは、それなりに高かった。中国最古の医学書『黄帝内经』は「聖人は未病を治す」と疾病の予防を重視した。春秋戦国時代の諸侯(へんじやく)や『三国志』の華佗(かた)など、伝説的な名医も輩出した。にもかかわらず、疫病の発生は防げなかった。歴代王朝の支配者と人民は、疫病に襲われるたびに、国土の広さと人口の多さに頼る「集団免疫戦略」をとるしかなかった。社会的弱者を中心に多数の死者が出る。明王朝の初代皇帝・朱元璋は貧民の出身で、若いころ家族全員を疫病と栄養失調で失った。そんな悲惨な話は珍しくなかった。聖邪逆疫の高揚感も、膨大な犠牲者が出る喪失感を乗り越えるための、悲しい知恵だった。21世紀の科学技術をもってしても、新型コロナウイルスの特効薬をすぐには開発できない。現代中国のコロナ対策も、本質は依然として「聖邪逆疫」の「戦役」である。犠牲を覚悟で膨大な人員を動員し、戦役の腕を磨き上げて決着をつける。戦役なので、人民も都市封鎖の苦勞を我慢する。政府は全国に動員をかけ、軍隊や、医師・看護師を病院単位で武漢に派遣する。鎮南山医師という総司令官や、李文亮医師という英雄、その他、軍事的な「戦死者」も出る。妊婦中の看護師や、頭髪を丸刈りにされる女性看護師など健気な「戦士」の報道映像を、国営放送は明るく勇壮なBGM入りで流す。人民は戦役勝利の高揚感に酔う。そんな中国人から見ると、よくも悪くも冷静な日本人のコロナ対策は、とても奇跡に見えらる。逆もまた真なりだ。今、中国は「第二波」への戦役に備えている。中国の政府と人民が自国のコロナ対策を冷静に振り返り、外国人に対して自国の責任を理性的に語れるようになるのは、まだ先である。

口 中国の民間伝承に伝わる厄よけの神、鍾馗(漢・張春祥、京劇「鍾馗嫁妹」より) ©新潮劇院、撮影・井田裕明 (写真)

(かとう・とおる=中国文学者) = かわり

36. 2020年(令和2年)5月18日 月曜日 日本経済新聞 第24面【文化】 【文化】連載特集『コロナと創作』

新型コロナウイルスの蔓延は、文化・芸術にも深刻な影響を与えている。この衝撃の中、どんな思索をめぐらせているか。創作者たちに聞いた

『コロナと創作』(1) 文学が描く危機下の共感 「非日常」価値観変える力 作家 平野啓一郎氏

口 (肖像:写真) ひらのけいいちろう 作家。1976年生まれ、京大卒。

99年『日蝕』で芥川賞。著書に『マチネの終わりに』など、「ある男」の英訳が近く米国で刊行される。

私ノール賞作家カミュの「ペスト」の発行部数が日本で100万部を超えるなど、感染症を扱った文学作品が注目されている。「優れた文学作品には、未曾有の出来事に出合ったときの様々な人々の性格や心の動きなどが『一般論』ではなく、具体的に描かれている。そのあるのは共感だと思える。『コロナ関連』を中心に、周りでは膨大な情報が飛びかっている。しかし、対処の術のない情報、過剰な情報は、不安を与えっぱなしにする。それに対し、文学は読者に抱かせた感情に責任を負っている。そこに、心を落ち着かせる作用があるのでは」危機の時代に求められる小説には「現実を忘れられるような作品と現実に向き合った作品がある」と考える。もともと、自らの書き方は変わらないという。「コロナ禍の前に書いた作品が今になって無効になるようでは、何か間違っていたということ。作家は自分が信じているものを執筆するしかない」と強調する。災厄や災害のとき「パンか芸術か」との選択を迫られることがある。「憲法25条には『すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する』とある。芸術は精神を安定させ、豊かにする力がある。存続に向けた公的支援は欠かせない。コンサートやライブに行けない状態が続いているが、感染拡大が落ち着いた頃に、楽しみにしていた音楽も芝居もなくなっている。というのではとても耐えられない。コロナ禍が経済に甚大な被害をもたらすことに強い懸念を抱く一方で、人々の価値観が変わる可能性に希望を見いだす。「あえてポジティブな見方に立てば、テレワークの定着などで働き方の変化が期待される。よく言われることが、体調が悪かったら会社を休むという習慣が根付くのは健全だと思う。社会的格差が一層あらわになったことで、その解消に取り組む必要性も重要視されるだろう」と指摘する。「東日本大震災後も日本人の価値観が変わることが期待されたが、自己中心主義が進むなどむしろ反動的にさえなった。しかし台風被害など災害・災厄は続く。今後感染症の流行は起きるだろう。いまや『非日常』が当たり前になった。これまで私たちが考えていた『日常』はたまたまに訪れない小確状態だと覚悟し、リスクとの向き合い方や医療体制のあり方を考えなくてはならない」考え次第でピンチはチャンスになるという。「(人は関わる相手によって別々の人格『分人』を持つという)『分人主義』を私が思いついたのは、『アイデンティティ』の問題に悩んでいたときだった。今回のコロナ禍でも(インターネット上で会話する)『オンライン飲み会』といった動きが広がっている。自分もやってみて意外に楽しかった。新たな文化を生み出す機会にもなると思う。先日、海外の友人とオンラインで話していたとき『分人』が話題になった。「それまで彼は『分人』という概念がよく分かっていなかったが、コロナ禍で閉じこもり、ピンときたらいい。会話が限られたことで自分の『分人』数が減り、違和感を覚えたのだろう。強制的にそうした事態に追い込まれていることが問題なのですか」講演、イベントの中止や子供のケアに頭を悩ませつつも、小説執筆に集中する日々だ。(編集委員 中野悠)

37. 3つの密

3つの密は、2020年(令和2年)の新型コロナウイルス感染症拡大期に、集団感染の防止のために総理大臣官邸、厚生労働省が掲げた標語。密閉・密集・密接を指し、これらを選避することで感染拡大を防ぐことに協力するよう国民に呼びかけた。3つの「密」、3密と表記されることもある。

経緯・概要

2020年3月1日、厚生労働省は新型コロナウイルスの感染拡大の予防策として「新型コロナウイルスの集団感染を防ぐために」を公表した。これまでにクラスターが発生した場所の共通点として、「換気が悪く、人が密に集まって過ごすような空間・不特定多数の人が接触するおそれが高い場所」を挙げ、注意喚起をした。3月18日、総理大臣官邸公式Twitterは、「換気の悪い密閉空間・多数が集まる密集場所・間近で会話や発声をする密接場面」を避けて外出するように呼びかけ、3月19日には新型コロナウイルスの集団発生防止に関するチラシ「密を避けて外出しましょう」をHPに掲載した(後に「3つの密を避けて外出しましょう」に変更)。3月28日には、安部首相総理大臣が記者会見で「3つの密」を避けるように呼びかけた。以来、「3つの密」は新型コロナウイルス拡大防止の標語として広く用いられているが、3月31日から4月1日にかけて厚生労働省とLINEが新型コロナウイルス対策のため全国の利用者を対象に行った調査の第一回では、「3つの密」を避ける取り組みが十分ではない現状が明らかになった。……(Wikipedia「3つの密」最終更新 2020年4月29日(水)07:45)

健康・医療 新型コロナウイルス感染症について

……

国民の皆様へ(予防・相談)

風邪や季節性インフルエンザ対策と同様にお一人お一人の咳エチケットや手洗いなどの実施がとても重要です。感染症対策に努めていただくようお願いいたします。風邪症状があれば、外出を控えていただき、やむを得ず、外出される場合にはマスクを着用していただくよう、お願いします。集団感染の共通点は、特に、「換気が悪く」、「人が密に集まって過ごすような空間」、

「不特定多数の人が接触するおそれが高い場所」です。換気が悪く、人が密に集まって過ごすような空間に集団で集まることを避けてください。

『新型コロナウイルスの集団発生防止にご協力をお願いします 3つの密を避けましょう！ ①換気の悪い密閉空間 ②多数が集まる密集場所 ③付近で会話や発声をする密接場面  
新型コロナウイルスへの対策として、クラスター(集団)の発生を防止することが重要です。日頃の生活の中で3つの「密」が重ならないよう工夫しましょう。3つの条件がそろった場所がクラスター(集団)発生のリスクが高い！ ※3つの条件のほか、共同で使う物品には消毒などを行ってください。 首相官邸・厚生労働省』

(出典:首相官邸HPより:2020年4月29日)

38. 2020年(令和2年)4月28日 / 01:32 / REUTERS

『NY市。一部車道閉鎖し歩道拡張へ 新型コロナの移動制限中』

【ニューヨーク 27日 ロイター】米ニューヨーク市のデブラジオ市長は27日、新型コロナウイルス感染拡大防止に向けたロックダウン(都市封鎖)措置が狭く、市内の一部車道を通行止めとし、歩行者に開放するほか、一時的な自転車レーンを設置すると発表した。夏が近づくと、狭いアパートから外に出ようとする市民が増え、外出時にソーシャル・ディスタンシング(社会的距離)を維持することが困難になることが懸念されている。デブラジオ市長は「今後1カ月かけ、64キロ分の車道を開放し、危機が長引けば、最長160キロまで拡張する」と述べた。人が集まりやすい公園周辺の道路を中心に開放する方針としたが、詳細には踏み込まなかった。市議会のメンバーは当初、市民の移動制限措置が実施されている間、車道の1レーンを少なくとも歩行者や自転車に開放する計画を提案していたが、歩行者の安全などを巡り市警察などから懸念の声が上がったことで計画が修正された。米国ではサンフランシスコやデンバー、欧州ではイタリア・ミラノ、ドイツ・ベルリンなどで、車道を通行止めにし、歩道や自転車レーンを拡張する措置が実施されている。

39. 2020年(令和2年)4月29日 水曜日 長崎新聞 第3面【総合】

『第2波は欧州起源 国立感染研 コロナウイルスのゲノム解析』

国内の新型コロナウイルス感染症は、中国・武漢から持ち込まれた第1派の感染拡大はほぼ終息し、今は欧州で流行しているウイルス株を起源とする第2派が広がっているとする研究結果を、国立感染症研究所が28日までに発表した。感染者から採取したウイルスのゲノム(全遺伝情報)配列のわずかな違いを解析した。チームは、国内患者562人の検体を集めて調査。海外で登録されている4511人分のデータと比較した。

【武漢からの第1派 ほぼ終息】

中国・武漢で発生したウイルス株は、1~2月に日本に入り込み、各地でクラスター(感染者の集団)が報告されたが、既に封じ込めたとみられることが分かった。クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗客乗員から見つかったウイルスは、武漢のウイルス株と比べ1カ所だけゲノム配列が変異していた。国内には広がっていないという。一方で武漢株から変異した欧州で流行しているウイルス株が、3月中旬までに海外からの帰国者らが持ち込む形で国内に流入。大都市圏から地方に「感染ルート不明例」として拡大したとみられる。同研究所の黒田誠病原体ゲノム解析研究センター長は「第1派は保健所などの対応で抑え込めたものの、海外旅行や3月の夏の連休による外出などで、欧州経由の第2派が国内で大きく広がったようだ」と話している。

40. 2020年(令和2年)5月10日 日曜日 日本経済新聞 第1面 記事

『新興国感染、先進国抜く 世界に新たなリスク 1日5万人 [チャートは語る]』

米欧が経済再開へ動き始めるなか、新興・途上国で新型コロナウイルスの感染が急増している。新規感染者数は5月上旬に先進国を逆転し、8日に1日5万人を超えた。ロシアは感染者数が連日1万人を超え、ブラジルは1日の死者数が米国に次いで世界2位となった。脆弱な医療体制にもかかわらず、貧困層の不満を抑えるため経済再開を急いでおり、感染爆発の懸念が高まっている。財政差益が不安定な新興・途上国の感染拡大は、世界経済へのリスクにもなりかねない。

世界保健機関(WHO)のデータをもとに、新型コロナの新規感染者数を国連の基準で先進国と新興・途上国に分類して集計した。先進国は4月上旬から4割以上減少したが、新興・途上国は拡大が止まらない。ロシアは病院や軍で集団感染が相次ぎ、9日まで7日連続で新規感染者数が1万人を超えた。政府系研究機関は感染源の64%が病院に集中すると指摘する。ブラジルも新規感染者が1万人を超え、1日あたりの死者数は米国に次ぐ2位で推移する。サンパウロ、アフリカ、南アフリカやカメルーン、新興・途上国は先進国に比べて公的医療体制が脆弱だ。感染拡大が医療崩壊、ひいては死者の増加につながるリスクも高い。WHOによる公的医療関連支出は国内総生産(GDP)比で3%と、先進国の8%を大きく下回る。感染拡大が目立つロシアやブラジル、インド、メキシコはいずれも世界平均(6%)を下回る。感染爆発の危機に直面している新興・途上国だが、それぞれで外出禁止の解除や商店の営業再開をめざす動きは後を絶たない。3月に全土封鎖したインドは感染者が比較的少ない2割強の地域で経済活動の再開を認めた。ブラジルのボルソナロ大統領は新型コロナを「ただの風邪」と呼び、「外出自粛は経済や雇用を破壊する」と国民に呼びかける。ロシアは6日の閣議で地方の感染状況を踏まえた行動制限の緩和を議論。モスクワでは12日から建設業や製造業の再開を認める。経済再開を急ぐ背景には、財政や経済の弱さがある。先進国のような手厚い補償や現金給付を提供できず、国民の不満が政府へ向かいやすい。イランは専門家「時期尚早」との警告を押し切って行動制限を緩和した。新興・途上国は外出規制などに伴う経済対策で財政赤字が膨らみ、これを不安視する海外マネーの流出を招いている。その結果、自国通貨の相場が下落し、対外債務の実質負担を高めるという悪循環に陥っている。国際通貨基金(IMF)には100カ国以上が緊急融資を求めている。新興・途上国の感染爆発を止められなければ、世界の新型コロナへの戦いに終止符は打てない。対外債務の不履行などが広がれば、世界経済にも大混乱が広がる懸念がある。医療・経済の両面でグローバルな支援体制の構築が求められている。

□ 新興国の新規感染ペースが勢いを増している 新規感染者数(万人):先進国、新興国(折れ線グラフ) / 累計感染者数(万人):ロシア、ブラジル、イラン、インド、メキシコ(折れ線グラフ)

□ 新興国は公的医療が弱い一方、先進国も大型財政出動に奔走 財政収支のGDP比(%) - 公的医療支出のGDP比(%, 2017年):先進国平均、世界、イラン、ブラジル、ロシア、メキシコ、インド、新興国平均(棒グラフ)

(サンパウロ=外山尚之、黄田和宏、真鍋和也)

41. 2020年(令和2年)5月17日 日曜日 日本経済新聞 第2面【総合1】

『「欧州型」世界で猛威 コロナウイルス遺伝情報分析▶17種に 半月で変異 対策明確』

新型コロナウイルスの遺伝情報を調べると、感染が世界にどう広がったかがわかるようになってきた。欧州で猛威をふるったタイプが米ニューヨーク州やブラジル、アフリカ、ロシアなどに渡り、さらに感染を広げている。米国では欧州型のほか米国型も猛威をふるう。ほぼ半月ごとに変異し、米大学の解析では17種にのぼる。対策の巧拙もわかるという。

ウイルスのゲノム配列を調べると、感染経路や変異などがわかる。主に「中国型」「欧州型」「米国型」に分類でき、それぞれの地域で爆発的に感染が広がった。欧米の研究者らが作る国際データベース「GISAID」は患者から採取したウイルスのゲノム(遺伝子の総体)を公開中だ。5月上旬までに5千人分のウイルスのデータが集まった。このデータの分析を集めた「ネクストストレン」によると、1月中旬に中国・武漢から中国型のウイルスが世界に拡散し始めた。欧州では1月下旬~2月上旬、変異した欧州型が無症状の旅行者を通じて各国に広がったとみられる。その後、ウイルスは変異を繰り返しながら3~5週間で国境を越えていった。米国では、ニューヨーク州で欧州型が主流だったが、他の州では変異した米国型が主流になった。中国のほか、様々なタイプが国内に入ってきており、それらが感染者の体内で融合して生まれたとみられる。米ドレクセル大学の研究チームはゲノム変異の違いを「指紋」という形で分類し、17種類になった。世界で感染者が増えるにつれ、変異のペースが上昇しているという。新型コロナ対策が機能したかどうかともわかる。国立感染症研究所は、3月に以降に主に欧州型によって全国に感染が広がったとの分析をまとめた。1~2月に中国から日本に入ったウイルスは封じ込めにも成功した。その後、欧州で流行しているウイルスが帰国者らを通じて流入し、対策が不十分なまま都市部から全国に感染が広がった。国内の感染者560人から採取した検体のほか、国際データベースの約4500人分の情報も加えた。ドレクセル大学の解析では、大規模な渡航制限に踏み切った中国や香港では、欧州型は検出されていない。感染研の黒田誠・感染研病原体ゲノム解析研究センター長は「過ちを正しく把握する必要がある」と話す。変異し続けること、感染力や毒性が高いウイルスが出現する恐れがある。しかし、英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのフランソワ・パルレ教授は「毒性や感染力を増したのかどうかはまだわからない」と話す。同教授らは約7500人分のウイルスを解析、変異が198カ所あると突き止めた。ただ、ウイルスの機能面で重要な変化が生じたとは考えにくいという。一方で、感染が深刻な地域全てで、ゲノムの幅広い多様性が確かめられた。ウイルスが早い時期に世界に広がっていたことになる。毒性については変異をみても、わからないことが多い。北京大学は3月、新型コロナウイルスは「L型」と「S型」の2つに分かれ、L型が毒性が高いと発表した。その後、毒性を「裏付けする証拠はなかった」と修正した。確定するには、動物や細胞を使った実験で確かめる必要がある。

□ 欧州では中国から入った変異したタイプが猛威をふるった(イタリアの病院の集中治療室) = AP

42. 2020年(令和2年)5月16日 土曜日 日本経済新聞 第28面【読書】

『砂と人間』 ヴァン・バイザー著

原題=The World in a Grain (藤崎百合訳、草思社・2400円)  
▼著者は米国在住のジャーナリスト。ニューヨーク・タイムズ紙などに寄稿。

【都市化と欲望の行き着く所】 環境の変化や生活圏の拡大によって、野生動物を宿主として突如人間にうつる人獣共通感染症が報告されるようになった。このたびのパンデミックも、急速な都市化が背景にあるといわれる。では都市化とは何か。その歴史と今を見直す優れたノンフィクションが刊行された。何千年にもわたる砂と人間の関わりから現代の砂採掘現場まで、「砂」をテーマに世界各地で取材を行い、文明の裏面を描き切った大作だ。古代ローマの建築材に使われた砂と砂利を原料とするコンクリートが都市の土台となったのは19世紀。鉄筋コンクリートの登場を起点とする。砂浜や湖で採取した砂はビルの建築資材となり、道路を覆い、人や物の流れを変えた。砂はガラスの主原料として科学革命も牽引した。顕微鏡や望遠鏡、デジタル社会に欠かせない光ファイバーやシリコンチップ、スマホの画面も砂でできている。良質な砂が眠る川や湖、海では争奪戦が繰り広げられている。インドネシアでは24の島が消え、ベトナムのメコンデルタは今世紀中に半分消滅するといわれる。近年、砂の需要が増すのはシェール石油の採掘現場だ。岩盤を裂く際に必要な砂の採掘が進む米ウイスコンシン州チペワ

群では、地下水と露が壊滅的な影響を受け、反対運動が起きた。「未来の世に対する犯罪だ」と住民は嘆く。前者はバランス感覚の優れた取材者で、砂で利益を得る者を糾弾するわけではない。だが……その姿から浮かび上がるのは砂を求めた人間の底なしの欲望の歴史である。目下、世界最大の砂消費国は中国だ。気候変動で砂漠化が進み、内陸から多くが都市に移住した。今や100万人都市は220超。都市人口は60年前の3倍だ。生態系への影響を顧みない開発で自然破壊が進んでいる。コロナ禍は起こるべくして起きたと思われた。全世界が米国並みの暮らしをするには地球4個半が必要で、砂の枯渇は時間の問題だという。コンクリートやガラスの代替物はなく、消費量を減らすしか道はない。国際的な連携は急務であり、本書は議論に必要な材料をふんだんに提供してくれるだろう。【評】ノンフィクションライター 最相 兼月  
□『砂と人類』(表紙写真)

43. 2020年(令和2年)5月17日 日曜日本国経済新聞 第26面【サイエンス】

『サケ、骨に「旅の記録」 解析方法、ウナギ養殖に活用も』

サケは食卓の定番メニューだが、これだけ身近な魚でも広い海のどこを泳いでいるのかわかっていなかったという。最近、サケの骨の中に各地の痕跡が記録されていることを日本の研究チームが突き止めた。位置をたどると、日本の川でとられるサケの多くが米国アラスカ州に近いベーリング海の大陸棚まで回遊していた。イワシやウナギでも、「耳石」と呼ぶ耳の組織から行動履歴が明らかになりつつある。魚たちが語り始めた「旅の記録」をもとに、未知の生態に迫る研究が始まった。

3月、海洋研究開発機構などの研究チームは、サケの詳しい回遊ルートが初めて明らかになったと発表した。長旅の末にベーリング海の大陸棚にたどり着き、たつぷりとエサを食べて日本に戻ってくるという。サケが日本近海からベーリング海へ渡ることは捕獲調査で知られていた。太平洋最北部にあるベーリング海の大陸棚まで到達しているかは不明だった。……サケの回遊ルートを探っていた研究チームが手掛かりをつかんだのは、海を泳ぐ姿の観察でも全地球測位システム(GPS)の活用でもなかった。意外にも、旅の記録を秘めていたのはサケ自身の骨だった。魚の骨の一部は年齢を刻むように成長する。骨を輪切りにすると、中心に近づくとほど若い頃に育った環境の影響が残っている。研究チームは……サケの脊椎骨をつくるコラーゲンの中の元素を分析した。すると、稚魚や若魚、成魚の各時期に成長した部分で窒素分の比率が違っていた。元素は、同じ種類でも質量(重さ)がわずかに異なる「同位体」という兄弟がいる。窒素分の同位体の比率は、海中のプランクトンの働きによって海域ごとに変わる。この手法は、他の魚の研究でも引張りだ。東京大学などのチームは、マイワシの耳石をつくる酸素の同位体の比率を調べ、過去に泳いでいた海域の水温と塩分を明らかにした。耳石に残っていた記録とシミュレーション(模擬実験)を組み合わせて、マイワシが日本の太平洋側の近海からまず黒潮から狭く潮の流れに乗って東に移動し、そこから北上する可能性が高いことを裏付けた。……ニホンウナギの養殖にも役立ちそうだ。東大の白井厚太郎准教授はウナギの耳石を分析し、泳ぐ場所の水温と、耳石中の酸素の同位体の比率との関係を見いだした。最大の関心は回遊経路だ。ウナギは太平洋の中央部に向かって回遊し産卵するとされるが、養殖後に放流したウナギが産卵場に向かっているのかわかっていない。養殖場の暖かい水温で育ったウナギが産卵場で見つかれば、放流が資源維持に有効と分かる。完全養殖に必要な採卵などの技術開発にもつながりそうだ。ネオジムという元素も、太平洋と日本海など海域ごとに同位体の比率が異なる。現在は魚にネオジムが取り込まれる仕組みを研究する段階だが、魚の生態解明に生かせる日が来るかもしれない。(尾崎達也)

□各地の痕跡が骨に残る・マイワシの耳石・サクラマスの脊椎骨 | 骨の成分と一致する海域から回遊ルートを見つけた 稚魚期:海域A→若魚期:海域B→成魚期:海域C→回遊ルート | 生態がわかれば計画的な漁業や保全にもつながる 生物/分析した場所/分析した元素/分かったこと:サケ/脊椎骨のコラーゲン/窒素/ベーリング海の大陸棚まで回遊:マイワシ/耳石/酸素/黒潮の流れに乗った後で北上する:リボソズメダイ/耳石/酸素/海水と淡水が混ざった河口で生息:マグロ/脊椎骨/ネオジム/研究中

44. 書籍『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』上 | 2016年9月30日 初版発行 著者 ユヴァル・ノア・ハラリ 訳者 柴田裕之 発行者 小野寺優 発行所 株式会社河出書房新社 上り

Yuval Noah Harari SAPIENS: A Brief History of Humankind

第1部 認知革命 第1章 唯一生き延びた人類種 ……

第2章 虚構が協力を可能にした

前章で見たとおり、サピエンスは一五万年前にはすでに東アフリカで暮らしていたものの、地球上のそれ以外の場所に復出して他の人類種を絶滅に追い込み始めたのは、七千年ほど前になってからのことだった。それまでの八万年間、太古のサピエンスは外見が私たちにそっくりで、脳も同じくらい大きかったとはいえ、他の人類種に対して、これといった強みを持たず、とくに精巧な道具も作らず、格別な偉業は何一つ達成しなかった。 それどころか、サピエンスとネアンデルタール人との間の、証拠が残っている最古の衝突では、ネアンデルタール人の縄張りだったレヴァント地方(現注 地中海東岸の地方)に移り住んだが、掘るきない足場は築けなかった。敵意に満ちた先住民がいたり、気候が厳しかったり、地球特産の菌類のみ寄生生物に出くわしたりしたのかもしれない。理由はなんでもあれ、サピエンスはけっきょく引き揚げ、ネアンデルタール人は中東に君臨し続けた。 学者たちはこのような乏しい実績に照らして、これらのサピエンスの脳の内部構造は、おそらく私たちのものとは異なっていたのだからと推測するようになった。太古のサピエンスは見かけは私たちに同じだが、認知能力(学習、記憶、意思疎通の能力)は格段に劣っていた。彼らに英語を教えたり、キリスト教の教義を正しくと信じさせたり、進化論を理解させたりしようとしても、おそらく無駄だっただろう。逆に私たちに比べて、彼らの言語を習得したり、考え方を理解したりするのは至難の業だろう。 だがその後、およそ七千年前から、ホモ・サピエンスは非常に特殊なことを始めた。そのころ、サピエンスの複数の生活集団が、再びアフリカ大陸を離れた。今回は、彼らはネアンデルタール人をはじめ、他の人類種をすべて中東から追い払ったばかりか、地球上からも一掃してしまった。サピエンスは驚くほど短い期間でヨーロッパと東アジアに達した。四万五〇〇〇年ほど前、彼らはどうにかして大海原を渡り、オーストラリア大陸に上陸した。それまでは人類が足を踏み入れたことのない大陸だ。約七千年前から約三千年前にかけて、人類は舟やランプ、弓矢、針(暖かい服を縫うのに不可欠)を発明した。芸術と呼んで差し支えない最初の品々も、この時期にさかのぼる(図4のシュタール洞窟のライオン人間を参照のこと)。宗教や交易、社会的階層化の最初の明白な証拠についても同じだ。 ほとんどの研究者は、これらの前例のない偉業は、サピエンスの認知能力に起こった革命的な産物だと考えている。ネアンデルタール人を絶滅させ、オーストラリア大陸に移り住み、シュタールのライオン人間を撃つ人々は、私たちに同じくらい高い知能を持ち、創造的で、繊細だったと、研究者たちは思い切った。仮にシュタール洞窟の芸術家たちに出会ったとしたら、私たちは彼らの言語を習得することができ、彼らも私たちの言語を習得することができたら、不思議の国での冒険から、量子物理学のパラドクスまで、私たちは知っていることのいっさいを彼らに説明でき、彼らは自分たちの世界観を私たちに教えられるはずだ。 このように七千年前から三千年前にかけて見られた、新しい思考と意思疎通の方法の登場のことを、「認知革命」という。その原因は何だったのか? それは定かではない。最も広く信じられている説によれば、たまたま遺伝子の突然変異が起こり、サピエンスの脳内の配線が変わり、それまでない形で考えたり、まったく新しい種類の言語を使って意思疎通をしたりすることが可能になったのだという。その変異がネアンデルタール人ではなくサピエンスのDNAに起こったのか? 私達の知る限りでは、それはまったくの偶然だった。だが、より重要なのは、「知恵の木」の突然変異の原因よりも結果を理解することだ。サピエンスの新しい言語のどこがそれほど特別だったのか、私たちは世界を征服できたのだろうか? それはこの世で初の言語ではなかった。どんな動物も、何かしらの言語を持っている。ミツバチやアリのような昆虫でさえ、複雑なやり方で意思疎通させる方法を知っており、食物のありかを互いに伝え合う。また、それはこの世で初の口頭言語でもなかった。類人猿やサルは、多くの動物が口頭言語を持っている。たとえば、サバンナモンキーはさまざまな鳴き声(コール)を使って意思疎通させる。動物学者は、ある鳴き声が、「気を付けろ! ワンだ!」という意味であることを突き止めた。それはわずかに違う鳴き声は、「気を付けろ! ライオンだ!」という警告になる。……

おそらく、「噂話」説と「川の近くにライオンがいる」説の両方とも妥当なのだろう。とはいえ、私たちの言語が持つ真に比類なき特徴は、人間やライオンについての情報を伝達する能力ではない。むしろそれは、まったく存在しないものについての情報を伝達する能力だ。見たことも、触れたことも、匂いを嗅いだこともない。ありとあらゆる種類の存在について話す能力があるのだ。 私たちの知る限りではサピエンスだけだ。 伝説や神話、神々、宗教は、認知革命に伴って初めて現れた。それまでも、「気を付けろ! ライオンだ!」と言えぬ動物や人類種は多かった。だがホモ・サピエンスは認知革命のおかげで、「ライオンはわが部族の守護霊だと宣言能力を獲得した。虚構、すなわち架空の事柄について語るこの能力こそが、サピエンスの言語の特徴として興彩を放っている。 現実には存在しないものについて語り、『鏡の国のアリス』ではないけれど、ありえないことを朝食前に六つも信じられるのはホモ・サピエンスだけであるという点には、比較的に容易に同意してもらえよう。サルが相手では、死後、サルの天国でいらでもバナナが食べられると信じ合ったところで、そのサルが持っているバナナを譲ってはもらえない。だが、これはどうして重要なのか? なにも、虚構は危険だ。虚構のせいでは判断を誤ったり、気を遣わされたりしかねない。群に妖精やユニコーンを探しに行く人は、キノコやシソを探しに行く人にとって、生き延びる可能性が低く思える。また、突進しない守護神に向かって何時も祈っていたら、それは貴重な時間の無駄遣いで、その代わりに狩猟採集や戦闘、密通でもしていたほうがいいのではないかと、私が虚構のおかげで、私たちはたんに物事を想像するだけではなく、集団でそうできるようにした。聖書の天地創造の物語や、オーストラリア先住民の「夢の時代(天地創造の時代)」の神話、近代国家の国民主義の神話のような、共通の神話を私たちに紡ぎ出すことができる。そのような神話は、大勢で柔軟に協力するという空前的な能力をサピエンスに与える。アリやミツバチも大勢でいっしょに働けるが、彼らのやり方は融通が利かず、近視者とかうまくいかない。オオカミやチンパンジーはアリよりもはるかに柔軟な形で力を合わせるが、少数のごく親密な個体とだけしか駄目だ。ところがサピエンスは、無数の赤の他人と著しく柔軟な形で協力できる。だからこそサピエンスが世界を支配し、アリは私たちの残り物を食べ、チンパンジーは動物園や研究室に閉じ込められているのだ。

プジョー伝説

……

第2部 農業革命 第5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇 …… 聖なる介入 革命の犠牲者たち ……

聖なる介入

以上の筋書きは、農業革命を計算違いとして説明するものだった。じつに説得力がある。歴史はそれよりはるかに馬鹿げた計算違いに満ちあふれている。だが、計算違い以外の可能性もある。農耕への移行をもたらしたのは、楽な生活の探求ではなかったかもしれない。サピエンスは他にも強い願望を抱いており、それらを達成するために、生活が厳しくなるのも厭わなかったかもしれないのだ。 科学者はたいてい、歴史の展開の原因を経済と人口動態の客観的要素に求める。そのほうが、彼らの合理的で数学的な手法に適しているからだ。近代史の場合、

宇宙はアトモムとエレクトロニクスに非物質的要素を考慮に入れたいことを示す。建築家としての、強固でつらさのない、又豊かや潤、回廊球にみちみちたつらさのない、第一次大戦が食糧不足あるいは人口増加による圧力によって引き起こされたわけではないことを立証できる。だが、たとえサトウ文化の文書などないで、古代に取り組むときには、物質的側面が最も重視される。文字を持たない人々が、経済的な必要性ではなく信仰心に動機づけられていたことを証明するのは難しい。 それでもごく稀には、歴然とした手掛かりが遠く見つかることもある。十九九五年、考古学者たちはトルコ南東部のギョベクリ・テペと呼ばれる場所で遺跡の発掘を始めた。最も古い層では定住地や家、日常的活動の跡はまったく見られなかった。ところが、見事な彫刻を施した石柱から成る記念碑的構造物がいくつも出てきた。一つひとつの石柱は、最大で七メートルあり、高さは五メートルに達した。近くの様子は、彫り出しかけの石柱が一つ発見された。重さは五〇トンもあった。全部で一〇を超える記念碑的構造物が発掘され、最大のもは差し渡しが三〇メートル近くあった。 考古学者たちにとって、その手の記念碑的建造物は世界中の遺跡で馴染みで、最も有名な例はイギリスのストーンヘンジだ。だが、ギョベクリ・テペを調べた考古学者たちは、驚くべき事実を発見した。ストーンヘンジは紀元前二五〇〇年にさかのぼり、発展した農耕社会によって建設された。ところがギョベクリ・テペに構造物は、紀元前九五〇〇年ごろまでさかのぼり、得られる証拠はみな、狩猟採集民が建設したことを示している。考古学界はこの発見をわが国には受け入れられなかった。これらの構造物がこれほど早い時期までさかのぼり、農耕以前の社会がそれを建設したことを確認する検査結果が相次いだ。古代の狩猟採集民の能力と、彼らの文化の複雑さは、従来考えられていたよりもはるかに目覚ましかったようだ。 狩猟採集社会が、なぜそのような構造物を建設したりするのか？それらには、明白な実用目的はなかった。マンモスの屠殺場でも、雨宿りしたり、ライオンから身を隠したりする場所でもなかった。そこで残るのが、考古学者には解明の難しい、何らかの謎めいた文化的目的のために建設されたという説だ。それが何であるにせよ、狩猟採集民たちは莫大な手間と暇をかける価値があると考えたのだ。ギョベクリ・テペの構造物を建設するには、異なる生活集団や部族に所属する何千もの狩猟採集民が長期にわたって協力する以外になかった。そのような事業を維持できるのは、複雑な宗教的あるいはイデオロギイ的体制しかない。 ギョベクリ・テペは、他にもあつた驚くような秘密を抱えていた。遺伝学者たちは長年にわたって、栽培化された小麦の起源をたどっていた。最近の発見からは、栽培化された小麦の少なくとも一種、トフツコムギがカラガ丘陵に由来することが窺える。この丘陵は、ギョベクリ・テペから約三〇キロメートルの所にある。これはたまたまの偶然の一致ではない。ギョベクリ・テペの文化的中心地は、人類による最初の小麦の栽培化や小麦による人類の最初の家畜化に、何らかの形で結びついている可能性が高い。この記念碑的建造物を建設し、使用した人々を養うためには、膨大な量の食糧が必要だった。野生の小麦の採集から集約的な小麦栽培へと狩猟採集民が切り替えたのは、通常の食糧供給を増やすためではなく、むしろ、神殿の建設と運営を支えるためだったことは、十分考えられる。従来見方では、開拓者たちがまず村落を築き、それが繁栄したときに、中央に神殿を建てたということになっていた。だが、ギョベクリ・テペの遺跡は、まず神殿が建設され、その後、村落がその周りに形成されたことを示唆している。

### 革命の犠牲者たち

45. 書籍『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 著者 隈研吾 発行者 岡本厚 発行所 株式会社岩波書店より

隈研吾 2004年『負ける建築』岩波書店 2020年『点・線・面』岩波書店

『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 著者 隈研吾 発行者 岡本厚 発行所 株式会社岩波書店

----- はじめに

二〇世紀を総括し、批判しようと考えて、『負ける建築』(二〇〇四年)というテキストを書いた。二〇世紀は「勝つ建築」の時代であり、コンクリートという固く、強く、重たい素材を使って、環境に勝つことを目的として、「勝つ建築」が大量生産されてきた。それに代わるものとしての『負ける建築』を提案したのである。 負けなければならぬことはわかっていたけれど、どう負けようか、どう負けたらよいのだろうかという質問を、その後、やまほど受けた。 『負けなさい』と親切的に説教するのではなく、なるべく具体的に、現実的に即して語ろうと思って書き始めたのだが、書き進めるうちに、二〇世紀のはるか前にさかのぼらなければ、『負ける方法』が姿を現わさないと明らかになってきた。 作品の背後にある方法を探ると、初期ルネサンスの建築家、ブルネレスキやアルベルティが勝つ方法と負ける方法のひとつの分水嶺であった。 単位が小さいということが、負ける方法の基本であった。しかし、小さいというだけでは充分ではないこともわかってきた。小さなあり方にいろいろあり、---点・線・面というあり方がまさにそうなのだが---石ころや細い棒や布きれなど、様々な小さな物遣は、相互に埋め込み合い、相互にジャンプしながら、生き生きと『負けて』来たのである。量子力学以降の新しい物理学の助けを借りながら、そのように次元を埋め込み、ジャンプが起きるありさまを観察すると、時間という問題を抜きにしては、次元の転がりが説明できないことがわかり、また、人間をその小さな物遣と同一のレベルに降してこなければならぬことも、わかってきた。 建築が勝つていったというよりは、人間が物遣の上位のレベルにいたことで、その人間が作り、使う建築が勝つてしまっていたのである。民主的な建築、社会に開かれた建築ということをやずっと考えてきたが、民主的であることも、この方法を用いて語り、実現することができる予感を手に入れた。その方法については、これからはいろいろと探索が進むとあって、方法次第という呼び方もしてみた。 そのような思考を促したのは、僕が物理的に大きな建築を作らざるを得ないという個人的な事情である。物理的には大きくても、あり方としては小さく、『負ける』という人々が感じられるような建築を作ることではできないだろうか、その方法を見出すことができれば、拡張し加算する世界の中でも、小さくてゆっくりとした物と共に生きていくことができるかもしれない。人間という小さく、弱く、はかない存在が、同じような物遣を仲間とすることで、なんとか生き延びていけるかもしれない。 その状況、そのプレッシャーが僕の筆を後押しした。

二〇二〇年一月

隈 研 吾

### 方法序説

自分のやっていることを一言でまとめると、ヴォリュームの解体ということになるのではないかと、最近考えるようになった。ヴォリューム(量塊)を、点・線・面へと解体して、風通しをよくしたいのである。風通しをよくすることで、人と環境を、人と人をつなぎ直したいのである。そしてヴォリュームとは、コンクリート建築の属性でもあった。コンクリート建築は、無意識のうちにヴォリュームを指向し、ヴォリュームに人を入れたがるのである。砂利と砂とセメントと水とを混ぜた、ドロドロとした液体を乾燥させて、固めたものがコンクリートなので、そもそも塊=ヴォリュームだからである。逆に、ひとつの塊(ヴォリューム)になることを拒否した、バラバラとした、さわやかな物のあり方が、点・線・面である。 『コンクリートから木へ』が生産のテーマだと、僕はずっと考え続けてきた。二〇世紀とは要約すれば工業化社会であり、コンクリートの時代であった。工業化社会は、コンクリートという素材によって、実際に建設された。同時にコンクリートという物質によって表裏される社会であった。 その後、僕らが生きているポスト工業化社会は、木という素材によって、様々な物遣が作られるべきである。木によって築かれる社会になるであろう。それは僕の予測であると同時に、熱望である。だからこそ、二〇二〇年の東京オリンピック、パラリンピックのために建設された国立競技場は、全国から木を集めて、小さな木のピースを、ひとつづつ手で組み上げるようにして作り上げた。 そして、木を使うなら、可能な限り、ヴォリュームとして閉じたことを避け、木独自の、バラバラとした開放感を作り出したと考えた。一〇・五センチの幅しかない、点のように小さく、あるいは線のように細い寸法の杉の板で国立競技場の外壁は覆われた。全体は大きいのが、僕らの目の前にあるのは、小さな点や線である。 実際の工事現場に立ち会えばよくわかるのだが、コンクリートは大きな塊を作るのに適した素材である。型枠を作って、そこにドロドロのコンクリートを流し込みさえすれば、たちまちにして、閉じたヴォリュームが生成されるからである。鉄骨や木は、一種の細長い線材で、線と線の間に隙間ができてしまい、ヴォリュームを作り出すには、とても手間がかかる。線と線とをしっかりとつなぎ、その隙間をひとつずつ丁寧に埋めていかなければならない。 コンクリートを使ってインスタントに生成された大きくて頑丈なヴォリュームの中に、可能な限り多くの人間を詰め込むというのが、二〇世紀の基本的なライフスタイルであり、経済システムであった。さらに空調機という便利なものが二〇世紀に発明されて、ヴォリュームの中の空気の速度を簡単にコントロールすることが可能となり、空調された不自然な密閉空間の中の生活を、人々は幸福と錯覚した。 それ以前の時代には、ヴォリュームの外に色々な種類の幸福があった。たとえば、路地を歩きまわったり、縁側でゴロゴロするという幸せは、ヴォリュームの外だからこそ可能な、種々しい体験であった。しかし、二〇世紀の人々は、ヴォリュームの外で起こる楽しいこと、気持ちいいことはすべて捨て、ヴォリュームの中に閉じこもって、それを幸せと思いこんだ。 二〇世紀というのは、ヴォリュームの拡大を至上目的とする時代であった。世界規模の競争と、その後の人口爆発によって、大量の住宅が必要になった。都市の中心部にはオフィス・スペースも大量に必要になった。大きなヴォリュームの空間を、スピーディに建設することが、時代の要請であった。 そんな、懐かしい時代であった。企業は大きなオフィスを持つことを誇りと、大きなヴォリュームの象を所有することが幸福であると定義された。その粗雑きまりない時代には、ヴォリューム作りが得意で、しかも仕事の早いコンクリートという素材が、おあつちや向きだったわけである。 さらに、建築が私有可能な売買の対象、すなわち商品となった。僕らの身体がコンクリートを受け付けなかった。 一方、二〇世紀の建築デザインのリダーでありコンクリート建築のチャンピオンでもあるル・コルビュジエ(一八七三-一九六五)は、日本を訪れ、桂屋宮を見せられた時に『線が多すぎる』とつぶやき、嫌悪感を示したと伝えられている。線と面のバランスが美しい桂屋宮も、コンクリートの王者であり、ヴォリューム主義者であった彼の目には、煩雑なだけの建築と映った。 コルビュジエと並び称される、二〇世紀の建築のもう一人のチャンピオン、ミース・ファン・デル・ローエ(一八八六-一九六九)は、コルビュジエとは対照的に、線の建築家であった。金属製サッシという線と、ガラスという面とを組み合わせて、ガラス張りの超高層建築の原型を作ったのがミースである(図1)。繰り返しの多い単純な形態の超高層ビルを作るのなら、鉄骨やサッシという線と、ガラスや床板という面を、あらかじめ工場で用意し、それらを現場で組み立てた方が、現場でコンクリートを流し込んで作るよりもはるかに簡単である。コンクリートよりもスピーディに、大きなヴォリュームを獲得することができる。ミースはその事実にも早く気がつき、線と面との美しいコンビネーション(構成)をきわめて、二〇世紀建築のもう一人のチャンピオンとなった。実際に、超高層ビルは今でも、線と面の組み合わせで作られていて、ミースの発明をコピーし続けている。 しかしミースの作った空間も、僕にとってはあまり居心地がよくない。線を主役にしたにもかかわらず、空間を効率的に閉じこめて閉鎖された感じが先にあって、日本の伝統建築に存在していたような、点・線・面が自由に浮遊する楽しさ、透け感が全く感じられないのである。ミースもまた、閉鎖することを至上命令とする。二〇世紀という時代の子であった。 僕は空間のよききたガラス張りの超高層ビルになると、牢獄の中にいるように感じる。ガラスで作れば、透け感があるというのではない。二〇世紀をリードし、モダニズム建築を建築史全体の中に位置づけようとした建築史家、コリン・ロウ(一九二〇-一九九)は、『実の透明性』と『虚の透明性』とを区別して、二〇世紀のガラス至上主義に警鐘を鳴らした。ガラスを使えば自動的に透明になるという単純、素朴な透明性の追求を、彼は『実の透明性』と呼んだ。ガラスを使わなくても、層状の空間構成によって、背後に存在する、空間には見えない空間を暗示する方法を、彼は『虚の透明性』と呼び、高く評価した。 ロウは『虚の透明性』の例として、ガラスが大量に使われるはるか以前の、イタリアのマニエリスム期の建築家、アンドレ・パラディオ(一五〇八-一八〇)の建築について論じ(図2)、その奥行きを示唆する、洗練された知的な空間構成を賞賛している。 しかし、『虚の透明性』ということでは、ガラスを一切使うことがなかった明治以前の日本の伝統木造建築に及ぶものはない。十二単のように層

### 日本建築の線とミースの線

コンクリートが三次元ヴォリュームを作るのに向いているのに対して、日本の木造建築は線の建築である。すなわち一次元の建築である。森から伐り出しやすい長さ三-四メートル程度の線材(一次元)の木材を組み上げ、その間を土壁や障子や襖などの軽い建具で埋めて、透明でフレキシブルな空間を作ってきた。だから、コンクリートより何層にも手間がかかる。線と線の隙間を閉じるのが、大変だからである。実際のところ、日本の木造建築は、完全に閉じているとは言いがたく、線がバラバラと空中を漂っているだけという。その方が風通しがよく、身体は快適に感じた。逆にコンクリートで作られたヴォリュームの中に閉じ込められることを、日本人は好まなかった。実際僕らは、コンクリートの箱の中に入ると、息が詰まりそうになる。僕の身体がコンクリートを受け付けなかった。 一方、二〇世紀の建築デザインのリダーでありコンクリート建築のチャンピオンでもあるル・コルビュジエ(一八七三-一九六五)は、日本を訪れ、桂屋宮を見せられた時に『線が多すぎる』とつぶやき、嫌悪感を示したと伝えられている。線と面のバランスが美しい桂屋宮も、コンクリートの王者であり、ヴォリューム主義者であった彼の目には、煩雑なだけの建築と映った。 コルビュジエと並び称される、二〇世紀の建築のもう一人のチャンピオン、ミース・ファン・デル・ローエ(一八八六-一九六九)は、コルビュジエとは対照的に、線の建築家であった。金属製サッシという線と、ガラスという面とを組み合わせて、ガラス張りの超高層建築の原型を作ったのがミースである(図1)。繰り返しの多い単純な形態の超高層ビルを作るのなら、鉄骨やサッシという線と、ガラスや床板という面を、あらかじめ工場で用意し、それらを現場で組み立てた方が、現場でコンクリートを流し込んで作るよりもはるかに簡単である。コンクリートよりもスピーディに、大きなヴォリュームを獲得することができる。ミースはその事実にも早く気がつき、線と面との美しいコンビネーション(構成)をきわめて、二〇世紀建築のもう一人のチャンピオンとなった。実際に、超高層ビルは今でも、線と面の組み合わせで作られていて、ミースの発明をコピーし続けている。 しかしミースの作った空間も、僕にとってはあまり居心地がよくない。線を主役にしたにもかかわらず、空間を効率的に閉じこめて閉鎖された感じが先にあって、日本の伝統建築に存在していたような、点・線・面が自由に浮遊する楽しさ、透け感が全く感じられないのである。ミースもまた、閉鎖することを至上命令とする。二〇世紀という時代の子であった。 僕は空間のよききたガラス張りの超高層ビルになると、牢獄の中にいるように感じる。ガラスで作れば、透け感があるというのではない。二〇世紀をリードし、モダニズム建築を建築史全体の中に位置づけようとした建築史家、コリン・ロウ(一九二〇-一九九)は、『実の透明性』と『虚の透明性』とを区別して、二〇世紀のガラス至上主義に警鐘を鳴らした。ガラスを使えば自動的に透明になるという単純、素朴な透明性の追求を、彼は『実の透明性』と呼んだ。ガラスを使わなくても、層状の空間構成によって、背後に存在する、空間には見えない空間を暗示する方法を、彼は『虚の透明性』と呼び、高く評価した。 ロウは『虚の透明性』の例として、ガラスが大量に使われるはるか以前の、イタリアのマニエリスム期の建築家、アンドレ・パラディオ(一五〇八-一八〇)の建築について論じ(図2)、その奥行きを示唆する、洗練された知的な空間構成を賞賛している。 しかし、『虚の透明性』ということでは、ガラスを一切使うことがなかった明治以前の日本の伝統木造建築に及ぶものはない。十二単のように層

にも重なった層状の空間構成、そして柱、陣子などの可動道具の併用によって醸し出される透明感、パラディオも遠く及ばない。にもかかわらず、コーリン・ロウは、日本について言及しようとはしなかった。ロウは、コンクリートと鉄とガラスの時代を生きて、その制約の外側にある日本の伝統建築は、視界の中に入っていなかったのである。ロウほどのすぐれた歴史家でも、二〇世紀的な素材の制約の中でしか、建築を考えようとしなかったのである。

では、どうすれば、ヴォリュームの世紀から自由になることができるのだろうか。ヴォリュームの束縛から自由になり、物質空間の自由な流れの中に、再び身を任すことができるのだろうか。そのヒントを手に入れるために、点・線・面の可能性を掘り下げて、ヴォリュームを分解する方法を探ろうと思った。点・線・面と向かい合う前に、僕自身にとっても思い出の深い、カンディンスキー（一八六六—一九四四）の『点・線・面—抽象美術の基礎』を読み返した。二〇世紀初頭の、最も先端的で総合的デザイン教育機関であったバウハウスは、一九二二年に画家カンディンスキーを招き、指導的役割を期待した。アート、建築、デザインという縦断的カリキュラムが当たり前とされている今日の目から見ると、バウハウスの教育方法は驚くほどに横断的であり、中でもカンディンスキーは、そのすべての領域を串刺しにしようという意気込みで溶け込んでいた。『点・線・面』は、彼のバウハウスでの伝説的講義をまとめたものである。僕は高校時代に『点・線・面』というスタイルに直感的に惹かれて、この本を手にとった。当時、絵画に特別に興味を惹かれていたのだが、絵画に対する科学的な議論、テキストがあまりに少なく、すべての絵画論が主観的でウェットであったことに不満を感じ、点・線・面というドライな数学的タイプロジーに惹き寄せられたのである。読後感はずいぶん良かった。非常に興味深い部分と、退屈部分とが混在して、困惑した記憶がある。あらためて読み返し、何がおもしろいのか、何がおもしろくなかったのかはさきとさきとした。カンディンスキーの中の構成主義的思考が鼻についたのである。すなわち点・線・面という三要素を用いたコンポジション分析が退屈であった。コンポジションの手法を列挙し、分類し、それぞれがどんな心理的効果をもたらすかの分析が延々と続くことに、辟易した。点と線のように構成すると冷たい印象をもたらす、逆にあのように組み合わせると温かい印象を人々に与えるといった類いの、構成と心理的効果の相関についての細かい分析が続くのだが、すべてどうでもいいことと思えた。構成がどうであろうと、すなわち右に置こうか左に置こうか、あるいは大きい物を置こうか小さいものを置こうか、心理的効果の差はほとんどないと感じられた。心理は、全く別の物で動かされていると感じた。二〇世紀の初頭、形態と心理との関係の科学的分析がブームになり、現象学が生まれ、カンディンスキーが『点・線・面』の中で展開した構成主義的分析も、その流れの中にあっただけであらう。その種の現象学は科学をめぐりながら、具体的な方法を見出すことはできないままに下火となった。そして、ジェームズ・ギブソン（一九〇四—一九七九）によるアフォーダンス理論の登場によって、疑似心理学的議論は、すべて色あせて感じられるようになったのである。ギブソンの『視覚ワールドの知覚』、生知学的知覚システム—感性をとりえなおすは、現象学に引導を渡した。ギブソンは構成という概念を拒絶し、代りに肌理（テクスチャ）を問題にした。生物の心理、行動が、環境の構成によってではなく、環境の肌理によって決定されるということ、実証的に突き詰めていったのである。環境を点・線・面による「構成」と捉えずに、点・線・面が作る「肌理」として捉えることで、彼は、世界と生物、環境と心理との関係に深く、そして科学的に分け入ることができたのである。

#### ギブソンと粒子

ギブソンは、世界を三次元のヴォリュームから解放したといってもいい。世界は連続するヴォリュームではなく、無数の点や線の組み合わせで作る、肌理の集合体であると彼は再定義した。彼にそれができたのは、ひとつには心理学者としてスタートしながら、心理学の曖昧性を飽き足らず、生物学へと踏み込み、生物の身体をベースにして、その環境認識の過程を把握しようとしたからである。彼は生物の網膜の構造にまで立ち入ることで、肌理という曖昧なものを科学化した。彼にとって、もうひとつの決定的な体験は、第二次世界大戦中、空軍に従軍し、パイロットも訓練士も携ったことであっただけであらう。三次元を高速で移動するパイロットの身体が、いかにして空間を、そして距離を認知するかを研究することによって、ギブソンは、身体と空間をつなぐ、科学的な方程式を見出した。パイロットは世界の肌理を利用して、距離やスピードを測定していることをギブソンは発見したのである。ギブソンはまず、人間がどのようにして、空間の奥行き、対象との距離を測定しているかに注目した。通常、左右の目の視差を用いた立体視によって、人間は対象との距離を測定するとされてきた。しかし、高速で移動するパイロットは、立体視を使うことができない。人間は、空間に存在する点・線を用いて、空間の奥行きを測定し、自分の移動する速度を計り、対象との距離を測っていたのである。それゆえ、空間に、点や線などの粒子が存在しないと、人間は不安になる。人間だけではなく、すべての生物が、粒子のない世界には棲むことができない。自分のまわりに粒子がないと、自分と世界とをつなぐことができないからである。生物には粒子が必要なのである。環境とは、点・線・面の構成ではなく、点・線・面が作る肌理である。僕が考えるに至ったきっかけは、ギブソンから与えられた。肌理という概念を教わったことで、点・線・面が、従来の構成主義のプロトタイプとは全く違うた姿で、僕の世界には点として現れ、僕の世界には点として登場したからである。モダニズム建築は、粒子の価値を認めず、白い抽象的空間、ホワイト・キューブを指向した。しかし、そのような空間に放り込まれてしまったら、生物は生きていくことができない。実際には、モダニズム建築が追求した白い空間の中にも、家具、照明器具、小物などの様々な粒子がばらまかれていた。だから人間は、モダニズム建築の中でも、生きながらえることができたのである。

#### 主知主義対ダダイズム

ギブソンに出会うことによって、アートにおける構成主義に対して、僕が抱いていた違和感の理由が解けた。二〇世紀初頭、アートは二つの革命を体験したといわれる。ひとつは形態の革命であるキュビズムであり、もうひとつは色彩の革命であるフォーヴィズムであった。二つの革命によって、過去のアートのすべてのルールは破壊され、アーティストは完全な自由を獲得したはずであった。しかしキュビズムの革命の後、その主導者であるピカソ（一八八〇—一九七三）とブラック（一八八二—一九六三）は、具象にとどまり、抽象に向かわなかった。具体的な対象物を描くという制約を外した途端に、どのような混沌と不毛が訪れるかを、ピカソもブラックも察知していたからである。すべての革命の後、構成という名の主知主義的傲慢が登場する。アートにおける革命でも、政治における革命でも、革命の勝者である新エリートは構成という名の主知主義的傲慢に陥る。新エリートは、（メタ上層）レベルに立つ特権的な地位による構成=計画で、世界を支配しようとする。政治、経済において、主知主義は計画と呼ばれる。ソ連は計画経済の国家であった。すなわち計画の混沌と不毛の実験場であった。一方、構成や計画と呼ばれる「上からの」方法の不毛を察知して、ピカソやブラックは具象にとどまった。構成主義誕生と同時に、アートの世界でダダイズムという運動が起きた。従来、ダダは第一次世界大戦によってもたらされた虚無的な態度を根拠とする、既成の常識に対する批判的、破壊的運動だと捉えられ、一種のニヒリスティックな芸術運動と見做されてきた。しかし、その本質は反主知主義であり、反構成主義であった。特権的な主体が全体を俯瞰して、主知主義的に下位の部分を構成し計画する行為への批判として、ダダイズムは偶然性を重視した。偶然性の尊重とは、少しも破壊的ではなく、むしろ、自由に流れ続ける時間への敬意であった。ニヒリズムという見方はむしろ、地獄的な視点に基づく、目前の物質と時間に対する露骨な反応であった。だからダダイズムは、日用品やクラフトマンシップ（職人の技能）に賞賛を示し、アートに対して下位と見られがちな、ダンスや映像などの応用芸術に関心を示した。僕がカンディンスキーの『点・線・面』の半分を占める構成主義に対して違和感を覚え、同時代のダダイズムに共感を覚えるのは、ダダイズムの視点の、地上性と即物性に賛同するからである。一方で、カンディンスキーを読み返すと、構成主義、主知主義を超える、新鮮な指摘も数多くあった。たとえば点・線・面という分類自体が相対的であり、決して絶対的な区分ではないという指摘である。点でどうも思っていたものが、ある時突然に、線や面として出現するという指摘であり、面であるはずのものが、別の瞬間には点として出現するという指摘である。さらに建築、絵画、音楽という分類自体が流動的であると、カンディンスキーは指摘する。それらは相互に埋め込まれた関係にあり、芸術にジャンルは存在しないと、カンディンスキーは重畳したのである。『点・線・面』の半分では従来、傑作とされた世界を自由に横断し、誰は天を駆ける鳥のごとく、領域を破壊する。そして、領域破壊の聖地といわれた先端的教育機関バウハウスはダダイズムとも深い関係があった。バウハウスで指導的役割を果した建築家テオ・ファン・ドゥーサール（一八八三—一九三二）はダダイズムに深く関わり、僕は新しい精神に新しい道をまきかきすと、機能主義の本山バウハウスには不似合いな、偽善的ポーズを示した。バウハウスが一九一九年に産声をあげたドイツのヴァイマルは、ダダイズム運動がスイスのチューリッヒでスタートした後に本拠地とした。ダダイズムの中心地でもあり、そこでダダイスト達は、酒と無調音楽におぼれながら日々を過ごしたのである。ダダイズムの存在が近くにあったそのおかげで、バウハウスは領域を破壊する自由を獲得したといえる。

#### 運動としての時間から、物質としての時間へ

絵画は空間に関する芸術であり、音楽は時間に関する芸術だと思ひ込みは、全く通俗的な錯覚であり、どちらにも点（音符）・線・面というヴォキャブラリーを適用することで、そこから得られる経験と同様に科学的に分析できると、カンディンスキーは主張した（図3）。音楽と建築の親近性を指摘したのは、カンディンスキーがはじめてではない。最も早い例は、ドイツ観念論を代表する哲学者フリードリッヒ・シェリング（一七五五—一八四四）による『建築は空間における音楽』であるという定義であり、ゲーテ（一七四九—一八三二）は『建築は無言のサウンド・アート』と呼んだというコメントで、サウンド・アートという意味深長な言葉を残した。日本ではフェノロサ（一八五三—一九〇八）が、美術師等東洋を「運ぶ音楽」と評した。フェノロサは、日本美術をはじめて詳細に西歐人の一人として知られるが、彼の父親はスペインの音楽家であり、フリゲート艦の船上ピアノリストとして渡米している。フェノロサは音楽と近い場所にいた。しかし彼ら先人達の美しい言葉は、建築と音楽の親近性を指摘しているようでありながら、実は、音楽は時間とともに流れ、消え去るものである。それに反して、建築は凍らされたもの、すなわち流れ去らぬように固定されたものであるとして、両者の対照性を強調してしまっている。僕には聞こえる。一方、カンディンスキーは、建築は少しも固定されてはおらず、流動的、現象的存在であり、音楽と建築の間に本質的な差はないと考えた。芸術の諸領域を横断する点・線・面という共通概念の発見が、カンディンスキーによる領域破壊の引き金となった。点・線・面という道具は、そのようにして、様々な領域の聖を壊すために役立つのである。カンディンスキーの領域破壊的分析はさらに、版画における修正という問題へと発展していき、修正とは、過去に作ったものを修正することである。すなわち時間軸上の加算行為である。カンディンスキーは修正という行為を分析することで、版画という平面芸術に対し、時間という要素を挿入することになった。時間とは、四つ目の次元といわれるが、カンディンスキーは二次元の芸術とされる版画に対して、四次元、すなわち時間軸を重ねたのである。平面芸術の小部門であり、脇役であったはずの版画が、彼によって突然、時間の流れる大きな世界、宇宙の中へと解放されて、跋扈は驚愕する。具体的には、時間軸を挿入することで、銅板、木版、石版（リトグラフ）の本質的違いを、カンディンスキーは明らかにした。銅版画は基本的に修正不可能であり、木版画では修正は制約の中で可能であり、石版画においては、銅板に比べて、石版に比べて、その上に塗られる水と油の反応を利用して、修正は制約なく無限で自由であると、彼は物質（金属、木、石、水、油）と時間との関係性を記述した。実作者カンディンスキーだからこそ、物質と時間とを縫い合わせることができたのである。多くの美術評論家は、できあがった「死んだ」作品を見て、その中の構成を論じたり、そこに描かれた「対象」や「時間」を論じた。たとえば、この絵の中には秋の夕暮れが描かれているというように。しかし実作者にとって、時間とはそこに描かれた対象ではなく、作品を創造すること自体が、時間に対する緊張感溢れる介入なのである。言い換えれば、実作者は、創作という生のプロセスの中を生きて、カンディンスキーは実作者だからこそ、版画という小さな二次元的作品を使って、作者が、時間に対して様々な介入する様子を記述したのである。彼らにとって版画は死んだ作品ではなく、作者と共に時間の中を生きていくものである。製作のプロセスに目を向けた途端に、僕は新しい意外なものに叫び喚びた。すなわち版画制作という現場に目を向けた途端に、物質というわけて混濁した地上的ながらも、時間という形のない宇宙的なものと結びついたのである。銅板、木版、石版という三つのメディアは、金属、水、石という物質と深く関わっており、それぞれの物質は、それぞれ特別な手続きを経て、時間と関わっていくことが明かされる。[時間の中に物質があり、物質の中に時間があることをわれわれは知らされる。時間の中の物質、物質の中の時間というアイデアは、建築デザインに対して、従来存在しなかった画期的な視点を開くという手ごたえを僕は感じた。時間という概念が、今までとは全く別の形で、建築の世界に登場してくる予感があった。

#### 足利算のデザインとしてのコンピューター・シミュレーション

カンディンスキーが版画の中に発見した重層的な時間概念は、ポスト工業化社会の、新しいデザイン手法、すなわちコンピューターを駆使したパラメトリック・デザインの本質を考える上でも、多くの示唆を与えてくれた。一九九〇年以降、コンピューターがどのように建築のデザインを変え、人間と建築との関係を変えようとするかという議論が、建築界を賑わせた。建築理論の中心となった。新しい技術が、新しいデザインを生むことで、建築の歴史が一変した。古代から現代に至るまで、新しい技術が、新しい建築を開いてきたのである。二〇世紀のモダニズム建築は、鉄骨とコンクリートによる大スパン構造という新技術の産物であった。だとしても、コンピューター・テクノロジーはどんな建築デザインを生むのか。コンピューター・デザインはルネサンス以降の様々なデザイン手法と比較して、大胆な整理を行う建築史家、マリオ・カルポ（一九五八—）は、コンピューター・デザインによって、建築デザインが、引き算のデザインから、足利算のデザインへと劇的に転換したと著した。『アルファベットとしてアルゴリズム 表記法による建築—ルネサンスからデジタル革命へ』の中で、コンピューター・デザインは単に図面（ドローイング）の描き方を変えただけではなく、ドローイング（図面）とファブリケーション（施工・製作）の統合を促したと、カルポは指摘した。すなわち、かつては図面の制作と施工は別分されていたが、コンピューターによって、両者はひとつの連続した流れ、すなわち描き続け、作り続けるひとつのシームレスな流れへと転換したと、カルポは見抜いた。建築とは、

いまや元祖としての作品ではなく、歴史を塗り、修正し続ける、不透明なアトムへと変わり、それを彼は足し算の「アトム」で印した。石版画は水通しに修正可能であり、水通しに足し続けることが可能であるとカンディンスキーが指摘したように、カルポはコンピューターが、建築を、修正のきかない銅版画から、永遠に続く修正システム、すなわち石と水と油との対話の産物としての石版画システムへと転換したのである。カルポはアルベルティ（一四〇四—一七二二）以前、つまりルネサンス以前の建築は、同じように足し算であったと整理する。施工と設計と職人が共働して、建築というゆるい全体を作り続け、直していったのである。そのゆるやかな世界に、革命的建築家アルベルティが登場し、建築の方法を技術的に変えてしまった。初期ルネサンスを代表する建築家であり、建築評論家でもあったアルベルティは、引き算という新しい方法を導入し、竣工後の変更、修正を許さない「作家—アーティスト」という絶対者を生み出した。その転換によって建築が本末持った自由は失われ、建築とは、建築家という絶対者の描いた図面を実現するための、融通のきかない硬直したシステムになってしまったとカルポは指摘する。アルベルティ以降の長い自由な歴史を、ついにコンピューターが打ち破ったというのが、カルポの説である。アルベルティ以前には、描く人と作る人（職人）は分離されず、もろもろ対立もせず、ゆるやかに連続的に建築は作られ続け、変更され続けていた。その濃密な人と線な物との対話、一体感が、コンピューターによるファブリケーションによって復讐するだろうと、カルポは宣言するのである。さらにカルポは、コンピューターの導入も、当初から、足し算を否定していたわけではなかったと振り返る。一九九〇年代初期、建築デザインにコンピューターが導入され、パラメトリック・デザインという言葉が使われはじめた。コンピューターはただ、くじやぐじやと、目新しい形態を創造するマシンでしかなかった。九〇年代以前、その複雑な形態を描くには、恐ろしく手間がかかった。その「夢の形態」を実現するための、便利なドロウイング・マシンとして、コンピューターが導入されたのである。その意味で、一九九〇年代前半の、奇をてらった形態を特徴とするコンピューショナル・デザイン（図4）は、三〇年代にアメリカで流行した流線形デザイン（図5）の九〇年代版のリバイバルであったとカルポは断言し、巻く。一九九五年以降、ITの領域において、ネットワークへの関心が高まるのと併行して、コンピューショナル・デザインは、第二フェーズに突入り、形態の新奇さから、ファブリケーション・プロセス（制作過程）へと関心が移行した。描くことと作ることの境界の消滅、竣工後も変化し続ける建築と関心が移った。その時代を、カルポはデジタル・デザインの第二期と呼ぶのである。カルポの二段階論の背景にあるのは、建築史家レイナー・パンハム（一九二二—一九八八）による『第一機械時代の理論とデザイン』（一九六〇年）という名著である。パンハムは一九世紀から二〇世紀までの人間と機械との関係を総括し、汽車、車などの第一世代の機械とラジオ・テレビ、家電などの第二世代の機械との間に、質的な差異があり、その差異が当時の建築デザインに対しても大きな影響を与えたと整理した。カルポはそこからヒントを得て、コンピューターという機械の時代にも、二相があることを見出したのである。コンピューター・ショナル・デザイン第二期、すなわち、足し算の時代が求める永遠の修正を可能にするためには、一度できたら硬く固まってしまっているコンクリートは、全く適していない。コンクリートは建築デザインの中心的な位置を失った。同時に、小さなビースのアグリゲーション（集積）によって作られる、粒子的な建築の追求が始まった。そしてその新しい波の中心人物の一人が僕であると、カルポは語って来たのである。コンピューター・ショナル・デザインの本質は、形態の革命ではなく、時間の革命だということカルポの指摘が興味深い。形態がすべてに優先するといわれよう自体がアルベルティ的であり、近代の産物なのである。アルベルティはルネサンス最初の建築理論書と呼ばれた『建築論』（一四八五年）を著した。このテキストはその後の建築界に大きな影響を与えた。デカルトの『方法序説』（一六三七年）が哲学の世界で果たしたのと同様な役割を担った。アルベルティは形態を時間から分離した。それは、時間と分かちがたくつながった施工（工事）という行為と、時間を無視しても成立する設計（計画）という行為との切断でもあり、施工の軽視であり、設計者（建築家）の絶対化でもあった。形態の世界だけの純粋な理論を組み立てた『建築論』は、その純粋性ゆえに、テキストとしての普遍性を獲得し、建築家は建築界の絶対者としての地位を獲得したのである。しかし、形態のデザイン論から、時間のデザイン論への転換が起こりつつある。時間という流れの中で建築を相対化し、物質も人間もすべてが、時間の中を漂う粒子であるとする世界観にわれわれは回帰しつつある。その意味で本書は、ヴォリュームを解体する方法の探求であると同時に、建築家という存在を解体する方法の提案でもある。時間を軸としてアルベルティ以前の回帰をめざすカルポのデザイン理論は、すでにカンディンスキーの版論によって先取りされていたといえる。

ブルーノ・ラトゥールと写真銃

僕らの設計の方法が、加算的であるという議論は、フランスの人類学者、哲学者であるブルーノ・ラトゥール（一九四七—）との間でも交わったことがある。ラトゥールは、ANT（アクトー・ネットワーク・セオリー）と呼ばれる新しい世界観を提示したことで知られている。ラトゥールの上の世代のフーコー（一九二六—一九八四）、デリダ（一九三〇—二〇〇四）、ドゥルーズ（一九二五—一九九五）に代表される脱構築の哲学者達は、特種的な主体（サブジェクト）の解体を試みた。しかし、依然として、人間中心主義という西洋哲学の基本形からは抜け出せなかったと、ラトゥールは脱構築の哲学を批判的に総括する。主体の特権性、独善性を含むフーコー—デリダは人間しか見えていなかったというのである。人間は様々な物と共に生きており、物運と協働して、世界を創しているというのがラトゥールの説である。その物運を彼はアクターと呼ぶ。人間と物との間に上下はなく、すべてが世界を運ぶアクターだというのが、ANTの要点である。たとえば、われわれが道具という物を使って、材料という物を加工しようとする時、われわれと物とは上下関係がない。われわれが物を使っているだけでいいから、われわれ自身が教える。物から指示されているのだということ、ラトゥールは指摘したのである。たとえば木を鋸で切るとき、われわれは木にその堅さや粘性を教わりながら、鋸を動かしているのだから、人間は鋸も含めたそのネットワークの一員に過ぎないのである。ラトゥールの弟子であるソフィー・ウダール（一九七七—）が、ある日、僕の事務所を訪れ、僕が建築を設計するプロセスを研究したいと申し出たことをきっかけにして、ラトゥールとの交流が始まった。ラトゥールは以前、建築家兼—コルムハース（一九四四—）の設計の方法について研究し、弟子のアルペナ・ナヴァと連名で、*Give me a gun and I will make all buildings move: an ANT's view of architecture* を著した（二〇〇八年）。ここでANTは、蟻（ants）との掛合言葉になっている。巨視的、俯瞰的な視点ではなく、微視的、地上的な蟻の眼から、建築ができていくプロセスを眺めるという趣向である。脱構築時代の哲学者達は、建築は大きく、しかも固定されてしまった運命的存在であると批判した。特種的な主体によってデザインされた、巨大で動かしようのない建築というヴォリュームが、脱構築哲学の標的となった。しかしラトゥール達は、蟻の視点から建築を眺めれば、建築は少しも固定されていないと発見するのである。彼らはその蟻の眼を、フランスの生理学者、エディエヌ・ジュル・マレー（一八三〇—一八〇四）が発見した写真銃（図6）に喩えた。写真銃を用いれば、動いていると感じられたものが、止まってしまったように感じられる。蟻の眼は逆に、止まっていると感じられていた建築を、突如、動き続け、変わり続けるものとして、再発見するための道具なのである。だからタイトルが *Give me a gun* すなわち写真銃とは逆の機能を持つ新しい銃と、なのである。ソフィー・ウダールは実際に、一年間亘って僕らの事務所に通い、実際の設計のプロセスを蟻のように観察し続け、*小さな写真銃—人類学者による「脱構築」の新しい本にまとめた。僕の事務所の中で、模型、素材サンプル、CAD（コンピューター支援設計）、カッターなどの物運と、スタッフ、外部のエンジニア、協力事務所、施工会社の人間達が緊密なネットワークを作り、建築が設計され、施工され、竣工後も変わり続けていくさまを、ソフィーは蟻の眼からリアルタイムに観察した。僕らが作る建築が、少しも固定されてはいないこと、すなわち僕らの建築は、様々なものが加算され続ける場であり、小さな粒子が流れ続ける場であることを、ソフィーは発見してくれたのである。ラトゥールとソフィーの蟻の眼が、時間と建築との関係、人と物と建築との関係に、新しい視界を開いてくれた。*

建築と時間

従来の建築論でも時間と空間の接続というテーマは魅力的であり、繰り返し議論されてきた。代表的なものは、カンディンスキーと同時期、二〇世紀モダニズムの誕生に立ち会った、スイスの建築史家、ジューフリード・ギューオン（一八八八—一九六八）の『空間・時間・建築』である。ギューオンの著作は、モダニズム建築の聖書といわれるほどに、当時は高く評価された。二〇世紀初期、空間と時間の統合は、文法、芸術領域におけるブームであり、流行であったから、ギューオンは過大評価されたといえる。まっかにはアインシュタイン（一八七九—一九五五）であった。アインシュタインが物理学において、空間と時間の統合理論を完成させたのを受けて、絵画においては、異なる時間をひとつの平面の中に統合しようとする、キュビズムやシュールレアリスムが誕生した。建築において、コルビュジエは、代表作サヴォア邸（一九三一年）の中心部に立体的回廊空間を導入して「建築的プロムナード」と呼ぶ（図7・図8）。それこそが空間と時間の統合のモデルであると説明した。ギューオンがそれをさらに誇張し、モダニズム建築が時間と空間とを統合したと、世界に宣伝したのである。……アインシュタイン、コルビュジエと同じスイス人であったギューオンは、モダニズム建築の背後に、アインシュタインの物理学が存在しているかのよう、巧妙に論を組み立てた。しかし、ギューオンのロジックは幼稚である。移動のための装置—スロープや階段—をサヴォア邸のように、収拾空間の主体として強調すれば、空間と時間とが統合されたというロジックである。どこかで聞いたことがあった議論である。運動する人や物を、ひとつの画面に重ねて描けば、時間と空間を統合したことになるというキュビズム絵画（図9）の議論を、ギューオンは建築に応用したのである。この手の議論が二〇世紀初期にもはやされたということは、逆にいえば、当時の人々がいかに運動というものに熱狂していたかを教えてくれる。自動車、飛行機が登場し、体験したこのない速度で運動することに、人々も芸術家も臣倒された。時間とは物の運動のことであり、それ以外の時間のあり方、時間のあらわれ方について考えようという余裕は、全く存在しなかったのである。二〇世紀初期の、この手の「運動=時間」論と比較して、カンディンスキーの版論の視点は独創的であり、その対象は自動車と飛行機に触発された浅薄な流行を超えて、今日にも充分届くのである。

運動から時間を開放する

カンディンスキーは一嘗ていえば、時間を運動から解放したのである。製作の現場における、物質と時間と作者との会話に耳を澄ました結果、思いもかけない形で、時間というものの姿が彼の前に立ち現れた。カンディンスキーと同じようなことができたという思いが、僕にもあった。様々な物質と会話し、物質がいかにして時間の中を流れ、時間がいかに物質に影響するかを見つめる僕の日常の中から、新しい時間論を紡ぎ出すことはできないだろうか。僕にとって、時間とは物質を運ぶのではなく、すべての物質の中に内蔵された存在であり、物質を運ぶことで、宇宙と時間とは分かちがたく、つながっている。木や石といった具体的な物質が、時間の開闢として空間の中を漂うのである。それは、小さな発見の瞬間にはあるが、長く宇宙的な行程を導く大きな発見である。一方コルビュジエには、物質と時間をつなげようという発想は全くなかった。コルビュジエにとって、物質とは、抽象的な白い箱を作るための裏方ではなかった。運動を誘発する白い箱を生産すれば、その白い箱の中を、物体が運動法則に従って移動すると、コルビュジエは考えた。多くの同時代人と同じように、彼にとっては、運動こそが時間であった。サヴォア邸の中心を貫通するスロープは、運動を象徴的に見せるための、白い背景、白いランドウでしかなかった。サヴォア邸の背後にあるこの時間認識は、アインシュタインというよりは、そのはるか以前のアイザック・ニュートン（一六四二—一七二七）の時間認識であった。抽象的な空間の中を、物体が運動法則に従って運動することをニュートンは発見し、世界を変えた。しかし、一七世紀の話である。……しかし、コルビュジエの名譽のために、「初期の科ルビュジエ」はニュートン力学のレベルにあって、付け加えた。サヴォア邸は初期コルビュジエの代表作である。一方、ラトゥール・レイト修道院（一九五九年）、ロサンゼルス礼拝堂（一九五五年）などの後期コルビュジエでは、もはや抽象的な白いランドウはめざされていない。粗々とした不均一な肌理を持つ後期コルビュジエのコンクリートは、もはや背景ではない。語りかけ、それ自身が物質であることに自覚した、覚醒した物質であり、風化し続け、腐り続ける物質。時間とともに生き、過去の時間、未来の時間をも内蔵した、深く豊かな物質である。彼がそのような物質観を獲得した大きなきっかけは、インドとの出会いであったと僕は想像する。一九五一年からインドのチャンディガールの都市計画に関わり、インドの赤土の上で、コルビュジエは新しいコンクリート、新しい物質と出会うのである。少しも言うことを聞いてくれない自由なコンクリート、ガラガラとして不均一で粗々しいコンクリート。彼が知らなかったコンクリートがそこにあった。インドで、インドの物質と出会ったことを通じて、彼もまた、物質の中に内蔵された時間を発見した（図10）。インドのコルビュジエは、僕が僕としていた建築のあり方、建築と時間との関わり方に対して、大きなヒントを与えてくれたのである。

カンディンスキーによる次元の超越と埋め込み

コルビュジエがインドと出会うはるか以前に、カンディンスキーは時間と物質と空間の境界を取り払おうとした。それだけではなく、点・線・面・ヴォリュームというカテゴリーの世界も消し去ろうとした。彼は、点・線・面・ヴォリュームというチャプターに沿って世界を考察しながら、同時にその四つを自身の無効化を宣言しているのである。僕にとって最も新鮮であったのは、ヴォリュームにしか見えてなかった中世ヨーロッパのゴシック建築が、実は点を指向する「点の建築」であるという指摘である。カンディンスキーいわく、ゴシックには短く簡潔な、ピンと響く音色が聴かれる。それは空間的形態が、建築を包んでいる大気の中に解消し、その響きを失ってゆく遠逝の瞬間を表現している。同様にして、中国独特の反りがあつた屋根も、空中に消滅する寸前の点である。カンディンスキーは指摘する（図11・図12）。なぜ中国建築が、あのような不自然ともいえる反りを指向するようになったのかという僕の疑問に対し、カンディンスキーは簡単に解答を与えてくれた。中国の屋根は、空中に懸けようとして、どんでん返っていたのである。その意味で中国の屋根は、コルビュジエのピロティと同種の、浮遊願望を共有していたのである。カンディンスキーの分析の先にあるのは、次元（一、二、三、四次元）すなわち点・線・面・時間という枠組みの否定である。次元という枠組みを用いて世界を理解しようとする、われわれの通俗的思考方法の、完全な破壊である。同様な破壊を、量子力学がすでに実行している。コルビュジエやギューオンがアインシュタインと併せて世界を試みたように、僕もまた、新しい物理学に目を向けてみた。するとそこには、世界理解のための、自由な道具が溢れていた。その道具と付き合うことで、ニュートン力学の世界認識をベースとするモダニズム建築に、風穴をあけることはできないだろうか。量子力学の最大の難問のひとつが、三次元をはるかに超えた複数次元の存在である。日常の感覚をもってしては想像もできない複数次元の

存在を仮定しないと、宇宙の様々な現象が説明できないと、量子力学は教える。たとえば、一〇次元を前提としないと、宇宙は説明できない。空間を定義する九次元に、時間という一次元をプラスした、計一〇次元で世界を定義しないと、宇宙の様々な現象の説明がつかないのだからである。通常の三次元空間の他に、六つの余剰次元が宇宙の中に埋め込まれているとは、一体どういふことなのか。われわれの日常的な知覚を超える九次元空間を、一体どう理解したいのだろうか。素粒子論をリードする物理学者の大栗博司(一九六二)は、ホースとアリと鳥の喩えを用いて、次元の埋め込みをわかりやすく説明している。「庭に水をまくのに使うホースの上をアリが這い回っていると想像してください。アリにとって、ホースの表面は「縦」にも「横」にも行ける二次元空間です。しかし(中略)どこからか鳥が飛んできてホースの上に乗ったとしたら、どうでしょうか。鳥の足はホースの太さよりも大きいので、縦方向にしか移動できません。(中略)つまり、アリにとっては二次元空間のホースが、鳥にとっては一次元空間にしか見えない。一次元のホースに縦に沿ってしか移動できない鳥には、横方向という「余剰次元」が感じられないのです」(『重力とは何かーアインシュタインから超弦理論へ、宇宙の謎に迫る』)。

#### 相対的な世界と有効理論

次元とは、このような形で自由に埋め込みが可能であることを、大栗は日常的な風景を用いて、見事に説明する。言い換えれば、主体(鳥)と客体(ホース)との距離、そのスケールの差によって、次元は相対的に変化するというのが、量子力学によって提示された、新しい次元観なのである。そのような相対的世界観を、物理学は有効理論という語を用いて説明する。あらゆる理論は、一定のスケールを持つフレームの中においてのみ有効であり、すべての理論、法則は、一定のスケールの中でのみ成立する。限定的、相対的なものでしかないという考え方を、量子力学以降の物理学は、有効理論と呼ぶ。われわれのまわりの、今でも普通に存在する、日常的なスケール、日常的なスピードの空間の中で、ニュートンの法則は依然として十分に機能する有効理論である。アインシュタインが登場し、あるいは量子力学が出現したからといって、ある限定されたスケールの中で、ニュートン力学の有効性が失われるわけではない。量子力学は新しい世界観をもたらしたばかりではない。その量子力学的世界観さえ、ひとつの有効理論にすぎないという相対的世界観をもたらしたこそが、量子力学後の物理学の最大の達成であると、僕は考える。正確さを期すれば、有効理論とは、相対的ではなく、重層的に世界を把握するための理論である。相対的というと、ひとつの平面の上に、いくつかのシステムが並列的に横並びになっているわけではなく、重層的に重なりあっている。その真意は世界の相対性ではなく、重層的なのである。この「有効理論」とも呼ぶべき相対的世界観は、僕ら建築家が扱う空間スケールの劇的拡大、多様化という今日的現象とも、見事に対応し、響きあっている。僕らもまた、「有効理論」に世界を把握し、設計活動を行っているのである。極小粒子の世界の観察と、極大の宇宙の果ての観察が可能になったことで、物理学は質的に転換した。同じようなスケールの交換が建築の世界でも起こりつつある。極大と極小との併存するその新しい環境を解き明かす新しい理論的ツールを、僕はこの本の中で捜そうとしている。

#### 建築の拡大

一九世紀以前の建築家は、Mサイズの建築を相手として仕事をしていた。一九世紀以前、すなわち鉄骨とコンクリートが建築の主役となる以前には、作れる建築の大きさは限界があった。木造でも、あるいは石やレンガを積み上げる組積造(マーンリー)を採用した場合でも、作れる建築物の大きさには限界があり、建築家は、その限界の内側にあるMサイズの建築しか、作ることができなかった。建築とはMサイズの物体のことであり、Mサイズ以外の建築は、ありえなかった。ここでSではなくMが最初に出てくるのには訳がある。Sとは小さな民家つまり、集落であり「建築」以前である。民家には、建築家という特種な設計者は必要ない。建築がMサイズへと進化してはじめて、建築家が登場し、建築理論というものが登場する。ルネサンス以降、すなわち「建築」以降、建築が、絵画、彫刻、音楽と並んで文化を構成する重要な領域と見做されることとなるが、その時議論された建築はS建築ではなく、M建築であった。そもそもルネサンスの建築家達は、S=民家や集落を無視して、建築を考え始めた。そしてMサイズの建築は、部屋と呼ばれるヴォイドの集合体であった。部屋をどう配列し、どう組み合わせるかを考え、その組み合わせ全体に、どのようなシルエットやスキンを与えるかが、建築デザインと呼ばれた。Mサイズの建築とは、レム・コールハースが「S, M, L, XL」で提唱した概念である。この本において、不思議なことに、建築界で、スケールについての本格的な思考は皆無であった。なぜなら、建築とは、技術、経済的制約によって、Mサイズであることが大前提であり、LやXL(エクストララージ)の建築など、想定の外にあったからである。Sもまた、建築家達の視野の外にあった。レム・コールハースはその大前提が前提された後の建築のあり方を思考した。最初の建築家であった。発想の転換のきっかけは、日本、中国などでのアジア体験であったと、僕は想像する。

#### 金融資本主義のXL建築

レムが出合った日本は、一九八〇年代のバブル時代の日本であった。彼はその特別な時代と場所に加わった。当時のヨーロッパでは想像できないような、奇想天外なプロジェクトに携わったのである。突如到来した金融資本主義に翻弄されたバブル時代の日本は、当時の世界の常識を逸脱したスケールとスピードを有する経済を体験し、新しい経済に対する抵抗力のないままに、無数のナイーヴなドリーム・プロジェクトが立ち上げられた。レムは磯崎新(一九三二)がプロデューサーとして、イケイケのディベロッパーと世界の建築家をつないだ、福岡のネクサス・スワールド(図13)に呼ばれ、アジアという従来の常識が通用しない新しい場所へ、M建築の時代が終わる、XLの建築が始まりつつあることを、突如としたのである。そもそもレムは、金融資本主義時代の新しい建築に関心があった。産業資本主義の建築のチャンピオン・ル・コルビュジエであったとすれば、レムは金融資本主義の建築のチャンピオンを志せど、そのキャリアをスタートした。大恐慌(一九二九年)直前に計画された奇想天外の建築ーエンパイア・ステート・ビル(一九三一年)、クライスラー・ビル(一九三〇年)、ダウタウン・アスレチック・クラブ(一九三〇年)の中に、ポスト資本主義の建築のヒントを求めて、彼は『雑居のニューヨーク』を書き、著々といふデビューを飾った。金融資本主義に支配される現代という時代のヒントが、大恐慌直前のニューヨークにあることを、レムは発見したのである。レムと共にロンドンのAAスクールで学んだ友人、ザハ・ハニッド(一九五〇ー二〇一六)は、レムが立ち上げた設計事務所OMAの設立メンバーの一人であり、レムと同時に、大恐慌前の通称アール・デコ建築から多くのヒントを得て、最終的に、九〇年代以降の金融資本主義建築のディーヴァとなった。彼女は、東京の国立競技場の第一回の入賞者でもあった。「あなたが、無人島に一本の本を持っていくとしたら、何の本を持っていくか」というインタビューでの質問に対して、ザハは『雑居のニューヨーク』と答えた。その答えはザハとレムのつながり、そして二人と金融資本主義との関係を暗示している。大恐慌直前の一九二〇年代のニューヨークで、金融資本主義が一瞬の花を咲かせた。レムが『雑居のニューヨーク』の中で取り上げたアール・デコ建築というアダダである。株面、不動産価格は高騰し、建築家は奇妙な形態と、奇想天外なプログラムを持つ巨大建築に酔いしれた。その奇妙で美しい花は、一九二九年の金融大恐慌で、無残な形で飛び散り、堅実で動機ある産業資本主義時代が到来したのである。その産業資本主義のチャンピオンが、コンクリートのコルビュジエと、鉄骨造のミースだったというわけである。レムは大恐慌直前のアダダとも見える建築の中に、プラザ合意(一九五五年)以降の金融資本主義時代の建築のヒントが隠れていることを発見して、『雑居のニューヨーク』を書いた。拡大し、巨大化した世界は、もはや産業資本主義というスタティックなシステムでは支えきれないとは彼は予測して、一九二〇年代に目を向けたのである。経済のデジタル化とネットワーク化によって、金融資本主義はゾンビのようによみがえった。そのゾンビに身を委ねるしか、膨張した世界を支える途がないことを、レムはザハに予知していた。ゾンビとして復活した金融資本主義に最もフィットする建築スタイルを、彼らは発見し、その時代の寵児となり、バブル期の日本、そしてその後の中国、他のアジアの諸国の巨大でクレージーなプロジェクトが、レムにそれを気づかせ、S, M, L, XL を書き、彼らを二〇世紀末のスターの座にのぼせさせたのである。そして僕もまた、SからXLへと至る超階層的スケールを持つ膨張世界の行く末を考へざるを得なかった。しかし、レムのように悲観的に偽善的に、その膨張世界の行く末を描くのではなく、量子力学的、有効理論的に解き明かそうと考えたのである。われわれが環境とどうも生きるために必要なのは、主知主義的方法の破壊を、レムのように偽善的に笑うことではない。偽善は不毛であり、現実逃避である。流れ続ける現実の物質と時間と共に流れる、柔軟なダイナミクスが今こそ必要なのである。

#### 建築の膨張と新しい物理学

ニュートンの物理学は、ルネサンス的なMサイズ建築から、産業革命的なLサイズ建築へのジャンプと併走した。歴史的に見ても、ニュートン物理学は産業革命の引き金となり、産業革命によって、Mサイズ建築からLサイズ建築への転換が引き起こされた。ロンドンの万博のために建設されたクリスタル・パレス(一八五一年、「点」図24参照)は、その転換を象徴する。Mサイズのものをだけ建築だと考えた当時の人々の眼に、クリスタル・パレスは建築には見えなかった。鉄の柱やガラスの枠などの工業部材をでたらめに寄せ集めてできたランドウにしか見えなかった。コンクリートと鉄によって、小さな部屋の集合体でしかなかった建築の中に、柱がなく天井の高い大空間が出現し、建築は、建築家達の意思に反してMサイズからLサイズへと転換したのである。ニュートンの物理学の基本は、ランドウの抽象空間の中を、ニュートン方程式に従って物体や人間が運動することである。コンクリートと鉄が可能にした抽象的な大空間の中を、物や人が自由に運動する様子は、まさにニュートン物理学そのものであった。ラトウールが提唱したANTの新しい地平から見返してみると、抽象的空間の中を、物や人が移動するというイメージは、西歐的な人間中心主義と、深く結びついているように感じられる。運動の単なる背景と見做されたランドウの抽象的空間を、ANTは、一種のフィクションであるとして批判した。物とはもともと、影響を与えあひながら、運動方程式では解きようのない、複雑な網を作りあげており、その網こそが、世界の現実である。ANTは教える。コルビュジエが、運動を象徴化するためにデザインした、サヴォア邸の吹抜けた空間、あの「建築のプロムナード」の壁と名づけた吹抜けた、素朴な、牧歌的なMサイズ建築であったと僕には感じられる。サヴォア邸の後、エレベーター、エスカレーターなどの二〇世紀初頭の新技術の普及によって、運動の器としてのヴォイドは巨大化し、ニュートン物理学が発見したヴォイド、ランドウは、世界中に拡散し、環境を破壊したのである。ルネサンス的M建築から産業資本主義のL建築への転換が、単にスケールだけの問題ではなかったように、産業資本主義のLから金融資本主義のXLへの転換も、スケールの転換である以上に、都市と生活の質的な大転換であった。そこでは、まず、敷地という制約が撤廃された。複数の敷地をまたぎ、その間を横切っていた道路や鉄道さえも、新しい巨大な敷地に生み出された。小さな土地、細い道路をも統合した六本木ヒルズや東京ミッドタウンのような大規模開発によってXL建築が出現し、XL生活がスタートしたのである。路地も埋め尽くすまで消え去った。これは単に、敷地の面積が増えたという量的な転換だけを意味しない。敷地が複合されるということはず、それを可能にするだけの、金融的流動性が出現したということであり、また、それを可能にするだけの政治と経済の、複数の国家をまたぐ調整、結託が出現したということである。政治と経済が超階層的に結託しなくては、金融資本主義の不安定なシステムを、安全に運用することができなくなった。ポスト産業資本主義とは、まさにそのような流動性と結託の時代である。流動性によるスケールの超越が、アジアという「古い」場所から起こったことは、少しも偶然ではない。西欧が長い時間をかけて築き上げてきた民主主義的なシステムは、経済の流動性、政治と経済の結託にプレーキをかける。西歐的個人主義を尊重する限り、MからLへの転換が精いっぱいであったともいえる。アジアという古い場所に保存されてきた独裁的な全体主義の中ではじめてLは敷地を超え、既存のルールも法律もすべて超越して、XLへとジャンプできたのである。このXL状況に対応する新しい物理学が量子力学であった。XLとは、ただの巨大ではなく、極小から極大までの無数のスケールの混在。そして重層を意味する。その重層こそがXLであった。西歐的民主主義、法治主義の下では決して出現しなかった混在と重層とが、アジアの全体主義の中で、はじめて地上に出現したのである。アジアの参入によって出現したそのカオティックな状況は、ニュートン物理学では説明できないだけでなく、アインシュタインの物理学でも説明できない。アインシュタインは、空間と時間とはひとつのものであり、圧縮のスピードの中では空間も伸び縮みすることを示した。そして、その時空の伸び縮みは、 $E=mc^2$ という美しい方程式ですべて証明できることを、見事に示したのである。アインシュタインは空間・時間という枠組みを否定し、その二つの世界のボーダーを壊したが、その統合された新しい世界にも、依然として法則は存在する。その意味でアインシュタインは、十分に保守的であった。しかし、現代の量子力学は、すべてを説明できる法則など、もはや存在しないことを明らかにした。極小、極大を観測することが可能になって、それらを統合する法則が存在しないことを、量子力学が僕らに突き付けたのである。それは物理学という学問自体の自己否定であったといってもいい。物理学とは、法則を探り、方程式を発見することが目的の学問であったからである。アインシュタインは、その意味で、古典的な物理学の最終形態であり、物理学に対する白鳥の歌でもあった。その逆に、量子力学は、法則に基づいて、何かを計算して予測するという科学的態度自体を否定した。物理学は、その学問自体の大前提を喪失し、量子力学以降のアーキタイプな物理学は、アインシュタイン以前のあらゆる物理学と、決定的に訣別するのである。

#### 進化論から重層論へ

ではその新しい物理学は、どのような新しい建築と併走するのだろうか。新しい建築は、どのようなヒントを、新しい物理学から受け取ることができるのだろうか。新しい物理学の最も興味深い点は、進化論的な論理構造との訣別である。レム・コールハースの「S, M, L, XL」の論理構造は基本的に進化論的であり、直線的である。小さな建築が次第に大きくなってM, L, XLと拡大し、さらにアジアの登場によってXLまでに爆発的に膨張し、世界は最終的、絶望的に陥ったという、進化論をベースとする悲観である。それは世界の現状に対して批判的とも見えるが、新しいアジアの状況、その混沌、混沌に対する、ヨーロッパのエリート層の嘆き節でもあった。レムの時代は、しばしばこのようにベシムスティックな論調で、現在の都市、建築を批判する。たとえば、磯崎新の都市論、建築論も、基本的には同じ悲観的トーンで語られる。すなわち世界は次第に拡大したあげくに、終末に向かって急降下して、もはや救いはなく、一方自分だけが、状況を正確に理解し、生きる賢者であると持ち上げられる。この終末的状況にのみ注目し、回避されるだけの華の種を撒き、徹底的に暴下すのが、彼らの語り口である。人生の後

半でXLと遭遇してしまった確率やレムの時代の建築家としては、この書きぶりでもいまいちが、彼らが自分だけを被害者に仕立てあげてなぐさめ、救出したとしても、そもそもXL状況の中で建築家としてスタートした僕らの世代には、なんの救いにもならない。まして僕は、レムがXLの元凶とするアジアに生まれ育っている。XLを他人事のように突き放し、笑い飛ばすことなど、とてもできない。僕はアジアという現実を受け入れ、アジアに生まれた自分という現実を受け入れた上で、アジアを批判し、アジアの可能性と未来を考えようと思う。僕が新しい物理学に興味を持つのは、その論理が小さい物から大きい物へと進化するという直線型、進化論型ではなく、大きい物の中にも小ささを発見し、そして小さい物の中にも大きさを発見しようとするからである。極小から極大までの重層性を許容する寛容性、極小から極大を自由に行き来するスピード感覚が、新しい物理学のベースとなっている。小さい物はいつでもわれわれの近くにあり、いつでも近くに引き寄せることができ、直接触れることができる。世界は大きい物へと一方的に進化しているわけではなく、大きい物がより大きくなり、速い物がより速くなるほど、僕らは小さい物、ゆっくりとした物に魅了され、引き寄せられてしまう。大きい物と小さい物とで、僕らは振動し続けている。量子力学的な重層性は、高尚な学問の世界の中の出来事ではなく、僕らの日常感覚そのものである。そして実際のところ、建築はどんどん大きくなっていく一方で、心あるデザイナーの関心は、小さい物へと向かっている。大きい物を効率的に作るのが二〇世紀の建築家の目的であったとするならば、小さい物——建築の点・線・面——と人間の身体との間の対話、相互作用が、建築デザインテクノロジーの中心課題となってきた。小さくて繊細な物達を使って、自由でやさしくてやわらかな空間を作りあげていくテクノロジーが、次々とめばえてきたのである。僕が小さなパヴァリオン、家具やカーテンなどのプロダクトをデザインすることで試みているのは、まさに、この極小=XSの復活である。

### 超弦理論と音楽的建築

それは、ルネサンスによるMの登場、建築家という特権的存在の登場以前の状態への回帰である。ラファエル（一四八三—一五二〇）以前の状態への回帰をめざしたヴィクトリア朝のラファエル前派、そしてその後継者たるウィリアム・モリス（一八三四—一九〇六）によるアーツ・アンド・クラフト運動の復活といつてもいい。アーツ・アンド・クラフトはSへと戻ろうとしたが、ノスタルジーという重層性からめとられてしまった。Sにとどまらず、XS、XXSに分け入っていくことで、ノスタルジーも鉄削りできるかもしれない。この極小と極大がもたらす新しい量子力学的な環境を整理し、その環境の中で生き抜く途を探るのが本書の目録である。その際、大きなヒントを与えてくれたのが、超弦理論（super-string theory）であった。従来の素粒子論は、素粒子という小さな点が、宇宙の単位だと考えた。しかしクォーク、光子、電子、ニュートリノなどの様々な小さな素粒子が次々と発見され、もはや素粒子が宇宙の基本単位であるとは考えにくくなった。その困難を打開するために、すべての粒子はストリングス（弦）だと考える超弦理論が生まれた。パリオンの弦が、振動することによって様々な音を奏でるように、弦は時にクォークの音色を奏で、時にニュートリノの音色を奏でると、超弦理論は考える。超弦理論によって、世界は物質の集合体ではなく、弦が発する様々な音楽の集合体となった。建築もまた、音楽の集合体として、理解することはできないのだろうか。それはカンディンスキーによる、音楽と建築との統合の継承でもある。すべてが振動であるとする超弦理論は、点というものが宿命的に持つ困難を克服した。実のところ、点とは様々な困難を抱えていた。点と点が近づきすぎると、引力は距離の二乗に反比例するという物理法則によって、点の相互に吸引力が無限大になり、計算不能となって、物理学をはみ出してしまふ。その困難が、弦により、音楽により、克服されるのである。S、XSと向かって、単純に小ささを追求していくと、点の困難に必ず突き当たってしまう。そこに振動とリズムという概念を導入することで、僕らは点というもののジレンマから解放される。建築を点として定義しても、線と定義しても、すべてが様々な困難に直面する。なぜなら点も線も、幅や厚みを持たないから、それをいかに足していかにも、建築という物質の境には到達できないからである。点と線の困難を回避して、建築をヴォリュームとして定義しようというのが、西洋建築の基本的な構えであった。二〇世紀ヨーロッパに登場したモダニズム建築も、建築をヴォリュームとして定義した点において、西欧建築の正統な嫡子であった。その結果、建築はコンクリートで作られた、退屈な三次元ヴォリュームへと退化して、量子力学的自由は失われてしまったのである。しかし振動する弦という考えを導入すれば、点・線・面は、いかに引も拡張することが可能となり、建築も都市も超越して、世界へと到達していくことができる。点・線・面を物質にも、そして空間へも、そして宇宙へも拡張していくことが可能となる。物質もまた点・線・面の振動であり、音色であり、リズムでもありと考えると、建築も、そして都市も全く違ったものに見えてくる。

### ドゥルーズと物質の相対性

振動という概念を導入することによって、点・線・面を自由に横断することが可能となり、色、固さ、質感、重みさえも、振動の結果として説明することができる。カンディンスキーはもちろん超弦理論を知るわけでもない。振動という考え方も持ち合わせていなかった。しかし彼は音楽を深く知っていたので、直感的に、点・線・面をひとつの連続的な振動として、ひとつにつなぐことができたのである。シル・ドゥルーズの、固体と液体の相対性に関する論考は、カンディンスキーの延長線上にある。ドゥルーズは船と波の例をひいて、液体であったはずの水が、ある時は固体として出現すると指摘した。「物体は、ある硬さの度合とともに、ある流動性の度合をもっている。あるいは物体は本質的に弾性をもつというべきなのだ。物体の弾性的な力は、物質に作用する能動的な圧縮力の表現だからである。船の速度によっては、波は大理石の壁のように硬くなる。絶対的な硬さという原子論者の仮説も、絶対的流動性というデカルトの仮説も、無限の物体という形態であったり、船の形態でも無限であったりするにしても、分割可能な最小限を設定することによって同じ誤謬を共有するのだから、なおさらびつたり一致するのである」(『異論』一五二頁)とバロック) ドゥルーズは、物質とは基本的に相対的なものであると認識していた。すでに見たように、相対的というよりは、重層的という言葉を使った方が適切だろう。SからXLへの世界の膨張が、実は世界の拡大ではなく重層化であったように、物質自体もまた重層化していることを、ドゥルーズは指摘した。物質は点でも線でも面でもヴォリュームでもなく、要として捉えるべきである。ドゥルーズは論を進める。そして要とは、振動の別名に他ならない。「これはまさにライブニッツが、真実的な文章を書いて説明していることである。(中略)連続的なものの迷宮は、羨らぬが砂が砂粒に分解されるように独立した個々の線ではなく、むしろ一つの布あるいは紙切れにあって、それは無限の裏に分割され、あるいは曲線的運動に分解され、そのおのおのは堅牢な、あるいは協調的な周囲によって限定されるのである。連続的なものは、砂が粒に分割されるようにではなく、紙切れや布が裏に分割されるように分割されるのである。このようにして物体は決して点や最小のものに分解されるのではなく、無限の裏が存在し、あるいは他の裏よりさらに小さいのである。」「(中略)迷宮の最小要素とは裏であり、決してその部分ではない点などではなく、線の単なる末端なのである。」「(同上) ドゥルーズの物質論で注目すべきは、彼がバロック建築にインスピレーションを得て、このユニークな物質論を展開している点である。バロック研究の定本といえるヴェルブリンの『ルネサンスとバロック—イタリアにおけるバロック様式の成立と本質に関する研究』(一八八八年)をドゥルーズは引用し、最終的にはバロック建築こそ、無限の裏の集合体であるという結論に到達する。カンディンスキーがゴシックに点を見出したように、ドゥルーズはバロックに線を見出し、線の振動を聞き出し、ヴォリュームであると思われてきた石の建築を、無数の線の集合体として再定義した。ヴォリュームを指向するはずの石という重層性を、その物理的制約に反して、点・線・面を奏で始めるというバロックのジャンプが、ドゥルーズを魅了した。ではその先、いかにしたら、弦、要の振動の秘密に立ち入っていくのだろうか、いかにしたら、ゴシックでもバロックでもない、現代の音色を発見し、響かせることができるのだろうか。僕はまず聞き耳をたてて、弦から発せられる音色に耳を澄ませ、物質が奏でる音に耳を澄ませ、弦を弾いてみては音を聞き、またそれを自分の身体に折りたたむ。次にまた、そと弦に触れて、鳴らしてみよう。新しい音の響く一瞬を求めて、それを忘れたらだれ繰り返すだけである。音楽家とは、それを繰り返す忍耐力を持った人間の別名である。そして物質が響くこととならば、建築家もまた、音楽家である。最も必要なのは、聞くことであり、聞き続けることである。すなわち、受動的であり忍耐を継続することである。本書では、点・線・面という三つのカテゴリーに分けて、弦の振動を記述した。点・線・面と分類することが本書の目的ではなく、むしろ全く逆で、それが逆に振動であり、その現われであり、それゆえに決して点・線・面と切り分けることができないこと、明らかにしたのである。

### 点

### 大きな世界と小さな石ころ

建築における点という点、まずは石ころを思い浮かべよう。そもそも大地の中で、石は巨大なヴォリューム、すなわち塊として存在した。石=大地といつてもいいくらいに、そのヴォリュームは大きくて重い。そのままで人間の手に負えないので、石は切り刻まれる。人間によって切り出されることもあれば、自然の力によって砕かれて石ころになることもあるが、いずれの場合でも、石は点として、われわれの前に立ち現れる。点にはじめて、人間という、やわで小さな存在でも石を扱うことができるようになる。石のことを考えれば、世界と人間との関係が見えてくる。世界がいかに大きく、人間がいかに小さく、弱く、頼りないかが見えてくる。点という小さな存在になった石を、再び積み上げていく構造システムを組積造(メゾンリー)という。世界を小さく切り分け、再び積み上げ組み合わせて大きくするという面倒なことを、人間は繰り返してきた。それが建築という行為の本質であった。組積造は、木造と対比される。古代ギリシャ・ローマ以来、西欧の建築の基本は組積造であった。アジアでは、木造が基本であった。組積造は点を積み重ね、木造は線を組んでいくので、その意味で、二つの世界の方法は対照的に見られるかもしれない。しかし、実際には、古代ギリシャの建築もそもそも木造であった。ギリシャ人は森の木をすべて伐ってしまい、木材がとれなくなったので、それに代わって石による組積造が主流になった。火山性の豊かな土壌の日本と異なり、ギリシャの土は痩せていて、森林を再生する力がなかったことが原因であった。しかし、木造であったことの痕跡は古代ギリシャ遺跡の様々なディテールに残されている。アジアの木造建築に特徴的な、線状の部材(墨木)を再生する力がなかったこと(図1)を、パルテノン神殿を以てする古代ギリシャ建築の中で発見することができる(図2)。細い断面形状を持つ石を使って、墨木の記憶、木造の記憶、森の記憶が巧みに再現されている。ギリシャの神殿は、基本的に、垂直な柱が発する強いモニュメンタリティに依存していた。柱の列が作り出すリズムによって、建築の全体を統制しようとした。その意味でギリシャ建築とは柱の建築であり、垂直な線の建築であった。そして、柱というヴォキヤブラリーが、そもそも木造建築に由来することは間違いない。森の木を伐って柱にすれば、そこに一本の柱が立つからである。一方、巨石を使って柱にすることは、巨石が網羅に用いられた古代といえども容易ではなかった。それゆえ、建築の原点は、森の木を伐り出して、柱を立てることだと、繰り返し囁かされてきた。「原初的小屋」と名づけられたイェズス会神父ロジェの絵(図3)は、現在でもしばしば、建築の教科書の巻頭を飾る。森の木はどうやら、人間にとって特別な存在だったのである。人間という生物がそもそも森の中で誕生し、森に依存して生活していたからかもしれない。古代ギリシャ建築は五つのオーダー(柱)を基本ヴォキヤブラリーとしているが、そのひとつであるドーリス式の柱(図4)には、樹皮を思わせる細い溝が切られている。コリント式の柱の頂部には、なんとアーカンサスの葉が彫られているのである(図5)。ギリシャ建築とは、森の再現そのものであった。

### ギリシャからローマへの転換

そのように近寄って細部を眺めると、石という点の集合体と見える古代ギリシャ建築も、線に依存する建築であったことがわかる。点と線の境界は曖昧であり、相互が埋め込みあう関係にある。線と点との間を揺れ動く、この繊細な古代ギリシャ建築が、それを引き継いだ古代ローマになると、ヴォリュームの建築へと変身してしまふ。ローマの社会、経済が、大きなヴォリュームを必要としたからである。小さな都市国家群であった古代ギリシャと、世界帝国となった古代ローマとは、必要とされたヴォリュームが、桁違いだったのである。古代ローマはギリシャから多くのことを学び、そのスタイルを継承したが、ローマ人は柱よりは壁の表現を主流とし、その巨大でマツプな壁に、リズムを作り、振動を発生させるために、ピラスターと呼ばれる付け柱を、申し訳程度に壁の表面に取り付けた(図6)。

### 点の集合としてのシーグラム・ビル

二〇世紀にも、古代ローマと同じことが起こった。ヨーロッパという「小さな場所」からスタートしたモダニズム建築は、ギリシャの神殿と同じように、線を大事にした(図7)パルセロナ・パヴァリオン。設計:ミース・ファン・デル・ローエ、1929年・図8 線が作り出すリズム)。柱という線が作るリズムで、建築という全体をまとめあげようとした。しかし第一次世界大戦後、経済の中心がヨーロッパからアメリカへと移動すると併行して、ヴォリュームの拡大が社会の目標となり、建築デザインのテーマとなっていく。ヨーロッパは古代ギリシャと同じような「小さい場所」であり、アメリカは古代ローマと同じような「大きな場所」であった。場所が移動することで、デザインも変化した。二〇世紀は、古代史を繰り返した。古代ローマの付け柱のように、ミース・ファン・デル・ローエは巨大ヴォリュームに付け柱を施して、大きくなりすぎた建築になんとかリズムを与え、統制しようとした(図9)シーグラム・ビル。設計:ミース・ファン・デル・ローエ、1958年・図10)シーグラム・ビルの石に付け柱を足したディテール)。ミース自身がヨーロッパからアメリカへと活動拠点を移したが(一九三八年)、彼の移住は、建築表現の中心地が、ヨーロッパからアメリカへと移ったことを象徴する。ミースはこの移動の意味と本質を正確に理解し、アメリカという「大きな場所」へ自分のデザインを適応させて、付け柱を発明したのである。ミースのシーグラム・ビル(一九五八年)は、超高層建築の傑作といわれたが、建築史家のレイナー・バンハムは、シーグラム・ビルは組積造の現代化に成功したかゆえに、モダニズムの傑作になったと見做した。組積造では、積み重ねる石のひとひとつが、はつきりと認識できる。そしてその単位(点)は、人間の身体が取り扱うことができるサイズで、超えることができない。すなわち、人間の身体が、組積造の単位となる点の大きさを規定している。点のインテリジェント(親密)なスケールが、組積造建築を人間にとって親しみやすいものとしている。同じように、シーグラム・ビルの

ガラス・カーテン・ウォールはブロンズ製のフレームによって、小さな点へと分割されている。ガラスのない石の壁面にミースが貼り付けたブロンズのフレームは、単なる付け柱ではなく、ビル全体を、小さな点の集合体とする手段であることを、パンハムは見抜いた。石職人の子どもでもして生まれつきのミスは、超高層ビルを、組積造の手法を用いて、ヒューマンな点の集合体へと変質させたというが、パンハムのシグナム論がきっかけとなり、僕は点について考えはじめた。 ミースが行ったような工夫は、古代にも多く見出すことができる。組積造の場合、点と点が十分に密着しなくては建築を支えることができないので、隙間なく積み上げていった結果、全体は重たいヴォリュームとして出現してしまう。点を基本単位としているにもかかわらず、できあがったものからは、点の軽やかさが感じられなくなってしまう。その危険を避けるため、古代ギリシャでもローマでも、石と石の間の目地をV型にカットして、石と石の間に多きな影を作ったり(図11)、石の表面を粗く仕上げることで(図12)、ひとつひとつの石を独立した点として感じさせようという工夫が行われた。ミースには、多くの先遣がいたのである。ミースはさすがに石職人の子どもであり、西欧建築の嫡子であった。

### 石の美術館の点への挑戦

石は本質的には点であるにもかかわらず、つながりやすく、ヴォリュームになりやすい、やっかいな素材である。その困難な素材にはじめて直面することになったのが、芦野石の石切場を持つ白井石材と一緒に作った、石の美術館(二〇〇〇年)(図13)である。石をテーマにするミュージアムなので、どうしてもこの土地の石である芦野石を使って欲しいと、強く要望された。石はヴォリュームという陥穽に落ち込みやすい危険な素材なので、それまでの僕は必ずと石を避けてきた。…… 日本の建築基準法の組積造の項をよく読み返してみよう。組積造の規定自体が曖昧であることに驚かされた。壁の長さや厚みの目安が決めてあるだけで、根拠ははっきりしない。その基準でやってきて、今まで壊れなかったから大丈夫だろうという、経験主義的な曖昧な基準しかないのである。

### 点からヴォリュームへのジャンプ

それは、日本の建築基準法に限った曖昧さではなかった。組積造の建築が、どう地震に耐えているかは、計算によって確認されているわけではなく、経験に依存していたのである。点という小さな物を積みあげ大きなヴォリュームが生まれるということ自体が、いまだに経験に頼らざるを得ないほどに、神秘的な行為だからである。小さな点から、大きなヴォリュームになるためには、魔術的なジャンプが必要なのである。二世紀でも、人は魔術に頼って点を取り扱っていた。一方、柱や梁のようなフレームでできた建築構造は、計算がたやすい。線は計算可能なものである。だから二世紀には、フレーム(線)の建築が主流となった(図16)。フレームならば、二世紀の稚拙な計算技術でも計算が可能だったからである。流行のレベルが上がったように、計算のレベルもまたアップし、その方法もまた変化していった。そもそも、一九世紀以前には、構造計算という概念がなく、すべてが経験に依存していた。一九世紀までのヨーロッパは組積造で支えられていて、点の集合である組積造は、そもそも計算が不可能であったという事情もある。二世紀に入り、ヨーロッパの建築にも、鉄骨やコンクリート製の柱などの線が導入され、構造計算という作業が始まった。当初は、建築を単純なフレームと見做して計算する、フレーム解析だけが可能であった。ラーメン構造(図17:ラーメン構造)と呼ばれる単純なフレームしか計算することができず、建築家も、計算の限界に素直に従って、ラーメン構造の建築を量産した。計算の限界が、現実を制限を与えていたのである。点と線の数を増やして、ラーメン構造よりも複雑なフレームを、有限要素法という方法で計算することができるようになったのは、それほど昔のことではない。コンピュータの登場により、有限要素法、個別要素法、粒子法へ、計算はさらなる進化を遂げてきて、やっとならば小さな点を取り扱えるまでになってきたわけである。粒子が集合したような僕の建築デザインは、そのような新しい計算技術に、裏から支えられているのである。…… 石の美術館は、色々な意味で、僕にとってターニング・ポイントであった。まずそこで、石という物質と遭遇した。石という地球生誕の謎にまたつながる深い世界と付き合ってきた。重たいヴォリュームになりやすいという、やっかいな悪癖をもつ石に出会ったことで、逆に、点の意味、点の価値を意識しはじめた。石は僕に、点の世界の扉を開いてくれた。

### ブルネスキの青い石

次に、フィレンツェ郊外の石切場で採れる、やや青みの入ったグレーの砂岩、ピエトラ・セーナとの出会いがあった。ピエトラ・セーナは、点の世界を、さらに深めてくれた。ピエトラ・セーナの石切場を持つ石屋のサルパトールが、ピエトラ・セーナを使って小さなヴォリュームを作らせて欲しいと、わざわざイタリアから訪ねてきたのである。スーツケースに詰めてイタリアから運ばれたピエトラ・セーナは、清らかな石、という意味で、その名の通りの青灰色の落ち着いた色をして、一目で好感を持った。 アップルの創業者スティーブ・ジョブズがこの石を特別に好み、すべてのアップルストアの床を、このピエトラ・セーナで仕上げるように厳命した。歴史をさかのぼると、この石が建築で果たした役割は、意外なほどに大きく、深い。 ルネサンス最初の建築家といわれ、ピエトラ・セーナの石切場に近いフィレンツェをベースとして活躍したフィリッポ・ブルネスキ(一三三七—一四四六)が、この石を好んで用いたのである。しかもブルネスキは、それまでには誰も試みなかったユニークな方法で、この石を用いた。まず彼は、ピエトラ・セーナで構造フレーム(柱・梁・アーチ)を表現し、そのフレームの隙間を、白い漆喰塗りのプレーンな壁で埋めたのである。 あたかも白い紙の上に青いペンで線のフレームを描くようにして、実際の建築が作られた。 実際には、ブルネスキの建築は、当時の一般的な構造システム、すなわち組積造の壁で支えられている。フレーム構造で支えられているわけではない。コンクリートや鉄でできた構造フレームが建築を支えるようになるのは、一九世紀以降である。フレーム構造とはすなわち、線の構造であった。しかし、一九世紀以前のヨーロッパでは、石やレンガを積み上げて作る組積造が主流であり、一五世紀のブルネスキもまた、組積造という技術的な制約の中で、組積造独特の、重たく、閉じたヴォリューム建築を作らざるを得なかったのである。しかし、ブルネスキは、その制約の中で、線の建築を夢想していた。彼の頭の中には、来るべき線の建築の時代が見えていたに違いない。だから彼は、白い漆喰の壁の上に、ピエトラ・セーナを用い、細い線を描いたのである。ピエトラ・セーナ独特のあの青みを帯びたグレーの色調は、シャープな線を描くのにふさわしいものであった。白い紙の上に青いインキで線を描いたような、数学的で抽象的な印象を、彼は建築に与えようとした。鉄骨の線の建築が作られるはるか前に、彼はピエトラ・セーナの青い色を利用して、線の建築を達成したのである(図22 捨子保育園、設計:ブルネスキ、1445年)。ブルネスキの次の世紀を生き、全盛期ルネサンスの中心的存在であったミケランジェロ(一四七五—一五六四)も、同じように、ピエトラ・セーナを好んだ。 世界で最も美しい階段とも呼ばれる、ラウレンツィアーノ図書館のホール階段では、白い壁の上でピエトラ・セーナを用いて描かれたフレームの中に、ピエトラ・セーナの青い階段が浮いている(図23 ラウレンツィアーノ図書館ホール、設計:ミケランジェロ、1552年)。ブルネスキもミケランジェロと共に、組積造という当時の技術に拘束されながらも、未来にやってくるであろうフレーム構造の時代、すなわち線の時代を予告するような、線の建築を作った。彼らは線の預言者であった。その予言に最も適した物質として、ブルーグレーの冷たい肌をしたピエトラ・セーナが選ばれたのである。そして、彼らの活躍したフィレンツェの近く山かた、この石は切り出された。建築家の数学的、抽象的な発想と、彼らの地元のローカルな素材とを、神が結びつけた。建築はそのようにして、ローカルな場所と宇宙をつなぎ、物質の概念をつなぐのである。 彼らの予言の通り、フレームの時代は三〇〇年後に到来した。鉄骨やコンクリートのフレームによって建築を支え、フレームの間をガラスや壁で埋めていくという建築(図24 クリスタル・パレス、設計:パキストン、1851年)が、一九世紀後半以降の、西欧建築の主流となった。線の技術によって超高層建築が可能になり、二世紀の都市と文明が生まれたのである。ブルネスキとミケランジェロがピエトラ・セーナを用いて描いた予言は、数百年の長い射程を有していたのである。

### ブルネスキの点の実験

ヴォリューム(組積造)から線という流れのバイオニアであったブルネスキは、線に挑戦しただけではなく、点に関して興味深い実験を行っている。彼の代表作といわれ、ドーム建築に技術的なブレークスルーをもたらしたことで有名なフィレンツェの大聖堂、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の上の大クーポラ(ドーム)(図25)は、点の可能性に挑んだ大規模な実験であった(一四三六年)。 柱のないダイナミックな内部空間と、天へと延びる象徴的な外観を同時に達成する手段として、古代からたくさんドームが作られてきた。石やレンガという小さな点を積み上げ、大きなヴォリュームを獲得する手段として、すなわち点とヴォリュームとを繋ぐ魔術的な手法として、ドームという工法が古代より重要されてきた。しかし、石、レンガの重量が、ドームの大きさを制約した。石もレンガも、素材の重量に比較して、点と点とのモルタルを用いた接合面の強度が弱く、自重によって崩壊してしまうのである。点といえど重量があった。そこに点の建築の、宿命的な欠陥があった。中世においては三メートル以上の直径を持つドームは不可能と考えられていた。すなわち、点をヴォリュームへとジャンプさせ界線させるにも、物理的な限界が存在したのである。石やレンガという点は、いくら工夫をこらして積み重ねても、その三メートルという限界を超えることができなかった。 その限界を越え、点の宿命を超えたのが、ルネサンス発祥の地であるフィレンツェの大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレの大クーポラであり、それを成し遂げたのがブルネスキという天才であった。直径三メートルのこじんまりとした中世的なドームでは、繊維産業と金融業によってイタリアの経済的、文化的中心となったこの「花の都」には、いかにも物足りない、誇り高きフィレンツェ人は考えたのである。まさに二世紀の超高層建築へとつながるヴォリューム至上主義が、新興都市フィレンツェに萌芽したのである。 まず、フィレンツェ政府はドーム・デザインコンペを行った(一四一八年)。ブルネスキが提出した大胆なアイデアは、賛否の大激論を呼ぶ画期的なものであり、彼はコンペの勝者となった。彼自身は大聖堂全体の完成を見ることはできなかったが、彼の提案をベースとして、死後、数々のハードルをクリアして、フィレンツェは、直径四三メートル、高さ二二メートルの花の都にふさわしい大ヴォリュームを獲得したのである。それほどの挑戦の難易度は高く、先見の明があったということもできる。大クーポラを可能としたのは、リブ(フレーム)付きの二重ドームというアイデア(図26)。リブを介在させることで、点とヴォリュームとを階層的につないだのである。ブルネスキはそもそも、線の可能性に最初に関心を持った建築家であった。線に対する関心執着は、ピエトラ・セーナの線のファサードを持った捨子保育園(一四四五年)をはじめとして、彼のすべての作品に見てとれる。線を媒体にすれば、点とヴォリュームとがスムーズにつながることを、ブルネスキは、直感的に理解していた。その直後に具体的なヒントを与えたのは、古代ローマの線の建築との遭遇であった。ブルネスキは、クーポラのコンペが正式に告示された後、古代ローマの遺跡を訪れ、古代ローマのオーダー(ドリス式、イオニア式、コリント式などの柱)について研究を行った。そこで彼は、古代ローマ建築が、構造的にも、デザイン的にも、柱という線を用いて、巨大なヴォリュームを実現したことを発見するのである。古代ローマ建築は、世界帝国ローマという巨大化した社会が要請する巨大なヴォリュームを獲得するために、古代ギリシャで生まれた線のアイデアを、最大限に展開した。 のべりたりがちな巨大な壁面にはピラスターと呼ばれる線が取り付けられ(本巻図6参照)、二階建て以上の建築の形態をまとめあげた。ジャイアント・オーダーと呼ばれる、階をまたぐ巨大な柱を、ローマ人は発明した(図27)。ジャイアント・オーダーという長い線によって、高く大きな建物も、間延びすることなく、リズムカルにデザインすることが可能となった。古代ローマ人は、拡大する社会が要請する巨大なヴォリュームを、長く強い線によって解いたのである。ブルネスキはローマ遺跡を訪れて、線を見出し、それをフィレンツェの緊急課題であったコンペに応用した。サンタ・マリア・デル・フィオーレの中で、線は線々に組み合わされ、編まれることによって、建物の強度を上げた。まず、木材(まさに線)六〇本を束ね(またはも線)でボルトで結合したリングを作り、リングという線によってドームの底部を締め付け、ドームが水平方向にばらけることを防いだ。 強度を高めるため、リブ付のドームは二重に重ねられた(図28)。リブ(線)を二重に編み込むことで、ドームは直径三メートルという限界から解放され、外側のドームは、圧倒的なヴォリューム(高さ二二メートル)を獲得することになったのである。点の弱さが線によって克服され、線は編まれることによって、さらなる強度を獲得した。まさに線を編む技術によって成長した繊維産業の街フィレンツェにふさわしい、しなやかな建築的発明であった。

### ブルネスキの橋脚法

ブルネスキのコンペ提案のもう一つの斬新さは、足場を作らないで、ドームを作るという画期的な工法にあった。たとえリブという線を、点とヴォリュームをつなぐ媒介として導入したとしても、リブとリブの間は、根気よく点(レンガ)で埋めなければならぬ。どうしても最後は、点とヴォリュームを強引につなぐというジャンプが必要となる。その宿命的な困難を、ブルネスキはどのように克服したか。 小さな点(砂利、セメント)を一気にヴォリュームへとジャンプさせる一種の魔術的工法が、二世紀の最も一般的な建築工法となつた現場打ちコンクリートであった。しかもこの工法を用いれば、石やレンガをひとつひとつ手作業で積み上げるという手間を省くことができた。その意味で、コンクリートは魔術的であると同時に、怠慢な工法でもあった。二世紀建築は、魔術と怠慢を結合させることに成功した。だからこそ、二世紀の人々は熱狂し、商業に依存するようになり、コンクリート建築におぼれたのである。合理的であるかに見えるが、実は魔術と怠慢を愛するこの時代に、コンクリートはうってつけの素材であった。コンクリートは一瞬にして、夢の城を人々に提供してくれた。コンクリートで堅牢な城を建て、私有するというのが、二世紀の人々には異様なほどの情熱を示したのである。そして実は、コンクリートにおける点からヴォリュームへのジャンプは、仮設足場(図29)と呼ばれる、芝居の黒子のような補助的建築、補助線によって、はじめて可能になったのである。仮設足場がなければ、決してコンクリート建築を作ることができず、魔法は起こらなかった。そして、線(鉄パイプ)を編むだけで簡単に仮設足場が製作できたからこそ、現場打ちコンクリートという魔術的工法が二世紀に支配することになったわけである。仮設足場という作られて、用が終わり消えてゆく線の建築が、点をヴォリュームへとジャンプさせたのである。しかし、ドームを作る場合、ドームと同じ大きさの木製の仮設足場をドームの下に建て、その上に木でドーム型の型枠を作ると、さらにその上

にレンガを置いていかなければならない。垂直な壁を積む時の足場よりも、はるかに困難な作業が必要であった。その結果、工事中はドームの内部空間全体が、仮設足場で埋めつくされて、足場の森のような有様になる。この足場と型枠を作るという面倒なプロセスを、いかにしたら省路できるかに、ブルネレスキは果敢に挑んだのである。彼の解決は、レンガをずらしながら積み上げていく、斬新な方法であった。レンガは点とはいえ、大きさがあるから、少しずらして、上のレンガが下のレンガよりわずかにはり出すように積むことができる。これをどんどん積み返していけば、最終的には、昔ながらの森のような足場がなくても、大きなドーム(ヴォリューム)を建設することができるのである。いわば点であったはずのレンガを、ずらしの手法によって、線として用いたのである(図30)。これは、数学における掃納法を想起させる画期的な方法であった。nで成立することが、n+1でも成立することを示せば、あとはそれを無限に繰り返せばいいというのが、掃納法の論理構造である。ブルネレスキは、建築における掃納法を発明したのだともいえる。

建築における演繹法と掃納法

建築にも演繹のアプローチと、掃納のアプローチがある。二〇世紀のコンクリート建築は演繹的であった。まず、全体の形のイメージがあって、その形を実現するために、部分を構成する素材やその結合のディテールが結論される。部分は全体に服従しなければならない。コンクリート建築では、すべての部分が全体に従属していた。一方、ブルネレスキの方法は、部分から全体へと到達しようとする掃納法であった。部分の性質、その境界を徹底的に洗い出した上で、その部分と部分とが繋ぎ合わされて、上位の段階へと昇っていく。その作業を積み重ねていった末に、時として、予想もしていなかったような全体が出現する。それが掃納法という方法である。掃納法は時として、驚きに満ち溢れ、想像を超えた結果を運んでくる。コンクリート後の建築では演繹的方法ではなく、掃納法が多用されるようになるだろう。コンピュータショナル・デザインが可能とする加算的建築は、掃納法と相性がいいからである。ブルネレスキは掃納法の効果を知っていた。点を掃納法的に拡張して線に到達し、線を媒体としてヴォリュームへと到達した。線というものの効果を熟知し、線を徹底的に活用した。それは彼が金細工師として、そのキャリアをスタートしたことと関係があるように、僕は想像する。彼はそもそも、建築ではなく、金細工の技術を学んだ。石やレンガが本質的に点であるのに対し、金属とは、本質的に線である。その経験が彼に線の魔術を教え、彼は線の力を、建築の世界へと持ち込んだのである。ブルネレスキ以降の建築の歴史は、金属という新しい物質の参加によって開かれていった。金属が参加することで、歴史は大きく転換していった。金属と線とは、切っても切れないものだったからである。鉄柱の柱をはじめとする、鉄が作る線によって大空間の創造が可能となり、建築空間のスケールは拡大していった。ドイツの宰相ビスマルク(一八五〇-一八九八)が築いた「鉄は国家なり」という言葉は、金属の作る線がいかに人間の空間の拡大に役に立ったかを物語っている。実際一八世紀のドイツの運道において、鉄は大きな役割を果たした。一見金属とは関係がないように見えるコンクリートだが、実は、内部の鉄筋がなくては、コンクリート構造は成立しない。砂、砂利、セメントの粉などの小さな点を、鉄筋という線が束ねているのである。建築の近代化とは、建築の「金属化」であり、「線化」であった。その第一歩が、金細工師ブルネレスキの建築家への転身であった。フレンツェの大聖堂で足場を省略するために、ブルネレスキは、レンガ自体をデザインし直した。彼は薄くして、しかもサイズの大きなレンガを焼かせた。そうすると、レンガとレンガとを突きずらすことが可能となり、そのずれが、次のレンガの持ち出し(キャンチレバー)を可能にする。日本ではコンニャクレンガとも呼ばれたこの扁平なレンガは、点でありながら、少しだけ、線へと近づいたレンガである。さらに、ブルネレスキは、ヘリンボーン(にしんの骨)とも呼ばれるジグザグ状の積み方を導入して、レンガ同士の接着の強度を確保している(図31 サント・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のヘリンボーン)。ヘリンボーンもまた、点の中にこそっと線と線を導入する巧妙な手法である。この工夫により、にしんの骨が人間の肉に差し込まれたように、点の集合体はさらに粘り強いものになったのである。どういう形状の骨(線)を挿入すれば、最も強靱で柔軟な身体を形成できるのかを学習した結果が、ヘリンボーンであった。生物のしなやかさを、彼は建築に導入したともいえる。彼は金属から、そのしなやかさを学んだに違いない。ブルネレスキは、このずらしの手法を、ドームの水平の円環にそって回転する形で実行した(図32 ドームに挿入されたヘリンボーン)。回転を利用することで、ちょっとずつずれ、一周するうちに大きくなれ、持ち出しを生み、足場を全く用いない経済的な方法で大きなドームを施工することが可能となったのである。

／ ポリタクとピケラ …… ／ 液体で点をつなぐ …… ／ メタボリズムと点 ……  
／ 線と呼べるほどに薄い石 ……

日本の瓦と中国の瓦

ピエトラ・セレスナとの出会いで、ブルネレスキの点や線との構図を再発見したように、新しい材料との出会いも、僕らを新しい段階へと導いてくれる。材料はいつも、僕らにとって、他者として出現する。他者と向き合い、がっばりと四つに組むことで、僕らは次の地平へと進むことになる。中国の民衆に使われている瓦も、その意味で僕らにとっては他者であった。中国の瓦に出会って、点の建築の、次のステージが始まった。中国で建築をデザインすることは、決して易しくない。日本流の高い精度を求めると、必ず失敗する。施工の精度以前に、現場に持ち込まれる材料のバラツキが激しく、ほとんどの日本の建築家は、搬入された不揃いの材料を見て、途方に暮れてしまう。僕も最初に中国で仕事を始めた頃は、同じように、何度かぐっすり、打ちのめされた。しかし、ある日、考え方が変わった。むしろ、そのバラツキを生かしたデザインというものがあるのではないかと、考えを一八〇度転換したのである。そう考えはじめること、中国で仕事をすることが楽になった。やがて、よりバラツキが激しいものを探しはじめた。その中でも、一番気に入っているのが、中国の民衆に用いられるバラツキの激しい瓦である。杭州と新津の二つの美術館で、この中国瓦の可能性を徹底して追求した。二つの場所とも、数地のまわりには典型的な中国の田園風景が広がっていた。瓦で屋根を葺いた、昔ながらの民衆が、風景を構成する基本単位となっていた。近寄って瓦を観察してみると、興味深いほどに、色、形、寸法がバラついている。その田園風景の中に、時々白い煙があがっていた。瓦を焼く野焼きの煙が出す煙だ。野原の中に、レンガと土で小さな窯を作り、そこに薪をいれて瓦を焼くのである。今でも、あのようにプロミティブな方法で瓦を焼いているから、あの美しいバラツキが生まれるのである。一方、日本の屋根瓦は、ほとんどが大工場で、機械を用いて焼成される。当然バラツキはほとんどない。バラツキはあってはいけない。日本人の几帳面さと、高い工業技術とが運動して、中国の瓦とは対照的な精度、均一性に到達してしまっただけである。そのせいで、日本の民衆の屋根の表情は、すっかりの硬りとしたものになってしまった。瓦はそもそも生きた点であり、点の作るリズムが、屋根に表情、スケール感を与えていたはずなのに、工業製品となってしまった日本の瓦は、少しも点を感ぜさせない。日本の瓦は、屋根を灰色に染めただけに見える、点のリズム、点の運動感はどこにも存在しないのである。瓦の形状が、こののっぺり感に輪をかけている。そもそも、屋根瓦は曲面に成型して焼いた陶板を上向き、下向き、交互に組み合わせることで、雨水を防ぐというシステムであった(図48)。西欧でもアジアでも、この基本形からスタートしている。日本では、平瓦の上に載る丸瓦の断面の曲率をつきつけて、凹面と凸面の陰影がよりはっきりできるようにした組み合わせを本瓦と呼び、奈良時代以来、本瓦は日本の都市景観を構成する基本素材のひとつとなってきた(図49)。しかし、江戸時代の延宝二年(一六七四年)、近江の瓦工、西村五兵衛正輝が、丸瓦と平瓦とを一体化した枝瓦と呼ばれる合理的、経済的システムを発明した。枝瓦は別名、簡略瓦とも言われ、確かに施工の効率を高めたが、その近代的な建築材料の登場以降、日本の屋根は、すっかり陰影、メリハリを失って、のっぺりとしたものになってしまったのである(図50)。枝瓦は、明治以降の工業化によって、さらに表情を均一化させ、日本の屋根は、さらに退屈なものとなつてしまった。点のきらめきとリズムとが、日本の屋根から、そして日本の景観全体から、すっかり失われてしまったのである。そののっぺりした景観にうんざりしていた僕らに、中国の瓦が発する点のバラツキは、奇跡のように美しく生き生きとしたものと映った。中国の山の中で建築を作るなら、この野焼きの瓦を主役にしたいと、密かに思っていたのである。

点の階層化とエイジング

杭州の中国美術学院民衆博物館(二〇一五年)の敷地は、もともと茶畑であった。茶畑独特のゆるやかな斜面に寄り添うような建築を作って、屋根をすべて互で重なるように考えた。しかし、互で重なりあえば、自動的に、景観になじんだ建物ができるとはわけがない。ひとつの屋根が大きいと、その面の大きさに比較して、それを構成するひとつの点、すなわち一個の瓦のサイズが小さすぎ、いかにひとつひとつの点にランダムなバラツキがあったとしても、点は大きな面の中に埋没して、のっぺりとした印象を与えてしまう。その危険を避けるため、大屋根を作るのではなく、民衆と同じようなスケールの小さな屋根を単位とし、その小さな屋根が無数に集合した、村のような風景を作ろうと考えた(図51)。小さな屋根の中に置く、バラツキのある瓦は全体に埋もれず、しっかりと独立した点として、自分の存在を主張していろいろ(本景観写真)。点の建築を作る時に重要なのは、点と全体のバランスである。僕はしばしば点を階層化して、段階的に全体へとつなげ、環境へとつなげていく。小さな屋根の下には、小さな菱形の平面形をした空間が集合して、その小さな空間が、茶畑の微妙に傾斜した地形を、三角形分割の手法でなぞっている。建築が全体として大きくなったとしても、階層化の方法を上手に用いれば、生き生きとした点のきらめきを失わずに、小さな点と、大きな全体とのゆるやかなつながることができ、一番苦しいのは、瓦を使って、外光をコントロールするスクリーンのディテールだった。……小さく独立した点が、ランダムに集積し、ひとつの雲のような、意の曖昧なスクリーンを構成するのである。バラツキがあり、汚れがあり、痛みがあり、デコボコしているということは、それだけ点が自由であり、点がより点らしいということでもある。点をより自由な存在として、解放してやろうと考えるには、汚れを歓迎し、痛みを愛し続けなければならない。それは、建物ができた後についてくる。長く、予想のつかない時間に対して、開かれた建築を作るということである。完成した後に、徐々に汚れ、傷んだとしても、最初から汚らわしい点は、エイジングを許容し、飲み込んでくれる。きれいで、整然とした建築は、汚れを許容しない。現代の日本建築は、その不寛容な方向に向かって進化し、その結果、日本の都市は汚れを許容しない、居心地の悪い環境となつてしまった。カンディンスキーは、石版画に永遠に修正が可能であり、加算的、永遠に完結しない指摘した。汚らわしい点の建築もまた、汚れや痛みを最初から内蔵しているがゆえに、建物の竣工という閉じた時間に封じ込められることなく、永遠の時間へと開かれている。石版画と同じように、汚れや痛みは、環境を自由に、やさしくする。

自由な点としての三角形

杭州の博物館では複雑な地形を三角形を単位として分割した。四角形ではなく三角形を単位とすることで、どのような複雑な曲面でも、三角形の集合体として近似できる。その意味において、四角形は面であるが三角形は面であると同時に、点の自由さを持っている。四角形は不自由であり、三角形は自由である。建築は通常、四角形を単位として作られる。平面も、立面も、四角を単位として、建築は作られてきた。しかし、四角形は融通がきかないという点に気づいた建築家何人かいる。フランク・ロイド・ライト(一八六七-一九五九)は、自然の原理に基づいて建築を様々な形で試み、三角形の可能性に注目していた。ライトの影響を受けたバックミンスター・フラー(一八九五-一九八三)や、ルイス・カーン(一九〇一-一九七四)も、三角形に大きな関心を抱いていた(図55・図56・図57)。三人の背後には、一九世紀のアメリカに起こった、トランセンデンタリズム(超主主義)と呼ばれる思想の流れがある。トランセンデンタリズムの自然への崇拜、自然と精神の調和の追求は、三角形という幾何学へと辿り着いた。トランセンデンタリズムは、R. W. エマソン(一八〇三-一八八二)や、『ウォールデン— 森の生活』(一八五四年)で自給自足を提唱したH. D. ソロー(一八一七-一八六二)らによって一九世紀の産業化直前のアメリカで創始された思想だが、彼らは宗教的にはユニタリアニズムに近く、同じプロテスタントの一派で、動機は繁栄生活を重視するカルヴィニズムを徹底的に批判した。一方、コルビュジエをはじめとする、ヨーロッパのモダニズム運動を主導した建築家達は、カルヴィニズムに近い位置にあった。コルビュジエの生み出したスイスの山中のラ・ショード＝フォンは、南仏のカルヴァン派の人々が、迫害を逃れて辿り着いた土地といわれている。マックス・ウェーバーは、『プロテスタント主義の倫理と資本主義の精神』(一九〇四-一〇五)の中で、カルヴィニズムの繁栄主義が、近代資本主義の起源にあることを指摘した。またカルヴィニズムの信徒が大きなガラス窓を好んで、神に対して何物も隠さないことを心掛けたこと、モダニズム建築の大きなガラス窓との関連性もしばしば指摘される。カルヴィニズム、近代資本主義、大きなガラス、四角形が一方にあり、もう一方の極に、トランセンデンタリズムの資本主義批判、森の生活、三角形が対峙していたのである。近代という時代は、そのような構造を有していた。「幼稚園では」筆目目のテーブルがあった。この「ユニット・ライン」の上で、私はとりわけ滑らかな木のブロックで作られた四角(立方体)や、円(球)や、三角(四面体または三脚台)で遊んだ。深紅の厚紙の六〇度-三〇度の三角形で、短い辺が二センチ。そして片面は白色。私の想像から生まれたパターン・デザインは、およそそのような面からな三角形の部分であった(『ライトの遺言』)と、ライトは三角形に関心を持った原初的体験を述べている。そして教育者であった母から幼い頃に与えられた、ドイツの教育家フリードリッヒ・フレーベル(一七七八-一八五二)の遊具を、「滑らかな形のよい塊の木片を積み上げると、その感触はその後決して指から消えることがなかった」(『自伝— あるいは芸術の形成』)と振り返る。フレーベルの遊具は、四角形の幾何学をベースとする立方体、直方体などで構成された通常の積み木とは違って、多角形や球のブロックを含んでいた。それがいかにライトにとって意味を持っていたかは、この言葉からも窺い知ることができる。まさに三角形という点の感触は、ライトの指先に生涯残り続けたのである。

／ 松葉の原理の成長するTUMIKI …… ／ 市松模様を作る点 ……

線路の砂利という自由な点

点の大きさについて、大きなヒントを与えてくれたのは、鉄道の枕木の下に敷かれた砂利の寸法にまつわる研究である。鉄道のレール、枕木、砂利とが重層することで、車体の荷重は分散され、大地というわからぬものに、ダメージを与えることがない。レールにおいては、まず線状の鉄がしなること荷重を分散し、その力が枕木という線に伝達され、枕木にかかった荷重は、その下に敷かれた砂利によって分散される。その段階的な力の分散によって、地面は窪んだり、割れたりすることがない。ここで重要なことは、砂利が接ぎられることなく、それぞれの砂利が自由に動き、自由にずれることである。砂利が拘束された点ではなく、自由な点であることによって、砂利の山全体が、クッションの役割を果たしているのである。この自由を保障するのが、砂利の大きさである。枕木の下に砂利の代わりには砂を敷くと、砂という小さすぎる集合体は、力を分散させることができず、荷重は集中してしまて、地面にダメージを与える。経験の積み重ねによって、最も適切で経済的な点の大きさ、すなわち砂利のあの大きさまで到達したのである。このエピソードは自然と建築の関係を考える上で、大きな示唆を与えてくれる。大地という自然と、車体に乗っている人間との間に、様々な点と線とが介在し、その二つをスムーズに、そして階層的につなげている。建築もまた同様にして、自然と人間をスムーズにつなげるものでなければならぬ。枕木の下に敷かれた砂利が理想である。その砂利のように、一見、自由な点でありながら、実際には見事なクッションとして、その二つをつなぐ建築を作ることができないうらうか。コンクリートのようにはガチガチのものを介在させるのではなく、様々な自由な粒子を媒介して、この小さくてやわかな身体を、自然という大きなものにつなげていきたい。民主主義的な建築があるとしたならば、線路の砂利のようなものではないかと、僕は考える。あのように自由で、あのようにしなやかなものである。

市松模様と俊約

### 離散性とサハラ砂漠

市松模様のような、点がバラバラと浮いているような状態を、離散的状态と呼ぶことがある。僕の恩師である建築家の原広司(一九三六-)は、そもそも数学で用いられていた離散という言葉を建築の世界に持ち込んだ。原先生は、教鞭をとっていた東京大学の学生と、世界の辺境の集落を調査し、その配置を平面化し、そこから未来の都市、未来の建築のヒントを得ようとしていた。その集落研究で、原先生は数学的手法の建築への応用を試みた。これは、レヴィ=ストロース(一九〇八-二〇〇九)が、その文化人類学調査において、数学から多くのヒントを得たことに倣ったものかもしれない。集落とは属人的なほどに魅力的である。生の生活と家族があり、生き生きとした建築が存在している。もし、数学のような香艷な武器を持たずにそこに乗り込んでいくと、たちまちその魅力に捕らわれ、理性を失ってしまうことを、レヴィ=ストロースも原先生も警戒していた。学生であった僕らと原先生は、一九七八年の冬、西アフリカ、サハラ砂漠周辺の集落を、二か月かけて共にジープで旅し、調査した。旅の途中、原先生はさかんに離散という言葉を使った。サハラ周辺の集落は、小屋が隙間をあけながら集合する、コンパウンド住居という形式で知られている(図65-図66)。この地域では一夫多妻制が一般的で複雑な形態であり、夫はそれぞれ妻が住む小屋を日ごとに回って、その中の一軒で食事をして、妻や子どもと遊ぶ。それぞれの妻に付属する小屋が、中庭を中心として、ゆるやかに離散と集合する形態を、原先生は離散の集落と呼んだ。点と点が距離を置いて、ゆるやかに離散と集合している状態が離散的であり、その対極にあるのが、点と点が密着して、隙間のない状態である。離散の状態こそが、人間関係の理想であり、すべての点が密着した状態の究極がファンズムではないかと、砂漠を旅しながら僕は議論した。未来の建築は、サハラのコンパウンドのように、離散をめざさなければいけないと、砂漠の中で、火を囲みながら、僕は語り合った。離散的なものへの憧れ、すなわち点への関心が、このサハラの旅で、僕の心の中にめばえた。離散という数学の概念を用いて建築を考え始めると、数学や量子力学が、建築を考える上で、大きな武器になることを実感した。離散数学は、現代の数学の中の重要な分野であり、世界を連続体ではなく、バラバラとした粒子的なものとして捉えようとする。世界の新しい貌が見えてくることを、僕は数学から教わった。離散は単に建築の平面的な配置に関わるだけではない。素材もディテールも、建築のすべての領域に適用できる概念であった。そして、離散とは、点の別名に他ならない。

### 線

二〇世紀の建築史は、ヴォリュームと線との抗争の歴史であったと見ることもできる。二〇世紀初頭に建築の世界に革命をもたらした、モダニズム建築をリードした二人の巨人、ル・コルビュジエとミース・ファン・デル・ロエは、それぞれヴォリュームと線を表現し、この時代の建築デザインへの二つの極相を見せてくれた。人口と経済の爆発が要求する巨大なヴォリュームを、安価にスピーディーに獲得するためには、柱と梁、すなわち垂直の線と水平の線とを組み合わせた立体格子が、最も効率的な解決であった。石やレンガなどの小さな点を、ひとつずつ丁寧に積み上げて作る伝統的な工法——粗積造——に代わって、柱、梁という線的な要素を組み合わせた線の工法が、二〇世紀以降の近代社会のデファルトとなったのである。コンクリートで局面を作るシェル構造やドーム構造も、二〇世紀に開発されたが、体育館や教会のような閉じた形態を持つ特殊な建築であり、二〇世紀の一般的な建築は、線を組み合わせた立体格子に類した。その立体格子の時代の中で、ル・コルビュジエはあえて、コンクリートを用いたヴォリュームの表現を極めた。建築をヴォリュームとしてデザインすることで、この時代のリーダーたらんとしたのである。「建築とは光の下に集められた立体(ヴォリューム)の構築であり、正確で、壮麗な演出である。」「(『建築をめざして』)と彼は建築を定義し、ヴォリュームへの情熱を告白した。二〇世紀以前の西欧を支配した、古代ギリシア・ローマ以来の古典主義建築が、オーダーと呼ばれた柱=線の建築であったことへの反発が、ル・コルビュジエの線から遠ざけ、ヴォリュームへと向かわせた。二〇世紀が巨大ヴォリュームそのものを必要とするなら、そのヴォリュームをストレートにコンクリートで表現しようというのが、ル・コルビュジエの、深い戦略だったわけである。建築はヴォリュームであるとして定義した途端に、建築がよくいえば自由になり、悪くいえば暴力的になる。ル・コルビュジエは、ヴォリュームの特徴を熟知し、ヴォリュームを使い倒し、時に暴力的造形を厭わなかった。ル・コルビュジエのヴォリューム指向は、晩年にはさらに過激化し、最終的にはロンシャンの礼拝堂(一九五五年)(図11)やインドのチャンディガールの新都市建設(『方法序説』図10参照)のような、「ヴォリュームのアート」へと建築を昇華させた。今までの建築が到達したことのない自由を、ル・コルビュジエはヴォリュームの力を借りて、実現したのである。彼が住居宮(図2)を案内され、「線が多すぎる」とはきかすようにつぶやいたという先述のエピソードは、ヴォリューム派の彼が、圧倒的な線の建築を見せられた時の、当然の反応であった。一方、ドイツ表現主義建築を代表するブルーノ・タウト(一八八〇-一九三八)は、一九三三年の彼の誕生日、五月四日に住居宮を案内され、五月四日に住居宮を案内され、書き残し、実際に済滞の涙を流した。タウトは、ル・コルビュジエやミースのような評価を受けることがなく、時代を牽引するリーダーともならなかった。タウトは、二〇世紀のものに背を向けていたように感じられる。コンクリートのヴォリュームに背を向け、鉄骨の武骨な線に背を向け、頼りない柱に頼る繊細な住居宮の本の線に、心を奪われてしまったからである(図3)。それほどに、線が優つた人間であり、建築家であった。タウトが日本に残した唯一の住宅作品、白川邸(一九三六年)(図4)には、彼が好んだ繊細な線が溢れている。細い竹を無数に並べ壁を作り、同じ細い竹を編んで漁り火をモチーフとした不思議な照明器具をデザインした(図5)。アメリカ流の鉄骨の線、工業の線に憧れていた当時の日本人は、タウトの繊細で自由な線を全く理解せず、彼は失意のうちに日本を去った。もう一人の二〇世紀の巨人ミースは、ル・コルビュジエとは逆に、ヴォリュームを避けて、線を極めた。ミースはタウトのようなロマンチズムではなかった。彼は失意という二〇世紀的な素材を用いて、美しい線を描くことを極めた。金属の線であらゆる場所を反復し、二〇世紀という時代が持つ超高度ビルに巨大なヴォリュームを、隠蔽し、空に融かしていった。ミースは巨大なヴォリュームを、線によって処理する方法を発見したことで、二〇世紀のチャンピオンとなったのである。その美しい線を作るためには、アメリカの工業力が必要であった。ミースはその工業力を味方とするために、アメリカに移住したのではなくかえり、勤けられた。戦前のドイツでバウハウスの校長まで務めたミースは、ナチスが追いつた、一九三八年、アメリカに移った。第二次世界大戦後、ドイツに帰る資格があったにもかかわらず、ミースはそのままアメリカに残った。当時のアメリカは、線で覆われた巨大ヴォリュームを最も必要とし、その工業力が、ミースの美しい線を実現してくれたから、彼はアメリカに残ったのである。その意味でいえば、ミースにとって、二〇世紀とは決定的にアメリカの時代であり、ミースはそれを否定せず、それに乗じた。一方、ル・コルビュジエはアメリカに選ばれることをせず、ヨーロッパという場所にとどまり、アメリカのなるものも否定し続けた。ル・コルビュジエは超高度ビルに関心がなかったわけではない。二〇〇万人の現代都市(一九二二年)(図6)、ヴァザン計画(一九二五年)(図7)、環く都市(一九三五年)をはじめとし、超高度ビルを乱暴ともいえる都市改造プロジェクトを繰り返して発表した。ル・コルビュジエは真剣に超高度を設計したいと望み、当時のフランスの知識人は、パリを壊してまで超高度を建てようとしたル・コルビュジエを冷めた。フランス人から見れば、パリを超高度で破壊しようとするル・コルビュジエは、スイスの片田舎からやってきた、アメリカかぶれの変人に見えるものではない。しかし、一方でル・コルビュジエは「ニューヨークの摩天楼は小さすぎ、そして多すぎる」と批判した(『監査が白かったとき』)。巨大ヴォリュームは大いに結構であるが、工場で作った金属の単調な線がヴォリュームを隠蔽するような、アメリカの線、ミース流のごまかしを、ル・コルビュジエは嫌悪と見做したのである。ル・コルビュジエはフランスで超高度を実現することもなかったし、またアメリカにも受け入れられなかったが、その代わりに、彼はフランスともアメリカとも全く異なり、全く対照的な場所、インドへ向かった。一九五一年からインドの新都市チャンディガールの計画に携わり、高幹をともせず、計二三回、灼熱の現場を訪れた。インドという場所は、線を用いてヴォリュームを低化するアメリカ的なコスプレ、隠蔽は、全く無効であった。当時のインドにはまったく線を作る技術など存在しなかった。コンクリートで作った荒々しいヴォリュームを、赤い大地の上に投げ出すしかない。その赤い大地の上で、二〇世紀のアメリカとは対極的な方法を、ル・コルビュジエは発見したのである。インドとの格闘は、ル・コルビュジエ自身にとって大きな出来事であったわけではなく、その後の世界の建築デザインに決定的な影響を与えた。ブルー・タリス(野生主義)と呼ばれる、荒々しいコンクリートの表現は、チャンディガールがきっかけとなつた。ブルー・タリスは日本の戦後の建築にも大きな影響を与え、木目きつい杉板型枠で打設した荒々しいコンクリートは、戦後の一時期、日本の公共建築の制限になった。幾何学に支配された美しい白い箱=サヴォア邸に代表される前半期のル・コルビュジエ以上に、後半生の野蠻なル・コルビュジエは、二〇世紀に大きな影響を与えたと、僕は考える。なぜならば、どんな荒々しい大地にも建築を建たせられることを、ル・コルビュジエはチャンディガールで示したからである。インドの赤土の上にも現代建築が成立しうることを示して、ル・コルビュジエは、どんな大地の上にも、現代の人間が、力強く生き生きと生活できることを示した。それは世界のすべての場所に希望を与える、希望の建築であった。前半生のル・コルビュジエがリードしたモダニズム建築は、世界を画一化しようとする工業化社会の、インターナショナル建築であった。一方、後半生の彼の建築は、世界の多様化の途を示し、世界のすべての場所に希望を与えた。インターナショナルではなくワールド・アーキテクチャであった。僕はル・コルビュジエのコンクリート建築をたびたび批判してきたが、チャンディガール以降のル・コルビュジエからは、様々な形で影響を受けた。チャンディガールには、二〇世紀を超える何物かが、存在していた。

### 丹下健三のずれた線

チャンディガールのル・コルビュジエとは全く別のやり方で、多様性の途、大地とつながる途を探ったのが、日本の丹下健三(一九一三-二〇〇五)であった。彼は、ル・コルビュジエともミースとも別の方法を用いて、アメリカ流、工業化社会流の線の建築を、超えようとした。丹下はそのヒントを、日本の伝統建築から得た。香川県庁舎(一九五八年)(図8)では、コンクリート製の柱と梁を、接点をずらしながら組み合わせた。すなわち二つの線を、一点で交わらずに、ずらして接合したのである。日本の伝統木造建築では、しばしば線と線を、ずらして組み上げる(図9)。いわば、材木という線の上に、もう一本の材木をそっと載せる。ずらすことによって、材木に欠け込みを入れる必要がなくなり、その結果、断面の欠けが起らないので、一本一本の材木すなわち線の強度を保つことも可能となる。しかも接点はずらしている、力はスムーズに伝達されることを、日本の大工は経験的に理解していた。日本の木造はずらした木造であったといつてもいい。線と線が一点で交差する。西欧流のカルテジアン・グリッド(デカルト流の直交グリッド)(図10)とは別のやり方で、線が編まれていたのである。西欧の近代の数学と工学のベースになっていたのは、さきまじめなカルテジアン・グリッドである。しかし、接点をずらすことで線はより軽やかに自由になり、空間に動きが生まれることも、日本の大工は知っていた。そしてそれによって、線材と線材が分節され、線が固くならず、線のままにとどまり、軽やかさ、透明感が生まれてくることも、大工は熟知していたのである。カルテジアン・グリッドが図式的で、幼稚な幾何学に依拠していたのに対し、日本のずらしの木造は、経験主義的であり、しなやかであった。丹下もまた、線のずれた効果を知っていた。日本の伝統木造建築の、接点のずれたディテールを、丹下はコンクリートに翻訳した。コンクリートを用いても、コンクリートのヴォリュームの中に埋没しない、自立した軽やかな線を描けることを、丹下は香川県庁舎で証明した。さらに続けて、東京オリンピック(一九六四年)のためにデザインされた国立代々木競技場では、巨大なコンクリートの垂直の線が、大地から天に向かってまっすぐに立ち上げられ、その二本の巨大な柱から、スチール製のケーブルが吊られる。ケーブルの線はコンクリートの線とは比較にならないくらいに細く、しかも重力を受けて美しくカーブし、人々を圧倒した。丹下は一気に「世界のタンゲ」となった。コンクリートでは決して達成できない細く美しい線が、ミースが超高度に貼り付けたアメリカの工業力の直線とも異なる美しくしなやかな線が、丹下によってはじめて引かれた。吊り橋などの土木構造物でしか用いられなかった鉄製のやわらかいケーブルを、建築に使うことで、二〇世紀の建築の歴史の中に、生き物のような自由な線が出現したのである。代々木競技場では、二本の柱の間に梁を渡されたメイン・ケーブルから、さらに繊細な細いケーブルが分岐し、べたっとした面とつながりながら重層が、線の集合体として再生された。それは日本の屋根の歴史に、新しいページを開くものでもあった。丸瓦と平瓦を一体化した核瓦(図11)の発明以降、日本の屋根から美しい線が失われた。さらに、西欧からフラット・ルーフが輸入され、日本の景観の基本であった屋根の美は、消えていった。丹下はオリンピックというパレの舞台で、日本の屋根を取り戻し、屋根の線を取り戻すことに成功してあ



認し、許したのである。丹下は弥生であることに引け目を感じ、丹下自身が弥生を超えようとしていた。日本の鉄鋼産業の力を尽くして建設されたスペース・フレームの線、縄文がぶら下がったのである。高度成長の日本が、イキイクの太い線によってリードされていくことを、岡本の「太い」モニュメントは見事に象徴している。伝統論争は、線からヴァクリウムへと傾斜していく高度成長期の日本建築の予告編でもあった。その高度成長の「太い」日本の中で、細い線を追及していったのは、「和の大家」と呼ばれる建築家達だけであった。吉田五十八(一九四一―一九七四)、村野藤吾(一九〇一―一九八四)は、丹下、磯崎、黒川達とは別世界の、いわば伝統芸術の担い手のような存在と認識され、料亭、茶室、高級住宅を設計する特殊な建築家として、建築界の外側に置かれていたのである。高度成長期の日本は、そのような形で、日本の伝統建築の細い線を排除してきたのであった。「和の大家」の追求した細い線は、今日から見ても、驚くほどに繊細である。そして単に繊細であるだけでなく、彼らは現代の素材を用いて、さらなる細い線を追究していった。……丹下、磯崎、黒川に代表されるモダニズムの建築家達の関心が、ヴァクリウムに美しいシルエットを与えるだけに止まらなかった一方で、吉田や村野は、現代の素材を使って、繊細な点・線・面を作ることに挑戦し続けていた(図27)。その意味で彼らこそがモダニストであった。特に磯崎、黒川が西欧古典主義にならってハコへと回帰した後は、吉田や村野の方が前衛であると僕は感じた。しかし、彼らの知恵と達成、建築界は無視したのである。

#### 移動する日本の木造の線

日本の伝統木造の線は、単に細いだけではなく、自由に移動できるものでもあった。これは驚くほどに未来的な手法でもあった。まず生活の変化に応じて、襖、障子などの線で構成された道具を、自由に動かすことができた。このシステムは、二〇世紀のオフィス空間を支配した可動間仕切りシステムの、先取りでもあったし、それ以上には驚かすほどに軽量で洗練されたものでもあった。さらに驚くべきことには、建物を支える主要構造である柱さえ、その完成後に、自由に動かすことができたのである。その秘密は日本建築の屋根裏にあった。天井と屋根との間に和小屋と呼ばれる、木のジャングル・ジムのような骨組みを挿入することによって、屋根全体にしっかりとした剛性を与え、屋根がしっかりと固められた(図28)ので、それを支える細い柱は、完成後に自由に移動することができた。この驚くべきフレキシブルなシステムが、一四世紀の日本で完成したのである。移動できる柱は、世界に例がない。西欧における建築の近代化は、壁を消滅し、柱と梁のフレームによって大空間を確保することであった。それがモダニズム建築が追求したフレキシビリティであり、生活の自由であった。しかし、日本の木造建築は、そのほかに先をいっていたのである。間取りを変える時に、柱の位置まで動かしてしまうのである。ニュートン力学の大ざっぱな空間と太い柱の代わり、日本の柱、梁は一〇センチ角前後の細さであり、しかも固定された空間の代わりに、変化できる柔軟な空間を獲得していた。太く動かない線(フレーム)の代わりに、細く繊細な動き回る線を、日本人はすでに一四世紀に手に入れたのである。二〇世紀モダニズムの硬直した大空間を超えようとした時、日本の伝統木造のシステムは大きなヒントを与えてくれた。……

#### 芯おさえと面おさえ

さらに、日本の伝統木造において興味深いのは、柱や梁といった線を、その線の中心線、すなわち芯で捉える方法――芯おさえ――とその線の輪郭で捉える方法――面おさえ――を同居させ、見事に使い分けていたことである(図31)。そもそも古来、日本の大工は、芯おさえで図面を描き、芯おさえの考えで建築を施工していた。匠家では、丸太をそのまま使ったり、まがった材木をそのまま梁に使うことが多かった(図32)、芯おさえでないと、それらの「生きた線」を使うことができなかったからである。日本の伝統木造は「生きた線」から使った。縄文の堅穴式住居以来の「生きた線」である。しかし、畳の出現によって状況が変わった。平安時代の神祇作りの住居においては、床は板敷が基本で、畳は家具のように、あるいは座布団のように板の上に置かれていた(図33)。さらに室町時代、床に畳が敷きつめられるというスタイルが生まれた。限定された狭い空間を快適に有効に使うとすれば、畳を敷きつめた方が効率的だったのである。畳をびっちり敷きつめると、柱の芯ではなく輪郭、すなわち柱の面が、柱の芯よりも重要になってくる。柱の面と面によって規定され、限定される平面の中に、畳を隙間なく敷きつめなければならないからである。この生活様式の変化によって、芯おさえの建築から、面おさえの建築へとという転換が起こった。人々が高密度に集う都市からこの変化は始まった。限られた空間に効率的に畳を敷きつめるには、芯おさえよりは、面おさえの方が、現実的で経済的だったのである。京間と呼ばれる畳の敷き方は、畳の寸法を三尺一寸五分×六尺三寸という基準寸法で固定し、それにあわせて、柱の芯位置を決定していた。すなわち面おさえの原理に基づく建築の全体が決定されている。この方法に基づけば、引越しの時も同じ畳を持っていくことができる。一方、江戸間と呼ばれる手法は、柱の芯の間を、約三尺、六尺、九尺という基準寸法で決定し、それによって作られた平面計画を、だままだま畳で埋めていく。当然畳はイレギュラーな寸法になってしまうので、引越しの時、畳を持ち運ぶことはできない。京都の方法は都市的であり、近代的であった。一方、江戸の方法は田園的であり、民衆的であった。日本では、この二つの方法は共存し、巧みに使い分けられていた。線にも太さがあり、壁にも厚みがあるという現実を、日本では芯おさえと面おさえという二つの方法の共存によって、適宜、解決していたのである。そして江戸においても、京都においても、日本の大工は建築の部位に応じて、芯おさえと面おさえを使い分けしている。現代の日本の大工も、二つの方法を使い分けることで、複雑な現実に対して柔軟に対応しているのである。一方の西欧でも、線に太さがあり、壁に厚みがあるという現実を、建築家を悩ませ続けた。この問題を中世の建築家(工匠)達は、連続するアーチを、二本の対面に柱で支えるツイン・コラム(図34)や、細い柱が束ねられて太い柱となったように見える、ゴシック教会の束ね柱(図35)で解決していた。複数の柱を束ねて用いれば、柱が反復するグリッド・システムと厚い壁を支えるアーチ・システムとを共存させることができたのである。柱に太さがあり、壁に厚みがあるという現実を、中世の建築家は線と面を併用することで解決したのである。しかし、ルネサンスという時代を拓いた先述のブルネスキは、この解決を嫌った。すなわち人間の脳が構想する抽象的な幾何学と、物質によって構成されている現実との間に宿命的に存在するギャップに対し、ブルネスキは極めて敏感な建築家だったともいえる。彼はそのズレを要素の断片化という今日から見ても前衛的な方法で解決した(図36)。アーチや柱などの要素は時として、コラージュ絵画のように断片化をされて、空間を漂うのである。この方法は、様式に対する無知からくるものだと当時から批判されたが、彼は図式的、概念的にしか思考できない人間が、物質で構成された複雑きまりない世界を生きて時の宿命的な困難、その悲劇、喜劇をはじめと願って願った。ブルネスキ本人は、この困難を断片化によって解決し、一方、日本の大工は、このギャップを、芯おさえと面おさえの共存によって解決し、中世の工匠はツイン・コラムや束ね柱によって解決した。僕が最も惹かれていたのは、線を無数に並べるゴシックの束ね柱である。

#### 広重の夕立の細い線

日本の伝統木造が長い時間をかけて磨いてきた細く、移動する線を、再び取り戻すことはできるだろうか。あるいはアフリカの熱帯雨林の軍のカゴのような細い線を、現代の建築に導入することはできるだろうか。細い線が復活した時どのような建築が生まれ、どのような都市が生まれ、人間と線とはどのような関係を取り結ぶことになるのだろうか。僕がこの課題を考案して、最初に線に取り組んだのは、那珂川町馬頭広重美術館(二〇〇〇年)(図37)や、細い柱が束ねられて太い柱となったように見える、ゴシック教会の束ね柱(図35)で解決していた。複数の柱を束ねて用いれば、柱が反復するグリッド・システムと厚い壁を支えるアーチ・システムとを共存させることができたのである。柱に太さがあり、壁に厚みがあるという現実を、中世の建築家は線と面を併用することで解決したのである。しかし、ルネサンスという時代を拓いた先述のブルネスキは、この解決を嫌った。すなわち人間の脳が構想する抽象的な幾何学と、物質によって構成されている現実との間に宿命的に存在するギャップに対し、ブルネスキは極めて敏感な建築家だったともいえる。彼はそのズレを要素の断片化という今日から見ても前衛的な方法で解決した(図36)。アーチや柱などの要素は時として、コラージュ絵画のように断片化をされて、空間を漂うのである。この方法は、様式に対する無知からくるものだと当時から批判されたが、彼は図式的、概念的にしか思考できない人間が、物質で構成された複雑きまりない世界を生きて時の宿命的な困難、その悲劇、喜劇をはじめと願って願った。ブルネスキ本人は、この困難を断片化によって解決し、一方、日本の大工は、このギャップを、芯おさえと面おさえの共存によって解決し、中世の工匠はツイン・コラムや束ね柱によって解決した。僕が最も惹かれていたのは、線を無数に並べるゴシックの束ね柱である。

広重の夕立の細い線

日本の伝統木造が長い時間をかけて磨いてきた細く、移動する線を、再び取り戻すことはできるだろうか。あるいはアフリカの熱帯雨林の軍のカゴのような細い線を、現代の建築に導入することはできるだろうか。細い線が復活した時どのような建築が生まれ、どのような都市が生まれ、人間と線とはどのような関係を取り結ぶことになるのだろうか。僕がこの課題を考案して、最初に線に取り組んだのは、那珂川町馬頭広重美術館(二〇〇〇年)(図37)や、細い柱が束ねられて太い柱となったように見える、ゴシック教会の束ね柱(図35)で解決していた。複数の柱を束ねて用いれば、柱が反復するグリッド・システムと厚い壁を支えるアーチ・システムとを共存させることができたのである。柱に太さがあり、壁に厚みがあるという現実を、中世の建築家は線と面を併用することで解決したのである。しかし、ルネサンスという時代を拓いた先述のブルネスキは、この解決を嫌った。すなわち人間の脳が構想する抽象的な幾何学と、物質によって構成されている現実との間に宿命的に存在するギャップに対し、ブルネスキは極めて敏感な建築家だったともいえる。彼はそのズレを要素の断片化という今日から見ても前衛的な方法で解決した(図36)。アーチや柱などの要素は時として、コラージュ絵画のように断片化をされて、空間を漂うのである。この方法は、様式に対する無知からくるものだと当時から批判されたが、彼は図式的、概念的にしか思考できない人間が、物質で構成された複雑きまりない世界を生きて時の宿命的な困難、その悲劇、喜劇をはじめと願って願った。ブルネスキ本人は、この困難を断片化によって解決し、一方、日本の大工は、このギャップを、芯おさえと面おさえの共存によって解決し、中世の工匠はツイン・コラムや束ね柱によって解決した。僕が最も惹かれていたのは、線を無数に並べるゴシックの束ね柱である。

#### 夕立の建築

広重作品を収蔵展示する広重美術館は、「夕立」のような建築としてデザインしなければならなかった。「夕立」の両は、どのようにしたら建築化できるだろうか。まず、敷地の裏に広がる八溝山系から刈り出された八溝杉という美しい杉を、建築の材料と決めた。建築の近くにある木材を再上の材とするのは、日本の大工の伝統的方法である。裏山の土と気候とから生まれた線と、山裾に立つ建築を構成する線は、同一の温度、湿度、日照条件に置かれる。山で採れた木を使えば、ネジレ、ソリなどの狂いが生じにくい。裏山と建築の間に同時に存在する二つの線が、同じ温度と湿度を持つ空気の中で、共振するのである。線とは抽象的な存在である。線とは生きている。生きている線は、生きている線である。その線の共振に耳を澄ませているうちに、裏山の木が自ら建築、そして室内へというグラデーションを、目に浮かんできた。自然から人工物、さらに身体へという、ゆるやかなグラデーションを作れないだろうか。広重の「夕立」の中で、雨、横、川、対岸の森へと向かってレイヤーが重なるように、裏山の杉林から、このちっけな身体へと至るグラデーションを、レイヤーの重なりによって作れないだろうか。そもそも日本の建築は、グラデーションとしてデザインされてきた。線で構成された、一連の透明な道具(ガラス、障子、襖、障子)がレイヤーを構成し、自然と身体との間をゆるやかに調停していく。さらに自身の体のまわりにも、衣服というレイヤーの集合体が介在し、やわらかな身体が丁寧に守られる。十二単は、レイヤーの究極の姿であった。奥へ奥へと引き込むようなグラデーションが、人々を時に外へ、時に内へと引き込み、人々の生活をやさしく包み込み、保護するのである。日本において建築は、厳重な壁からほど遠い、ゆるやかなレイヤーの連続であった。まず裏山の最も近く、自然の最も近くに、杉を縦で製材した線と並べた(図42)。……広重は線の質というものに対して、異常なほどに神経質であった。割り師によって製造される木版面という芸術が、そもそも線の質に全面的に依存していたからである。木版面においては割り師というもうひとりの作者が存在した。割り師が線とどう表現・定義するかで、割り師が驚くほどに異なる表情を見せる。木という素材のやわらかさを最大限に用いて、重くと割り師は、線というものに対して、驚くほどに多様な表情を与え続けたのである。カンデンスキーが版画から多くを学んだように、版面は点・線・面の扱いに対して、多くのヒントを与えてくれた。版面を作る作業には多くの他者が介在し、トラウマ的にいえば、多くのアクターが参加するからである。割り師もアクターであり、木版の木の原料もアクターであった。アクター達の様々な協力、拒否を通じて、作者は形態や色彩の背後にある点・線・面の秘密に触れるのである。同じく広重による東海道五十三次の中の内膳料(図43)も、線と面との間に宿命的に存在するギャップを、線と面との共存によって解決し、中世の工匠はツイン・コラムや束ね柱によって解決した。僕が最も惹かれていたのは、線を無数に並べるゴシックの束ね柱である。



せると、この軽やかでやわらかい平和な秩序が、破壊されてしまう。カーボン・ファイバーのような軽くて強い素材を使えば、木造建築はその軽さを保ったままで、地震に耐える強さを獲得することができる。富岡倉庫では、構造エンジニアの江原憲彦さんと一緒に、最も効率的な木造の補強を考えた。江原さんはカーボン・ファイバーと木が相性のいいことを知って、すでに京都の清水寺や長野の善光寺で、カーボン・ファイバーを用いた文化財の補強を行っている。国宝や重要文化財の補強の場合、補強材を見せないことが重要である。屋根裏などの見えないところにカーボン・ファイバーは用いられる。しかし、富岡倉庫では、あえてカーボン・ファイバーの線を見せるとした。白いカーボン・ファイバーの線が、アヤトリのようにして、空中を走る(図65)。鉄やステンレスのワイヤーではアヤトリはできない。なぜなら、アヤトリの糸が折れる部分から、鉄やステンレスは確認してしまからである。接点に別の金物を挿入しないと、線と線がつながらず、線の構造が破壊する。カーボン・ファイバーは、まさに糸そのものであるから、接点が弱点とならずにアヤトリができる。アヤトリの自由としなやかさを、そのまま実際の建築の中で実現することができる。接点に別のジョイントを入れなければならない「鉄の線」は、接点に拘束された不自由な線で、自由な線とはいえない。逆に自由にながらって行くアヤトリの線は、インゴルドが「ラインズ」の中でその価値を発見した。痕跡として、線ではなく、しなやかに空中を走り、舞う線である。生きながら、しかも新しい幾何学を追求するのがアヤトリという線である。建築が金属を卒業し、生きた糸で建築を作れる日を夢みて、僕は富岡倉庫でアヤトリをした。絹の街裏で、線の新しい歴史を聞こうと試みた。

面

二〇世紀の爆発する人口と経済を収容する上で、剛性と粘性と気密性にすぐれた、コンクリートという素材が選ばれた。しかし、ヴォリュームを解体して、風通しのよい、軽やかな空間を作ろうという試みも、併行して起動していた。オランダの若き建築家達が結成した「デ・ステイラー-スタイルー」という名のグループは、薄い面を用いて、ヴォリュームの解体を試みた。デ・ステイラーの中心人物、建築家のヘリット・リートフェルト(一八八八-一九六四)は、シュレーダー邸(一九二四年)(図1)で、ヴォリュームの徹底的な解体を行い、建築界に大きな衝撃を与えた。そもそも家具職人の子として生まれ、自らも家具職人としてスタートしたリートフェルト(図2-図3)だからこそ、面の建築をやすやすと実現できたといえる。建築はヴォリュームとして閉じる必要があったが、家具はそもそも、その必要はないからである。冬の気候の厳しい西欧では、建築は閉じることが大前提だった。一方、「家の作りやうは、夏をむねとすべし」(『徒然草』第五十五段)の日本では、閉じることが建築の要件ではなかった。リートフェルトはその保守的な西欧において、家具の世界から、薄い面による構成という方法を教わった。面と面、面と線を組み合わせれば、閉じていなくても家具になる。面と線を使って、身体や物を支えることができれば、家具として成立する。建築と身体との間にも、そんな自由でゆるい関係があってもいいと、リートフェルトは考えて、シュレーダー邸という「大きな家具」に到達したのである。リートフェルトの構成主義的な椅子より、僕がさらにおもしろいと思うのは、リートフェルトと同時代のオランダの建築家、ミケル・デ・クレルク(一八八四-一九九二)が農家の生活にヒントを得てデザインした、裏紐を用いた木製の椅子である(図4)。やわらかな線とできた肘掛けは、体にしっくりなじむ。クレルクやその弟子のピエト・クラメル(一八八八-一九六六)は、オランダの茅葺の農家の素朴さと、近代の生活とを接合しようとした(図5)。日本のモダニズム・デザインのパイオニアであり、分離派を立ち上げた堀口捨己(すてみ)(一八九五-一九八四)も、クレルク達のデザインに多大な影響を受けている。堀口は一九二〇年に東京大学の建築学科の同級生と共に、日本で最初の近代建築運動を立ち上げた。茅葺と近代のな箱とを組み合わせた築畑荘(一九二六年)(図6)を発表し、若き天才の登場とともに、戦前の日本の建築界に衝撃を与えた。クレルクも堀口も、工業化という、時代の大きな流れに対する批判として、モダニズムを捉えていた。オランダでも、日本でも、茅葺は当時の農家で一般的であった。茅葺の自然さ、素朴さを取り戻すことが二〇世紀という時代、そしてモダニズムのテーマでもあり、かれらは考えていたのである。しかし、その後のモダニズム建築は、工業化を全面的に肯定し、コンクリートと鉄による大量生産の建築へと一気に傾斜していった。第二次世界大戦後から高度成長期にかけて、二人の提案したしなやかな面や線は、すっかり忘れ去られてしまった。丹下健三らの次世代は、堀口を、時代遅れのヒューマニストとして否定していった。堀口は挫折の中で、奈良の慈光院にこもって、茶室の研究に没頭し、研究者として大きな業績を残したが、建築家としては専作であった。クレルクが農具にインスピレーションをひいて、椅子の肘掛けに使われているロープは、美しいとは無関係に、一見、だらっと垂れているように見えるが、そこにひとつひとつの線を縫い、ロープという生きた線と、身体という生きた物体とが、生き生きとした会話を始めるのである。リートフェルトの硬い面からは得られなかった物と身体との会話が、クレルクの家具からは聞こえてくるのである。

ミス対リートフェルト

シュレーダー邸は、二〇世紀初期のモダニズム建築群の中では、圧倒的に軽やかである。初期モダニズムの傑作を挙げろといわれれば、通常はル・コルビュジエのサヴォア邸(一九三一年、「方法序説」図7参照)とミス・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パヴィリオン(一九二九年、「点」図7参照)の名が挙がる。しかし、点・線・面という視点で建築を見直した時、シュレーダー邸の軽やかさは、他の二つと異なる。サヴォア邸は、線と面の建築というよりは、浮かしたヴォリュームであった。二〇世紀のスタンダードであるヴォリューム建築を、単に浮かしただけと捉えることもできる。浮かしただけで特別なものだと錯覚させたことに、ル・コルビュジエの天才があったという言い方もできる。しかし、浮かしたことで、かえって空間としては黄いものになった。ル・コルビュジエがモダニズム建築の重要な手法として提唱した空中庭園は、大地との関係は薄く、周囲の森とは切断され、黄弱で殺風景である。ル・コルビュジエがサヴォア邸のクライアットの気持ちはよくわかる。にもかかわらず、「ヴォリュームの世紀」であった二〇世紀には、この線々とした住宅が、大傑作とたたえられたのである。バルセロナ・パヴィリオンへの柱のディテールを見れば、ミスがヴォリュームの解体に、興味という以上の執念を持っていたことは、間違いない。普通の人には柱は線であるに見える。しかしミスには、柱も鈍重なヴォリュームに見えていた。重さを支え、地震に耐えなければならないのだから、当然柱も太さが必要となる。ミスはそれが許せなかった。鉄骨の柱を、角パイプではなく、わざわざエッジの立った十字型断面とすることで(図7)、柱のヴォリューム感も薄れ、エッジのシャープな線が眼を刺さる。ヴォリュームとつながりかねない鉄の柱を、ミスは細い線とすることで成功した。バルセロナ・パヴィリオンへの壁もかなり薄い。まず石の下地となるレンガを、普通とは逆の向きで積むことで、トータルで一七センチの厚みの、石とは思えないような薄い壁を作った(図8)。通常、レンガやコンクリートの壁の両側に石を貼り付けると、三〇センチ程度のぼてぼてとした壁厚になってしまう。ミスは石壁はその標準寸法の半分ほどの薄さである。二〇世紀における面の建築として、突出して薄い、石工の子として生まれ、石の使い方を熟知したミスだからこそ、石の壁を常識的な取まりでは考えられないほどに薄くすることに成功し、薄い壁が張り詰めるような緊張感を空間に与えたのである。しかし、いかにミスでも、シュレーダー邸の家具を思わせるような薄さにはかなわなかった。石工が、家具職人の作り出す薄さにはかなわなかったともいえる。しかし、そのシュレーダー邸の薄ささえも、僕にとっては厚すぎ、硬すぎるように感じられた。そして、面や線の組み合わせ方(構成)を工夫して、全体を軽やかに見せようとする。シュレーダー邸の構成主義的な形態操作も(本巻図1参照)、その主知主義的の人間中心のなげざらさが鼻についた。構成主義とは、二〇世紀のヴォリューム主義を破壊するための、苦し紛れの発明ともいえる。点・線・面が自由に軽やかに組み合わせたり、あたかも踊っているようにふるまうが、構成が自由であればあるほど、作家という絶対者の恣意的な身振りが際立ち、主知主義的ないやしさが鼻につく。構成するエレメントの重さや厚みを、構成主義がかえって強調してしまふ。カンディンスキーの「点・線・面」中の、構成主義的な方法を詳述した部分が、愚問でいやらしく感じられたように。

サハラで出会ったペドウィンの布

ティム・インゴルドが「ラインズ」の中で指摘したように、線には、軌跡としての線(trace)と、糸としての線(thread)の二種類がある。クレルクの椅子の肘掛けに用いられた裏のロープは、生きた線であり、インゴルドの言う糸である。同じように、面にも二つの種類があると僕は感じる。ひとつは軌跡としての面、すなわち、何かの痕跡を記述した死んだ面、もうひとつは、空間の中を自由に舞う、生きた面である。リートフェルトの面は、薄くはあっても、死んでいるように、僕には感じられた。一方、僕の捜している生きた面は、量子力学の超弦理論の比喩を用いるならば、弦のような自由な面であり、サハラと波の二重性の間を揺動し、続ける面である。しなやかな面を作り出したに、単に面を薄くするだけでは不十分である。何らかの力、作用を受けて、踊り出すようなしなやかさを持った面を建築に導入することができれば、面を道具に用いて、重いヴォリュームの解体ができるかもしれない。そんな風に考えていた時、大学院時代、サハラ砂漠での調査旅行で出会った、ペドウィンのテントの記憶が突然よみがえった。木の枝でできた細い支柱を砂に突き刺し、その上に布を架け渡しただけの簡単なテントである。遊牧の民ペドウィンは、枝と布をラグドに架けて、サハラを旅していた。テントの薄い頂が、サハラの厳しい気候に耐え、遊牧生活を支えていた。原田司教授も、遊牧の民ペドウィンのような、プラスチックの細い支柱とナイロン製の布を組み合わせた日本製の小さなテントを軍に預んで、僕は、ペドウィンの布に倣ってサハラ砂漠を縦断したのである(図9)。日本製テントはコンパクトにたたむことができて、モビリティという点ではすぐれていたが、ペドウィンのテントに比べるとお茶をふるまわれた時に、その布の作る美しさ、快適さなどは、とてもかわらないと感じた。布が、ペドウィンの文化の中心を占めているように感じられた。布は砂の上に何重にも敷き詰められ、布の床が、彼らの身体と砂漠との関係性を定義した。冬の夜の砂漠は、かなり湿度が落ちるが、ペドウィンは身体と砂の間に布を重ねることで、身体をやわらかく支え、気温の変化に対応し、やわでちっぽけな身体との近傍に、筒のような領域を形成する。布が大地と彼らの身体との関係を定義し、枝によって支えられた薄い一枚の布が、彼らと砂漠との関係を定義するのである。布はペドウィンの日常のすべてに入り込んでいた。当時、世界的に流行のラジカセは、砂漠の民にとっても必需品のようだったが、そのラジカセを濡らさず掛けるためにデザインされた布のバッグはあまりに素敵で、ひとつ置つてもええなかと頼んだ。あの布のバッグに入れられた途端に、安っぽいラジカセが別のものに見えた。布というしなやかな面は、生活を転換し、世界を变身させる力があった。

ゼンバー対ロジェ

一九世紀の最も重要な建築理論家、ゴットフリート・ゼンバー(一八〇三-一八七九)は、布という面、すなわち織物に対し、そして編むという行為に対して、異常と思われるほどに高い関心を寄せ、独自の建築理論を打ち立てた。建築は骨組み(フレーム)からスタートしたとする考え方が、ルネサンス以降の西欧の建築家を支配していた。すなわち、柱を強固に結んだフレームを使って、建築を説明し、建築を作ろうとする理論である。フレーム主義の代表は、丸太の骨組みから建築は始まったとするロジェ神父の『建築試論』(一七五三年)である。先述の通り、ロジェの絵はいまだに、多くの建築の教科書で、建築の始まりを説明するのに使われている(「点」図3参照)。そして今日でも建築構造の主流はラーメン構造である(「点」図17参照)。工事現場に連れてられた、柱と梁のラーメン構造のフレームを見るたびに、ロジェのフレーム主義がいまだに建築の基本であり、人間が作る環境を支配していることを突き付けられているようで、暗い気持ちになる。日本の伝統木造構造は、柱と梁の組み合わせなので、ラーメン構造と思われがちだが、実はそうではない。すなわちラーメン構造ではない。ラーメン構造は梁と柱と梁の接点は、がっちり固められてはならず、一剛接合ではなく、一ボルトも釘も使わずに、材料同士を欠き込んで、組み合わせられているだけである。すなわちゼンバー流に言えば、柱と梁とが緩んただけである。そんなゆるいジョイントが、なぜ地震で生き残ったのだろうか。その秘密は、柱と梁の間を土壁、欄間、障子をはじめとする様々な軟弱な装置でつないでいることにある。日本の土壁は、相模造の石やレンガと違って、やわらかであり、柱や梁ともゆるく接合されて、地震がきたら簡単にひびが入ってしまうような、頼りないものであった。しかし、この頼りなさによって、地震力を吸収していた。このゆるく緩やかなシステムで、日本の木造建築は地震に耐えてきた。ガチガチに固めないほうが耐震性が高いという解答に、日本人は経験を重ねて辿り着いたのである。柱と柱の間に存在していたこのようなやわらかな装置が、最近注目され、柱間装置という特別な名前がつけられるようになった。ヨーロッパでも、ライン川の谷には大きな断層があり、地震が起こることが、この地域でも、木造の柱と梁の間を、土壁で埋めたりやわらかな構造システムが主流となっている。かの地の人々もまた、地震の経験を重ねたことによって、日本の木造と同じ知恵に到達したのである。近代の建築がフレーム主義、すなわち単純な図式主義に支配される前には、世界には多様な織物建築が存在し、人々は織るように、やわらかな建築を作ってきたのである。一方ゼンバーはロジェ流のフレーム主義を否定し、建築はフレームではなく、覆いであり織物であると定義した。フレームがなくて覆いも成立すると、ゼンバーは考えた。彼は脱フレーム主義のパイオニアだったのである。ゼンバーがそう考えたきっかけは、一九世紀最大の国際イベントであった万国博覧会が展示された、環境の集落であったと考えられている。クリスタル・パレスで開かれたロンドン万博(一八五一年)の展示デザインに携わったゼンバーは、実際の原始的な住居に触れて大きな衝撃を受けた。僕がペドウィンの布の住居に衝撃を受けたように、ゼンバーは西欧の外部に位置する、環境の集落に出会うことで、織物の重要性に気づき、織物主義を生み出した。ゼンバーの父親が織機関係のビジネスをしていたことも関係していたかもしれない。父親が扱っていた布は、辺境の布ほどには、自由でしなやかなものではなかっただろう。

／ フランクフルトの布の茶室 …… / フランク・ロイド・ライトの砂漠のテント ……  
／ 大樹町の布の家 …… / 災害から人を守るカサ・アンブレラ ……

( 32 / 84 )

ひとつのストーリーが描けたならば、あとは技術的にそれを解決するだけである。小さなユニットを組み合わせて、ドーム状の建築を作る実験は、アメリカの天才的建築家、デザイナーでもあり思想家でもあったバックミンスター・フラーが繰り返して行っていた。フラーは、四角いハコのような建築を壊そうとした先達で、建築から革まで幅広くデザインし、学生時代からの僕の憧れのヒーローでもあった。建築家という絶対的な存在が、特異な造形の建築をデザインするという、ヨーロッパ的でエリート主義的な建築家像をフラーは批判し続けた。アルベルティ以降の特異な建築家像を壊そうとした、草の根の建築、建築の民主化をめざして、一生闘い続けた。「宇宙船地球号」というのも彼の造語で、地球環境の危機をいち早く叫ぶ、その解決のためには、最小の物質を使って、最大限のウォリュームを獲得することができるドーム建築が最適であると主張した。得意の数字を駆使して、正二面体と正二〇面体から、ドーム構造に適していることを証明し(図21)、誰もが自分で作れる民主的建築というアイデアを実証するために、学生達と一緒に、ワークショップというやり方でたくさんのフリードームを建設した(図22)。……しかし、実際やってみると、フラーがいうほど、フリードームを作るのは簡単ではなかった。フレームを加えて正二面体や正二〇面体を作るのはとても難しい、ジョイント部分の防水も弱くて、フラーの予測ほど、フリードームは普及することはなかった。モントリオール万博(一九六七年)のアメリカ館(図23)などの、特殊な用途の建築物のための、特殊な建築技術という位置づけに終わってしまった。ドーム建築という課題を、ロジエ的なフレーム主義で解こうとしたことに、フリードームの限界があったと僕は感じる。フレームとは図式であった。そのロジエ流のフレーム主義は未知主義的な図式主義であり、複雑にからみあったこの世界を、フレームという乱暴な図式で簡略化して、無理やり計算に当てはめようとする。フレームに簡略化すると、頭の中で解けたように錯覚してしまうが、フレームと現実との間には大きなギャップがあり、現実を構成する様々な小さな物達がフレームの間からポロポロと砂のようにこぼれ落ちてしまうのである。しかし、フレームに頼らずに、小さな骨をそのままどんどんつぎ足しただけでドームができるなら、フラーがめざした究極の民主的建築に、一歩近づけるのではないか。……フラー自身が作ったフリードームの骨に比べて、普通の傘の骨は、はるかに華奢で細い。まさに骨(フレーム)がなくて、覆いだけの建築に見える。なぜそんな細い骨で、ドームを支えられるのだろうか。

テンセグリティで地球を救う

江尻さんは、骨と膜が助け合って一種のテンセグリティ構造を形成するから、普通の傘を支えるあの細い骨で直径五・三メートルのドームを支えることができると、自身満々であった。テンセグリティ構造もまた、バックミンスター・フラーが提唱した、効率性がきわめて高い天才的な構造システムである。……まさに彼は現代の地球環境の危機を予告していた。その有限な資源を長持ちさせるためには、物質の効率性を最大限に高めなければいけないと、フラーは考えた。ある物質(たとえば鉄)を構造材料として使う時、最も効率が低いのは、それを引っ張り材として使うことである。鉄でできた細いワイヤーを引っ張り材として使えば、重たい石を吊り上げることができるともできる。しかし圧縮材(例えば柱)や曲げ材(例えば梁)として鉄を使うと、効率ははるかに落ちてしまう。太くてごつい鉄の梁でないと、重たい石を支えることはできない。しかし、だからといって、ワイヤーだけだと、だらっとしたままで地面から立ち上がれず、建築にならない。そこで、引っ張り材(ワイヤー)と圧縮材(棒)とをうまく組み合わせれば、最も効率性の高い建築ができることを、フラーは発見して、その構造システムのことをテンセグリティ構造と呼んだ。テンション(引っ張り)を活用して到達する、インテグリティ(統合)システムなので、彼はそれをテンセグリティと命名したのである(図27)。この魔法の構造システムを上手に使えると、まるで無重力状態の中に置かれたようなものを実現する。……石のような点をつまみあげていくやり方だと、どうしても重たい建築になってしまうのだが、線を使い、しかも線の張力を使うという発想の転換だけで、このように軽やかな構造体ができるのである。テンセグリティが建築の歴史を塗り変えるような予感があった。しかし、なぜか、自分のフリードームには、このテンセグリティ構造を採用していない。フレームだけでドームを支えて、フレームとフレームの間を、膜やガラスで埋めこんでいる。フリードームの構造システムだった。膜やガラスは構造には役に立っていない。あの天才フラーといえども、フレーム主義からは逃れられなかったともいえる。フラーはあらゆる面で、二〇世紀を超えようと考え、挫折し続けた人であった。短期間で施工可能で超ロコストな(当時、六五〇〇ドルでできることを売り物にした)、プレハブ式のドーム型住宅、ダイマキシオン・ハウスを発売したが(一九四五年)(図29)、飾りのついた昔ながらの四角い家を好む二〇世紀のアメリカ人からは受け入れられず、たちまち倒産に追い込まれた。フラーは早く生まれすぎた人間であった。二〇世紀を超える夢をたくさん持っていたが、二〇世紀の技術の限界、人々の趣味の限界で、夢はつぶされた。フレーム主義をベースとするフリードームも、結局二〇世紀という時代には受け入れられなかった。僕は、フラーの思想を使って、フラーの実験を超えようとした。すなわち、フラー自身のテンセグリティを借りることで、フリードームのフレーム主義、ロジエ主義を超えようとした。僕らのテンセグリティドームのミノは、通常のテンセグリティが、木・線・膜を引っ張り材として使っているのに対し、膜・面を引っ張り材として使ったことである。糸を使ったテンセグリティは、細い糸がほとんど見えなくなるので、アクロバティックな透明感がある。僕は逆に、面を引っ張り材として使うことによって、内外を仕切る材料としての膜ではなく、構造材料としての膜、構造材料としての面の可能性を発見することができた。きわめて薄い面が、建築を支える構造体になり、素材の節約が可能となるのである。

細胞のテンセグリティ

テンセグリティという考え方は、生物学の世界でも注目されている。Donald Ingber(一九五六年)という細胞生物学者が、細胞はテンセグリティ構造をしているといっていたのである。一九七〇年代、イエール大学の学生であった彼は、細胞をペトリ皿に載せたとき、べたべたつぶれてしまうのに、それに酵素を入れて皿から離すと、丸くふくらむのを見て、理由を考えはじめた。その数日後に、彼は偶然、デザインの授業でフラーのテンセグリティ構造について教わった。勤のいいイングバーは、そのふくらんだ細胞こそ、テンセグリティに違いないとひらめくのである。細胞を、中にジェルが入ったただの風船だと考えると、このふくらむ現象が説明できない。しかし、細胞の中に、細胞骨格という名の、タンパク繊維群が作る三次元の網目構造が隠れていたのだから、この網目の引っ張り(テンション)を利用して、細胞は形を保っていた。それぞれの細胞は、黒点接着現と呼ばれる点を介して、細胞を互いに繋ぎ合っているのだから、細胞の外部の力学的環境がリアルタイムで、タンパク繊維のネットワークを介して、細胞の隅々に伝わる仕組みだったのである。この仕組みは、僕らがフランクフルトに建てた茶室の二枚の細胞と、その間をつなぐ糸(線)の関係に似ている(図30)。細胞は孤立した点ではなく、面の引っ張り力、面の中に潜んでいた糸の引っ張り力を媒介して、相互につながりあっている。重さのある世界中で形を支え、重力と折り合いをつけているのである。フラーが未来の構造システムとして提唱したテンセグリティは、そもそも、生物の基本原理でもあったのである。再びイングバーとロジエの嘴えを用いれば、生物は骨(フレーム)を構造とすると考えていたロジエ主義的生物観に代わって、点・線・面がネットワーク的に統合したものが生物の体を支えているという、ゼンパー主義的生物観へと、生物学も向かっている。フラーは、建築の未来を予言していただけではなく、生物学においても、予言的役割を果たした。イングバーを媒介にして、フラーのテンセグリティが、生物学の世界にもつなぐ転換をもたらしたのである。……この特別な傘を玄關の傘立てに置いておけば、どんな災害が起きても、それを待つと逃げればなんとか助かるかと考えると、ちょっと安心できる。やさしい傘の骨が、仲間を守ってくれるに違いない。しなやかな布の力が、そんな安心感を与えてくれる。傘の家にはフリードームという存在がないので、衣服にくるまれたような安心感がある。白い膜で覆われた空間は、白くやわらかな光で満たされて、癒されるようなやが、フリー空間になった。ゼンパーとフラーとサハラ砂漠の知恵が一緒になって、ミラノで花が開いた。

八〇〇年後の方丈庵

鴨長明(一一五五頃―一二一六)が「方丈記」を書いたから八〇〇年がたったことを記念して、「現代の方丈庵」をデザインしてくれないかという依頼が、突如舞い込んだ。敷地は鴨長明が実際に暮らしていたという京都、下鴨神社の境内である。長明は下鴨神社の禰宜、鴨長継の次男であった。小さく貧しい家こそが素晴らしいという、「方丈記」の思想には、昔から興味があった。戦乱、天災地災、飢饉が相次いだ鎌倉時代と、挫折につく挫折でたゞの彼自身の人生が、長明の思想、長明の建築観を生んだ。災害が重なるひどい時代が、傘の家を生むきっかけとなったように、ひどい時代、ひどい環境から、新しい建築が生まれる。「巾(河)の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中にある人と栖(すみ)か、又かくのごとし。たましきの都のうちに、旗を並べ、壘を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々終て尽きせぬ物なれど、是をまことと尊ぬれば、昔しあり家は生まれ、或は去年(こ)に焼けて今年作れり。或は大家富びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二十人中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならむ。たゞ水の泡にぞ似たりける」(『方丈記』)。僕が一番興味を持ったのは、長明自身が、実際に移動可能な、一種のモバイルハウスに住んでいたという伝説である。彼は方丈(三メートル角)の小さい家を理想としただけではなく、彼の小さな家は、台車に乗せて、運搬可能だったという。単に小さいだけではなく、運搬可能な、安価なモバイルハウスを作ったこそ、長明の思想にふさわしいことにならないか。八〇〇年後の方丈庵を作るプロジェクトは、そのようにスタートした。長明の過激なモバイルハウスの壁は、壁であったという説がヒントをくれた。木のフレームに分解して台車に乗せられるが、さすがに土製の方は、運搬できない。壁なら、ぐるぐる丸めて、簡単に台車に乗せることもできるし、軽いので、手に抱えて運ぶこともできる。彼は木のフレームと壁を組み合わせて作った家に住んでいたからこそ、きっと簡単に運搬できたのではないかと考えている。従来、丸めて運搬できたのと同じように組み合わせて、モバイルハウスを作っていたに違いない。現代版の壁の家は作れないだろうか。壁の代わりに採り当てた材料は、ETFE(エチレン・フッ化エチレン共重合体)という名の新しいタイプの膜材だった。もともとは温室の素材だったという出目がおもしろかった。ETFEは、温室のような、安価で手軽な建築を作るための、安っぽい素材だと思われていたが、軽くて、強く、透明で、耐候性にもすぐれているので、近年、駅や空港、スタジアムなどの大型建築の屋根に使われるようになっていった。ETFEは、ガラスの透明性を持ち、しなやかな膜であった。残された課題は、どのような構造体で、この膜を支えるかである。木でフレームを組んで、それをETFEで覆うのなら簡単だが、それだと、長明の時代とあまり変わらない。木のフレームも、結構なごつさになってしまうので、ロジエ流のフレーム主義から脱したとはいえない。八〇〇年たったのだから、現代の方丈庵にふさわしい、フリードームの新しい構造システムを用いて、ゼンパー流の雑物のような小屋を作る実験が始まった。その時ひらめいたのが、海に住むナマコの身体を支える構造システムである(図33)。ナマコはご存じのようにグニャグニャの生き物であるが、「グニャグニャなのに骨のあるヤツ」と呼ばれることもある。なぜならば、ナマコは脊椎動物のような骨格を持たない代わりに、皮膚の中に、縦横断で見えないような、無数の骨片を隠し持っているからである。皮膚の張力と骨片の圧縮力をうまく利用する、テンセグリティの達人が、ナマコだったわけである。「グニャグニャなのに骨のあるヤツ」の脱力感たっぷりの構造システムは、ロジエ主義的な古くさい骨格を笑ひ飛ばしているように、きわめて未来的なものに感じられた。僕は、頼りないほど小さくて細い(二〇ミリ×三〇ミリ)木片を骨とすることに。三枚の透明なETFEに、それぞれ別パターンで、木片を骨片を貼り付けるところがモノである(図34)。別パターンの骨を持つ三枚を重ね合わせることで、フニャフニャであった面が、突如として壁のように堅く、しっかりしたものに変身する。これもまた一種のテンセグリティ構造である。木片という硬い線同士がつながることで、膜の張力が有効に働き、細胞がテンセグリティで形を保っていたように、膜の形が保たれるのである。小さな木片を貼り付けているだけだから、一枚一枚の膜はクルクルと、壁のように丸めることができ、膜に抱えて、簡単に持ち運べる(図35)。長明も、そんな風に壁を抱えて、荒れた都市をフラフラとさまよっていたのかもしれない。その三枚の膜を重ねるのに、金属ボルトでも接着剤でもなく、強力磁石を使ったところが、もうひとつの発明である。ボルトやのりを使うと、組み立て、解体に時間がかかる。磁石だったら、一瞬で、組み立ても解体も可能である。磁石の「点」の間に面と面を重ね合わせることで、霧や露のように突然出現し、突然消失させるモバイルハウス、八〇〇年後の方丈庵(二〇一二年)ができあがった(図36)。この強力磁石は、「点」の裏で紹介しているイタリア、フィレンツェの山の中のピエトラ・セルナ山も持つ石屋、サルヴァトーレから教わった。彼は強力磁石を使って、石を壁に取り付けるために実験を重ねていた。従来、石はモルタルかボルトを使って、コンクリートの壁に取り付けられてきた。しかし、これだと石を簡単にはずすことができず、一度貼ったら取返しがつかない。磁石を使えば、取り付けも、解体も簡単に、石をはずすこともない。引っ越す時も、石だけ外して、新しい家にも同じ石を使うことができるというのが、サルヴァトーレのアイデアだった。壁から移動する内装という考えはおもしろくて、方丈庵内ではある。しかし、石だけ運んでも、家自体が軽々と手に抱えられないと、現代の方丈庵とは呼べない。点(磁石)・線(木片)・面(ETFE)が運動してはじめて方丈庵となる。下鴨神社の境内に出現した現代の方丈庵は、あまりに透明で軽やかで、うっかりすると通り過ぎてしまいうるほどの淡い存在であった。細い木片が、バラバラと下鴨神社の森の中に漂っているようだった。あのひねくれた長明も、このさびやかなら、森の木陰から、きつと喜んで僕らを見ていくのではないかと。下鴨神社に出現したカゲロウのようにほかにもない建築は、ETFEを用いた面の建築であると同時に、強力磁石を用いた点の建築でもあった。点・線・面が響きあい、相互に埋め込みあいながら、人間のまわりを浮遊し、身体を守ってくれる。「方丈記」から八〇〇年たつて、時代は再びかなり激しいことになっているけれど、だからこそ僕らはもう一度、現代の壁を抱え、しなやかなでやさしい面を抱えて、この荒れた世界を、歩きはじめなければいけない。

#### 46. 否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』(2020年(令和2年)3月24日 火曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)、並びに当該計画に包含する『原遺跡担保計画』『原遺跡応用計画』について、私達人類、又、人類の概念と行為、並びに人類に関する事象、並びにその他の事象、並びにその関係性に於いて、当該事象、並びに当該事象のあらゆる変化に関し、蓄積し、可逆性を内包し、以って、恒常的に、柔軟に包含し得る、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』について、第一義に、地球の大地と地球の大気と宇宙に関する事象である、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』について、私達人類の歩みを示唆する、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』について、私達人類、又、人類の概念と行為、並びに人類に関する事象、並びにその他の事象、並びにその関係性に於いて、第一義の事象のうちに、之を、相対的重層的に包含する故に、私達人類が、豊かであり、幸福である、と認識し得る事象を包含し、又、再生産し得る、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』について、『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』(2020年(令和2年)4月23日 木曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)を包含する、と規定します。

私達当会は、皆様に、当該の『原遺跡計画』を計画し実行する事、を提案し要望します。

#### [仮定]

私達当会は、私達人類の活動の空間について、宇宙と地球の自然と遺跡と人類にとっての機能を、相対的重層性、離散的配置、レイヤー、交織、と仮定し、同時に、人類を纏う生物生命体、と仮定し、宇宙と地球の自然と遺跡と人類にとっての機能、その相対的重層性、離散的配置、レイヤー、交織、と、人類、即ち、纏う生物生命体、との、双方を階層的に接続する事象である、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、人類の非意図として、人類の意図の空隙、である、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』(2020年(令和2年)3月24日 火曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』(2020年(令和2年)4月23日 木曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)に於ける、宇宙と地球の自然と遺跡と人類にとっての機能、について、之等は、集まりながら、同時に離れている、と仮定します。

私達当会は、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延に係る新常态(ニュー・ノーマル)に適合する、と仮定します。

私達当会は、私達人類の活動の空間について、生物学がそうであるように、骨(フレーム)を構造とすると考えるよりも、点・線・面(様々な要素)がネットワーク的にも統合したものが生物の体(私達人類の活動の空間)を支えている、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の活動の空間について、生物学がそうであるように、骨(フレーム)を構造とすると考えるよりも、点・線・面(様々な要素)がネットワーク的にも統合したものが生物の体(私達人類の活動の空間)を支えている、と仮定し考察し様々な行為を選択すること、を提案し要望します。

a. 考察一-A

○ 私達 人類の生命体としての存在、否定され得る人類としての私達 人類の在り方、その姿、又、その痕跡

私達 当会は、宇宙と人類の関係について、人類がその能力の限りを尽くして宇宙を改変したとしても、宇宙の総体とその在り方は何ら変化しない、その一方、人類は、宇宙の極めて一時的で限定的な関係性を前提に、その生命体としての存在を得ている為に、宇宙の極めて一時的で限定的な関係性の微細な変化で、人類の生命体としての存在を消失する、と仮定します。

私達 当会は、嘗て、私達 人類が、私達 人類の活動の空間に、否定され得る人類としての私達 人類の在り方、その姿、又、その痕跡を、部分的、非意図的であったにせよ、否定せず整理することなく之を受容し、遺存してきた、と仮定します。

私達 当会は、今、私達 人類が、私達 人類の活動の空間に、否定され得る人類としての私達 人類の在り方、その姿、又、その痕跡を、否定し整理し消去し又は美化するならば、私達 人類は、私達 人類自身の存在について、その在り方を偽り、即ち、自らの虚妄により、自らを脆弱な事象とする、と仮定します。

○ 私達 人類の現在と過去、

又、『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』

私達 当会は、動物の行為とその社会について、個体の記憶とより限定された個体間の伝達をその構造とすると仮定する処、人類の行為とその社会について、人類の個体の記憶と人類の個体間の伝達と記憶の手段により人類の社会上に伝達し記憶し得るあらゆる過去をその構造とする、と仮定します。

私達 人類の、人類の個人又は社会に於ける、私達 人類による、あらゆる様々な過去、並びに、蓄積に対する、意図又は非意図を契機とするあらゆる様々な経緯と方法に係る消失又は改変又は忘却に由来する、人類の行為とその社会に関する偏倚した構造は、それでも、現生人類他様々な地球に関する生命を支持し包含し続ける宇宙と地球の自然、又、生命体としての人類の構造に、一致し得るでしょうか？

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、現代の人類の行為とその社会に関する構造に関し、私達 人類に対し、人類の個体の記憶と社会上の又環境への記憶、過去、蓄積、又、その認知、認識、解釈、関係を媒介させ、地球に関する生命を支持する宇宙と地球の自然、又、生命体としての人類の構造に、一致させ、又は、近似させる試行である、と仮定します。

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、人類の活動の空間に関し、現生人類の出現以来、又、近代への道程と共に試みられた、概念的存在としての人類に係る活動空間、から、身体的存在としての人類に係る活動空間、への、自覚して行う、転換、転回、又は、還元である、と仮定します。

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、人類の活動の空間として、人類の活動をその空間に内包しつつ、同時に、その公共の空間としての構造に於いて、又、その空間に包摂する人類の心理に於いて、新型コロナウイルス感染症に於けるクラスター(集団感染)発生の要素とされる、「3つの密 - ①換気の悪い密閉空間 ②多数が集まる密集場所 ③間近で会話や発声をする密接場面」、を解消する要素を内包する、と仮定します。

○ 私達 人類の過去の蓄積と継承、現在、未来

私達 当会は、私達 人類について、他の生命体と異なり、私達 人類の知性によって、個体の個別の生命に由来する私達 人類に関する過去に関する記憶の蓄積を、その集団に於いて、共時的通時的に、私達 人類の時空を超えて、蓄積し継承し、これを引見し体験し、引用し得る処に、生命体としての特異性がある、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類の現在、並びに、予定し得る未来、について、全て、私達 人類に関する過去に関する記憶、又は、その過去に関する記憶の蓄積と継承によって、構成され構造されている、と仮定します。

私達 人類の私達 人類に関する過去に関する記憶の蓄積とその継承の媒体は、多様です。生命体としての身体、個体の心的な記憶、言語を媒介する個体の認知と認識、画像と言語と文字を媒介する他者への伝達、印刷や装置や土木や建築などの技術、技術の成果たる事象、任意の集団、社会、地域、国家、遺跡、自然、観察、思惟、行為、論理、発見、発明、革新、解釈、哲学、宗教、思想。

私達 当会は、私達 人類に關係する過去に關する記憶、又は、その過去に關する記憶の蓄積と繼承、又、その媒体、について、之を、私達 人類の意図と非意図に於いて、一旦、破壊し、滅失すれば、之を、修復し回復することは、不可能であり、私達 人類の記憶と時空から永遠に失われ、私達 人類の存在の可能性に於ける欠失となる、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類の意図と非意図に於いて、私達 人類の記憶の蓄積とその繼承、又、その媒体、を破壊し滅失することについて、私達 人類、又、私達 人類と宇宙と自然の關係性、を破壊し滅失することであり、又は、私達 人類、又、私達 人類と宇宙と自然の關係性、その一部の破壊と滅失を、一挙に、又は、日々、累積することであり、私達 人類の存在の可能性に於ける欠失を、一挙に、又は、日々、累積すること、であると仮定します。

#### ○ 私達 人類の以前

私達 当会は、私達 人類の思惟や行為に価値がある、その以前に、私達 人類、又、他の共時的通時的な事象の存在、同時に、その相互の關係性に価値がある、と仮定します。

#### ○ 私達 人類の存在を埋め込む宇宙と地球の自然

私達 当会は、私達 人類について、私達 人類の概念が、如何に、宇宙と地球の自然を逸脱し、又は、逸脱しようとしても、私達 人類の存在は、宇宙と地球の自然に埋め込まれているので、之を逸脱することはできない、と仮定します。

#### ○ 私達 人類の、私達 人類による、私達 人類の事象の保全、繼承、受容

私達 当会は、皆様に、私達 人類について、私達 人類が、これ等の全ての事象を、人類の意図、乃至、非意図に於いて、保全し、繼承し、即ち、受容すること、を提案し要望します。

#### ○ 人類と親密な(インティメイト:intimate)關係を具現した、丁寧な、行き届いた、人類の活動の空間、人類の世界、地方

私達 当会は、例えば、物理的には小さく、且つ、あり方としても小さい、「負けている」と人々が感じられるような土木と建築による、同時に、宇宙と地球の自然と遺跡、人類の存在と世代を超える、長期的な、過去、即ち、時間軸、又は、基盤、前提条件としての宇宙と地球の自然、に編み込まれ、且つ、生命体としての人類の身体のあり方と大きさ、並びに、存在性の連続、に呼応する、人類と親密な(インティメイト:intimate)關係を具現した、丁寧な、行き届いた、人類の活動の空間を、実態として、形成できる可能性が、人類の世界、就中、地方にはある、と仮定します。

#### ○ 私達 人類たる生命体にとって、取捨し選択する必要がない事象の揺動と揺動の軌跡としての全体

宇宙と地球の自然の全ての事象の關係性の揺動と揺動の軌跡としての人類の活動の空間、就中、私達 生命体としての人類が知覚し認識できる限定的な形態乃至時空が、例えば、自然であり遺跡である、と仮定します。

私達 当会は、宇宙と地球の自然の全ての事象の關係性の揺動と揺動の軌跡としての全体のうち、とりわけ、私達 生命体としての人類が知覚し認識できる限定的な形態乃至時空は、私達 生命体としての人類が、生命体である為に、必要不可欠最小限の事象である筈、と仮定します。

私達 当会は、私達 生命体としての人類が知覚し認識できる限定的な形態乃至時空は、私達 人類たる生命体に於いて、その非意図に於いて、既に、取捨し選択した事象である、と仮定し、最早、私達 人類たる生命体にとって、その意図又は概念に於いて、之を、取捨し選択する必要がない、と仮定します。

#### ○ 近代、科学、普遍、特異、作家性、周辺としての個別性多様性と例外、効率

私達 当会は、近代から現代にかけて、私達 人類が、科学が人類の問題を解決すると考え、私達 人類に於ける権力が、政治から科学へと移転したとされる時代、その私達 人類の行為について、私達 人類は、選択たる抽象の方法に基づき、普遍との概念を設置し、之を希求し、同時に、事象の個別や多様について、特異たる作家性芸術性としての評価によって、之を代表させ、之によって普遍を補足し、人類の選択と行為としての総体を体系的に調整しようとするシステムを創出した、と仮定します。

私達 当会は、普遍と特異たる作家性芸術性としての評価による人類の行為への包括的で体系的な選択の意図に関するシステムについて、私達 人類は、当該システムの下で、普遍と特異たる作家性芸術性としての評価の周辺、即ち、個別で多様な事象の実態や例外とする事象を、考察の対象の範囲外と認識してきた、と仮定します。

私達 当会は、普遍と特異たる作家性芸術性としての評価による人類の行為への包括的で体系的な選択の意図に関するシステムについて、集団たる人類の要求に応える事象に対して、簡便に選択し行為できる道筋、即ち、効率への体系、としてのシステムである、と仮定します。

私達 当会は、普遍と特異たる作家性芸術性としての評価による人類の行為への包括的で体系的な選択の意図に関するシステムについて、私達 人類が、私達 人類の近代として認識する事象を形成するシステムである、と仮定します。

#### ○ 私達 人類の過去の記憶からの逸脱、緊急事態

私達 当会は、私達 現代の人類について、私達 人類が、宇宙と地球と人類の自然と意図について知っていることはごく僅かであるにも関わらず、私達 人類は、創造や発明や競争として、又、忘却により、私達 人類にとって唯一確実である筈の、私達 人類の過去の記憶、時に、その蓄積、を逸早く逸脱しようとし、又、意図せずとも逸脱する、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類が、創造や発明や競争の結果として、又、忘却の結果として形成する、私達 人類にとって唯一確実である筈の、私達 人類の過去の記憶、時に、その蓄積、を逸脱した事象について、確実を欠き、不安定であるとするれば、常に、これ等に関連する全ての事象が、緊急事態の許にある、と仮定します。

#### ○ 私達 人類の蒐集

私達 当会は、私達 人類の行為たる蒐集について、皇帝と国王のシステムでは、人類の命と人類の存在を消費して人類に関する土地を蒐集し、宗教家のシステムでは人類の知性を消費して人類を蒐集し、資本家のシステムでは人類に関する差異を消費して人類のシステムである資本を蒐集し、人民のシステムでは人類の経験を消費して人類の記憶を蒐集する、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類の行為たる蒐集について、人類の蒐集の契機は、人類の生存の知恵の過剰と、それぞれの蒐集のシステムのそれぞれの主体のそれぞれの 栄耀栄華と緊張感 (thrill:スリル) への麻薬である、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類の行為たる蒐集について、任意の人類による、特定の人類のシステムの蒐集である、と仮定します。

私達 当会は、人類の行為たる蒐集、任意の人類による、特定の人類のシステムの蒐集について、特定の人類のシステムのプラットフォーム(運営者)になることであり、その権力を掌握することであり、他者たる人類を支配し得る事象を獲得することである、と仮定します。

#### ○ 私達 人類の問題解決、生命科学と思想・哲学

私達 当会は、人類の問題解決に関する人類の社会の根源的な事象、社会的共通資本について、"人類のことは人類に聞け"と仮定し、生命科学と思想・哲学がその事象、社会的共通資本となる、と仮定します。

#### ○ 新常态 (ニュー・ノーマル)

新常态 (ニュー・ノーマル) : 私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、私達 人類による様々な事象への理解と大気たる通風と人類の尊敬と人類のソーシャル・ディスタンスと人類のにぎわいを同時に包摂し得る人類の活動の空間である、と仮定し、之を、提案し要望します。

b. 提案と要望――A

・近代の方法としての人工として形成されるヴォリュームの解体(時に解消)、又、閉じた空間から解放された空間への還元  
の方向性(ベクトル)の形成

―― 枠組み、概念、抽象、さらに、細部、実態、具象、へ――

・地球上に現生人類が出現する以前と以降の自然、並びに、地球上に現生人類が出現して以降の、現生人類の活動の痕  
跡、即ち、時に自然と人工に対する改変、即ち、活動の結果、即ち、遺跡――遺跡の保存と活用と継承

―― 意義、価値、さらに、存在、在り方、へ――

・フレキシビリティ：私達当会は、あらゆる現生人類とその状況に最も柔軟に対応できるシステムについて、之を、類型と  
しての現生人類出現以前以降の宇宙と地球の自然である、と仮定します。私達当会は、類型としての現生人類出現以前  
以降の宇宙と地球の自然について、現生人類が出現して以降20万年～15万年程のあらゆる現生人類とその状況に、又、  
現生人類出現以前以降のあらゆる地球に関する生命体とその状況に、可能な限り、柔軟に対応し、又は、之を包含し、継  
続させてきた、その実績がある、と理解します。

―― 改変、変容、さらに、過程、原点、へ(可逆性)――

・時空と行為と思想・哲学の開放

(共時的通時的又認識上の開放：グローバル時代若しくはポストグローバル時代の事象)

―― 科学との側面では、私達 人類の個体の科学的論理的態度の成熟と科学に依存しない姿勢の両立――

―― 呪術的様式と危機管理の関係性への認識――

## ○ 私達人類の活動の空間の形成について

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、私達人類の活動の空間に於ける、離散的配置又はレイヤー／グラデーション／肌理(テクスチャー)／階層／クッションによる空間構成、ひいては、私達人類の活動の空間に於ける、私達人類の、三次元のカルテジアン・グリッド並びに透視図法/遠近法たる概念に依拠する空間把握の無効化、並びに、空間の構成に於ける構成的なヴォリュームの解体と解消でもある、と仮定します。

私達 当会は、私達人類について、配置と機能の交錯、編み込み又は織り込み、を主調とする離散的空間の形成、同時に、空間の分断又は囲い込み又は閉鎖と機能の集約又は集中を主調とする構成的なヴォリュームの形成の解体によって、画一的で分断され同時に閉塞的な空間の印象と実態を解消し、さらに、共時的に、開放的で連続的で多様な変化に富む、透明感のある又は軽快な又はリズムカル又は音楽的な又は自由な様々な空間の印象と様々な作用を顕現する、と仮定します。

私達 当会は、私達人類について、空間の情報を、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚等の感覚のうち、主に、視覚から摂取すると考え得る処、感覚上の全体の大きさと部分又は要素たる、例えば、概念上の構成としての点、線、面、又、存在上の配置やレイヤー／グラデーション／肌理(テクスチャー)／階層／クッション、との相対的な大きさの関係は、私達人類の当該の空間に対する認識上の印象又は私達人類にとっての当該の空間に於ける関係上の作用を主調的に支配し得る、と仮定します。

私達 当会は、私達人類の活動の空間並びに人類の活動、行為について、地球の又その土地の大地が基準面である、と仮定します。

( …… しかしミースの作った空間も、僕にとってはあまり居心地が良くない。線を主役にしたにもかかわらず、空間を効率的に閉じることだけが優先されていて、日本の伝統建築に存在していたような、点・線・面が自由に浮遊する楽しさ、透け感が全く感じられないのである。ミースもまた、閉じること至上命令とする、二〇世紀という時代の子であった。僕は空調のよきいたガラス張りの超高層ビルにいて、牢獄の中にいるように感じる。ガラスで作れば、透け感があるというものではない。二〇世紀をリードし、モダニズム建築を建築史全体の中に位置づけようと試みた建築史家、コーリン・ロウ(一九二〇-一九九)は、「実の透明性」と「虚の透明性」とを区別して、二〇世紀のガラス至上主義に警鐘を鳴らした。ガラスを使えば自動的に透明になるという単純、素朴な透明性の追求を、彼は「実の透明性」と呼んだ。ガラスを使わなくても、層状の空間構成によって、背後に存在する、実際には見えない空間を暗示する方法を、彼は「虚の透明性」と呼び、高く評価した。ロウは「虚の透明性」の例として、ガラスが大量に使われるはるか以前の、イタリアのマニエリスム期の建築家、アンドレ・パラディオ(十五〇八-一八〇)の建築について論じ(図2)、その奥行きを示唆する、洗練された知的な空間構成を賛美している。しかし、「虚の透明性」ということでいえば、ガラスを一切使うことがなかった明治以前の日本の伝統木造建築に及ぶものはない。十二単のように何層にも重なった層状の空間構成、そして襖、障子などの可動建具の併用によって醸し出される透明感は、パラディオも遠く及ばない。にもかかわらず、コーリン・ロウは、日本について言及しようとはしなかった。ロウは、コンクリートと鉄とガラスの時代を生き、その制約の外側にある日本の伝統建築は、視界の中に入っていなかったのである。ロウほどのすぐれた歴史家でも、二〇世紀的な素材の制約の中でしか、建築を考えようとしなかったのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 方法序説 日本建築の線とミースの線 P007-P008)

( …… ギブソンは構成という概念を拒絶し、代りに肌理(テクスチュア)を問題にした。生物の心理、行動が、環境の構成によってではなく、環境の肌理によって決定されるということ、を、実証的に突き詰めていったのである。環境を点・線・面による「構成」と捉えずに、点・線・面が作る「肌理」として捉えることで、彼は、世界と生物、環境と心理との関係に深く、そして科学的に分け入ることができたのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 方法序説 構成のキャンデンスキーから肌理のギブソンへ P010-P011)

( ギブソンは、世界を三次元のヴォリュームから解放したといってもいい。世界は連続するヴォリュームではなく、無数の点や線の組み合わせが作る、肌理の集合体であると彼は再定義した。彼にそれができたのは、ひとつには心理学者としてスタートしながら、心理学の曖昧性飽き足らず、生物学へと踏み込み、生物の身体をベースにして、その環境認識の有様を把握しようと試みたからである。彼は生物の網膜の構造にまで立ち入ることで、肌理という曖昧なものを科学化した。……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 方法序説 ギブソンと粒子 P011)

( 市松模様のような、点がパラパラと浮いているような状態を、離散的状态と呼ぶことがある。僕の恩師である建築家の原広司(一九三六-)は、そもそも数学で用いられていた離散という言葉は建築の世界に持ち込んだ。原先生は、教鞭をとっていた東京大学の学生と、世界の辺境の集落を調査し、その配置を図面化し、そこから未来の都市、未来の建築のヒントを得ようと試みていた。その集落研究で、原先生は数学的手法の建築への応用を試みた。…… 学生であった僕らと原先生は、一九七八年の冬、西アフリカ、サハラ砂漠周辺の集落を、二か月かけて共にジープで旅し、調査した。旅の途中、原先生はさかんに離散という言葉を使った。サハラ周辺の集落は、小屋が隙間をあげながら集合する、コンパウンド住居という形式で知られている(図65・図66)。この地域では一夫多妻制が一般的な婚姻形態であり、夫はそれぞれの妻が住む小屋を日ごとに廻って、その中の一軒で食事をして、妻や子ども達と泊まる。それぞれの妻に付属する小屋が、中庭を中心として、ゆるやかに雑然と集合する形態を、原先生は離散的集落と呼んだ。点と点が距離を置いて、ゆるやかに雑然と集合している状態が離散的であり、その対極にあるのが、点と点が密着して、隙間のない状態である。離散的状态

こそが、人間関係の理想であり、すべての点が密着した状態の究極がファシズムではないかと、砂漠を旅しながら僕は議論した。未来の建築は、サハラのコンパウンドのように、離散をめざさなければいけないと、砂漠の中で、火を囲みながら、僕は語り合った。……離散数学は、現代の数学の中の重要な分野であり、世界を連続体ではなく、パラパラとした粒子的なものと捉えた途端に、世界の新しい貌が見えてくることを、僕は数学から教わった。離散は単に建築の平面的な配置に関わるだけではなく、素材もディテールも、建築のすべての領域に適用できる概念であった。そして、離散とは、点の別名に他ならない。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 離散性とサハラ砂漠 P104-P106)  
(……日本の伝統木造建築では、しばしば線と線を、ずらして組み上げる(図9)。いわば、材木という線の上に、もう一本の材木をそっと載せる。ずらすことによって、材木に欠き込みを入れる必要がなくなり、その結果、断面の欠損が起こらないので、一本一本の材木すなわち線の強度を保つことが可能となる。しかも接点はずれていても、力はスムーズに伝達されることを、日本の大工は経験的に理解していた。日本の木造はずらしの木造であったといってもいい。線と線が一点で交差する、西欧流のカルテジアン・グリッド(デカルト流の直交グリッド)(図10)とは別のやり方で、線が編まれていたのである。西欧の近代の数学と工学のベースになっていたのは、きまじめなカルテジアン・グリッドである。しかし、接点をずらすことで線はより軽やかに自由になり、空間に動きが生まれることも、日本の大工は知っていた。そしてずらしによって、線材と線材とが分節され、線が面とならずに線のままにとどまり、軽やかさ、透明感が生まれてくることも、大工は熟知していたのである。カルテジアン・グリッドが図式的で、幼稚な幾何学に依拠していたのに対し、日本のずらしの木造は、経験主義的であり、しなやかであった。……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 丹下健三のずれた線 P115-P116)

#### (広重の夕立の細い線

日本の伝統木造が長い時間をかけて磨いてきた細く、移動する線、再び取り戻すことはできるだろうか。あるいはアフリカの熱帯雨林の草のカゴのような細い線を、現代の建築に導入することはできるだろうか。細い線が復活した時どのような建築が生まれ、どのような都市が生まれ、人間と線とはどのような関係を取り結ぶことになるのだろうか。僕がこの課題を意識して、最初に線に取り組んだのは、那珂川町馬頭広重美術館(二〇〇〇年)(図37)であった。浮世絵画家の歌川広重(一七九七—一八五八)の美術館の設計を依頼され、広重の作品を研究し、広重にとっていかに線が重要であるかを知った。大きなきっかけを作ってくれたのは広重の代表作「大はしあたけの夕立」(名所江戸百景)(図38)である。「大はしあたけの夕立」の線は、芸術の世界に革命をもたらした二人のアーティストに、絶大な影響を与えた。一人は印象派の巨人であるヴァン・ゴッホ(一八五三—一九〇)であり、もう一人は、二〇世紀のモダニズム建築の巨匠であり、建築の透明化をめざすムーヴメントの最初の一步を踏み出したアメリカの建築家、フランク・ロイド・ライトである。……では「大はしあたけの夕立」の何が、この二人の革命的芸術家を引き寄せるのだろうか。夕立の雨の線に秘密があった。一九世紀までの西欧の画法は、重たいヴォリュームの支配する重たい世界であったと二人は感じ、ヴォリュームを解体しようと苦闘した。その二人が、広重の線と出会い、広重をヒンジとして、新しい世界へと踏み出していったのである。「夕立」の線を、細かく点検してみよう。一番手前に、夕立が線で描かれ、その線の東によってひとつのレイヤーが出現する。ヨーロッパ絵画の基本手法である透視図法によらずに、薄いレイヤーの重ね合わせによって、空間に三次元的奥行きが与えられている。ルネサンスに登場した透視図法の基本は、近くにあるものを大きく描き、遠くにあるものを小さく描くことである。遠近法と呼ばれるその手法によって、三次元の奥行きが容易に表現されるようになった。一方の広重は、透視図法と全く別の方法によって、空間の奥行きを表現したのである。「夕立」では、川を渡る橋は、遠くに向かっているのにもかかわらず、橋の幅が小さくならない。同じ幅のまま対岸に到達する。そして大橋の橋桁は細い線で構成された透明なスクリーンとして描かれる。線が創造する透明性によって、川の手前側と向こう側との距離、奥行きが表現される。大橋が細い木材を組み合わせて作った木造の橋だから、橋を透明なスクリーンとして表現することが可能となったのである。木造の橋と透明性は、深く、分かちがたく結びついている。木造と空間の奥行きは結びついている。日本は木造の国だからこそ、透視図法を必要としなかったともいえる。……しかし、「大はしあたけの夕立」の線から見える、人工と自然を同列に扱う方法は、広重美術館の線の線のデザインに大きなヒントを与えてくれた。自然とは何か、人工とは何かということを考える、大きなきっかけとなった。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 広重の夕立の細い線 P136-P140)

(……このようにグラデーションに線を変化させ、種類の違う線でレイヤーを作りながら、自然と身体とを、外と内とをスムーズにつなげようと試みた。透視図法を持たないアジア、必要としないアジアでは、この手法を、長い時間をかけて洗練させてきた。絵画においても、建築においても、透視図法によらずに奥行きが表現され、身体と世界とがスムーズにつながれていったのである。広重はそれを見事に使いこなした。結果、西欧のゴッホやライトが震撼するまでに線を使いこなしたのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 夕立の建築 P143-P144)

(……生物によって、身体を支える床面がいかに重要であるかは、ジェームズ・ギブソンのアフォーダンス理論の核心である。生物は、左右の目の立体視によって空間の奥行きを測定しているのではなく、基準となる水平面の上の、様々な粒子や線を用いて、空間の奥行きを知り、空間の広がり測定し、空間を自分のものとしていることを、ギブソンは発見した。基準面が存在することによって、その面に属する点や線がひとつの音楽を奏で、そこにリズムが生まれる。基準面がなければ、いかに点や線が存在しようとも、リズムも音楽も生まれず、生物はその環境を自分のものとするのができない。その環境を生きていくことができない。……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 生と死の境をさまよう線 P153-P154)

( 杭州の中国美術学院民芸博物館(二〇一五年)の敷地は、もともと茶畑であった。茶畑独特のゆるやかな斜面に寄り添うような建築を作って、屋根をすべて瓦で葺こうと考えた。しかし、瓦で葺きさえすれば、自動的に、景観になじんだ建物ができるとは限らない。ひとつの屋根が大きすぎると、その面の大きさに比較して、それを構成するひとつの点、すなわち一個の瓦のサイズが小さすぎ、いかにひとつひとつの点にランダムなパラッキがあったとしても、点は大きな面の中に埋没して、のっぺりとした印象を与えてしまう。その危険を避けるため、大屋根を作るのではなく、民家と同じようなスケールの小

小さな屋根を単位とし、その小さな屋根が無数に集合した、村のような風景を作ろうと考えた(図51)。小さな屋根の中に置くと、バラツキのある瓦は全体に埋もれずに、しっかりと独立した点として、自分の存在を主張してくれるだろう(本章扉写真)。点の建築を作る時に重要なのは、点と全体のバランスである。僕はしばしば点を階層化して、段階的に全体へとつなげ、環境へとつなげていく。小さな屋根の下には、小さな菱形の平面形をした空間が集合していて、その小さな空間が、茶畑の微妙に傾斜した地形を、三角形分割の手法でなぞっている。建築が全体として大きかったとしても、階層化の方法を上手に用いれば、生き生きとした点のきらめきを失わずに、小さな点と、大きな全体とがゆるやかにつながることができる。

……『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点の階層化とエイジング P089-P090)  
( 杭州の博物館では複雑な地形を三角形を単位として分割した。四角形ではなく三角形を単位とすることで、どのような複雑な曲面でも、三角形の集合体として近似できる。その意味において、四角形は面であるが三角形は面であると同時に、点の自由さを持っている。四角形は不自由であり、三角形は自由である。 建築は通常、四角形を単位として作られる。平面も、立面も、四角を単位として、建築は作られてきた。しかし、四角形は融通がきかないということに気づいた建築家が何人かいる。・フランク・ロイド・ライト(一八六七—一九五九)は、自然の原理に基づく建築を様々な形で試み、三角形の可能性に注目していた。ライトの影響を受けたバックミンスター・フラー(一八九五—一九八三)や、ルイス・カーン(一九〇—一九七四)も、三角形に大きな関心を抱いていた(図55・図56・図57)。……『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 自由な点としての三角形 P093)

( 点の大きさについて、大きなヒントを与えてくれたのは、鉄道の枕木の下に敷かれた砂利の寸法にまつわる研究である。鉄道のレール、枕木、砂利とが重層することで、車体の荷重は分散され、大地というやわらかなものに、ダメージを与えることがない。レールにおいては、まず線状の鉄がしなむことで荷重を分散し、その力が枕木という線に伝達され、枕木にかかった荷重は、その下に敷かれた砂利によって分散される。その階層的な力の分散によって、地面は窪んだり、裂けたりすることがない。ここで重要なことは、砂利が接着されることなく、それぞれの砂利が自由に動き、自由にずれることである。砂利が拘束された点ではなく、自由な点であることによって、砂利の山全体が、クッションの役割を果たしているのである。この自由を保証するのが、砂利の大きさである。枕木の下に砂利の代わりに砂を敷くと、砂という小さすぎる点の集合体は、力を分散させることができず、荷重は集中してしまっ、地面にダメージを与える。経験の積み重ねによって、最も適切で経済的な点の大きさ、すなわち砂利のあの大きさに到達したのである。このエピソードは自然と建築の関係を考える上で、大きな示唆を与えてくれる。大地という自然と、車体に乗っている人間との間に、様々な点と線とが介在し、その二つをスムーズに、そして階層的につなげている。建築もまた同様にして、自然と人間をスムーズにつなげるものでなければならない。枕木の下に敷かれた砂利が理想である。その砂利のように、一見、自由でゆるやかでありながら、実際には見事なクッションとして、その二つをつなぐ建築を作ることができないだろうか。コンクリートのようにガチガチのものを介在させるのではなく、様々な自由な粒子を媒介として、この小さくてやわな身体を、自然という大きなものにつなげていきたい。民主主義的な建築があるとしたならば、線路の砂利のようなものではないかと、僕は考える。あのように自由で、あのようにしなやかなものである。『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 線路の砂利という自由な点 P101-P103)

( 広重美術館を設計しながら、自然の線と人工の線の差は何だろうかという問題に突き当たった。広重美術館の基本原理は、裏山の杉の木目の荒々しい線、木立の生の線から、最も内側のレイヤー、和紙の裏に影としてだけ存在する抽象的な細い線へと至るグラデーションである。縄文から弥生、平安、数寄屋へというグラデーションといってもいい。杉の木立は樹皮がついたままで、しかも、ランダムな配列を持っている。ランダムな線の意味と効果を、広重は熟知していた。雨を描く時に、広重は均一な細い線を作るシンプルナリズムの中に、ランダムな線をまぎれ込ませた。広重は自然というものの本質がバラつきにあることを理解していて、角度の違う線を、雨の中にまぎれこませ、線を雨へと昇華させたのである。人の描いた線が、自然へと変身を遂げたのである。スコットランドでヴィクトリア&アルバート博物館の分館、V&A・ダンディ(二〇一八年)(図46)を設計した時に、この方法を応用して外壁をデザインした。ダンディはティ川の河口に位置する街で、V&Aの敷地は、街の南のエッジにあり、ティ川の河口に面していた。われわれは、川にはり出すようにして、建築をデザインした。実際に建築の一部を、水の中に建てたのである。通常、自然の脅威から建築を守ろうとする結果、建築は自然とは距離を置いて建てられ、自然とは異質のもの、違う領域に属するものとしてデザインされる。

自然と建築との差異、距離の強調が、西欧の建築デザインの基本であった。差異を示すために、建築を基壇と呼ばれる台で持ち上げ、ピロティという名の柱で浮かしたのである。ピロティを生み出した二〇世紀のモダニズム建築も、西欧の方法の正統的な嫡子であった。しかし僕らは、建築を川の中に建てることで、自然と人工との中間的な物を作り、自然(川)と街をシームレスにつなごうと考えた。西欧建築を支えてきた、自然と人工との対比を否定し、自然と人工とを境目なく、ゆるく、やわらかくつなげようとしたのである。では、どのような形態が、自然と人工の中間物にふさわしいだろうか。ヒントを与えてくれたのは、ダンディの北に位置する、スコットランドのオークニー諸島の海岸の崖であった(図47)。大地と水の接点に、純粋な幾何学は存在しようがない。大地も水も多くのノイズを包含しているから、その接点である崖は、必然的にゆがみ、バラつき、暴れるのである。海からそそり立つ崖は、海と陸との長い闘いの結果、幼稚で図式的な幾何学から逸脱し、髣髴—すなわちランダムな線の集合体へと到達する。自由で複雑なその線は、広重の雨のように、無数のノイズを包含する。その崖のように粗くランダムな建築を、海と陸の境に建てようと考えた。……このダンディのウォーターフロントは、かつては倉庫群が並び、人の気配のないさびれた場所だった。工業化社会が世界中に作り出した、人工物の残骸であった。その自然と人工とのぼんやりした空白に、自然と人工の中間的な存在を作ること、街と自然をつなぎ直した。崖から多くのことを学び、広重の夕立からも多くのヒントをもらって、ダンディの街はもう一度、川とつながり、自然と接合された。『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 V&A・ダンディの線描画法 P144-P148)

## ・スケールについて

私達 当会は、視覚上の全体の大きさと部分又は要素の大きさの関係は、例えば、何を視覚上の全体とするかその範囲、即ち、スケール、によって相対的に変化する、と仮定します。

私達 当会は、例えば、何を視覚上の全体とするか、即ち、スケールは、視覚の主体の回転の移動や、水平の移動や、垂直の移動によって変化し、移動の速度やその変化は、スケールとその変化の質を変容する、と仮定します。

私達 当会は、例えば、視覚上の日常的なスケールは、自身の姿勢、又、身体的な周辺、近景、中景、遠景、によって規定され、高所からの眺望、遠望や俯瞰は、また、性格の異なる規定を形成する、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類について、例えば、私達 人類を主体として把握する場合と私達 人類以外の事象を主体として把握する場合で、スケールは変化すると認識することができる、と仮定します。

## ・私達 人類の現代に於ける活動の空間 について

私達 当会は、私達 人類の現代に於ける活動の空間について、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』が、私達 人類の活動の空間に於ける、私達 現代の人類の生命の行為としての、創造性、快適性、活動の効率、の発現を定義する、と仮定します。

○ 人類の思念、行為、又は、集団としての文化が、人類の知の体系、即ち、学術、学としての科学、技術、又は、社会的生産形態、に先行する、との仮定

( 前章で見たとおり、サピエンスは一五万年前にはすでに東アフリカで暮らしていたものの、地球上のそれ以外の場所に侵出して他の人類種を絶滅に追い込み始めたのは、七万年ほど前になってからのことだった。それまでの八万年間、太古のサピエンスは外見が私たちにそっくりで、脳も同じくらい大きかったとはいえ、他の人類種に対して、これといった強みを持たず、とくに精巧な道具も作らず、格別な偉業は何一つ達成しなかった。 それどころか、サピエンスとネアンデルタール人との間の、証拠が残っている最古の遭遇では、ネアンデルタール人の縄張りだったレヴァント地方(訳注 地中海東岸の地方)に移り住んだが、揺るぎない足場は築けなかった。敵意に満ちた先住民がいたり、気候が厳しかったり、地域特有の馴染みのない寄生物に出くわしたりしたのかもしれない。理由はなんであれ、サピエンスはけっきょく引き揚げ、ネアンデルタール人は中東に君臨し続けた。 学者たちはこのような乏しい実績に照らして、これらのサピエンスの脳の内部構造は、おそらく私たちのものとは異なっていたのだらうと推測するようになった。太古のサピエンスは見かけは私たちと同じだが、認知的能力(学習、記憶、意思疎通の能力)は格段に劣っていた。彼らに英語を教えたり、キリスト教の教義が正しいと信じさせたり、進化論を理解させたりしようとしても、おそらく無駄だっただらう。逆に私たちにとって、彼らの言語を習得したり、考え方を理解したりするのは至難の業だらう。 だがその後、およそ七万年前から、ホモ・サピエンスは非常に特殊なことを始めた。そのころ、サピエンスの複数の生活集団が、再びアフリカ大陸を離れた。今回は、彼らはネアンデルタール人をはじめ、他の人類種をすべて中東から追い払ったばかりか、地球上からも一掃してしまっただらう。サピエンスは驚くほど短い期間でヨーロッパと東アジアに達した。四万五〇〇〇年ほど前、彼らはどうにかして大海原を渡り、オーストラリア大陸に上陸した。それまでは人類が足を踏み入れたことのない大陸だ。約七万年前から約三万年前にかけて、人類は舟やランプ、弓矢、針(暖かい服を縫うのに不可欠)を発明した。芸術と呼んで差し支えない最初の品々も、この時期にさかのぼる(図4のシュターデル洞窟のライオン人間を参照のこと)、宗教や交易、社会的階層化の最初の明白な証拠にしても同じだ。 ほとんどの研究者は、これらの前例のない偉業は、サピエンスの認知的能力に起こった革命の産物だと考えている。ネアンデルタール人を絶滅させ、オーストラリア大陸に移り住み、シュターデルのライオン人間を彫った人々は、私たちと同じくらい高い知能を持ち、創造的で、繊細だったと、研究者たちは言い切る。仮にシュターデル洞窟の芸術家たちに出会ったとしたら、私たちは彼らの言語を習得することができ、彼らも私たちの言語を習得することができるだらう。不思議の国でのアリスの冒険から、量子物理学のパラドックスまで、私たちは知っていることのいっさいを彼らに説明でき、彼らは自分たちの世界観を私たちに教えられるはずだ。 このように七万年前から三万年前にかけて見られた、新しい思考と意思疎通の方法の登場のことを、「認知革命」という。その原因は何だったのか？それは定かではない。最も広く信じられている説によれば、たまたま遺伝子の突然変異が起こり、サピエンスの脳内の配線が変わり、それまでにない形で考えたり、まったく新しい種類の言語を使って意思疎通をしたりすることが可能になったのだという。その変異のことを「知恵の木の突然変異」と呼んでいいかもしれない(訳注 知恵の木は「創世記」に出てくるエデンの園に生えていた木で、アダムとイヴはその実を食べて「目が開け」た)。なぜその変異がネアンデルタール人ではなくサピエンスのDNAに起こったのか？ 私達の知るかぎりでは、それはまったくの偶然だった。だが、より重要なのは、「知恵の木の突然変異」の原因よりも結果を理解することだ。サピエンスの新しい言語のどこがそれほど特別だったので、私たちは世界を征服できたのだらう？ それはこの世で初の言語ではなかった。どんな動物も、何かしらの言語を持っている。ミツバチやアリのような昆虫でさえ、複雑なやり方で意思を疎通させる方法を知っており、食物のありかを互いに伝え合う。また、それはこの世で初の口頭言語でもなかった。類人猿やサル全般を含め、多くの動物が口頭言語を持っている。たとえば、サバンナモンキーはさまざまな鳴き声(コール)を使って意思を疎通させる。動物学者は、ある鳴き声が、「気をつけろ！ ワシだ！」という意味であることを突き止めた。それとはわずかに違う鳴き声は、「気をつけろ！ ライオンだ！」という警告になる。……

おそらく、「噂話」説と「川の近くにライオンがいる」説の両方とも妥当なのだろう。とはいえ、私たちの言語が持つ真に比類なき特徴は、人間やライオンについての情報を伝達する能力ではない。むしろそれは、まったく存在しないものについての情報を伝達する能力だ。見たことも、触れたことも、匂いを嗅いだこともない、ありとあらゆる種類の存在について話す能力があるのは、私たちの知るかぎりではサピエンスだけだ。伝説や神話、神々、宗教は、認知革命に伴って初めて現れた。それまでも、「気をつけろ！ライオンだ！」と言える動物や人類種は多くいた。だがホモ・サピエンスは認知革命のおかげで、「ライオンはわが部族の守護霊だ」と言う能力を獲得した。虚構、すなわち架空の事物について語るこの能力こそが、サピエンスの言語の特徴として異彩を放っている。現実には存在しないものについて語り、『鏡の国のアリス』ではないけれど、ありえないことを朝食前に六つも信じられるのはホモ・サピエンスだけであるという点には、比較的容易に同意してもらえるだろう。サルが相手では、死後、サルの天国でいくらでもバナナが食べられると請け合ったところで、そのサルが持っているバナナを譲ってはもらえない。だが、これはどうして重要なのか？ なにしろ、虚構は危険だ。虚構のせいで人は判断を誤ったり、気を逸らされたりしかねない。森に妖精やユニコーンを探しに行く人は、キノコやシカを探しに行く人に比べて、生き延びる可能性が低く思える。また、実在しない守護神に向かって何時間も祈っていたら、それは貴重な時間の無駄遣いで、その代わりに狩猟採集や戦闘、密通でもしていたほうがいいのではないかと。だが虚構のおかげで、私たちはたんに物事を想像するだけではなく、集団でそうできるようになった。聖書の天地創造の物語や、オーストラリア先住民の「夢の時代(天地創造の時代)」の神話、近代国家の国民主義の神話のような、共通の神話を私たちは紡ぎ出すことができる。そのような神話は、大勢で柔軟に協力するという空前の能力をサピエンスに与える。アリやミツバチも大勢でいっしょに働けるが、彼らのやり方は融通が利かず、近親者としかうまくいかない。オオカミやチンパンジーはアリよりもはるかに柔軟な形で力を合わせるが、少数のごく親密な個体とでなければ駄目だ。ところがサピエンスは、無数の赤の他人と著しく柔軟な形で協力できる。だからこそサピエンスが世界を支配し、アリは私たちの残り物を食べ、チンパンジーは動物園や研究室に閉じ込められているのだ。『サピエンス全史 一文明の構造と人類の幸福 上』2016年9月30日 初版発行 著者 ユヴァル・ノア・ハラリ 訳者 柴田裕之 発行所 株式会社河出書房新社 Yuval Noah Harari SAPIENS: A Brief History of Humankind 第1部 認知革命 第2章 虚構が協力を可能にした P34-P40)

(以上の筋書きは、農業革命を計算違いとして説明するものだった。じつに説得力がある。歴史はそれよりもはるかに馬鹿げた計算違いに満ちあふれている。だが、計算違い以外の可能性もある、農耕への移行をもたらしたのは、楽な生活の探求ではなかったかもしれない。サピエンスは他にも強い願望を抱いており、それらを達成するためには、生活が厳しくなるのも厭わなかったかもしれないのだ。科学者はたいてい、歴史の展開の原因を経済と人口動態の客観的要因に求める。そのほうが、彼らの合理的で数学的な手法に適しているからだ。近代史の場合、学者はイデオロギーや文化といった非物質的要因を考慮に入れざるをえない。証拠書類があるので、嫌でもそうするしかない。文書や書簡、回想録がたつぷり残っているから、第二次大戦が食糧不足あるいは人口増加による圧力によって引き起こされたわけではないことを立証できる。だが、たとえばナトゥーフ文化の文書などないので、古代に取り組むときには、物質的側面が最も重視される。文字を持たない人々が、経済的な必要性ではなく信仰心に動機づけられていたことを証明するのは難しい。それでもごく稀には、歴然とした手掛かりが運良く見つかることもある。十九九五年、考古学者たちはトルコ南東部のギョベクリ・テペと呼ばれる場所で遺跡の発掘を始めた。最も古い層では定住地や家、日常的活動の形跡はまったく見られなかった。ところが、見事な彫刻を施した石柱から成る記念碑的建造物がいくつも出てきた。一つひとつの石柱は、最大で七トンあり、高さは五メートルに達した。近くの採石場では、削り出しかけの石柱が一つ発見された。重さは五〇トンもあった。全部で一〇を超える記念碑的建造物が発掘され、最大のもは差し渡しが三〇メートル近くあった。考古学者たちにとって、その手の記念碑的建造物は世界中の遺跡でお馴染みで、最も有名な例はイギリスのストーンヘンジだ。だが、ギョベクリ・テペを調べた考古学者たちは、驚くべき事実を発見した。ストーンヘンジは紀元前二五〇〇年にさかのぼり、発展した農耕社会によって建設された。ところがギョベクリ・テペに建造物は、紀元前九五〇〇年ごろまでさかのぼり、得られる証拠はみな、狩猟採集民が建設したことを示している。考古学界はこの発見をにわかには受け容れられなかった、これらの建造物がこれほど早い時期までさかのぼり、農耕以前の社会がそれを建設したことを確認する検査結果が相次いだ。古代の狩猟採集民の能力と、彼らの文化の複雑さは、従来考えられていたよりもはるかに目覚ましかったようだ。狩猟採集社会が、なぜそのような建造物を建設したりするのか？それらには、明白な実用的目的はなかった。マンモスの屠殺場でも、雨宿りしたり、ライオンから身を隠したりする場所でもなかった。そこで残るのが、考古学者には解明の難しい、何らかの謎めいた文化的目的のために建設されたという説だ。それが何であるにせよ、狩猟採集民たちは莫大な手間と暇をかける価値があると考えたのだ。ギョベクリ・テペの建造物を建設するには、異なる生活集団や部族に所属する何千もの狩猟採集民が長期にわたって協力する以外になかった。そのような事業を維持できるのは、複雑な宗教的あるいはイデオロギー的体制しかない。ギョベクリ・テペは、他にもあつと驚くような秘密を抱えていた。遺伝学者たちは長年にわたって、栽培化された小麦の起源をたどっていた。最近の発見からは、栽培化された小麦の少なくとも一種、ヒトツブコムギがカラカダ丘陵に由来することが窺える。この丘陵は、ギョベクリ・テペから約三〇キロメートルの所にある。これはただの偶然のはずがない。ギョベクリ・テペの文化的中心地は、人類による最初的小麦の栽培化や小麦による人類の最初の家畜化に、何らかの形で結びついている可能性が高い。この記念碑的建造物群を建設し、使用した人々を養うためには、麗大な量の食べ物が必要だった。野生の小麦の採集から集約的な小麦栽培へと狩猟採集民が切り替えたのは、通常の食糧供給を増やすためではなく、むしろ、神殿の建設と運営を支えるためだったことは、十分考えられる。従来から見方では、開拓者たちがまず村落を築き、それが繁栄したときに、中央に神殿を建てたということになっていた。だが、ギョベクリ・テペの遺跡は、まず神殿が建設され、その後、村落がその周りに形成されたことを示唆している。『サピエンス全史 一文明の構造と人類の幸福 上』2016年9月30日 初版発行 著者 ユヴァル・ノア・ハラリ 訳者 柴田裕之 発行所 株式会社河出書房新社 Yuval Noah Harari SAPIENS: A Brief History of Humankind 第2部 農業革命 第5章 農耕をもたらした繁栄と悲劇 聖なる介入 P118-P121)

(..... ルネサンス最初の建築家といわれ、ピエトラ・セレナの石切場に近いフィレンツェをベースとして活躍したフィリッ

ポ・ブルネレスキ(一三七七—一四四六)が、この石を好んで用いたのである。しかもブルネレスキは、それまでには誰も試みなかったユニークな方法で、この石を用いた。まず彼は、ピエトラ・セレナで構造フレーム(柱・梁・アーチ)を表現し、そのフレームの隙間を、白い漆喰塗りのプレーンな壁で埋めたのである。あたかも白い紙の上に青いペンで線のフレームを描くようにして、実際の建築が作られた。実際には、ブルネレスキの建築は、当時の一般的な構造システム、すなわち組積造の壁で支えられている。フレーム構造で支えられているわけではない。コンクリートや鉄でできた構造フレームが建築を支えるようになるのは、一九世紀以降である。フレーム構造とはすなわち、線の構造であった。しかし、一九世紀以前のヨーロッパでは、石やレンガを積み上げて作る組積造が主流であり、一五世紀のブルネレスキもまた、組積造という技術的な制約の中で、組積造独特の、重たく、閉じたヴォリューム建築を作らざるを得なかったのである。しかし、ブルネレスキは、その制約の中で、線の建築を夢想していた。彼の頭の中には、来るべき線の建築の時代が見えていたに違いない。だから彼は、白い漆喰の壁の上に、ピエトラ・セレナを用い、細い線を描いたのである。ピエトラ・セレナ独特のあの青みを帯びたグレーの色調は、シャープな線を描くのにふさわしいものであった。白い紙の上に青いインキで線を描いたような、数学的で抽象的な印象を、彼は建築に与えようと試みた。鉄骨の線の建築が作られるはるか前に、彼はピエトラ・セレナの青白い色を利用して、線の建築を達成したのである(図22 捨子保育園, 設計:ブルネレスキ, 1445年)。ブルネレスキの次の世紀を生き、全盛期ルネサンスの中心的存在であったミケランジェロ(一四七五—一五六四)も、同じように、ピエトラ・セレナを好んだ。世界で最も美しい階段とも呼ばれる、ラウレンツィアーナ図書館のホールの階段では、白い壁の上にピエトラ・セレナを用いて描かれたフレームの中に、ピエトラ・セレナの青い階段が浮いている(図23 ラウレンツィアーナ図書館ホール, 設計:ミケランジェロ, 1552年)。ブルネレスキもミケランジェロも共に、組積造という当時の技術に拘束されながらも、未来にやってくるであろうフレーム構造の時代、すなわち線の時代を予告するような、線の建築を作った。彼らは線の預言者であった。その予言に最も適した物質として、ブルーグレーの冷たい肌をしたピエトラ・セレナが選ばれたのである。そして、彼らの活躍したフィレンツェの近くの山から、この石は切り出されていた。建築家の数学的、抽象的な発想と、彼らの地元のローカルな素材とを、神が結びつけた。建築はそのようにして、ローカルな場所と宇宙をつなぎ、物質と概念をつなぐのである。彼らの予言の通り、フレームの時代は三〇〇年後に到来した。鉄骨やコンクリートのフレームによって建築を支え、フレームの間をガラスや壁で埋めていくという建築(図24 クリスタル・パレス, 設計:パクストン, 1851年)が、一九世紀後半以降の、西欧建築の主流となった。線の技術によって超高層建築は可能になり、二〇世紀の都市と文明が生まれたのである。ブルネレスキとミケランジェロがピエトラ・セレナを用いて描いた予言は、数百年の長い射程を有していたのである。『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 ブルネレスキの青い石 P065-P067)

(……建築の近代化とは、建築の「金属化」であり、「線化」であった。その第一歩が、金細工師ブルネレスキの建築家への転身であった。……『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 建築における演繹法と帰納法 P075)

私達 当会は、私達 人類の社会的生産形態が、私達 人類の文化を規定し、形成する、というよりは、私達 人類の思念、行為、又は、集団としての文化が、私達 人類の知の体系、即ち、学術、学としての科学、技術、又は、社会的生産形態、に先行する、と仮定します。

○ 身体能力の延長に伴走する人類の活動の空間の在り方と人類と諸事象の関係性の再確認と再生産に伴走する人類の活動空間の在り方について

(カンディンスキーが版画の中に発見した重層的な時間概念は、ポスト工業化社会の、新しいデザイン手法、すなわちコンピュータを駆使したパラメトリック・デザインの本質を考える上でも、多くの示唆を与えてくれた。一九九〇年以降、コンピュータがどのように建築のデザインを変え、人間と建築との関係を変えるかという議論が、建築界を賑わせ、建築理論の中心となった。新しい技術が、新しいデザインを生むことで、建築の歴史が一新されてきた。古代から現代に至るまで、新しい技術が、新しい建築を開いてきたのである。二〇世紀のモダニズム建築は、鉄骨とコンクリートによる大スパン構造という新技術の産物であった。だとしたらならば、コンピューター・テクノロジーはどんな建築デザインを生むのか。コンピューター・デザインをルネサンス以降の様々なデザイン手法と比較して、大胆な整理を行う建築史家、マリオ・カルポ(一九五八—)は、コンピューター・デザインによって、建築デザインが、引き算のデザインから、足し算のデザインへと劇的に転換したと看破した。『アルファベットそしてアルゴリズム 表記法による建築—ルネサンスからデジタル革命へ』の中で、コンピューター・デザインは単に図面(ドローイング)の描き方を変えただけではなく、ドローイング(図面)とファブリケーション(施工・制作)の統合を促したと、カルポは指摘した。すなわち、かつては図面の制作と施工は分断されていたが、コンピューターによって、両者はひとつの連続した流れ、すなわち描き続け、作り続けるひとつのシームレスな流れへと転換したと、カルポは見抜いた。建築とは、いまや完結したひとつの作品ではなく、変更し続け、修正し続ける、不断のシステムへと変わり、それを彼は足し算のデザインと命名した。石版画は永遠に修正可能であり、永遠に足し続けることが可能であるとカンディンスキーが指摘したように、カルポはコンピューターが、建築を、修正のきかない銅版画から、永遠に続く修正システム、すなわち石と水と油との対話の産物としての石版画システムへと転換したのである。カルポはアルベルティ(一四〇四—一七二)以前、つまりルネサンス以前の建築は、同じように足し算であったと整理する。施主と親方と職人が共働して、建築というゆるい全体を作り続け、直し続けていたのである。そのゆるやかな世界に、革命的建築家アルベルティが登場し、建築の方法を抜本的に変えてしまった。初期ルネサンスを代表する建築家であり、建築評論家でもあったアルベルティは、引き算という新しい方法を導入し、竣工後の変更、修正を許さない「作家=アーティスト」という絶対者を生み出した。その転換によって建築が本来持っていた自由は失われ、建築とは、建築家という絶対者の描いた図面を実現するだけの、融通のきかない硬直したシステムになってしまったとカルポは指摘する。アルベルティ以降の長い不自由な

歴史を、ついにコンピューターが打ち破ったというのが、カルポの説である。アルベルティ以前には、描く人と作る人(職人)は分断されず、もちろん対立もせず、ゆるやかに連続的に建築は作られ続け、変更され続けていた。その濃密な人と様々な物との対話、一体感が、コンピューターによるファブリケーションによって復活するだろうと、カルポは予言するのである。さらにカルポは、コンピューターの建築への導入も、当初から、足し算をめざしていたわけではなかったと振り返る。一九九〇年代初め、建築デザインにコンピューターが導入され、パラメトリック・デザインという言葉が使われはじめた。コンピューターはただ、ぐにやぐにやとした、目新しい形態を創造するマシーンでしかなかった。九〇年代以前、その複雑な形態を描くには、恐ろしく手間がかかった。その「夢の形態」を実現するための、便利なドローイング・マシーンとして、コンピューターは導入されたのである。その意味で、一九九〇年代前半の、奇をてらった形態を特徴とするコンピューテーショナル・デザイン(図4)は、三〇年代にアメリカで流行した流線形デザイン(図5)の九〇年代版のリバイバルであったとカルポは厳しく総括する。一九九五年以降、ITの領域において、ネットワークへの関心が高まるのと併行して、コンピューテーショナル・デザインは、第二フェイズに突入し、形態の新奇さから、ファブリケーション・プロセス(制作過程)へと関心が移行した。描くことと作ることの境界の消滅、竣工後も変化し続ける建築へと関心が移った。その時代を、カルポはデジタル・デザインの第二期と呼ぶのである。カルポの二段階説の背景にあるのは、建築史家レイナー・バンハム(一九二二-八八)による『第一機械時代の理論とデザイン』(一九六〇年)という名著である。バンハムは一九世紀から二〇世紀までの人間と機械との関係を総括し、汽車、車などの第一世代の機械とラジオ・テレビ、家電などの第二世代の機械との間に、質的な差異があり、その差異が当時の建築デザインに対しても大きな影響を与えたと整理した。カルポはそこからヒントを得て、コンピューターという機械の時代にも、二相があるあることを見出したのである。コンピューテーショナル・デザイン第二期、すなわち、足し算の時代が求める永遠の修正を可能にするためには、一度できたら硬く固まってしまつて修正不可能なコンクリートは、全く適していなかった。コンクリートは建築デザインの中心的位置を失った。同時に、小さなピースのアグリゲーション(集積)によって作られる、粒子的な建築の追求が始まった。そしてその新しい波の中心人物の一人が僕であると、カルポは励ましてくれたのである。コンピューテーショナル・デザインの本質は、形態の革命ではなく、時間の革命だったというカルポの指摘が興味深い。形態がすべてに優先するという考え方自体がアルベルティ的であり、近代の産物なのである。アルベルティはルネサンス最初の建築理論書と呼ばれる『建築論』(一四八五年)を著わし、このテキストはその後の建築界に大きな影響を与えた。デカルトの『方法序説』(一六三七年)が哲学の世界で果たしたのと同様な役割を担った。アルベルティは形態を時間から分離した。それは、時間と分かちがたくつながった施工(工事)という行為と、時間を無視しても成立する設計(計画)という行為の切断でもあり、施工の軽視であり、設計者(建築家)の絶対化でもあった。形態の世界だけの純粋な理論を組み立てた『建築論』は、その純粋性ゆえに、テキストとしての普遍性を獲得し、建築家は建築界の絶対者としての地位を獲得したのである。しかし今、形態のデザイン論から、時間のデザイン論への転換が起こりつつある。時間という流れの中で建築課を相対化し、物質も人間もすべてが、時間の中を漂う粒子であるとする世界観にわれわれは回帰しつつある。その意味で本書は、ヴォリュームを解体する方法の探求であると同時に、建築家という存在を解体する方法の提案でもある。時間を軸としてアルベルティ以前への回帰をめざすカルポのデザイン理論は、すでにカンディンスキーの版画論によって先取りされていたともいえる。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 方法序説 足し算のデザインとしてのコンピューテーショナル・デザイン P018-P023)

私達 当会は、汽車、車などの第一世代の機械について、身体能力の延長である、と仮定し、ラジオ・テレビ、家電などの第二世代の機械について、私達 人類と諸事象の関係性の再確認と再生産である、と仮定します。

私達 当会は、汽車、車などの第一世代の機械、即ち、身体能力の延長に伴走する私達 人類の活動の空間の在り方について、事象の集中を基軸とする人工として形成されるヴォリュームの生成である、と仮定し、ラジオ・テレビ、家電などの第二世代の機械、即ち、私達 人類と諸事象の関係性の再確認と再生産に伴走する私達 人類の活動空間の在り方について、事象の離散的定置を基軸とする人工として形成されるヴォリュームの解体で在り得る、と仮定します。

## ○ 人類の身体性の回復

( ……たとえリブという線を、点とヴォリュームをつなぐ媒介として導入したとしても、リブとリブの間は、根気よく点(レンガ)で埋めていかなければならない。どうしても最後は、点とヴォリュームを強引につなぐというジャンプが必要となる。その宿命的な困難を、ブルネレスキはどう克服したか。微小な点(砂利、砂、セメント)を一気にヴォリュームへとジャンプさせる一種の魔術的工法が、二〇世紀の最も一般的な建築工法となった現場打ちコンクリートであった。しかもこの工法を用いれば、石やレンガをひとつひとつ手で積み上げるという手間を省くことができた。その意味で、コンクリートは魔術的であると同時に、怠慢な工法でもあった。二〇世紀建築は、魔術と怠慢を結合させることに成功した。だからこそ、二〇世紀の人々は熱狂し、麻薬に依存するように、コンクリート建築におぼれたのである。合理的であるかに見えるが、実は魔術と怠慢を愛するこの時代に、コンクリートはうってつけの素材であった。コンクリートは一瞬にして、夢の城を人々に提供してくれた。コンクリートで堅牢な城を建て、私有するという行為に、二〇世紀の人々は異様なほどの情熱を示したのである。 ……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 ブルネレスキの掃納法

P071-P072)

(二〇世紀の爆発する人口と経済を収容する、大きなヴォリュームの確保を目的として、剛性と粘性と気密性にすぐれた、コンクリートという素材が選ばれた。しかし、ヴォリュームを解体して、風通しのよい、軽やかな空間を作ろうという試みも、併行して起動していた。オランダの若き建築家達が結成したデ・スティールースタイルーという名のグループは、薄い

面を用いてヴォリュームの解体を試みた。ア・ス・アールの中心人物、建築家のヘリット・リートフェルト(一八八八—一九六四)は、シュレーダー邸(一九二四年)(図1)で、ヴォリュームの徹底的な解体を行い、建築界に大きな衝撃を与えた。そもそも家具職人の子として生まれ、自らも家具職人としてスタートしたリートフェルト(図2・図3)だからこそ、面の建築をやすやすと実現できたともいえる。建築はヴォリュームとして閉じる必要があったが、家具はそもそも、その必要はないからである。冬の気候の厳しい西欧では、建築は閉じることが大前提だった。一方、「家の作りやうは、夏をむねとすべし」(『徒然草』第五十五段)の日本では、閉じることが建築の要件ではなかった。リートフェルトはその保守的な西欧において、家具の世界から、薄い面による構成という方法を教わった。面と面、面と線を組み合わせれば、閉じていなくても家具になる。面と線を使って、身体や物を支えることができれば、家具として成立する。建築と身体との間にも、そんな自由でゆるい関係があってもいいと、リートフェルトは考えて、シュレーダー邸という「大きな家具」に到達したのである。リートフェルトの構成主義的な椅子より、僕がさらにおもしろいと思うのは、リートフェルトと同世代のオランダの建築家、ミケル・デ・クレルク(一八八四—一九二二)が農家の生活にヒントを得てデザインした、藁紐を用いた木製の椅子である(図4)。やわらかな線でできた肘掛けは、体にしっくりなじむ。クレルクやその弟子のピエト・クラメル(一八八八—一九六一)は、オランダの茅葺の農家の素朴さと、近代の生活とを接合しようと試みた(図5)。日本のモダニズム・デザインのパイオニアであり、分離派を立ち上げた堀口捨己(すてみ)(一八九五—一九八四)も、クレルク達のデザインに多大な影響を受けている。堀口は一九二〇年に東京大学の建築学科の同級生と共に、日本で最初の近代建築運動を立ち上げた。茅葺と近代的な箱とを組み合わせた紫烟荘(一九二六年)(図6)を発表し、若き天才の登場として、戦前の日本の建築界に衝撃を与えた。クレルクも堀口も、工業化という、時代の大きな流れに対する批判として、モダニズムを捉えていた。オランダでも、日本でも、茅葺は当時の農家で一般的であった。茅葺の自然さ、素朴さを取り戻すことが二〇世紀という時代、そしてモダニズムのテーマであると、かれらは考えていたのである。しかし、その後のモダニズム建築は、工業化を全面的に肯定し、コンクリートと鉄による大量生産の建築へと一気に傾斜していった。第二次世界大戦後から高度成長期にかけて、二人の提案したしなやかな面や線は、すっかり忘れ去られてしまった。丹下健三らの次世代は、堀口を、時代遅れのヒューマニストとして否定し去ったのである。堀口は挫折の中で、奈良の慈光院にこもって、茶室の研究に没頭し、研究者として大きな業績を残したが、建築家としては寡作であった。クレルクが農具にインスピレーションを得てデザインした木製の椅子を今見ると、そこには工業化の論理には収まりきれない人間の論理、身体論が息づいていることを発見することができる。椅子の肘掛けに使われているロープは、美しさとは無関係に、一見、だらっと垂れているように見えるが、そこにひとたび腕を載せると、ロープは身体を支えてピンと伸び、ロープという生きた線と、身体という生きた物体とが、生き生きとした会話を始めるのである。リートフェルトの硬い面からは得られなかった物と身体との会話が、クレルクの家具からは聞こえてくるのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 リートフェルト対クレルク P163-P165)

(シュレーダー邸は、二〇世紀初期のモダニズム建築群の中では、圧倒的に軽やかである。初期モダニズムの傑作を挙げるといわれれば、通常はル・コルビュジエのサヴォア邸(一九三一年、「方法序説」図7参照)とミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パヴィリオン(一九二九年、「点」図7参照)の名が挙がる。しかし、点・線・面という視点で建築を見直した時、シュレーダー邸の軽やかさは、他の二つを凌駕している。サヴォア邸は、線と面の建築というよりは、浮かんだヴォリュームであった。二〇世紀のスタンダードであるヴォリューム建築を、単に浮かしただけと捉えることもできる。浮かしただけで特別なものだと錯覚させたことに、コルビュジエの天才があったという言い方もできる。しかし、浮かしたことで、かえって空間としては貧しいものになった。コルビュジエがモダニズム建築の重要な手法として提唱した空中庭園は、大地との関係は薄く、周囲の森とは切断され、貧弱で殺風景である。コルビュジエを訴えたサヴォア邸のクライアントの気持ちはよくわかる。にもかかわらず、「ヴォリュームの世紀」であった二〇世紀には、この寒々とした住宅が、大傑作とたたえられたのである。バルセロナ・パヴィリオンの柱のディテールを見れば、ミースがヴォリュームの解体に、興味という以上の執念を持っていたことは、間違いない。普通の人には柱は線であるに見える。しかしミースには、柱も鈍重なヴォリュームに見えていた。重さを支え、地震に耐えなければならぬのだから、当然柱も太さが必要となる。ミースはそれが許せなかった。鉄骨の柱を、角パイプではなく、わざわざエッジの立った十字型断面とすることで(図7)、柱のヴォリューム感は薄れ、エッジのシャープな線が眼を刺激する。ヴォリュームとなりかねない鉄の柱を、ミースは細い線とすることに成功した。バルセロナ・パヴィリオンの壁もかなり薄い。まず石の下地となるレンガを、普通とは逆の向きで積むことで、トータルで一七センチの厚みの、石とは思えないような薄い壁を作った(図8)。通常、レンガやコンクリートの壁の両側に石を貼り付けると、三〇センチ程度のぼてつとした壁厚になってしまう。ミースの石壁はその標準寸法の半分の薄さである。二〇世紀における面の建築としては、突出して薄い。石工の子として生まれ、石の使い方を熟知したミースだからこそ、石の壁を常識的な収まりでは考えられないほどに薄くすることに成功し、薄い石壁が張り詰めるような緊張感を空間に与えたのである。しかし、いかにミースでも、シュレーダー邸の家具を思わせるような薄さにはかなわなかった。石工が、家具職人の作り出す薄さにはかなわなかったともいえる。しかし、そのシュレーダー邸の薄い面さえも、僕にとっては厚すぎ、硬すぎるように感じられた。そして、面や線の組み合わせ方(構成)を工夫して、全体を軽やかに見せようとする、シュレーダー邸の構成主義的な形態操作も(本章図1参照)、その主知主義的で人間中心的なわざとらしさが鼻についた。構成主義とは、二〇世紀のヴォリューム主義を隠蔽するための、苦し紛れの発明ともいえる。点・線・面が自由に軽やかに組み合わせたり、あたかも踊っているようにふるまうが、構成が自由であればあるほど、作家という絶対者の恣意的な身振りが際立ち、主知主義的ないやらしさが鼻につく。構成するエレメントの重さや厚みを、構成主義がかえって強調してしまう。カンディンスキーの『点・線・面』中の、構成主義的な方法を詳述した部分が、退屈でいやらしく感じられたように。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 ミース対リートフェルト P165-P168)

私達 当会は、二〇世紀の、建築のヴォリュームの形成に関する、レンガ積みからコンクリート現場打ちへの建築工法の転換について、之を、一気にヴォリュームを出現する魔術的事象であり、手間の省略と、怠慢の工法であるとすれば、同時に、

とは、建築行為に於ける、身体はのび伸、身体の内側、身体の内側、と仮定します。

私達当会は、私達人類の現代に於ける活動の空間について、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』が、私達人類の活動の空間に於ける、私達人類の身体と環境、自然との関係性、又、スケール、又、人類の思索と行為、に於ける、身体性の回復へのジャンプを包含して、之を定義する、と仮定します。

#### ○ 人類の活動の空間における演繹法と帰納法

( 建築にも演繹的アプローチと、帰納的アプローチとがある。二〇世紀のコンクリート建築は演繹的であった。まず、全体の形のイメージがあって、その形を実現するために、部分を構成する素材やその結合のディテールが結論される。部分は全体に服従しなければならない。コンクリート建築では、すべての部分が全体に従属していた。一方、ブルネレスキの方法は、部分から全体へと到達しようとする帰納法であった。部分の性質、その限界を徹底的に洗い出した上で、その部分と部分とが繋ぎ合わされて、上位の段階へと昇っていく。その作業を積み重ねていった末に、時として、予想もしていなかったような全体が出現する。それが帰納法という方法である。帰納法は時として、驚きに満ち溢れ、想像を超えた結果を連れてくる。…… 『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 建築における演繹法と帰納法 P073-P074)

私達当会は、私達人類の活動の空間の形成について、私達当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』に於いて、まずは演繹的アプローチよりも帰納的アプローチを採用する、と仮定します。

#### ○ 人類の活動の空間と人類の活動の空間に於ける人類の意図の空隙

( …… ブルネレスキ以降の建築の空間の歴史は、金属という新しい物質の参加によって開かれていった。金属が参加することで、歴史は大きく転換していった。金属と線とは、切っても切れないものだったからである。鉄の柱をはじめとする、鉄が作る線によって大空間の創造が可能となり、建築空間のスケールは拡大していった。…… 『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 建築における演繹法と帰納法 P074)

“ …… 『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』以降の私達人類の活動の空間の歴史は、宇宙と自然と遺跡群という新しい空間性の参加によって開かれていった。宇宙と自然と遺跡群が参加することで、歴史は大きく転換していった。宇宙と自然と遺跡群と“土地の造形”とは、切っても切れないものだったからである。個別の遺跡や遺跡群をはじめとする、宇宙と自然と遺跡群が作る“土地の造形”によって人類の意図の空隙の存在が可能となり、私達人類の活動の空間の在り方とスケールは相対的に重層化していった。 …… ”

私達当会は、私達人類の活動の空間について、宇宙と自然と遺跡群の存在と時にその離散的配置、人類の意図の空隙の存在によって、人類の活動の空間の在り方とスケールを相対的に重層化した私達人類の活動の空間の実態を例示できる、と仮定します。

#### ○ 未来へと、永遠の時間へと開かれている空間

( …… バラツキがあり、汚れがあり、傷みがあり、デコボコしているということは、それだけ点が自由であり、点がより点らしいということでもある。点をより自由な存在として、解放してやろうと考えるならば、汚れを歓迎し、傷みを楽しまなければならぬ。それは、建物ができた後についてくる、長く、予想のつかない時間に対して、開かれた建築を作るということである。完成した後に、様々に汚れ、傷んだとしても、最初からバラついた点は、エイジングを許容し、飲み込んでくれる。きれいで、整然とすぎた建築は、汚れを許容しない。現代の日本建築は、その不寛容な方向に向かって進化し、その結果、日本の都市は汚れを許容しない、居心地の悪い環境となってしまった。カンディンスキーは、石版画は永遠に修正が可能であり、加算的で、永遠に完結しないと指摘した。バラついた点の建築もまた、汚れや傷を最初から内蔵しているがゆえに、建物の竣工という閉じた時間に封じ込められることなく、永遠の時間へと開かれている。石版画と同じように、汚れや傷は、環境を自由に、やさしくする。 『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 点の階層化とエイジング P092-P093)

私達当会は、私達人類の活動の空間について、人類の活動の空間が、“未来へと、永遠の時間へと開かれている”とは、人類の活動の空間の性質が、人類の活動の空間上の様々な改変に対し、可逆性を維持しているとの状態である、と仮定します。

私達当会は、私達人類の活動の空間について、人類の活動の空間が、“未来へと、永遠の時間へと開かれている”とは、人類の活動の空間が、地球と宇宙の自然と人類の関係性、又は、その変化、を柔軟に許容し、包含するとの事態である、と仮定します。

私達当会は、私達人類の活動の空間について、人類の活動の空間が、地球と宇宙の自然と人類の関係性、又は、その変

私達 当会は、私達 人類の活動の空間について、人類の活動の空間が、地球と宇宙の自然と人類の関係性、又は、その変化、を柔軟に許容し、包含する、とは、人類の活動の空間の性質が、人類の活動の空間上の様々な改変に対し、可逆性を維持しているとの状態である、と仮定します。

### ○ 可逆性との事象

私達 当会は、私達 人類の任意の特定の“保存、保全、継承、保護”たる行為について、当該の事象の性質や形態や存在の“可逆性”を維持することである、と仮定します。

### ○ 生きた造形と死んだ造形、並びに、生きた人工と死んだ人工

(……インゴルドは、時間という概念を導入することで、自由で生成され続ける生きた線と、事後的に、生成の刻印として取り残された死んだ線とを区分したのである。この対比は、日本の伝統木造における、芯おさえと面おさえの対比も想起させる。芯おさえで定義される木材は生きた線である。一方、面おさえで定義される木材は平滑な表面を持つ、製材されて殺された線である。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 生きている線と死んだ線 P150)

私達 当会は、自然と人工の造形について、日常に人類が知覚する時間という概念を導入し、自由で生成され続ける生きた造形と、事後的に、生成の刻印として取り残された死んだ造形、を仮定します。

私達 当会は、自然の造形について、時間の経過と共に、刻々と、生成し出現し枯死し崩壊する、生きた造形、人工の造形について、人類の動作の刻印として取り残され固定された、死んだ造形、と仮定します。

私達 当会は、人工の造形について、日常に人類が知覚する時間という概念を導入し、人類の所期の意図による規定を逸脱し、新しい事象や局面や性格が自由に生成され追加され変化し続ける生きた造形、人類の所期の意図による規定に依存し、人類の動作の刻印として取り残され固定された死んだ造形、の二つを仮定します。

私達 当会は、西欧の石やレンガによる組積造や日本の伝統木造建築やバックミンスター・フラーの圧縮材と引っ張り材によるテンセグリティの構造(接点があつちり固められてはいない：載せる、積まれた、組まれた、編まれた、織り込まれた構造)、又、肌理(テクスチャー)、の崩壊と修築や欠損や改築や動揺や経年その他の変化、又は、之を許容し包含する様式において、人類の所期の意図による規定を逸脱し、新しい事象や局面や性格が自由に生成され追加され変化し続ける生きた造形、ラーメン構造やフレーム構造などの剛接合の構造について、又は、人類の所期の意図による規定の逸脱を許容しない様式において、人類の所期の意図による規定に依存し、人類の動作の刻印として取り残され固定された、死んだ造形、と仮定します。

私達 当会は、日本の伝統的な工法による石垣や、遺跡、遺跡である“土地の造形”について、“生きた造形”である、と仮定します。

( 建築における点という、まずは石ころを思いつく。そもそも大地の中で、石は巨大なヴォリューム、すなわち塊として存在した。石＝大地といってもいいくらいに、そのヴォリュームは大きくて重い。そのままでは人間の手には負えないので、石は切り刻まれる。人間によって切り出されることもあるし、自然の力によって砕かれて石ころになることもあるが、いずれの場合でも、石は点として、われわれの前に立ち現れる。点になってはじめて、人間という、やわで小さな存在でも石を扱うことができるようになる。石のことを考えはじめると、世界と人間との関係が見えてくる。世界がいかに大きく、人間がいかに小さく、弱く、頼りないかが見えてくる。 点という小さな存在になった石を、再び積み上げていく構造システムを組積造(メゾンリー)という。世界を小さく切り分けて、再び積み上げ組み合わせる大きくするという面倒なことを、人間は繰り返してきた。それが建築という行為の本質であった。……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 大きな世界と小さな石ころ P053)

( それは、日本の建築基準法に限った曖昧さではなかった。組積造の建築が、どう地震に耐えているかは、計算によって確認されているわけではなく、経験に依存していたのである。点という小さな物を積みあげ大きなヴォリュームが生まれるということ自体が、いまだに経験に頼らざるを得ないほどに、神秘的な行為だからである。小さな点が、大きなヴォリュームになるためには、魔術的なジャンプが必要なのである。二世紀でも、人は魔術に頼って点を取り扱っている。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 点からヴォリュームへのジャンプ P061)

( …… 日本の伝統木造建築では、しばしば線と線を、ずらして組み上げる(図9)。いわば、材木という線の上に、もう一本の材木をそっと載せる。ずらすことによって、材木に欠き込みを入れる必要がなくなり、その結果、断面の欠損が起こらないので、一本一本の材木すなわち線の強度を保つことが可能となる。しかも接点はずれていても、力はスムーズに伝達されることを、日本の大工は経験的に理解していた。日本の木造はずらしの木造であったといってもいい。 線と線が一点で交差する、西欧流のカルテジアン・グリッド(デカルト流の直交グリッド)(図10)とは別のやり方で、線が編まれていたのである。西欧の近代の数学と工学のベースになっていたのは、きまじめなカルテジアン・グリッドである。しかし、接点をずらすこ

とで線はより軽やかに自由になり、空間に動きが生まれることも、日本の大工は知っていた。そしてすらしによって、線材と線材とが分節され、線が面とならずに線のままにとどまり、軽やかさ、透明感が生まれてくることも、大工は熟知していたのである。カルテジアン・グリッドが図式的で、幼稚な幾何学に依拠していたのに対し、日本のすらしの木造は、経験主義的であり、しなやかであった。……『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 丹下健三のずれた線 P115-P116)

(…… それに比較すると、日本の伝統的な木造建築を構成する線は、はるかに繊細で、人間の身体を脅かすこともなかった。柱も梁もおおむね一〇センチ内外の断面寸法を持っていて、長さも三、四メートルであった。一人で十分に運べる大きさと重さの、繊細なやさしい線で、空間のすべてが構成されていた。そんな美しい線の技術、デザインが日本には眠っていたのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 モダニズムの線と日本建築の線 P127)

私達 当会は、“生きた造形”について、人類の身体的スケールを造形の原点とする、と仮定します。

○ 遺跡：死にきれずに、生きながらえている空間と事象：その継承

(……一方、東洋の墨は、その中に濃淡があり、カスレがあり、線は死にきれずに、生きながらえている。……東洋においては、生と死すら曖昧であり、死んでしまったはずの線の中にも、生命があり、息の音が聞こえるのである。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 筆蝕論の線 P151)

私達 当会は、遺跡について、そこに濃淡があり、カスレがあり、空間と事象は死にきれずに、生きながらえている。東洋においては、生と死すら曖昧であり、死んでしまったはずの空間と事象の中にも、生命があり、息の音が聞こえる空間と事象である、と仮定します。

(…… しかし、一方でコルビュジエは「ニューヨークの摩天楼は小さすぎ、そして多すぎる」と批判した(『伽藍が白かったとき』)。巨大ヴォリュームは大いに結構であるが、工場で作った金属の単調な線でヴォリュームを隠蔽するような、アメリカの線、ミース流のごまかしを、コルビュジエは欺瞞と見做したのである。コルビュジエは……一九五一年からインドの大都市チャンディガールの計画に携わり……インドという場所では、線を用いてヴォリュームを化粧するアメリカ的なコスメティック、隠蔽は、全く無効であった。当時のインドにはまっすぐな線を作る技術など存在しなかった。コンクリートで作った荒々しいヴォリュームを、赤い大地の上に投げ出すしかない。その赤い大地の上で、二〇世紀のアメリカとは対極的な方法を、コルビュジエは発見したのである。インドとの格闘は、コルビュジエ自身にとって大きな出来事であっただけではなく、その後の世界の建築デザインに決定的な影響を与えた。ブルータリズム(野生主義)と呼ばれる、荒々しいコンクリートの表現は、チャンディガールがきっかけとなった。ブルータリズムは日本の戦後の建築にも大きな影響を与え、木目のきつい杉板型枠で打設した荒々しいコンクリートは、戦後の一時期、日本の公共建築の制服になった。幾何学に支配された美しい白い箱＝サヴォア邸に代表される前半期のコルビュジエ以上に、後半生の野蛮なコルビュジエは、二〇世紀に大きな影響を与えたと、僕は考える。なぜならば、どんな荒々しい大地にも建築を建ち上げられることを、コルビュジエはチャンディガールで示したからである。インドの赤土の上にも現代建築が成立しえることを示して、コルビュジエは、どんな大地の上にも、現代の人間が、力強く生き生きと生活できることを示した。それは世界のすべての場所に希望を与える、希望の建築であった。前半生のコルビュジエがリードしたモダニズム建築は、世界を画一化しようとする工業化社会の、インターナショナル建築であった。一方、後半生の彼の建築は、世界の多様化の途を示し、世界のすべての場所に希望を与えた。インターナショナルではなくワールド・アーキテクチュアであった。……チャンディガールには、二〇世紀を超える何物かが、存在していた。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 線 コルビュジエのヴォリューム、ミースの線 P113)

私達 当会は、遺跡について、その遺跡たる空間と事象に於いて、ごまかしと欺瞞によって、存在と構造を分断し又破壊し、又は、表層と肌理(テクスチャー)を化粧してコスメティック、隠蔽するならば、濃淡があり、カスレがあり、死にきれずに、生きながらえている、生と死すら曖昧であり、死んでしまったはずの空間と事象の中に、生命があり、息の音が聞こえることは、二度となく、事象が遺跡の本源的な意義に於いて継承され、伝えられることは、事象の断絶により、不可能となる、と仮定します。

私達 当会は、遺跡について、私達 人類は、私達 人類には遺跡を化粧する方法など存在しない、その遺跡としての荒々しいヴォリュームを、その土地の大地の上に投げ出すしかない、と仮定します。

私達 当会は、遺跡について、私達 人類は、私達 人類には遺跡を化粧する方法など存在せず、その遺跡としての荒々しいヴォリュームを、その土地の大地の上に投げ出すしかないことを自覚し、その土地の大地の上に投げ出す時、ようやく、後の人類に、事象が遺跡の本源的な意義に於いて継承され、伝えられることが、事象の連続と共に、可能となる、と仮定します。

## ○ 人類：纏う生命体

私達 当会は、私達 人類について、まず草や布を、次に、建築を、集落を、環濠を、個体や気体や液体を、環境として、自然を、個体の自身に引き寄せて、時に、組み換え、又は、改変し、纏う、特異な生物生命体である、と仮定します。

私達 当会は、纏うという生物の行為について、甲殻類や蠕形動物の一部が自然の部分の纏い、哺乳類では鯨(鯨偶蹄目-鯨凹歯類、海豚を含む)が海を纏うとも考え得る他は、私達 人類に特異な行為である、と仮定します。

私達 当会は、纏うという私達 人類の行為について、複数の個体に共有することができず個体に係る行為であり、食物が消費であると異なり、保有、又、個体の所有に係る事象であり、私有の概念の契機である、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類について、陸上に棲息する哺乳類のうち、体毛を喪失し同時に柔弱な皮膚を有する、特異な生物である、と仮定します。

私達 当会は、纏うという私達 人類の行為について、私達 人類の文明のうち、言語が人類の身体能力に附随する情報の交換と共有の拡張又概念の再生産たる情報の変容としての追加事象であり、道具の製作が人類の身体能力の延長としての追加事象である処、火の使用が人類の身体に由来しない追加事象であり、纏う行為が人類の身体の弱点を補填する追加事象である、と仮定し、それぞれ私達 人類にとって特異な性格を有する追加事象である、と仮定します。

( ティム・インゴルドが『ラインズ』の中で指摘したように、線には、軌跡としての線(trace)と、糸としての線(thread)の二種類がある。クレルクの椅子の肘掛けに用いられた藁のロープは、生きた線であり、インゴルドの言う糸である。同じように、面にも二つの種類があると僕は感じる。ひとつは軌跡としての面、すなわち、何かの痕跡を記述した死んだ面、もうひとつは、空間の中を自由に舞う、生きた面である。リートフェルトの面は、薄くはあっても、死んでいるように、僕には感じられた。一方、僕の摸している生きた面は、量子力学の超弦理論の比喩を用いるならば、弦のような自由さをもって、粒子と波の二重性の間を振動し続ける面である。しなやかな面を作り出すには、単に面を薄くするだけでは不十分である。何らかの力、作用を受けて、踊り出すようなしなやかさを持った面を建築に導入することができれば、面を道具に用いて、重いヴォリュームの解体ができるかもしれない。そんな風に考えていた時、大学院時代、サハラ砂漠での調査旅行で出会った、ベドウィンのテントの記憶が突然よみがえった。木の枝でできた細い支柱を砂に突き刺し、その上に布を架け渡しただけの簡単なテントである。遊牧の民ベドウィンは、枝と布をラクダに積んで、サハラを旅していた。テントの薄い膜が、サハラの厳しい気候に耐え、遊牧生活を支えていた。原広司教授率いる僕ら六人の集落調査隊も、同じくテント族であった。プラスチックの細い支柱とナイロン膜の布を組み合わせた日本製の小さなテントを車に積んで、僕らは、ベドウィンに倣ってサハラ砂漠を縦断したのである(図9)。日本製テントはコンパクトにたたむことができ、モビリティという点ではすぐれていたが、ベドウィンのテントに招かれてお茶をふるまわれた時に、その布の作る美しさ、快適さには、とてもかなわないと感じた。布が、ベドウィン文化の中心を占めているように感じられた。布は砂の上に何重にも敷きつめられ、布の床が、彼らの身体と砂漠との関係性を定義する。冬の夜の砂漠は、かなり温度が落ちるが、ベドウィンは身体と砂の間に布を重ねることで、身体をやわらかく支え、気温の変化に対応し、やわでちっぽけな身体に近傍に、菌のような領域を形成する。布が大地と彼らの身体との関係を定義し、枝によって支えられた薄い一枚の布が、彼らと砂漠との関係を定義するのである。布はベドウィンの日常のすべてに入り込んでいた。当時、世界的に流行のラジカセは、砂漠の民にとっても必需品のようだったが、そのラジカセを肩から掛けるためにデザインされた布のバッグはあまりに素敵で、ひとつ譲ってもらえないかと頼んだ。あの布のバッグに入れられた途端に、安っぽいラジカセが別のものに見えた。布というしなやかな面は、生活を転換し、世界を化身させる力があつた。:『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 サハラで出会ったベドウィンの布 P168-P170)

( 一九世紀の最も重要な建築理論家、ゴットフリート・ゼンパー(一八〇三-七九)は、布という面、すなわち織物に対し、そして編むという行為に対して、異常と思われるほどに高い関心を寄せ、独自の建築理論を打ち立てた。建築は骨組み(フレーム)からスタートしたとする考え方が、ルネサンス以降の西欧の建築家を支配していた、すなわち、線を強固に組んだフレームを使って、建築を説明し、建築を作ろうとする論理である。フレーム主義の代表は、丸太の骨組みから建築は始まったとするロジエ神父の『建築試論』(一七五三年)である。先述の通り、ロジエの絵はいまだに、多くの建築の教科書で、建築の始まりを説明するのに使われている(「点」図3参照)。そして今日でも建築構造の主流はラーメン構造である(「点」図17参照)。工事現場に建てられた、柱と梁のラーメン構造のフレームを見るたびに、ロジエのフレーム主義がいまだに建築の基本であり、人間が作る環境を支配していることを突き付けられているようで、暗い気持ちになる。日本の伝統木造構造は、柱と梁の組み合わせなので、ラーメン構造と思われがちだが、実はそうではない。すなわちフレーム構造ではない。ラーメン構造とは違って、柱と梁の接点は、がっちり固められてはならず一剛接合ではなく一ポルトも釘も使わずに、材料同士を欠き込んで、組み合わせているだけである。すなわちゼンパー流に言えば、柱と梁とが編みであるだけである。そんなゆるいジョイントが、なぜ地震国で生き残ったのだろうか。その秘密は、柱と梁の間を土壁、欄間、襖、障子をはじめとする様々なやわらかな装置でつないできたことにある。日本の土壁は、組積造の石やレンガと違って、やわらかであり、柱や梁ともゆるく接合されていて、地震がきたら簡単にひびが入ってしまうような、頼りないものであつた。しかし、この頼りなさによって、地震力を吸収していた。このゆるく曖昧なシステムで、日本の木造建築は地震に耐えてきた。ガチガチに固めないほうが耐震性が高いという解答に、日本人は経験を重ねて辿り着いたのである。柱と柱の間に存在していたこのようなやわらかな装置が、最近注目され、柱間装置という特別な名前と呼ばれるようになった。ヨーロッパでも、ライン川の谷には大きな断層があつて、地震が起こるが、この地域でも、木造の柱と梁の間を、土壁で埋めたやわらかな構造システムが主流となっている。かの地の人々もまた、地震の経験を重ねたことによって、日本の木造と同じ知恵に到達したのである。近

代の建築がフレーム主義、すなわち幼稚な図式主義に支配される前には、世界には多様な織物建築が存在し、人々は織るように、やわらかな建築を作ってきたのである。一方ゼンパーはロジエ流のフレーム主義を否定し、建築はフレームではなく、覆いであり織物であると定義した。フレームがなくても覆いは成立すると、ゼンパーは考えた。彼は脱フレーム主義のパイオニアだったのである。ゼンパーがそう考えるようになったきっかけは、一九世紀最大の国際イベントであった万国博覧会で展示された、辺境の集落であったと考えられている。クリスタル・パレスで開かれたロンドン万博(一八五一年)の展示デザインに携わったゼンパーは、実際の原始的な住居に触れて大きな衝撃を受けた。僕がベドウィンの布の住居に衝撃を受けたように、ゼンパーは西欧の外部に位置する、辺境の集落に出会うことで、織物の重要性に気づき、織物主義を生み出した。ゼンパーの父親が繊維関係のビジネスをしていたことも関係していたかもしれない。父親が扱っていた布は、辺境の布ほどには、自由でしなやかなものではなかっただろうが。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 ゼンパー対ロジエ P170-P172)

#### ○ 概念的な人類の空間と身体的な人類の空間

私達 当会は、概念的な人類の空間、又は、空間との関係性の理想について、移動距離ゼロ、到着時間ゼロ、の密着空間と、自身の空間上の位置の自由である、と仮定します。

達 当会は、身体的な人類の空間、又は、空間との関係性の実態について、人類が知覚する距離と時間により形成される空間に難散的に人類が知覚し想定し得る様々な事象を相対的重層的に包含し、様々な事象は、人類の概念にとって契機又は根拠を形成し、私達 人類は、事象との関係に於いて、人類自身のうちに人類が豊かと認識し得る世界を形成し、蓄積してきた、と仮定します。

#### ○ “分格” (又、“総格”) との仮定

私達 当会は、任意の物体、又は、事象は、その相対的重層性によって、人類の各それぞれの個体に対応し異なる特異な特定の関係性の群を形成する、と仮定します。

私達 当会は、任意の物体、又は、事象に関する、その相対的重層性により、人類の各それぞれの個体に対応して形成する異なる特異な特定の関係性の群を、“分格” と仮称し、存在の全体に集合する“分格” の総体を想定して、之を、“総格”、と仮称します。

私達 当会は、任意の物体、又は、事象の“総格”について、任意の物体、又は、事象に関係する人類によって多種多様多岐に亘り、同時に、常に変化し得る、人類は、之を、把握することができない(主知的に把握することができない)、と仮定します。

私達 当会は、例えば、“生きた造形” と “死んだ造形” と “分格” と “総格” について、“死んだ造形” よりも “生きた造形” に於いて、より多くの豊かで変化に富む多様な “分格” と “総格” が出現する、と仮定します。

( 仏ノーベル賞作家カミュの「ペスト」の発行部数が日本で100万部を超えるなど、感染症を扱った文学作品が注目されている。「優れた文学作品には、未曾有の出来事に出合ったときの様々な人々の性格や心の動きなどが『一般論』ではなく、具体的に描かれている。そこのあるのは共感だと思う」と話す。人々が自宅に籠もる時間が増えた。「コロナ関連を中心に、周りでは膨大な情報が飛びかっている。しかし、対処の術のない情報、過剰な情報は、不安を与えつぱなしにする。それに対し、文学は読者に抱かせた感情に責任を負っている。そこに、心を落ち着かせる作用があるのでは」危機の時代に求められる小説には「現実を忘れられるような作品と現実に向き合った作品がある」と考える。もともと、自らの書き方は変わらないという。「コロナ禍の前に書いた作品が今になって無効になるようでは、何かが間違っていたということ。作家は自分が信じるものを執筆するしかない」と強調する。…… 「東日本大震災後も日本人の価値観が変わることが期待されたが、自己中心主義が進むなどむしろ反動的にさえた。しかし台風被害など災害・災厄は続く。今後も感染症の流行は起きるだろう。いまや『非日常』が当たり前になった。これまで私たちが考えていた『日常』はたまにしか訪れない小康状態だと覚悟し、リスクとの向き合い方や医療体制のあり方を考えなくてはいけない」考え次第でピンチはチャンスになるという。「(人は関わる相手によって別々の人格『分人』を持つという)『分人主義』を私が思いついたのは、アイデンティティーの問題に悩んでいたときだった。今回のコロナ禍でも(インターネット上で会話する)『オンライン飲み会』といった動きが広がっている。自分もやってみたら意外に楽しかった」。新たな文化を生み出す機会にもなると見る。先日、海外の友人とオンラインで話をしていたとき「分人」が話題になった。「それまで彼は『分人』という概念がよく分かっていなかったが、コロナ禍で閉じこもり、ピンときたらいい。会う人が限られたことで自分の『分人』数が減り、違和感を覚えたのだろう。強制的にそうした事態に追い込まれていることが問題なのですが」講演、イベントの中止や子供のケアに頭を悩ませつつも、小説執筆に集中する日々だ。(編集委員 中野稔) : 18. 2020年(令和2年)5月18日月曜日 日本経済新聞 第24面【文化】【文化】連載特集『コロナと創作 (1) 文学が描く危機下の共感「非日常」価値観変える力』作家 平野啓一郎氏)

## ○空間のデザインについて

私達 当会は、空間のデザインについて、私達 人類の空間認識に於ける、様々なスケールの変化を包含する、様々な事象の全体と部分の関係性の生成、同時に、事象の“分格”の生成と“総格”への考察である、と仮定します。

## ○新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延に係る新常态(ニュー・ノーマル)に関して

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延に係る新常态(ニュー・ノーマル)に適合する、と仮定します。

私達 当会は、私達 当会が提案し要望する『原遺跡計画』並びに『否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成』について、離散的事象、即ち、隙間をあげながら集合する、距離を置いて、ゆるやかに雑然と集合する、人々や事象が、集まりながら、同時に離れている、空間に於いて密閉と密着と密接を回避する、事象を顕現する、と仮定します。

— 日本列島の上に人はどのように住まうのか。 —

(日本にとっては横浜港に停泊したクルーズ船の集団感染がプロローグとなり、今や列島全体がクルーズ船と化した。2月に報道を見ながら思い出したのが、18世紀から19世紀にかけて、イギリスの川岸や海岸に係留された監獄船である。監獄に囚人があふれ、廃船を活用したが、衛生状況が悪く、多数の死者が出たという。クルーズ船は横倒しの超高層ビルよりも大きい乗り物だ。が、空母でも感染が発生したように、一度、閉鎖された環境で感染が始まると、手に負えない。一方で陸地との隔離や機動性ゆえに、病院船も注目されている。実は空気の流れが、病院建築の重要な課題として認識されたのも、衛生観が変化した18世紀に遡る。ウイルス学の登場前だが、腐敗した空気は害を及ぼすと考えられたからだ。その結果、18世紀末には呼吸する機械としての病院デザインが、建築家によって提案されている。白色を好み、「衛生陶器」と揶揄されたモダニズムの建築も、健康を重視した。例えば、ル・コルビュジエの有名なサヴォア邸は、本体を持ち上げるピロティが、じめじめした地面と切り離すことで風通しを良くし、屋上庭園は日光を浴びる運動を想定している。彼がパリの中層の町並みを否定したのも、集合住宅を高層化すれば、足元の開放が可能となり、都心に緑地や公園を増やし、衛生的な都市が成立するからだ。しかし、現状はリスクが高い都市モデルよりも、フランク・ロイド・ライトが提唱した田園に分散居住するブロード・エーカー・シティの方がオンライン社会に適合するだろう。災害や戦争と違い、ウイルスは建築を物理的には破壊しない。人だけを攻撃する。したがって、ピカピカの都市に人が不在のシュールな風景が出現した。建築の立場からは、廃墟を復興させるような貢献はできない。ただし、被災直後の避難所や仮設建築の方法論は使えるだろう。中国・武漢で瞬時のうちに建設された巨大な仮設病院も記憶に新しい。日本では、圧倒的な病床不足を解消すべく、すでに軽症者をホテルで受け入れたり、幕張メッセなどの大規模施設を臨時病院に転用することが検討されている。横浜の武道館に収容されたネットカフェ難民に対し、飛沫感染予防をかねて、坂茂は災害時に活躍した紙管の間仕切りシステムを持ち込んだ。これから台風や地震が発生した場合にも問題になることだが、避難所で人が密集できないのが、新型コロナウイルスの厄介なところだろう。従来、人が集まるのは、良い建築であると、無条件で考えられていた。しかし、その前提が完全に覆ったのである。新しい空間モデルとして想起されるのが、2003年の藤本壮介の安中環境アートフォーラムのコンペ最優秀案だ。これはアメーバのような輪郭の建築であり、空間の形式として説明すると、多方向に突き出すひだ状の空間が並ぶが、それぞれは中央に向けて開く。ゆえに、隣の空間とは壁で仕切られているが、対面する空間は遠い。つまり、集まりながら、同時に離れている。これは実際に住宅で応用されたように、スケールを変えたり、かたちを調整することで、様々な汎用できる空間モデルのように思われる。 □ 犯罪者を乗せてオーストラリア行きを待つ英国の監獄船(19世紀初頭、木版画) = GRANGER.COM/アフロ提供(図版)(いがらし・たろう=建築評論家) : 2020年(令和2年)5月12日 火曜日 日本経済新聞 第34面【文化】【文化】連載特集『疫病の文明論 ⑥ 変わる建築 空気の流れ、重要な課題に 衛生観反映するデザイン』五十嵐太郎)

(緊急事態宣言は39県で解除されたものの首都圏などでは続いている。自粛ムードに慣れてきたとはいえ、さすがに閉塞感が増してきた。……ここでは日常の生活様式についてではなく、「東京への一極集中」というマクロの問題を考えることにしたい。……人類の歴史とともに古いパンデミックは人口密集、つまり、大都市の問題であった。1665年からロンドンではペストにより約10万の命が失われた。猖獗(しょうけつ)をきわめる感染症のもたらした惨状を「ロビンソン・クルーソー」の著者ダニエル・デフォーは、「ペスト」(1722年)で克明に描いた。大都市は生命にとり危険なところだという20世紀初頭までの常識を、われわれはいつのまにか忘れていたのではないだろうか。巨大地震のリスクに加えて、感染症リスクの深刻さを新型コロナ禍は突きつけた。関東大震災(1923年)の後、生粋の江戸っ子だった谷崎潤一郎は関西に「ターン」した。日本列島の上に人はどのように住まうのか。19世紀末に始まり、戦後に加速した「東京への一極集中」は今なお続く。これを是正すべく政府が旗を振っても効き目はいま一つだ。しかし、強いられた異常な環境下で急速に進む「オンライン化」と、大都市の感染症リスクへの再認識は、やがて新たな歴史的Uターンを生み出すかもしれない。(与次郎) : 2020年(令和2年)5月20日 水曜日 日本経済新聞 第19面【マーケット総合2】【大機小機】『コロナと東京一極集中』)

私達養生所を考える会 は、私達 人類の活動の空間について、私達 人類が軽々と手に抱えられるような人類の活動の空間を創出できないか、と考えます。

( 鴨長明(一一五五頃—一二一六)が『方丈記』を書いてから八〇〇年がたったことを記念して、「現代の方丈庵」をデザインしてくれないかという依頼が、突如舞い込んだ。敷地は鴨長明が実際に暮らしていたという京都、下鴨神社の境内である。長明は下鴨神社の禰宜、鴨長継の次男であった。 小さく貧しい家こそが素晴らしいという、『方丈記』の思想には、昔から興味があった。戦乱、天変地異、飢饉が相次いだ厳しい時代と、挫折につぐ挫折であった彼自身の人生が、長明の思想、長明の建築観を生んだ。災害が重なるひどい時代が、傘の家を生むきっかけとなったように、ひどい時代、ひどい環境から、新しい建築が生まれる。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中にある人と栖(すみか)と、又かくのごとし。たましきの都のうちに、棟を並べ、蓋を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々経て尽きせぬ物なれど、是をまことかと尋ねれば、昔しありし家はまれなり。或は去年(こぞ)焼けて今年作り。或は大家滅びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける」(『方丈記』)。 僕が一番興味を持ったのは、長明自身が、実際に移動可能な、一種のモバイルハウスに住んでいたという伝説である。彼は方丈(三メートル角)の小さい家を理想としただけでなく、彼の小さな家は、台車に乗せて、運搬可能だったという。単に小さいだけでなく、運搬可能な、究極のモバイルハウスを作ってこそ、長明の思想に応えたことにならないか。八〇〇年後の方丈庵を作るプロジェクトは、そのようにスタートした。 長明の過激なモバイルハウスの壁は、箆であったという説がヒントをくれた。木のフレームは分解して台車に乗せられるが、さすがに土壁の方は、運搬できない。箆なら、くると丸めて、簡単に台車に乗せることもできるし、軽いので、手に抱えて運ぶこともできる。彼は木のフレームと箆を組み合わせて作った家に住んでいたからこそ、きっと簡単に運搬ができたのではないか。彼なりに線と面とを上手に組み合わせて、モバイルハウスを作っていたに違いない。現代版の箆の家は作れないだろうか。 箆の代わりに探し当てた材料は、ETFE(エチレン・四フッ化エチレン共重合体)という名の新しいタイプの膜材だった。もともとは温室の素材だったという出自がおもしろかった。ETFEは、温室のような、安価で手軽な建築を作るための、安っぽい素材だと思われていたが、軽くて、強くて、透明で、耐候性にもすぐれているので、近年、駅や空港、スタジアムなどの大型建築の屋根に使われるようになってきている。従来の膜の欠点を克服したETFEは、ガラスの透明性を持つ、しなやかな膜であった。 残された課題は、どのような構造体で、この膜を支えるかである。木でフレームを組んで、それをETFEでくるむのなら簡単だが、それだと、長明の時代とあまり変わらない。木のフレームも、結構なごつさになってしまうので、ロジエ流のフレーム主義から脱したとはいえない。八〇〇年もたっているのだから、現代の方丈庵にふさわしい、フレームのない構造システムを用いて、ゼンパー流の織物のような小屋を作る実験が始まった。 その時ひらめいたのが、海に住むナマコの身体を支える構造システムである(図33)。ナマコはご存じのようにグニャグニャの生き物であるが、「グニャグニャなのに骨のあるヤツ」と呼ばれることもある。なぜならば、ナマコは脊椎動物のような骨格を持たない代わりに、皮膚の中に、顕微鏡でしか見えないような、無数の骨片を隠し持っているからである。皮膚の張力と骨片の圧縮力をうまく利用する、テンセグリティの達人が、ナマコだったわけである。「グニャグニャなのに骨のあるヤツ」の脱力感たっぷりの構造システムは、ロジエ主義的な古くさい骨格を笑い飛ばしているようで、きわめて未来的なものに感じられた。 僕らは、頼りないほどに小さくて細い(二〇ミリ×三〇ミリ)木片を骨とすることにした。三枚の透明なETFE に、それぞれ別パターンで、木片=骨片を貼り付けるところがモノである(図34)。別パターンの骨を持つ三枚を重ね合わせることで、フニャフニャであった面が、突如として壁のように堅く、しっかりしたものに変身する。これもまた一種のテンセグリティ構造である。木片という硬い線同士がつながることで、膜の張力が有効に働きはじめ、細胞がテンセグリティで形を保っていたように、膜の形が保たれるのである。小さな木片を貼り付けているだけだから、一枚一枚の膜はクルクルと、箆のように丸めることができ、腕に抱えて、簡単に持ち運べる(図35)。長明も、そんな風に箆を抱えて、荒れた都市をフラフラとさまよっていたのかもしれない。 その三枚の膜を重ねるのに、金属ボルトでも接着剤でもなく、強力磁石を使ったところが、もうひとつの発明である。ボルトやのりを使うと、組み立て、解体に時間がかかる。磁石だったら、一瞬で、組み立ても解体も可能である。磁石のついている面と面とを重ね合わせることで、霧や霞のように突然出現し、突然消え失せるモバイルハウス、八〇〇年後の方丈庵(二〇一二年)ができあがった(図36)。 この強力磁石は、「点」の章で紹介したイタリア、フィレンツェの山の中のピエトラ・セレナ(山も持つ)石屋、サルヴァトーレから教わった。彼は強力磁石を使って、石を壁に取り付けるために実験を重ねていた。従来、石はモルタルかボルトを使って、コンクリートの壁に取り付けられてきた。しかし、これだと石を簡単にはがすことができず、一度貼ったら取返しがつかない。磁石を使えば、取り付けも、解体も簡単で、石を傷つけることもない。引越す時も、石だけ外して、新しい家にまた同じ石を使うことができるというのが、サルヴァトーレのアイデアだった。確かに移動する内装という考えはおもしろくて、方丈庵的ではある。しかし、石だけ運べても、家自体が軽々と手に抱えられないと、現代の方丈庵とは呼べない。点(磁石)・線(木片)・面(ETFE)が運動してはじめて方丈庵となる。 下鴨神社の境内に出現した現代の方丈庵は、あまりに透明で軽やかで、うっかりすると通り過ぎてしまうほどの淡い存在であった。細い木片が、パラパラと下鴨神社の森の中に漂っているようだった。あのひねくれ者の長明も、このさりげなきなら、森の木陰から、きっと喜んで僕らを見ていてくれるのではないか。 下鴨神社に出現したカゲロウのようにはかない建築は、ETFEを用いた面の建築であると同時に、強力磁石を用いた点の建築であり、木片を骨とする線の建築でもあった。点・線・面が響きあい、相互に埋め込みあいながら、人間のまわりを浮遊し、身体を守ってくれる。 『方丈記』から八〇〇年たって、時代は再びかなり厳しいことになっているけれど、だからこそ僕らはもう一度、現代の箆を抱え、しなやかでやさしい面を抱えて、この荒れた世界を、歩きはじめなければいけない。 : 『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 八〇〇年後の方丈庵 P194-P198)

## ○ 例えば、工匠の造形と建築家の造形

( …… カルポはアルベルティ(一四〇四—一七二)以前、つまりルネサンス以前の建築は、同じように足し算であったと整理する。施主と親方と職人が共働して、建築というゆるい全体を作り続け、直し続けていたのである。そのゆるやかな世界に、革命的建築家アルベルティが登場し、建築の方法を抜本的に変えてしまった。初期ルネサンスを代表する建築家であり、建築評論家でもあったアルベルティは、引き算という新しい方法を導入し、竣工後の変更、修正を許さない「作家＝アーティスト」という絶対者を生み出した。その転換によって建築が本来持っていた自由は失われ、建築とは、建築家という絶対者の描いた図面を実現するだけの、融通のきかない硬直したシステムになってしまったとカルポは指摘する。アルベルティ以降の長い不自由な歴史を、ついにコンピューターが打ち破ったというのが、カルポの説である。アルベルティ以前には、描く人と作る人(職人)は分断されず、もちろん対立もせず、ゆるやかに連続的に建築は作られ続け、変更され続けていた。その濃密な人と様々な物との対話、一体感が、コンピューターによるアプリケーションによって復活するだろうと、カルポは予言するのである。 …… コンピュータショナル・デザインの本質は、形態の革命ではなく、時間の革命だったというカルポの指摘が興味深い。形態がすべてに優先するという考え自体がアルベルティ的であり、近代の産物なのである。アルベルティはルネサンス最初の建築理論書と呼ばれる『建築論』(一四八五年)を著わし、このテキストはその後の建築界に大きな影響を与えた。デカルトの『方法序説』(一六三七年)が哲学の世界で果たしたのと同様な役割を担った。アルベルティは形態を時間から分離した。それは、時間と分かちがたくつながった施工(工事)という行為と、時間を無視しても成立する設計(計画)という行為の切断でもあり、施工の軽視であり、設計者(建築家)の絶対化でもあった。形態の世界だけの純粋な理論を組み立てた『建築論』は、その純粋性ゆえに、テキストとしての普遍性を獲得し、建築家は建築界の絶対者としての地位を獲得したのである。しかし今、形態のデザイン論から、時間のデザイン論への転換が起こりつつある。時間という流れの中で建築課を相対化し、物質も人間もすべてが、時間の中を漂う粒子であるとする世界観にわれわれは回帰しつつある。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 足し算のデザインとしてのコンピュータショナル・デザイン P020-P023)

( 建築にも演繹的アプローチと、帰納的アプローチとがある。二〇世紀のコンクリート建築は演繹的であった。まず、全体の形のイメージがあって、その形を実現するために、部分を構成する素材やその結合のディテールが結論される。部分は全体に服従しなければならない。コンクリート建築では、すべての部分が全体に従属していた。一方、ブルネレスキの方法は、部分から全体へと到達しようとする帰納法であった。部分の性質、その限界を徹底的に洗い出した上で、その部分と部分とが繋ぎ合わされて、上位の段階へと昇っていく。その作業を積み重ねていった末に、時として、予想もしていなかったような全体が出現する。それが帰納法という方法である。帰納法は時として、驚きに満ち溢れ、想像を超えた結果を連れてくる。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 点 建築における演繹法と帰納法 P073-P074)

( ひとつのストーリーが描けたならば、あとは技術的にそれを解決するだけである。小さなユニットを組み合わせていって、ドーム状の建築を作る実験は、アメリカの天才的建築家で、デザイナーでもあり思想家でもあったバックミンスター・フラーが繰り返して行っていた。フラーは、四角いハコのような建築を壊そうとした先遣で、建築から草まで幅広くデザインし、学生時代からの僕の憧れのヒーローでもあった。建築家という絶対的な存在が、特異な造形の建築をデザインするという、ヨーロッパ的でエリート主義的な建築家像をフラーは批判し続けた。アルベルティ以降の特権的な建築家像を壊そうとし、草の根の建築、建築の民主化をめざして、一生闘い続けた。「宇宙船地球号」というのも彼の造語で、地球環境の危機をいち早く唱え、その解決のためには、最小の物質を使って、最大限のヴォリュームを獲得することができるドーム建築が最適であると主張した。得意の数学を駆使して、正二面体と正二〇面体が、ドーム構造に適していることをフラーは証明し(図21)、誰もが自分で作れる民主的建築というアイデアを実証するために、学生連と一緒に、ワークショップというやり方でたくさんの方々のフラー・ドームを建設した(図22)。 ……：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 フラー・ドームと建築の民主化 P185-P186)

私達 当会は、人類の造形の方法に二通りの類型を仮定します。

a. 部分の性質と限界を徹底把握し全体へ到達しようとする作業——帰納法——時として、予想もしていなかったような全体が出現する、時として、驚きに満ち溢れ、想像を超えた結果を連れてくる——アルベルティ『建築論』(ルネサンス最初の建築理論書と呼ばれる：一四八五年)以前——描く人と作る人(職人)は分断されず、もちろん対立もせず、ゆるやかに連続的に建築は作られ続け、変更され続けていた、その濃密な人と様々な物との対話——施主と親方と職人が共働

b. 全体の概念の実現の為に部分を選択結論し服従・従属させる方法——演繹的——アルベルティ『建築論』(ルネサンス最初の建築理論書と呼ばれる：一四八五年)以降——引き算——「作家＝アーティスト」という絶対者を生み出した、その転換によって建築が本来持っていた自由は失われ、建築とは、建築家という絶対者の描いた図面を実現するだけの、融通のきかない硬直したシステムになってしまった——アルベルティは形態を時間から分離した。それは、時間と分かちがたくつながった施工(工事)という行為と、時間を無視しても成立する設計(計画)という行為の切断でもあり、施工の軽視であり、設計者(建築家)の絶対化でもあった。形態の世界だけの純粋な理論を組み立てた『建築論』は、その純粋性ゆえに、テキストとしての普遍性を獲得し、建築家は建築界の絶対者としての地位を獲得したのである——ヨーロッパ的でエリート主義的な建築家像、特権的な建築家像——二〇世紀のコンクリート建築

私達 当会は、a類型の造形について、制作者の意図、並びに、人類にとっての存在とその概念は、造形自身に集約される、と仮定します。

私達 当会は、a類型の造形について、その造形の保存を、制作者の意図に対し、図面の保存に依存して代行できる根拠がなく、造形自体を保存するしか方法がない、と仮定します。

私達 当会は、a類型の造形について、その造形の保存に際し、造形自体を保存すること、を提案し要望します。

私達 当会は、b類型の造形について、制作者の意図、並びに、人類にとっての存在とその概念は、製作指示図面に集約され得る、と仮定します。

私達 当会は、b類型の造形について、その造形の保存を、制作者の意図に対し、製作指示図面の保存に代行できる可能性の根拠がある、と仮定します。

私達 当会は、b類型の造形について、その造形の保存に際し、絶対的にその造形を従属させている製作者の製作指示図面が現存する場合、造形自体の保存を、図面の保存に代行できる可能性がある場合が在り得る、と提案します。

## ○ 私達 人類の活動の空間

( テンセグリティーという考え方は、生物学の世界でも注目されている。ドナルド・イングバー(一九五六— )という細胞生物学者が、細胞はテンセグリティ構造をしているといいだしたのである。一九七〇年代、イエール大学の学生であった彼は、細胞をペトリ皿に載せると、ぺたっつぶれてしまうのに、それに酵素を入れて皿から離すと、丸くふくらむのを見て、理由を考えはじめた。その数日後に、彼は偶然、デザインの授業でフラーのテンセグリティ構造について教わった。勤のいいイングバーは、そのふくらんだ細胞こそ、テンセグリティに違いないとひらめくのである。細胞を、中にジェルが入ったただの風船だと考えると、このふくらむ現象が説明できない。しかし、細胞の中に、細胞骨格という名の、タンパク繊維群が作る三次元の網目構造が隠れていたのである。この網目の引っ張り(テンション)を利用して、細胞は形を保っていた。それぞれの細胞は、焦点接着斑と呼ばれる点を介して、細胞を囲む基質に接着しているので、細胞の外部の力学的環境がリアルタイムで、タンパク繊維のネットワークを介して、細胞の隅々に伝わる仕組みだったのである。この仕組みは、僕らがフランクフルトに建てた茶室の二枚の膜と、その間をつなぐ糸(線)の関係によく似ている(図30)。細胞は孤立した点ではなく、面の引っ張り力、面の中に潜んでいた糸の引っ張り力を媒介として、相互につながりあい、重力のある世界の中で形を支え、重力と折り合いをつけていたのである。フラーが未来の構造システムとして提唱したテンセグリティとは、そもそも、生物の基本原理でもあったのである。再びゼンパーとロジエの喩えを用いれば、生物は骨(フレーム)を構造とすると考えていたロジエ主義的生物観に代わって、点・線・面がネットワーク的にも統合したものが生物の体を支えているという、ゼンパー主義的生物観へと、生物学も向かっている。フラーは、建築の未来を予言していただけではなく、生物学においても、予言的役割を果たした。イングバーを媒介にして、フラーのテンセグリティが、生物学の世界にもひとつの転換をもたらしたのである。……この特別な傘を玄関の傘立てに置いておけば、どんな災害が起きても、それを持って逃げればなんとか助かると考えると、ちょっと安心できる。やさしい傘の家が、仲間を守ってくれるに違いない。しなやかな布の力が、そんな安心感を与えてくれる。傘の家にはフレームというごつい存在がないので、衣服にくるまれたような安心感がある。白い膜で覆われた空間は、白くやわらかな光で満たされて、癒されるようなやさしい空間になった。ゼンパーとフラーとサハラ砂漠の知恵が一緒になって、ミラノで花が開いた。：『点・線・面』2020年2月7日 第1刷発行 隈研吾 岩波書店 面 細胞のテンセグリティ P191-P194)

私達 当会は、私達 人類の活動の空間について、生物学がそうであるように、骨(フレーム)を構造とすると考えるよりも、点・線・面(様々な要素)がネットワーク的にも統合したものが生物の体(私達 人類の活動の空間)を支えている、と仮定します。

私達 当会は、皆様に、私達 人類の活動の空間について、生物学がそうであるように、骨(フレーム)を構造とすると考えるよりも、点・線・面(様々な要素)がネットワーク的にも統合したものが生物の体(私達 人類の活動の空間)を支えている、と仮定し考察し様々な行為を選択すること、を提案し要望します。

#### d. 提案と要望一ーB

私達 当会は、皆様に、人類の活動の空間について、鳥が知覚するであろう、高空からの地球が丸く見える大きな空間、旋回し、急降下して、様々な事象を経て至る、地を這う虫が知覚しぜんからる小さな空間、木々の枝葉の間をすり抜ける時、異なるスケールと視点その連続的な変化その速度に包含する、私達 人類が纏う行為たる、人類の身体と自然との関係性の双方向誘導性を内包する階層的連続的透明性による丁寧でゆるやかなグラデーション又は離散性による接続、又、生と死の往復へのグラデーション、人類の空間認識たる、肌理(テクスチャー)とレイヤーの生成、人類の身体的スケールの獲得、“生きた造形”の採用、豊かで変化に富む多様な“分格”と“総格”の出現、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、人類の活動の空間並びに人類の活動、行為について、地球の又その土地の大地が基準面である、と明確に、認識すること、改めて、認識すること、同時に、当該の認識を、私達 人類の活動、行為の基準とすること、を提案し要望します。

私達 当会は、皆様に、人類の活動の空間について、起伏に富む日本の大地に係る解法として、人工の造形よりも、大地の自然の造形に、そのヴォリュームをとり、自然、遺跡、現代の機能に於いて、離散的配置、交错(編み込み又は織り込み)、相対的重層性、を原理として、私達 現代の人類の生命の行為としての、創造性、快適性、活動の効率、の発現を定義すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、例えば、私達 人類の活動の空間に於ける、公園や街路の樹木について、その枝を短く刈り込むのではなく、根元をコンクリートやアスファルトで小さく囲むのではなく、十分に大きな面積の大地を樹木に附随して落葉を蓄積し、よって、自然の循環を生成することにより、関係する諸事象を処理すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、遺跡について、私達 人類にとって遺跡の本来の在り方であると考え得る、その遺跡に附随すると考え得る空間並びに環境と考え得る事象と共に、遺跡の全ての土地の範囲の現状保存し、同時に、活用し、之を継続的に維持する為の政策を執り、その為の整備を行い、以って之を行為し、私達 人類にとって遺跡の本来の在り方であると考え得る当該の遺跡の実態を保全すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、遺跡について、私達 人類は、私達 人類には遺跡を化粧する方法など存在しない、その遺跡としての荒々しいヴォリュームを、その土地の大地の上に投げ出すしかない、と自覚し、そう行為すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、私達 人類の活動の空間の形成について、まずは演繹的アプローチよりも帰納的アプローチを採用すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、人類の活動の空間について、宇宙と自然と遺跡群の存在と時にその離散的配置、人類の意図の空隙の存在によって、人類の活動の空間の在り方とスケールを相対的に重層化した人類の活動の空間の実態を例示すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、人類の事象と存在について、未来へと、永遠の時間へと開かれている為に、人類の事象と存在を、“保存、保全、継承、保護”し、即ち、人類に関する事象との性質や形態や存在、又、人類たる事象との性質や形態や存在の“可逆性”を維持すること、を提案し、要望します。

私達 当会は、皆様に、私達 人類の活動の空間について、生物学がそうであるように、骨(フレーム)を構造とすると考えるよりも、点・線・面(様々な要素)がネットワーク的にも統合したものが生物の体(私達 人類の活動の空間)を支えている、と仮定し考察し様々な行為を選択すること、を提案し要望します。

## 第二部 遺跡について

私達 当会は、私達 現代の人類が活動する土地の全体が、重層的な、ジオ サイト、並びに、遺跡である、と認識します。

(ジオサイト: geosite: …ジオサイトとは、ひとつの景観、地形グループ、単独の地形、岩石の露頭、化石床あるいは化石が存在する場のことである。…: Wikipedia「ジオツーリズム」最終更新 2017年11月5日 (日) 06:28)

私達 当会は、私達 現代の人類について、私達 現代の人類が、ジオ サイト、並びに、遺跡に居住し、又、活動している、との認知が、私達 人類の存在にとって、一つの始原となる、と仮定します。

私達 当会は、皆様に、遺跡の地に於いては、遺跡たる事象を優先して、様々な行為を認識すること、を提案し要望します。

私達 当会は、遺跡について、人類の抽象たる概念又主観に起因して生起する行為を離れ、又は、断絶し、宇宙と地球に於ける、人類並びに人類に関係する事象に関し、唯一の、痕跡ではあるが客観的普遍的包括的絶対的な意味の記録たる、同時に、具象たる事象である、と仮定します。

私達 当会は、遺跡に関し、(i) 私達 当会は、遺跡について、宇宙と地球の人類の移動と行為行動の範囲の拡大に伴い、様々な人類の相互の“共通の体験”となり、それぞれの人類相互の理解を得る契機となる、(ii) 私達 当会は、遺跡について、その土地に共伴して具象であり、人類の概念を断絶することで、人類に関わる事象のうち唯一の絶体である事実であり、各地域やその人類の“関係”や“交流”、“結びつき”や“多様性”、即ち、人類の事象の在り方の「実態」を、私達 人類に対して、直接に「証徴」する、(iii) 私達 当会は、遺跡について、遺跡に関し、宇宙と地球の人類の、異なる地域の、又、多様な文化の、又、異なる個人の、人類の“共同作業”を形成することで、それぞれの人類相互の理解と信頼を形成する契機となる、と理解します。

私達 当会は、遺跡について、私達 人類、又、宇宙と地球の地域とその人類の、オリジン(origin: 始原、源、由来、根源、始まり、起源、発祥、発端、源泉、発生、出所、出発点、原点)とオリジナリティ(originality: 独自性、独創性、真性)を証徴する、と理解します。

私達 当会は、遺跡について、人類の存在に由来する人類自身と風土又その各要素相互の関係の様々な均衡、又は、最適な均衡の痕跡、さらに、人類の概念たる真善美の多様な体現の可能性の痕跡として、之を仮定します。

私達 当会は、遺跡について、人類の営為の歩みに関する事象の忘却による不可逆性に対して、人類世界に於ける唯一の、可逆性への担保である、と仮定します。

私達 当会は、遺跡について、私達 人類が、人類の主観を離れ、人類の世界を、人類の客観に於いて観る、具象、構造、装置、と仮定します。

私達 当会は、遺跡について、人類の「社会的共通資本」、と認識します。

(「社会的共通資本」は数理経済学者 李沢弘文氏(1928年7月21日-2014年9月18日)が提唱する概念)

私達 当会は、その地域の遺跡や他の文化財が、その地域と人類の世界、又は、その地域と人類の世界の人類の関係性を顕わし、その地域と世界の人類の、広範な、文化経済活動の基盤足り得る、と仮定します。

私達 当会は、広く皆様に、私達 人類の活動空間において、遺跡と遺跡としての存在とその存在の在り方を、認知、調査、保存、活用、公開、整備、継承 すること、を提案し要望します。

私達 当会は、特定の当該の事象並びに現象について、当該の事象並びに現象に関係する人類が之を大切にしようとする気持ちが、他の人類の共感を誘導し、そこに祝祭、即ち、喜びと悲しみの共感、が生起する、と仮定します。

私達 当会は、この私達 人類の祝祭への作用が、遺跡の保全、即ち、遺跡の遺跡としての認知と調査と保存と公開と継承と活用、又、全ての文化財の保全の構造である、と仮定します。

私達 現代の人類、又は、現代の人類の個体は、個別の文化財、又は、その文化財に関連する財に、私達 人類の祝祭を発見し、又は、形成することができるでしょうか？

私達 当会は、皆様に、私達 人類について、現生人類たる人類種の出現以来の人類の生産行為と、人類又は人類の個体の自己たる人類、又は、人類又は人類の個体の他者たる人類、又は、人類又は人類の個体の他者たる非人類である宇宙と地球の諸事象のオリジン(origin:始原、源、由来、根源、始まり、起源、発祥、発端、源泉、発生、出所、出発点、原点)乃至オリジナリティ(originality:独自性、独創性、真性)、との関係を積極的に認知し、当該認知に由来する認識と行為を私達 人類に於いて広く顕現すること、を提案し要望します。

私達 当会は、私達 現生人類たる人類種の生産行為につき、之を生物種の捕食と区別し、諸事象の改変であり、人類にとっての諸利便であり、同時に、人類の存在上のオリジナリティである、と仮定します。

私達 当会は、私達 人類の主題について、人類又は人類の個体の自己たる人類のオリジン乃至オリジナリティと、人類又は人類の個体の自己たる人類、又は、人類又は人類の個体の他者たる人類、又は、人類又は人類の個体の他者たる非人類である諸事象のオリジン乃至オリジナリティの相克である、と仮定します。

五行思想(古代中国に端を発する自然哲学の思想: Wikipedia「五行思想」最終更新 2020年1月21日(火) 08:21)では、諸事象について、相生、相克、相侮、相乘、比和、勝復などの関係を、付与すると云います。

私達 人類は、私達 人類が関与する、諸事象の夫々のオリジン乃至オリジナリティの関係を、相克の関係から、相生の關係に、転換し得るでしょうか？

私達 人類は、何を、選択する でしょうか？、又は、何を、選択することができる でしょうか？

私達 当会は、私達 人類の遺跡と歴史の真実について、之を、私達 人類の存在の本源で在り得る、と認識します。

私達 当会は、遺跡と歴史の真実が、私達 人類の遺跡の最大の活用となる、と認識します。

私達 当会は、遺跡の活用について、皆様に、私達 人類の芸術による、ことを提案し要望します。

(「リベラル・アーツ」: リベラル・アーツ(英: liberal arts)とは、ギリシャ・ローマ時代に理念的な理想を持ち、ヨーロッパの大学制度において中世以降、19世紀後半や20世紀まで、「人が持つ必要がある技能(実践的な知識・学問)の基本」と見なされた自由七科のことである。具体的には文法学・修辞学、論理学の3学、および算術、幾何(幾何学、図形の学問)、天文学、音楽の4科のこと、…なおの本誌の「藝術」という言葉はもとも、明治時代に啓蒙家の西園によってリベラル・アートの訳語として造語されたものである。…プラトンは…ところが、古代ギリシア社会においては…その後、ローマ時代の末期の5世紀後半から6世紀にかけて、7つの科目からなる「自由七科」(e septem artes liberales)として正式に定置されるに至ったのである。…哲学はこの自由七科の上位に位置し、自由七科を統括すると考えられた。哲学はさらに神学の予備学として、論理的思考を教えるものとされる。この自由七科の構成は、キリスト教の理念に基づき教育内容を整えるため、ギリシャ・ローマ以来の諸学が集大成されたものと見ることもできる。…: Wikipedia「リベラル・アーツ」最終更新 2020年2月15日(土) 14:11)

私達 人類は、私達 人類の活動の空間に於いて、この土地の遺跡が送り続けるメッセージを受けとめることが出来ているでしょうか？ 遺跡は、人々のそして現代の私達の 生と死の証です。

## 第三部 遺跡

### I. 遺跡

遺跡は、一般に、人類の(過去の)活動の痕跡と認識され、遺構と遺物より構成され、一定の土地の範囲又は空間の範囲として把握されます。

### II. 遺跡と風土と文明、又、私達人類の公共と私達人類の選択、又人類の分断

#### <遺跡と風土と文明>

(1) 私達 当会は、遺跡について、宇宙のその土地、地域の風土にとって、自然の存在、人類の存在(その肉体、意識、知能、言語、文字、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、記憶、概念、行為)に次いで、第一義の存在である、と理解します。

(2) 私達 当会は、遺跡とは、逝きし者、逝きし者達、死者が、その時、そこに見た、その風景を、今、私達 自身が見ている、と云うことである、と認識します。

(3) 私達 当会は、風土とは、逝きし者、逝きし者達、死者のことを考える、逝きし者、逝きし者達、死者の言葉を聞く、逝きし者、逝きし者達、死者と行き通う、その環境、社会的状況、制度がある、それが私達人類の生活とその空間に生きている、と云うことである、と仮定します。

(4) 私達 当会は、風土について、人類が社会的に活動するその土地に於いて、宇宙の自然と人類の事象が、死者の存在を含めて、完全に、共存の状態にある、と仮定します。

(5) 私達 当会は、私達人類が、私達人類の世界に、複数の文明を認識するならば、風土は、人類の文明の本源的形態である、と認識します。

(6) 私達 当会は、少なくとも、人類のアフリカ、アジア、オーストラリア、南アメリカ地域では、風土に於いて、既に、持続可能(sustainable: サステイナブル)な社会が、達成されている、と仮定します。

#### <私達人類の公共と私達人類の選択、又人類の分断>

(7) 私達 当会は、公共について、“皆が関わる他者”であり、同時代の人類の各個(自己)への便益の還元(又は、その総体)というより、未来の人類への社会的共通資本への投資への選択である、と認識します。(社会的共通資本は、数理経済学者 宇沢弘文 氏の概念です)

(8) 私達 当会は、人類の様々な“分断”が形成する人類の不幸に関して、人類の公共、即ち、“皆が関わる他者”、例えば、風土、又風土の再生、文化、遺跡、人類の歴史の理解、現代の文明の完成(私達 当会は、現代の文明について、持続可能(sustainable: サステイナブル)な社会が達成されていないとすれば、現代の文明は未完成である、と認識します。)の保存、継承、形成への、多様な人々の参加が、人類の様々な“分断”を緩和する、と仮定します。

### III. 遺跡、その存在の性格と関連事象について

私達 当会は、遺跡について、以下、その性格やその他の関係する事象について理解し、又は留意します。

1. 人類の意図性に対照する非意図性、並びに、人類の空間と構造の囲い込みに対照する空間と構造の開放性 [遺跡の存在: 根源的な公共の空間]
2. 地形、地勢と遺跡との関係性 [又、遺跡とその関係する環境のランドスケープ]
3. 遺跡、又非遺跡の空間と共に、空間の諸関係性の連絡 [私達 当会が提案する“再興空間主義宣言”]
4. 地球時代と人類時代、並びに、日本地域への現生人類到達以来の三万年の出来事と変化と人類の伝統 [歴史]
5. 地理、地政、事象の伝播と移動、人工工作との関連性 [ネットワーク、又、各事象のランドスケープ]
6. 芸術と学術とその市場、又、祝祭による遺跡の活用 [遺跡、哲学、芸術、行為、神話、学術、生と死、祝祭の諸関係(又は、宗教)は、人類の存在を媒体に近接しています]  
その土地、地域の地勢と遺跡群を再整備しつつ、歴史に倣い、人類の、文化、芸術、伝統、学術の活動、並びに、発信の舞台として活用する。同時に、国際音楽祭、国際芸術祭、国際写真祭、国際映画祭、国際演劇祭、各種国際学会等(アカデミアのイベント)、国際アートフェスティバル等(市場)を企画開催し、即ち、その土地、地域の自然と地勢と遺跡と歴史、又、現代の地政の活用を、広範に芸術と学術とその市場、又、祝祭による。
7. 人類の生活空間に於ける、人類の風土、文化、文明、民俗の自律的展開とその維持 [人類の活動]

### IV. 遺跡たる事象

1. 人類の非意図たる事象、人類の意図たる事象、遺跡、空間の性格と構造、人類にとっての意義

(1) 人類の非意図たる事象、人類の意図たる事象、遺跡

① 私達 当会は、宇宙の自然と人類の事象について、人類の非意図たる事象、人類の意図たる事象、を認識します。

② 私達 当会は、遺跡について、人類の非意図たる自然、人類の意図たる人工、人工でありながら、人類の当該事象への意図(発現や目的や機能)の消滅、忘却、時に、埋土による忘却によって、人類の非意図たる遺跡、自然と人工の中間に位置する第三の存在の性格を有する希少で特異な事象、を認識します。

(2) 遺跡、空間の性格と構造、人類にとっての意義

① 私達 当会は、遺跡について、空間の性格、構造として、現代の西洋文明に係る人類に関する空間が、概ね、意図と囲い込み、閉鎖、であることと対照し、非意図と開放である、と認識し、理解します。

② 私達 当会は、遺跡について、遺跡の存在と空間の構造の、非意図と開放が、遺跡を、人類にとって、根源的な公共の空間とする、と理解します。

## 2. 遺跡の認知、調査、保存、活用、公開、整備、継承について

(1) 私達当会は、遺跡について、之を、認知し、調査し、保存し、活用し、公開し、整備し、継承する、とは、遺跡の存在の性格と構造の非意図と開放、根源的な公共の空間を、認識し、保存し、活用し、継承することである、と理解します。

(2) 私達当会は、遺跡について、之を、認知し、調査し、保存し、活用し、公開し、整備し、継承する、とは、遺跡の存在の性格と構造の非意図と開放、根源的な公共の空間に“寄り添う”ことである、と理解します。

## 3. 遺跡、歴史、考古学、人類の文化

遺跡は、人類の事実の解釈たる歴史と同じ事象ではありません。

遺跡は、生きる者の詩、文学、芸術、時に音階であり、死せる者の魂かもしれません。

私達当会は、遺跡を歴史と考古学と建築のみで規定することはできない、と理解します。

## 4. 現代と人類の活動、歴史と空間に開かれた「窓」

「窓」：私達当会は、私達が認知する宇宙の事象は、私達人類が、私達人類の肉体、意識、知能、言語、文字、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、記憶、概念、行為、即ち、人類という「窓」を通して感知する極めて一部の不確かな概念である、と理解します。同時に、私達当会は、現代の様々な事象について、人類の過去、現在、未来の連続の関係に開かれた部分たる「窓」として限定された事象と理解し又現代の人類はその関連に於いて行為すると理解します。私達当会は、皆様に、私達現代の人類が、遺跡のジェノサイドを停止し、アフリカから地球の全土に拡散する人類の活動たる過去から現代又未来への歴史とその空間たる遺跡の「窓」たる諸関連により限定された事象とその空間に行為する限定された存在であることを認識すること、を提案し要望します。

## 5. 人類の文化と人類の経済

私達当会は、人類の文化とその活動が、人類の経済に、その形質と速度を与えている、と仮定します。

## 6. 遺跡の活用(人類への還元)

私達当会は、皆様に、遺跡の活用(人類への還元)について、芸術と学術とその市場によることを提案し要望します。

遺跡、哲学、芸術、行為、神話、学術の諸関係は、人類の存在を媒体に近接しています。

私達当会は、皆様に、その土地、地域の地勢と遺跡群を再整備しつつ、歴史と土地の利用の履歴に倣い、人類の、文化、芸術、伝統、学術の活動、又、発信の舞台として活用する、同時に、国際音楽祭、国際芸術祭、国際写真祭、国際映画祭、国際演劇祭、各種国際学会等(アカデミアのイベント)、国際アートフェスティバル等(市場)を企画開催し、即ち、その土地、地域の自然と地勢と遺跡と歴史、又、現代の地政の活用を、広範に芸術と学術とその市場によること、を提案し要望します。

## 7. 遺跡へ

私達当会は、遺跡が、空間であると認識される処、当該の事象を遺跡と認知すること、又、之による、当該の遺跡の調査、保存、活用(人類への還元)、公開、整備、継承について、人類が、今より後、当該の遺跡の空間にどの様な形質を与えるか、人類の活動が当該空間にどの様に関与するか、当該の活動は経済にどの様な形質と速度を与えるか、当該の事象が宇宙の自然と人類の存在と遺跡の存在の相互関係と理解し得る当該の風土にどの様な形質と変化を構成するか、それは人類の文化財、遺跡として本義であるか、それは人類の風土として本義であるか、それは人類にとって好ましいのか、私達人類は何を選択するのか、との考察に対し、之を必然の事象、と理解します。

私達当会は、皆様に、遺跡とその存在、又は、範囲に対し、遺跡の外(そと)に現代の機能と目的を整備し獲得し、未来の構成について、様々な事象の全き共存と共栄を実現することを、提案し要望します。

## 8. 遺跡、文化財等への人類の行為について

(1) 私達当会は、人類の意図たる事象について、解釈が成立し、又、収集が在り得る処、人類の非意図たる事象について、解釈は成立せず、又、事象の本義上の破壊と改変と移動を伴う収集が元来在ってはず、人類の非意図たる事象について、事実の存在の認知、又、保存と修復が在り得る、と理解します。

(2) 私達当会は、人類のアフリカから世界への拡散と共に拡散し存在する遺跡を、蒐集し陳列する博物館概念に嵌合してはならない、と理解します。

(3) 私達当会は、人類の非意図たる事象が、人類の意図たる事象の取扱いへの擬制的取扱いによって、その本義上に於いて損壊する事態がある場合、その経緯を探索することは勿論、様々な政治上経済上の対応は云うに及ばず、本義に於ける原状回復、本義に於ける発展的展開が閉鎖されることがあってはならない、と理解します。

(4) 私達当会は、遺跡への行為や、事象の博物館その他への収蔵に関して、事象の本義上の損壊が、在り得ると理解します。

## 9. 遺跡、人類の必然

(1) 私達当会は、私達人類の活動の痕跡が、私達人類の活動空間に遺存し、私達人類が之を遺跡と認識することについて、私達人類の必然である、と認識します。

(2) 私達当会は、私達人類が、私達人類の必然たる遺跡を破壊することについて、即ち、直ちに、之を、私達人類の必然を破壊することに他ならない、と理解します。

## V. 日本地域について

私達 当会は、日本地域について、アフリカより世界に拡散する人類の当該地域への到達より以降、先史時代から、世界、又は、インド洋、南シナ海、フィリピン海、東シナ海、黄海、日本海、オホーツク海、太平洋、を囲む近隣地域の様々な文化圏又日本地域に関する、島伝いの、琉球、薩摩、肥前、長崎、蝦夷、東北、日本地域、との地政に在る、と理解します。

私達 当会は、日本地域について、「海と島と船と陸と空、人類の到達以来、世界と繋がる地政、もう一つの“鎖国”」とも表現できる、と理解します。

## VI. 長崎地域とその遺跡について

私達 当会は、長崎地域について、先史時代から近代まで、世界、又は、インド洋、南シナ海、フィリピン海、東シナ海、黄海、日本海、オホーツク海、太平洋、を囲む近隣地域の様々な文化圏又日本地域に関する地政上の結節となる地域であり存在である、と理解します。

私達 当会は、地政上の結節となる地域であり存在としての事象が、長崎地域に原子爆弾による被爆を誘引した、と理解します。

私達 当会は、長崎地域の遺跡について、例えば、先史時代の支石墓から、近代の終焉となる原子爆弾被爆の遺跡まで、第一義に、且つ、一貫して、地政上の遺跡である、と理解します。

## VII. 私達 当会より、皆様への、提案と要望について

1. 私達 当会は、皆様に、遺跡への対応について、本義に於いて、本紙の第二部－I. からV. の範囲に於いて、行為することを、提案し要望します。

2. 私達 当会は、皆様に、長崎地域の遺跡への対応について、本義に於いて、本紙の第二部－I. からVI. の範囲に於いて、行為することを、提案し要望します。

## VIII. 長崎地域の遺跡への提案と要望

私達 当会は、皆様に、人類の活動空間に於いて、遺跡を認知し、現状保存し、精神と行為、流行と娯楽、芸術とコミュニケーション(美)、学問と良心(真:哲学、学術と善:政治)、並びに、伝統と歴史により、遺跡とその存在を活かし、遺跡の外(そと)に現代の機能と目的を整備し獲得し、様々な事象の全き共存と共栄を実現することを、提案し要望します。

私達 当会は、人類の文化とその活動が、人類の経済に、その形質と速度を与えている、と仮定します。

### 1. 日本地域と地球の人類の世界

①世界の日本への憧憬 (中国 秦の徐福の伝説、マルコ・ポーロ『東方見聞録』、地下資源(金と銀と銅、硫黄))

②日本開国 (長崎による日本開国/西欧世界の東回り航路(インド洋-東シナ海)と西回り航路(大西洋-太平洋)の最後の接点の連絡の完成:資本主義世界の地球の一周、世界の一体化の完成/明治の日本の存在を経由して西洋の近代国民国家の人類世界の諸地域への地球規模の拡散の契機、始点として端緒)

(1858年のエンゲルス宛マルクスの書簡の一節:「ブルジョア社会の固有の任務は、世界市場及びその基礎の上に立つ生産を作り出すことである。世界は円形であるから、このことはカリフォルニア並びにオーストラリアの植民地化と支那並びに日本の開放によって結末に至ってきたと考えられる。」羽仁五郎『明治維新史研究』1956年P.94【世界の一体化】)

③日本の明治の近代国民国家の存在、形成と存続 (西洋の近代国民国家の人類世界の諸地域への地球規模の拡散の契機、存在として端緒:現代の地球規模の人類の世界に至る最初のモデル(model:模型、規範、典型)の実現、世界標準となる事象の獲得)

④日本への不理解（「日本は特別だ」：非西欧に於ける非野蛮の存在：例外としての存在（例外の理解は不要））

（「日本は特別だ」：『シリーズ・グローバルヒストリー① グローバル化と世界史』2018年3月26日初版 羽田正 東京大学出版会 P110「第4章 グローバル化時代の人文科学・社会科学、2 これからの日本の人文科学・社会科学、外国語での成果発表」）

⑤世界に於ける近代西洋との概念とその様式、又、態様の再確認と検証と再評価の契機（原爆被爆の遺跡）

⑥人類の過去と現代と未来（遺跡の具象としての保存と継承と活用を基層とした、人類世界の具体である人々の行為としての歴史解釈その他の諸概念の再確認、検証、認識作業の継続）

2. 私達 当会は、日本地域と地球の人類の世界との関係に於いて、長崎地域が、通時的共時的に、優れて特異な結節の状況を形成していると理解します。

3. 私達 当会は、皆様に、以下の遺跡、並びに、関係する概念について、認知し実現することを提案し要望します。

(1) 『長崎国際歴史文化都市構想』（2019年（平成31年）1月18日 金曜日 以降数次改訂 養生所を考える会 代表 池知和恭）

私達 当会は、皆様に、私達 人類が、長崎地域の地球時代—先史時代以来の特異な自然と地勢と遺跡と歴史、又、現代の地政を、現代の人類にとっての長崎地域の在り方に、積極的に活かし、地球規模の人類世界に於いて国際的な位置づけを実現し、この土地の生活に於いて特徴的な現代の風土を形成すること、その措置をとること、を提案し要望します。

①「先史時代/古代福田氏/中世肥前丹治比氏（戸町氏・永崎氏・大浦氏・矢上氏・時津氏・大串氏等）等遺跡群」 ②「都市長崎遺跡」（ローマ・カトリックと日本人による城塞都市、長崎奉行の近世城下町、中世、近世、近代、現代へ）

③「日本開国（その母胎、転回の起動力、最初の唯一の玄関、資本主義の経済圏（世界市場）の地球の一周の完結（世界の一体化）、明治の日本を通じて主権国民国家の地球規模の拡散の端緒（普遍と特異、一体と個別、非野蛮の顕在、多様性顕在の端緒）」

（1858年のエンゲルス宛マルクスの書簡の一節：「ブルジョア社会の固有の任務は、世界市場及びその基礎の上に立つ生産を作り出すことである。世界は円形であるから、このことはカリフォルニア並びにオーストラリアの植民地化と支那並びに日本の開放によって結末に至ってきたと考えられる。」羽仁五郎『明治維新史研究』1956年 P.94 【世界の一体化】）

④「長崎キリシタンの里構想」 ⑤「浦上キリシタンの里構想」 ⑥「長崎原子爆弾被爆遺跡整備構想」

⑦「長崎国際第二中華街構想」（市南部：柳井頭にて行政による第二バース（berth）設置を基盤とする外資による「開発型観光」）

⑧「長崎中央緑地計画構想」（都市長崎のバックボーン（backbone）の提示：立山地区—「小賢修船場遺跡」前の緑地帯による連絡） ⑨水辺の森『長崎音楽堂構想』

⑩ 長崎地区運河開港の歴史資料を第一軸とする長崎地区への第二運河開港/水辺の緑地帯への発展策：緑地帯開港との連携を期す 『長崎アーツセンター（Nagasaki Arts Senter）構想』

(2) 『再興空間主義宣言』（2019年（令和元年）6月29日 土曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭）：遺跡、又非遺跡の空間と共に、空間の諸関係性の連絡

(3) 『遺跡とそのランドスケープ（landscape）の選択』（2019年（令和元年）9月27日 金曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭）：自然、遺跡、建築、都市のランドスケープ、言語としての疎通

(4) 『「社会的共通資本」並びに「社会的共通資本」としての“遺跡”』（2019年（令和元年）9月28日 土曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭）

『数理経済学者 宇沢弘文氏、そして“社会的共通資本”としての医療』（資料：2019年（令和元年）9月28日 土曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭）

：私達 当会は、宇沢弘文氏が提案する『社会的共通資本』（Social Common Capital）概念により、遺跡が人類の『社会的共通資本』である、と理解します。

## IX. 長崎地域の特定の個別の遺跡群について

(一. 長崎地域の浦上地区遺跡群について)

(二. 長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について)

(三. 長崎地域の桜町地区遺跡群について)

(四. 養生所/(長崎)医学校等遺跡 (“佐古の丘の地形”、“中核区域”、“運用区域”、“関連区域”) について)

私達 当会は、皆様に、長崎地域の変化に富む地勢と重層し輻輳する遺跡群を再整備しつつ、歴史と土地の利用の履歴に倣い、人類の、文化、芸術、伝統、学術の活動、又、発信の舞台として活用する、同時に、国際音楽祭、国際芸術祭、国際写真祭、国際映画祭、国際演劇祭、各種国際学会等（アカデミアのイベント）、国際アートフェスティバル等（市場）を企画開催し、即ち、長崎地域の優れて特異な自然と地勢と遺跡と歴史、又、現代の地政の活用を、広範に芸術と学術とその市場、又、祝祭によること、を提案し要望します。

# 養生所/(長崎)医学校等遺跡の範囲

03125-2019M(9)K30915M1328000

2018年(平成30年)2月27日 月曜日 養生所を考える会 代表 池知和哉

私達は、当該遺跡の範囲について、下記(1)“佐古の丘の地形”(2)“中核区域”(3)“運用区域”(4)“関連区域”より構成されると考えます。

## (1) 養生所/(長崎)医学校等遺跡が位置する“佐古の丘の地形”

[現在の西小島1丁目、西小島2丁目、稲田町、館内町、籠町、船大工町、寄合町、道路/通路を含む一帯]  
 ・ポンペ・ファン・メルデルフォールト氏は、養生所の建設にあたってその建設場所について「新鮮な空気が通る、清潔な水の豊富な小高い丘の上で、街の外であるが病人の運搬に便利な場所」と献策しました。  
 ・私達は、ポンペ氏の長崎での病院建設への献策は、当時の世界に於ける又は長崎に於ける諸状況の下に近代病院運営の体系/仕組(system)として提言されたと理解します。  
 ・当該遺跡の立地は、ポンペ氏が示した献策に一致する態様を異えています。  
 ・私達は、当該遺跡の立地である“佐古の丘の地形”を、当該近代病院の運営の体系/仕組(system)を具体化する実体として、当該遺跡の要素であり、当該遺跡の範囲と考えます。  
 ・“佐古の丘の地形”は、大規模な開発事業による大規模な破壊がなく、当時の状況を良く遺存しています。

## (2) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“中核区域”

[現在の西小島1丁目の旧長崎市立佐古小学校の敷地及び外周道路(市道西小島稲田町1号線、市道西小島2号線、市道西小島館内町1号線、市道稲田町6号線、旧病院敷地の東道路及び南道路)及びその南部の西小島2丁目の一角及び可能性として長崎市道稲田町6号線の北部でその西に隣接する稲田町の一部]  
 [長崎市西小島佐古16番、15番、14番、14番-2、17番-2、17番-4、18番-2、1106番、その外周道路(17番-3、18番-3を含む)、59番-2、59番-3、59番-4、可能性として長崎市稲田町44番の一帯]  
 ・江戸期の養生所(病院、医学所)、精得館(医学所、病院、分析研究所)、明治期に入り長崎府医学校(及び病院)を経て第五高等学校医学部とその分教場(第五高等学校医学部、長崎医学専門学校の時代を含む)、明治期の梅毒病院から昭和初期の小島病院へと推移した建物敷地及び当該敷地に接する又は内包する当該施設に由来する道路。  
 ・一帯の西部にヘールツの居宅である蓋然性が高い平屋建洋館を含み、一帯の東部の二階建洋館も医学校関係者の居宅である可能性があります。  
 ・この状況は、遺跡の地上遺構、文献資料、複数の医学校の図面、複数の精得館から第五高等学校医学部とその分教場、梅毒病院から小島病院の写真より理解できます。  
 ・ヘールツの居宅については、Prof. Harmen Beukers が提示する De Bataafsche Leeuw, Amsterdam, 1987-Teacher among the Japanese-Letter by Dr. K. W. Gratama considering his stay in Japan 1866-1871-130p 1871-“Tuesday, May 11 及び a letter (by Escher) 23. 09. 1873 によりその蓋然性が高いと理解できます。

## (3) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“運用区域”

[現在の稲田町の北部の館内町の東に隣接する一帯]  
 [長崎市稲田町39番、40番、41番、42番、43番、44番、45番、46番、47番、48番、49番]  
 ・菜園と果樹園と初期の体操場とその付帯施設として運用されたと推測する一帯。  
 ・この状況は、慶応年間の複数の精得館の写真、明治四年頃の医学校の写真、明治10~11年頃の医学校の写真より理解できます。

## (4) 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“関連区域”

[現在の西小島1丁目と籠町と船大工町の旧大徳寺境内max.walzen、梅香崎天満宮と大楠神社及び大楠一帯]  
 [長崎市西小島町佐古1番、2番、3番、4番、5番、6番、7番、8番、9番、10番、籠町の一部]  
 ・掘遠隊墳墓地、明治三年から明治四年英医ニュートンが梅毒病院を運営、エッシャーが自身の日記で一帯をスクールガーデンと言及、佐古招魂社(梅香崎墳墓地)、勅使坂、明治12年に大徳寺庫裏跡一帯に長崎病院が竣工(大正期に橋本大徳園として整備し公開)した区域。  
 ・医学校関係者が一帯を親しむ様子は、Prof. Harmen Beukers が提示する Diary of Escher 及び a letter (by Escher) 23. 09. 1873 により理解できます。  
 ・古写真の大徳寺跡一帯の木陰に時期によりいくつかの洋館である可能性がある映像を確認できます。これが洋館であれば医学校関係者の居宅である可能性があります。

# 長崎奉行所西役所等遺跡群の範囲

01115-2020M(9)K41417M1310 0001

一 養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存と活用より

2019年(令和元年)11月21日 木曜日 養生所を考える会 代表 池知和哉

私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の範囲について、以下、認識します。

## 1. 長崎奉行所西役所等遺跡群の中核区域

私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の中核区域について、①長崎奉行所西役所等遺跡、②サン・ペトロ教会(スペイン系のフィリピン由来の托鉢修道会と地域司祭の教会:旧外浦町)等遺跡(長崎奉行所西役所等遺跡の北東隣接地一帯)、③大波止遺跡、④長崎奉行所西役所等遺跡に関連する、即ち、隣接する、又は、一帯の築地遺跡、を認識します。

## 2. 長崎奉行所西役所等遺跡群の狭義の範囲

私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の狭義の範囲について、中世後期から江戸初期の地政上意義であり、行為された、①長崎の岬の丘の上の、岬の教会及び広場一帯を中心とする要塞(石垣)と三ノ堀の内のローマ・カトリックと有馬氏と大村氏等日本人によって形成された西洋式の城塞都市(後に云う内町)の遺跡、②大波止遺跡、③当該の西洋式の城塞都市(後に云う内町)に関連する、即ち、隣接する、又は、一帯の築地遺跡、を認識します。

## 3. 長崎奉行所西役所等遺跡群の中範囲

私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の中範囲について、江戸期の地政上意義であり、行為された、①長崎奉行所西役所等遺跡群の中核区域、②市街築地、③切支丹、④出島、⑤新地倉地、⑥唐人屋敷、⑦丸山町、寄合町、⑧長崎奉行所立山役所、岩原目付屋敷、安禅寺、東照宮、立山稲荷、⑨大徳寺、⑩各藩屋敷、⑪烽火台、⑫番所、⑬台場、陣地、木戸、⑭外国人墓地、⑮高島佐賀藩炭坑、⑯長崎海軍伝習、⑰長崎製鉄所、⑱小曾根築地、⑲外国人居留地、⑳養生所、二十一野母崎方面、二十二矢上方面、二十三茂木方面、二十四時津方面、の遺跡群を認識します。

## 4. 長崎奉行所西役所等遺跡群の大範囲

私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の大範囲について、人類以前の地球の自然(ジオサイト: geosite: ...ジオサイトとは、ひとつの景観、地形グループ、単独の地形、岩石の露頭、化石床あるいは化石が存在する場のことである。...: Wikipedia「ジオツーリズム」最終更新 2017年11月5日(日) 06:28)、並びに、人類の日本地域への到達、先史時代、中世、近世、近代の地政上意義、又、中世の商業自治都市から江戸期の近世城下町への改編である、又、現代である、行為された、①地球創生、②人類以前の地球時代、③日本地域への人類の到達、④長崎地域の旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、⑤古代福田氏/中世肥前丹治比氏(戸町氏・永埴氏・大浦氏・矢上氏・時津氏・大串氏等)等遺跡群、⑥“都市長崎遺跡(八十町と唐人屋敷)”, ⑦近代の都市長崎、小曾根町西洋船大工街、炭礦舎、小曾修船場、三菱長崎造船所、⑧キリンタン、⑨長崎原子爆弾被爆、⑩現代の都市長崎遺跡、の遺跡群を認識します。

( 67 / 87 )

# 一. 長崎地域の浦上地区遺跡群について

私達当会は、皆様へ、長崎地域の浦上地区遺跡群について、以下、認識し提案し要望します。

## 1. 浦上天主堂西方隣接地公園(長崎市天主公園)について

### (1) 契機

私達当会は、2020年(令和2年)2月に入り、浦上天主堂西方隣接地公園(長崎市天主公園)について、長崎市中央総合事務所地域整備1課が統括する公共工事である公園整備開発行為による土地の形質の変更、即ち、土地の掘削と盛土等、を現地に於いて視認しました。

私達当会は、当該地について、遺跡である、と理解します。

私達当会は、当該地について、現状変更在先立ち、遺跡調査等としての発掘調査等が原則たり得る、と認識します。

私達当会は、当該視認により、現状変更在先立つ遺跡調査等としての発掘調査等が実施されていない可能性がある、と認識します。

私達当会は、2020年(令和2年)2月6日(木曜日)長崎県教育庁学芸文化課に電話等により口頭にて、当該事象を連絡し説明し、同年2月7日(金曜日)までに、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地に決定されていない(従って長崎県の遺跡地図に登載されていない)事、又、当該事象について長崎市文化観光部文化財課に確認中である旨、回答いただきました。

### (2) 私達当会の浦上天主堂西方隣接地公園(長崎市天主公園)への認識

私達当会は、以下の事象により、当該地について、之を遺跡である、と理解し、同時に、現状変更在先立ち、遺跡調査等としての発掘調査等が原則たり得る、と認識します。

#### ① 浦上天主堂の関連地である事

当該土地の性格について

i) 私達当会は、当該土地が、元、浦上天主堂付きの田であった、と聞いています。

私達当会は、江戸期から明治初期には、現浦上天主堂の地に屋敷のあった庄屋高谷氏の田であった可能性がある、と仮定します。

ii) 当該公園の隣接地の「里、中野郷会館」に隣接し、次の標記が掲示されています。

「里郷および中野郷財産区大正9年10月1日旧山里村が長崎市に編入される際先祖から継承され郷財産として所有していた貴重な財産である山林原野など89745平方メートルを昭和48年に長崎市の計画に基づく都市公園地として処分しその処分金を地域の小中学校の教育施設の整備拡張に資するためその費用を長崎市に寄附し教育の向上に功績を残した。また両財産区はその有するすべての財産をもってこの地に里、中野郷会館を建設することにより地域住民の福祉の増進に大きく貢献するものである。ここに里、中野郷会館の完成を記念し、記念碑を建立する。」

#### ② 当該地が長崎原爆爆心より至近距離である事

i) 私達当会は、当該地が長崎原爆被爆遺跡である、と認識します。

ii) 私達当会は、当該地に長崎原爆被爆による遺骨が埋没している可能性がある、と認識します。

iii) 私達当会は、当該地に長崎原爆被爆による遺骨が発見された場合、人類により、別途埋葬する、現地に於て展示する、追悼する、等の行為が可能である、と認識します。

#### ③ 浦上地区全体に包含される土地として

本紙、2. 浦上地区全体、並びに、関連の土地や地域について、を御参照下さい。

#### ④ 当該土地が、公有地であること。⇒ 私有権の設定がありません。

⑤ 当該開発工事が、公共工事であること。⇒ 地方公共団体間に於いて遺跡保全担当部門と開発工事担当部門の定期的な情報交換会議の設置等により開発計画の初期段階に於ける遺跡での開発計画の出現の把握と遺跡としての情報提供、計画的な(先行する)遺跡調査による現状保存を本来の姿とする遺跡保存と(後発の)開発行為との調整が比較的容易に可能です。(文化庁次長通知等)

⑥ 私達当会は、当該の公共工事について、主として、行政による、行政上要件に由来する公益の実現の行為であり、同時に、計画上の緊急性は低い、と推測します。

⑦ 私達当会は、遺跡たる事象について、公益であり、数理経済学者宇沢弘文氏が提唱する「社会的共通資本」たり得る、と理解します。

## 2. 浦上地区全体(浦上村ノ内山里庄屋懸り(馬込郷、里郷、平野、中野、本原、家野)、並びに、浦上村の内、川平郷、木場郷(三ツ山)等浦上川上流方面)、並びに、関連の土地や地域について

私達当会は、以下の事象により、当該地について、之を遺跡である、と理解し、現状変更在先立ち、遺跡調査等としての発掘調査等が原則たり得る、と認識します。

### (1) 浦上地区全体、並びに、関連の土地や地域の遺跡としての性格について

① 私達当会は、浦上地区全体について、辻町の民有の畑地で石鏝が発見され、長崎市文化財課も之を確認した、と伝聞します。

私達当会は、浦上地区全体一帯について、石器時代、縄文時代以来の遺跡地である、と認識し得る、と仮定します。

② 私達当会は、浦上天主堂の後背地である「本尾公園」について、中世の城跡の可能性があり、民間の調査にて土塁等の痕跡を確認した、と伝聞します。私達当会は、本尾地区と西方等山麓地域について、中世の城館遺跡である、と認識し得る、と仮定します。

③ 私達当会は、自ら切支丹であり、慶長八年(1603年)正月に伏見城で徳川家康から頭(代官)に確認任命される村山等安(家康は同時に四人の町年寄を確認任命する)が、家康への訴えにより、慶長十乙巳年七月から九月(1605年)寺沢大村有馬村山各方協議で決定した長崎換地により大村喜前より獲得した支配地(浦上村ノ内山里庄屋懸り(馬込郷、里郷、平野、中野、本原、家野)、浦上村ノ内淵庄屋懸り(寺野郷、竹久保郷、稲佐郷、水浦郷、西泊り郷、船津(浦)、立神郷、平戸小屋郷、瀬ノ浦浦、飽ノ浦郷、岩瀬道郷、木鉢郷、小瀬戸郷)、長崎村ノ内(河内郷、中川郷、馬場郷、西山郷、伊良林郷、夫婦川郷、片瀬郷、木場郷、岩原郷、高野平郷、小島郷、十善寺郷、船津郷)ノ代地は浦上村之内古場村北村西村、家野村之内一邑、外目村全ク)について、例えば、浦上地区等、長崎の旧市街から切支丹が移住する、切支丹を維持する等、切支丹の重要拠点である、と認識し得る、と仮定します。

(大村喜前は長崎換地の後法華経に改宗する。 元和五年一月二十九日(1619年3月15日)ドミニコ会管区代理フランシスコ・モラーレスと村山等安が逮捕される。 元和五年十月二十六日(1619年1月31日)村山等安が江戸近郊の地で斬首される。)

④ 私達当会は、浦上地区全体について、樫山、岩屋山、帆場岳等の伝承により、広域に諸関係を形成した切支丹の重要拠点である、と認識し得る、と仮定します。

⑤ 私達当会は、浦上地区全体一帯について、浦上街道(時津街道:西坂から時津宿迄の約12km)に於いて平野宿を包含し、通交上の重要拠点である、と理解します。

⑥ 私達当会は、現在の浦上天主堂の地は、江戸期から明治期に庄屋高谷氏の屋敷地である、と理解します。

⑦ 私達当会は、浦上天主堂とその地について、先史時代より中世城館や近世庄屋屋敷等の重層的な可能性を包含する遺跡であり得る、と認識します。

⑧ 私達当会は、浦上地区全体について、日本地域に於いて、日本地域の人類が、初めて、信教の自由を獲得した、直接の契機となった地域である、と歴史学上民俗学上の解釈を為し得る、と仮定します。

⑨ 私達当会は、浦上地区全体について、辻町には「十字架山」が、石神町から浦上川一帯は「石神の石切り場」が、遺跡として認識し得る、と仮定します。

⑩ 私達当会は、「石神の石切り場」等を運用した、浦上切支丹社会に於ける伝統的な石工集団が仮定できる、当該の石工集団は、関連遺跡(石垣等石造造形構造物)の作行と伝聞より、長崎旧市街の寺町一帯の石垣を形成した技術上の系譜を有する可能性がある、と理解し得る、と認識します。

⑪ 私達当会は、浦上地区全体並びに旧市街の複数個所に浦上切支丹社会に於ける伝統的な石工集団の工作を仮定でき、「十字架山」並びに「石神の石切り場」等と共に、之を浦上切支丹社会に於ける伝統的な石工集団(又その工作)の遺跡として認識し得る、と仮定します。

⑫ 私達当会は、浦上地区全体について、長崎原爆爆心より至近距離である事より、長崎原爆遺跡である、と認識し得る、と理解します。

⑬ 私達当会は、1945年(昭和20年)11月23日長崎原爆被爆後浦上天主堂敷地西部の現信徒会館一帯の土地で行われたミサと合同葬(約1000人程が参集と伝聞)について、世界で最初の核被害に於ける集団的追悼であり、出来事として歴史学上の価値が極めて高い、と仮定し、当該地は文化財として学術上の価値が高い遺跡である、と認識します。 広島では、被爆後の集団的追悼について、広島市健康福祉局原爆被害対策部調査課により、1946年(昭和21年)8月5日の「平和復興市民大会」が確認されています。

⑭ 私達当会は、①から⑬により、浦上地区全体並びに関連の土地と地域は、先史時代から近代と現代に至る、重層的で多様な関連性を有する遺跡と歴史と民俗の地区として、全体が濃密な空間を形成する遺跡である、と理解します。

⑮ 私達当会は、当該遺跡が、浦上地域と長崎地域と九州地域と関西地域と日本地域とアジア地域と世界にとって、重要な遺跡である、と理解し、同時に、仮定します。

### 3. 私達当会の提案と要望

#### (1) 浦上天主堂西方隣接地公園(長崎市天主公園)について

① 私達当会は、皆様に、当該地について、直ちに、周知の埋蔵文化財包蔵地に決定すること、を提案し要望します。

② 私達当会は、皆様に、当該地について、速やかに、当該の公共工事を中止し、発掘等遺跡の遺跡としての調査を実施すること、を提案し要望します。

③ 私達当会は、皆様に、当該公園について、発掘等遺跡の遺跡としての調査の成果を活用し、遺跡公園としての性格付の下に計画を企画し、遺跡としての実態を顕現し、同時に、地域の市民公園、児童公園、又、国際的な交流の拠点としての性格と控えめな機能を付加し、改めて整備することを提案し要望します。

#### (2) 浦上地区全体(浦上村ノ内山里庄屋懸り(馬込郷、里郷、平野、中野、本原、家野)、並びに、浦上村の内、川平郷、木場郷(三ツ山)等浦上川上流方面)、並びに、関連の土地や地域について

① 私達当会は、浦上地区全体、並びに、関連の土地と地域について、特定の宗教の枠組みを超越する、私達人類の遺跡として、世界的に、又、地域の生活の痕跡として、歴史上価値、並びに、学術上価値が高い、世界的な文化財である、と認識します。

② 私達当会は、皆様に、本尾地域、浦上天主堂、十字架山、石神の石切り場等を含む浦上地区全体、並びに、樫山、岩屋山、帆場岳、浦上切支丹社会に於ける伝統的な石工集団遺跡等関連の土地と地域について、速やかに、土地の所有者と住民の理解の元に、周知の埋蔵文化財包蔵地に決定すること、を提案し要望します。

③ 私達当会は、浦上地区全体、並びに、関連の土地と地域に於ける、土地の所有者と住民の、周知の埋蔵文化財包蔵地としての決定への理解の形成過程に於いて、私達人類が、遺跡に居住し活動する事実の認識と之を継続する作法とその動機が醸成される、と期待します。

④ 私達当会は、皆様に、浦上地区全体、並びに、関連の土地と地域について、随時、計画的に、発掘等遺跡の遺跡としての調査を実施すること、を提案し要望します。

⑤ 私達当会は、皆様に、浦上地区全体、並びに、関連の土地と地域について、様々な開発計画について、遺跡と開発の調整に於いて、遺跡の遺跡としての性格と空間等その実態を、現状保存し、同時に、回復すること、を提案し要望します。

⑥ 私達当会は、皆様に、浦上地区全体、並びに、関連の土地と地域について、発掘等遺跡の遺跡としての調査の成果を活用し、遺跡としての性格の下に都市計画を企画し、遺跡としての実態を顕現し、同時に、人類の居住と活動、又、国際的な交流の地域としての性格と控えめな機能を付加し、近代の写真並びに他の資料より、当該地域の本来の姿であると理解し得る、田園都市としての態様を、計画的に整備し回復すること、を提案し要望します。

## 二. 長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について

私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について、以下、提案し要望します。

### 1. 長崎奉行所西役所等遺跡群の調査について

(1) 私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の調査 について、私達 当会が、当該遺跡の中核区域と認識する、① 長崎奉行所西役所等遺跡、② サン・ペドロ教会(スペイン系のフィリピン由来の托鉢修道会と地域司祭の教会:旧外浦町)等遺跡(長崎奉行所西役所等遺跡の北東隣接地一帯)、③ 大波止遺跡、④ 長崎奉行所西役所等遺跡に関連する、即ち、隣接する、又は、一帯の築地遺跡、の遺跡としての発掘調査等調査を提案し要望します。

(2) 私達 当会は、長崎奉行所西役所等遺跡群の調査 について、私達 当会が、当該遺跡の狭義の範囲と認識する、中世後期から江戸初期の地政上意義であり、行為された、① 長崎の岬の丘の上の、岬の教会及び広場一帯を中心とする要塞(石垣)と三ノ堀の内のローマ・カトリックと有馬氏と大村氏等日本人によって形成された西洋式の城塞都市(後に云う内町)の遺跡、② 大波止遺跡、③ 当該の西洋式の城塞都市(後に云う内町)に関連する、即ち、隣接する、又は、一帯の築地遺跡、の遺跡としての発掘調査等調査を提案し要望します。

(3) 私達 当会は、本紙1-(1)、(2)について、遺跡の全ての範囲について、遺跡の現状保存を前提とする「活用のための発掘調査」を提案し要望します。

(4) 私達 当会は、本紙1-(1)、(2)、(3)について、より上層の遺跡の現状保存を前提としつつ、より古い時代の遺跡、並びに、ジオサイト(geosite)としての実態、並びに、当該の人類の活動の様相を確認する為、徹底した、より下層の遺跡、地層の発掘調査を実施すること、を提案し要望します。

### 2. 長崎奉行所西役所等遺跡群の活用と際して

#### ○ 長崎奉行所西役所等遺跡地一帯の歴史

当該地の歴史は、古来、当該の長崎の丘の全体、又は、当該地が、日本地域の民俗上の墓域、民俗上の信仰の拠点と聖域、アジア貿易の拠点、の可能性、又、中世後期から近世初期にかけて、ローマ・カトリックと有馬氏と大村氏等日本人によって形成された西洋式の城塞都市(後に云う内町)の中核域、最初の六町(島原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀬浦町)と岬の教会(サン・パウロ教会、後にご上天のサンタ・マリア教会(被昇天の聖母の教会)を建築)、要塞(石垣)と三ノ堀の内の西洋式の城塞都市(後に云う内町)、糸割符宿老会所、高木作右衛門屋敷と五カ所町人屋敷、近世の江戸の御公儀(後に云う幕府)による長崎奉行所(西屋敷、高木作右衛門屋敷と五カ所町人屋敷部分に拡張して東屋敷、後に東屋敷を立山に移転して長崎奉行所西役所、さらに東屋敷跡に船番屋敷十七軒)、幕末に長崎奉行所西役所に於ける長崎海軍伝習所の設置、当所にてオランダ海軍二等軍医ボンペ・ファンメルデルフォールトによる医学伝習の開講、医学伝習は四十一日以内に園内の大村町の高島秋帆邸に移転、当地に医学伝習所の施設拡張整備、長崎会議所、長崎裁判所(後れて長崎裁判所に九州鎮撫長崎総督府設置)、長崎府、広運館、明治7年第二代県庁舎開庁、明治9年第三代県庁舎開庁、明治44年第四代県庁舎開庁、昭和28年(1953年)第五代県庁舎開庁、と重層的であり、且つ、様々な事象が絡み合っています。

#### (1) 長崎奉行所西役所等遺跡について (第一義、第二義)

① 私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡について、第一義に、遺跡に現代の建物を建造することを避け、重層的で複雑する歴史の限定された一部分と限定された解釈を顕現することを回避するために、建造物を建設しない広場による遺跡記念公園とすること、を提案し要望します。

② 私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡について、第二義に、本紙1-(1)-①に記す遺跡記念公園に於いて、長崎奉行所西役所等とともに現存した可能性のある「森崎神社」の祠等について、存在や位置や様式等の実態が確認されることを契機として、之を、諏訪神社によって、再建すること、を提案し要望します。

#### (2) 長崎奉行所西役所等遺跡について (第三義)

私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡について、第三義に、現在の当該地外周に顕在する石垣の様式に合致することを契機として、古写真や複製の平面図が伝来する長崎奉行所西役所について、特定の用途を付さない建築として、様式、建材等の考証を含め、限りなく、僅測の余地のない再建に類する再建を行うこと、を提案し要望します。

当該の提案と要望は、本紙1-(1)-②に記す「森崎神社」の祠等の再建を含みます。

私達 当会は、当該の建築物が、長崎地域に残存しない、大型の和様建築として、その様式を顕現する機能を有し、同時に、特定の用途を付さないことにより、官民の様々な用途に、運用可能である、と理解します。

#### (3) 長崎県警察本部跡地～日本生命ビル一帯について

私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡に隣接する、長崎県警察本部跡地～日本生命ビル一帯について、本紙1を前提として、イエズス会、又は、カトリック教会によって、記念聖堂と哲学宗教歴史研究展示図書室拠点を設置し、同時に、一般に、訪問と参観を開放下すること、を提案し要望します。

私達 当会は、当該の施設が、一帯の遺跡地の性格のひとつを顕現する、と理解します。

#### (4) 高島秋帆本邸遺跡(現家庭裁判所簡易裁判所一帯)について

私達 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所に、幕府により長崎海軍伝習所が設置され、当所にてオランダ海軍二等軍医ボンペ・ファンメルデルフォールトと幕臣の松本良順により医学伝習が開講され、医学伝習は四十一日以内に大村町の高島秋帆邸に移転、さらに、当地に医学伝習所の施設拡張整備を見た、当該地に(適宜、現家庭裁判所簡易裁判所と施設を共有するなどして)「国立長崎海軍伝習資料館」並びに「国立近代医学歴史資料館」を設置すること、を提案し要望します。

私達 当会は、当該の施設が、一帯の遺跡地の性格のひとつを顕現する、と理解します。

#### (5) 大波止遺跡について

私達 当会は、皆様に、大波止遺跡 について、漸次、遺跡の全体の実態を把握する発掘等調査を実施し、遺跡の現状保存を前提に、大波止を遺跡として再建し、盛土等、遺跡の保持の措置を執った上で、整備し、長崎くんちの御旅所を、本来の当該の位置で復興し定置し、又、催事広場として活用すること、を提案し要望します。

私達 当会は、長崎くんちの庭先回りについて、切支丹の聖行列を映した可能性がある、と仮定します。

(「…六一四年五月に長崎で行われた聖行列はアブラ・ヒロンの『日本王国記』に詳しいが、とりわけ五月二十日の記述は、きわめて生き生きとした描写で、その内容の信頼性は高い。高い理由は、アブラ・ヒロン自身がこの聖行列に参加して、詳細な行程を記述しているからである。「聖母マリアが奥布に包まれた台の上でその後を行き、四本の旗台がその前に輝いていた。これとともにわれわれはおびたさうなく手を加わり、その後から大勢の向宿と舞子のパレードたちが続いた。」そして、サン・ペドロ教会に近づき、通り過ぎる部分を指さしてみよう。「本館前町 Hum Quye machi に入り、慈悲院の後をまわって通り出て、その入口を過ぎて島原 Ximabara 町を過ぎ、その後まっすぐに分知町 Bunchi machi に向かった。そしてサン・ペドロ天主堂の前の広場に出、小門から入って正門から出、外浦町 Fucuf uni machi に入った。サン・ペドロ天主堂では、祭礼服をつけた三人のバードレが待ちうけて、行列の着く前に鐘を鳴らし拍手して迎えた。行列は外浦町から大村町 Omura machi に入った。」 …」)

(6) 一帯の築地遺跡について

私運 当会は、皆様に、一帯の築地遺跡について、漸次、遺跡の全体の実態を把握する発掘等調査を実施し、遺跡を現状保存する措置を執った上で、例えば、大波止遺跡から出島対岸一帯を対象に、築地を遺跡として再建し、可能な範囲で植栽、例えば、藎、長崎市街の水路沿岸に植栽された柳、を施し、築地大波止遺跡記念緑地公園とすること、を提案し要望します。

(7) 出島遺跡について

私運 当会は、皆様に、出島遺跡の北岸について、憶測の余地のない再建を行為し、同時に、出島遺跡の外周、又、大波止遺跡、築地遺跡の沿岸部、について、「長崎水辺の森公園」「水辺のプロムナード」一帯より、水路を整備し、導水すること、を提案し要望します。

私運 当会は、当該の施設が、長崎の丘の南西端部＝長崎奉行所西役所等遺跡からの、地域への海へ繋がる景観を形成し、一帯の遺跡地の性格の根源的な要素を顕現する、と理解します。

私運 当会は、同時に、出島遺跡周辺の水路面積の増加により、治水上の改善を期待します。

(8) 養生所/(長崎)医学校等遺跡(長崎市立佐古小学校跡地一帯)について

医学伝習、大村町の医学伝習所、並びに、養生所/長崎の医学校及び病院、は、長崎奉行所西役所を本拠とする幕府とオランダ政府による共同事業である長崎海軍伝習に於ける長崎奉行所西役所の一室でのオランダ海軍二等軍医ポンペ・ファンメルデルフォールの医学伝習の開講に始まりました。

私運 当会は、皆様に、養生所/(長崎)医学校等遺跡について、遺跡の全体の実態を把握する発掘等調査を実施し、遺跡の現状保存と原状回復、又、之を前提とした憶測の余地のない再建と遺跡の継承と整備と公開と活用を実現すること、を提案し要望します。

(9) 『長崎アーツセンター(Nagasaki Arts Senter) 構想』 (生活文化、並びに、一般市民の教養文化芸術の活動と発信の振興、長崎地域の遺跡活用の中心拠点：現在の長崎市桜町地内、即ち、現 長崎市役所、長崎市役所別館、長崎市議会、長崎県勤労福祉会館、長崎地区労働福祉会館、桜町市営駐車場、桜町公園、一帯の一体再開発による 私運 当会は、皆様に、『長崎国際歴史文化都市構想』(2019年(平成31年)1月18日 金曜日 改訂5版：2020年(令和2年)2月16日 日曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)で提案している『長崎アーツセンター構想』について、桜町地区遺跡群に於ける遺跡保存を優先して、之を、第二圏案に取り下げ、長崎水辺の森公園地区への発展策と策定し、一帯に於ける、抽象文化分野芸術との連携、活動の発展を期待します。)

○ 当該地は、要塞(石垣)と三ノ堀の内のローマ・カトリックと有馬氏と大村氏等日本人によって形成された西洋式の城塞都市(後に云う内町)の遺跡の北東端部です。

◎ 『リベラル・アーツ』：リベラル・アーツ(英:liberal arts)とは、ギリシャ・ローマ時代に理想的な源流を持ち、ヨーロッパの大学制度において中世以降、19世紀後半や20世紀まで、「人が持つ必要がある技芸(実践的な知識・学問)の基本」と見なされた自由七科のことである。具体的には文法学・修辞学、論理学の3学、および算術、幾何(幾何学、図形の学問)、天文学、音楽の4科のこと。…なおの本後の「藝術」という言葉はもとも、明治時代に音楽家の西岡によってリベラル・アートの訳語として造られたものである。…プラトンは…ところが、古代ギリシア社会においては…その後、ローマ時代の末期の5世紀後半から6世紀にかけて、7つの科目からなる「自由七科」(septem artes liberales)として正式に定義されるに至ったのである。…哲学はこの自由七科の上位に位置し、自由七科を統治すると考えられた。哲学はさらに神学の予備学として、論理的思考を教えるものとされる。この自由七科の構成は、キリスト教の理念に基づき教育内容を整えるため、ギリシャ・ローマ以来の諸学が最大大成されたものと見ることもできる。…: Wikipedia 「リベラル・アーツ」最終更新 2020年2月15日 (土) 14:11

① 私運 当会は、皆様に、当該地一帯について、本紙1に記す調査を提案し要望します。

② 私運 当会は、皆様に、遺跡の調査と現状保存と活用を前提に、現 長崎市役所、長崎市役所別館、長崎市議会、長崎県勤労福祉会館、長崎地区労働福祉会館、桜町市営駐車場、桜町公園、を主体に一体の再開発を行為し、遺跡や公園の保存にピロティを採用し、同時に、東に隣接する弥生近世近代町家遺跡である「魚の町遺跡」に、「弥生今相屋町中紺屋町本大工町遺跡記念催事広場公園」を実現し、之と連動する、「国立人文哲学芸術自然科学応用科学総合博物館、写真美術館、市民の劇場、一般に供用する各種の工房とスタジオ、会議場、複合的な各種和室、厨房、長崎県立図書館長崎本館、長崎公文書館、利用者無料駐車場、等の複合施設、仮称『長崎アーツセンター』」を形成すること、を提案し要望します。

私運 当会は、当該の提案と施設が、現代までに歴史的に形成された、当該地域一帯の長崎地域の人類の生活文化の拠点地域としての土地の利用の履歴の性格を継承し、次世代への生活文化、並びに、一般市民の教養文化芸術の活動と発信の拠点を提供して之を活性し、同時に、地域一帯への活気の波及効果を生起することを期待し、並びに、近隣の「長崎歴史文化博物館」等立山地区、並びに「長崎市立図書館」等と連携し、当該地域を中心に包含する、長崎郊町80町と関連する機能拠点地域の遺跡群、並びに、近隣の長崎奉行所西役所等遺跡群、の活用と活気の形成、長崎地域の生活文化、並びに、教養文化芸術の活動と発信の振興の中心拠点「司令塔」として機能すること、を期待します。

③ 私運 当会は、皆様に、弥生近世近代町家遺跡である「魚の町遺跡」に計画行為中の長崎市役所建物について、私運 当会が[政治経済機能の集約集積と効率追求][コンパクトシティへ向けた公共生活空間形成]の地区と提案し要望する「浦上川河口東岸域」の新市街再開発地区へ形成すること、を提案し要望します。

④ 『長崎音楽堂構想』 私運 当会は、皆様に、オペラ・ハウス/シンフォニー・ホール 両用施設(仮称)『長崎音楽堂』を、「長崎水辺の森公園」「水辺のプロムナード」一帯に形成すること、を提案し要望します。

⑤ 『長崎中央緑地計画構想』(都市長崎のバックボーン(backbone)の提示:都市拠点地域の連結と都市景観美観と環境配慮)

私運 当会は、皆様に、《立山地区「長崎歴史文化博物館」地区一帯ー「長崎城塞都市遺跡」(『長崎アーツセンター』ー「長崎市立図書館」ー長崎奉行所西役所等遺跡)一築地遺跡ー出島遺跡ー長崎バンド遺跡ー「長崎水辺の森公園」「水辺のプロムナード」一帯ー小菅根家築地遺跡ー「小菅修船場遺跡」》並びにその間の地所を緑地化し、同時に、遊歩道、自転車道を整備し、連結すること、を提案し要望します。

⑥ 私運 当会は、皆様に、長崎地域について、a. 遺跡と歴史と生活文化の「旧市街と歴史的関連地域」-「長崎アーツセンター構想」、b. 新市街形成[政治経済機能の集約集積と効率追求][コンパクトシティへ向けた公共生活空間形成]の浦上川河口東岸域、c. 抽象文化形成発信の「長崎水辺の森公園」「水辺のプロムナード」一帯、「長崎県美術館」「オペラ・ハウス/シンフォニー・ホール」「長崎音楽堂構想」以上、三角「トライアングル」構造、さらに、d. 北部:浦上方面に「長崎原子爆弾被爆遺跡整備構想」、e. 南部:柳埠頭に第二バース設置とアジア資本による自由開発型観光[長崎国際第二中華街構想]、の海岸河川沿岸の線「ライン」構造、又、f. 「長崎中央緑地計画構想」(都市長崎のバックボーン)の提示、即ち、輻輳する都市動線形成、連結しわかりやすい都市構造、徒歩、自転車、公共交通、自動車と複数の移動手段を併せた、都市への行為浸透性の誘導による活気と経済効果、又、g. [長崎キリシタンの里構想] 西洋式城塞都市、長崎地域の長崎奉行支配の内町、長崎代官支配の外町並びに属色(浦上村山里庄屋懸り、浦上村瀬庄屋懸り、長崎村)、大村領と佐賀領、長崎半島・彼許半島・諫早方面、長崎県熊本県九州日本世界の各所の関連旧観と旧跡の調査と整備、事象の体系化によるネットワーク効果形成による人々と諸事象の交流の形成、を提案し要望しています。

(『長崎国際歴史文化都市構想』「日本開国」-日本遺産・世界遺産へ向けて / 求められる街の姿 ~ 街の「価値」の再生産、復興を越えて ~ 水と石と土と緑と空 ~ 魅力ある街づくり) 2019年(平成31年)1月18日 金曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭: 随時改訂: 参照下さい)

(9) 遺跡のネットワーク効果の形成と活用 (遺跡は、どこにでもあります。)

私運 当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡群の活用の際に、私運 当会が提案する、長崎奉行所西役所等遺跡群の中範囲、大範囲の遺跡の調査と保存と整備、歴史と情報の調査、その体系化と情報発信、又、世界の遺跡と歴史と情報の調査、その体系化と情報発信、によって様々な事象間に様々な関係性を形成し(遺跡のネットワーク効果の形成)、之を差盤とする人的並びに諸事象の交流の実現、を提案し要望します。

### 三. 長崎地域の桜町地区遺跡群について

私達 当会は、皆様に、長崎地域の桜町地区遺跡群について、以下、認識し提案し要望します。

#### 1. 長崎地域の桜町地区遺跡群の性格

(1) 私達 当会は、当該の遺跡群について、石器時代遺跡、縄文時代遺跡、弥生時代遺跡、古代遺跡、中世遺跡、近世遺跡、近代遺跡、長崎原子爆弾被爆遺跡、現代遺跡、と想定します。

桜町遺跡では、過去の遺跡調査により、中世近世町家の遺跡のほか、1995年(平成7年:旧豊後町北側東部)13世紀の中国産黒系青磁碗15世紀後半期の中国明代の染付碗(長崎県)、1996年(平成8年:豊後町北側西中部)16世紀末葉から17世紀中葉頃を主体とする中国東南アジア陶磁器、縄文時代と推察される集中した黒曜石片、1997年(平成9年:旧東町西側南部)16世紀末から17世紀の遺物、1998年(平成10年)~1999年(平成11年:旧東町西側北部)16世紀末期~19世紀中葉にかけての中国東南アジア日本の陶磁器又ドイツ・ライン陶器、土坑墓に中世十四世紀前後に埋葬と推定の女性の人骨一体(下顎骨、上肢骨、下肢骨)、2001年(平成13年:旧引地町)国産の近世陶磁器を主体とする遺物、再堆積の可能性のある縄文時代の黒曜石製石鏃、剥片、砕片、弥生土器、寛文3年(1663年)の大火後、東西二段に分割されていた敷地が平坦に造成されたことが看取される痕跡、が検出されています。

#### (2) 都市長崎遺跡として

(古代中世の肥前丹治比氏長崎氏の根拠都市の機能地域としての長崎の丘-古来の墓域-東アジア交易港湾施設、中世近世の西洋式城塞都市、近世の長崎奉行在所の城下町-築地-長崎惣町八十箇町の内町-長崎奉行所西役所-日本開国の玄関-長崎海軍伝習-医学伝習、近代の市街-近代埋立造成と治水-長崎原子爆弾被爆遺跡-現代の市街)

私達 当会は、当該の遺跡群について、中世末期から江戸初期までに、ローマ・カトリックと有馬氏と大村市と様々な日本人によって形成された、長崎の丘の背後の西洋式の城塞都市、即ち、妻墓(石垣)と一ノ堀並びに大堀(一ノ堀)、二の堀、三ノ堀の内に形成する中世の自治都市、又、近世の長崎奉行在所の城下町、長崎惣町八十箇町のうち長崎奉行支配の「内町」(『寛永長崎港図』に見える)について、その南端に位置する外浦町の岬の教会と広場一帯、又、糸割符宿老会所~長崎奉行所~長崎奉行所西役所等に相対し、二の堀、三ノ堀に囲まれ、その北端を形成する処、重要遺跡である、と理解します。

※近世の明和年間(1764年~1772年11月)の『長崎惣町絵図』では、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群について、以下、確認できます。

・現在の行政区画である桜町は、『長崎惣町絵図』では、小川町の南東部分、内中町、櫻町、引地町の北部、豊後町の北部、で構成されます。

・櫻町の、南に隣接して二ノ堀、北部に三ノ堀、が確認できます。

・櫻町の、東部に「箱屋敷」(牢屋敷)、が確認できます。

#### ① 肥前丹治比氏である長崎氏の根拠都市の機能地域としての長崎の丘

ア) 日本古来の民俗的な埋葬葬送の地としての遺跡

イ) 東アジア交易港湾施設としての遺跡

ウ) 長崎港や地域の象徴的な場所として-神社、祭祀等の遺跡

#### ② 西洋式城塞都市として

ア) 二ノ堀 (桜町南部に隣接)、三ノ堀 (桜町北部) 遺跡

中世近世の桜町は、南で二ノ堀に、北で三ノ堀により、西に中内町、東に引地町により区切られます。

イ) "土地の造形"(土地造成の遺跡)

大堀から二ノ堀、三ノ堀の地区にかけて、岬の教会から大堀の地域までの丘陵頂部の東西の広範囲の平坦な高石垣による規格的な土地造成が滅亡し、斜面に沿った小区画と一般的な石垣による非規格的な土地造成が散見されます。場合によっては、上部に石垣を基部に土羽を併用し平面に緩斜面や不整地を残存する土地造成があったと想定します。

#### ③ 中世末期から近世初期の切支丹遺跡として

ア) サンフランシスコ教会 (桜町東側東部: 1611年(慶長16年)~1614年(慶長19年)【桜町遺跡 2000年】長崎市埋蔵文化財調査協議会) 遺跡

#### ④ 近世の都市遺跡として

ア) 近世の「内町」の町家遺跡 (元禄12(1699)年には、内町外町の区別が撤廃され、総町は長崎奉行の支配となった。【桜町遺跡 1998年3月 長崎市埋蔵文化財調査協議会】)

イ) 二ノ堀 (桜町南部に隣接)、三ノ堀 (桜町北部) 遺跡

中世近世の桜町は、南で二ノ堀に、北で三ノ堀により、西に中内町、東に引地町により区切られます。

二ノ堀が遺存し、三ノ堀が埋め立てられたようです。

ウ) 「町年寄 高嶋家」(桜町西側南部) 遺跡

エ) 「箱屋敷」(牢屋敷) (桜町東側東部: サンフランシスコ教会跡: 1620年(元和6年)~1882年(明治15年)【桜町遺跡 2000年 長崎市埋蔵文化財調査協議会】) 遺跡

・天正年間-豊臣秀吉が(南)馬町(現在の長崎市諏訪神社下辺り)に囚獄を設置。

・1600年(慶長5年)-囚獄を(南)馬町から桜町に移転。(以上、Wikipedia『長崎刑務所』最終更新 2020年2月13日(木)12:54)

#### ⑤ 近代の都市遺跡として

ア) 長崎区役所-長崎市役所 (桜町西側南部: 町年寄 高嶋家跡一帯) 遺跡

・1878年(明治11年)10月28日 長崎県、郡区町村編制法の公布により、従来の大小区制を廃止して長崎市街一円を長崎区とする。議政機関として区会が設けられ、執行機関として区役所を揚山小学校内に設置し、10. 21 初代区長に家永恭種を任命。

・1878年(明治11年)11月20日 長崎区役所を開庁。

・1882年(明治15年)7月7日 初めて長崎区議会を開議、議長に西道仙が選任される。

・1884年(明治17年)4月- 桜町に区役所・戸長事務取扱所及び議事堂完成。(町年寄 高嶋家跡一帯)

・1884年(明治17年)5月1日 区役所・戸長事務取扱所及び議事堂の開庁式をあげ、5月4日から移転執務。

・1889年(明治22年)4月1日 長崎区に市制が施行され、長崎市が誕生。

・1889年(明治22年)8月9日 長崎市役所が開庁される。

・1889年(明治22年)8月10日開庁式を行う。(旧長崎区役所庁舎をそのまま引き継ぎ、市役所庁舎に当てられた)。

イ) 桜町四獄 (桜町東側東部: 籠屋舗(牢屋敷)跡: サンフランシスコ教会跡) 遺跡

- ・明治五壬申正月(1872年) 移設所の牢屋の給園の越山町側の牢番居宅の部分に「明治五壬申正月私下げ 地味百八十七坪共」また総坪数七百四十四坪余の下に「内私下引正戻り五百五十七坪余」と明治建新以降の変化が赤雲で書き込まれている。この給園が明治になって役所で使用されていたことがわかる。(『長崎給園帖の世界』P104)
- ・1874年(明治7年)4月-桜町四獄を長崎本獄に改称。
- ・1876年(明治9年)1月-長崎監獄に改称。
- ・1882年(明治15年)-長崎村片瀬郷に移転。(長崎監獄を、西南戦争に際して設置された片瀬の長崎軍団病院跡に移転。『長崎給園帖の世界』P44 P104)
- ・1908年(明治41年)4月-旧北高米倉跡(早稲(早稲早中)に、五大監獄(千歳監獄・奈良監獄・金沢監獄・長崎監獄・鹿児島監獄)の一つとして開設。
- ・1922年(大正11年)10月-長崎刑務所に改称。(以上 Wikipedia『長崎刑務所』最終更新2020年2月13日(木))
- ・1927年(昭和2年)9月に、長崎市松山町・岡町(横町)にまたがる雑木林を造成し新設された。(Wikipedia『長崎刑務所浦上刑務支所跡』最終更新2019年12月5日(木)22:05)
- ・1988年(昭和63年)4月-長崎刑務所、移転計画決定。
- ・1992年(平成4年)-現在地(早稲市小川町)に移転。(旧刑務所を設計した山下啓次郎はジャズピアニスト山下洋輔の祖父。以上 Wikipedia『長崎刑務所』最終更新2020年2月13日(木)12:54)
- ・2007年(平成19年)-旧長崎刑務所、一部(正門など)を残して解体。(Wikipedia『旧長崎刑務所』最終更新2017年11月26日(日)04:56)

ウ) 長崎西彼杉郡役所 (桜町東側東部: 籠屋舗(牢屋敷)跡: サンフランシスコ教会跡) 遺跡

- ・1878年(明治11年)10月28日 長崎県で郡区町村編制法の施行により、西彼杉郡等が発足。郡役所が下長崎村に設置。
- ・1897年(明治30年)4月1日 郡制を施行。
- ・1923年(大正12年)4月1日 郡会が廃止。郡役所は存続。
- ・1926年(大正15年)7月1日 郡役所が廃止。以降は地域区分名称となる。

エ) 長崎税務監督局-長崎税務署 (桜町東側西北部) 遺跡

- ・1886年(明治29年) 全国に23の税務管理局と520の税務署が創設される。
- ・1902年(明治35年) 全国に18の税務監督局が設置され、税務署が513となる。(九州では、長崎税務監督局、熊本税務監督局、鹿児島税務監督局)
- ・1909年(明治42年)11月5日 長崎税務監督局(長崎・佐賀両県の税務署を指揮監督)、行政整理によって廃止され、熊本税務監督局に併合される。

オ) 長崎商業会議所-長崎商工会議所 (桜町1番地: 桜町東側北部: 籠屋舗(牢屋敷)跡北部: サンフランシスコ教会跡北部) 遺跡

- ・1879年(明治12年)10月1日 島町107番地の松田商行において長崎商法会議所発足。
  - ・1883年(明治16年)5月 政府は、区町村や混合区町村に商工会を設置することができる旨を布告。
  - ・1883年(明治16年)12月 長崎商法会議所を改組し、長崎商工会を設立。事務所を桜町40番地に置く。
  - ・1893年(明治26年)12月27日 農商務大臣後藤兼二より長崎商業会議所設立認可指令下される。 商業会議所条例に基づき、長崎商工会を長崎商業会議所に改組。事務所を大村町(現在の万才町)の長崎貿易商業会所に置く。
  - ・1903年(明治36年)4月 商業会議所法施行にともない、長崎商業会議所を改組。
  - ・1919年(大正8年)11月15日 長崎商業会議所、大村町の長崎貿易商業会所から桜町1番地の元長崎税務監督局跡(当時長崎税務署: 桜町東側西北部)に移る。
  - ・1920年(大正9年)3月 社屋の大改修工事に着手。
  - ・1922年(大正11年)2月10日 社屋の大改修工事、第3期まで全館落成。
- (長崎商業会議所歴当該改組につき、その地所を東方、即ち、長崎西彼杉郡役所(籠屋舗(牢屋敷)跡: サンフランシスコ教会跡) 北部、へ盛土して拡張が)
- ・1928年(昭和3年)8月6日 昭和3年1月商工会議所法が施行。認可を申請、8月6日付をもって認可があり、長崎商業会議所を新法に基づき長崎商工会議所へ改組。
  - ・1943年(昭和18年)8月6日 昭和18年3月商工経済会法が公布、同年6月施行されて、同年8月6日 長崎商工経済会 発足。
  - ・1943年(昭和18年)8月28日 長崎商工会議所を解散。

カ) 長崎原爆被災遺跡として

- ・1945年(昭和20年)8月9日 爆心地帯の火災に次いで正午過ぎ、旧市内で第2次火災が発生。(旧市内の火災地帯では、主要官庁の市役所と隣接を結ぶ集合が中心となったが、ここでは最大風速8mの環状風を生じて延焼を繰り返す。更に裏側のがけ下の原町・本下町から酒造町・今集町に延焼し、夜中にかけて約30ヵ町が全焼 この第2次火災で県庁・長崎地方裁判所・長崎区裁判所・同接車庫・本博多郵便局・市水道課(益町)・長崎新聞社・日本勧業銀行長崎支店・長崎女子商業学校など次々に延焼し、火勢は長崎市会に迫ったが、庁舎防衛の消火活動と風向きの一転によって、虎ノ口延焼を免れた。
- ・旧桜町は、東側北部に強制疎開がある道、ほぼ長崎原爆被災による罹災を免れた、と推定します。

⑥ 現代の都市遺跡として

ア) 桜町の立体交差「桜橋」(旧桜町、旧内中町、旧小川町の北部一帯を掘削破壊)

- ・1954年(昭和29年)3月26日 桜町の立体交差「桜橋」完成し、開通式を挙げる。

イ) 長崎市役所 (旧桜町西側南部: 町年寄 高嶋家跡一帯 → 旧桜町西側北部: 町年寄 高嶋家跡一帯)

- ・1958年(昭和33年)3月29日 午後9時35分ごろ 市議会事務尾付道から出火、長崎市役所庁舎2層の大半を消失
- ・1959年(昭和34年)4月1日 長崎市制70周年・長崎市庁舎落成・開校389年記念式典を長崎市庁舎屋上で挙げる。(旧桜町の旧長崎市庁舎の北側一帯は強制疎開地)

ウ) 長崎商工会議所 (旧桜町東側北部: 西彼杉郡役所跡北部: 籠屋舗(牢屋敷)跡北部: サンフランシスコ教会跡北部)

- ・1846年(昭和21年)10月 社団法人日本商工会議所の発足。同年10月8日 社団法人長崎商工会議所の発足。
- ・1950年(昭和25年)3月 所置の火災とその復旧。
- ・1950年(昭和25年)11月30日 昭和25年5月(社団法人)商工会議所法の制定施行により、同年11月30日に認可を受けて、社団法人長崎商工会議所を再発足。
- ・1954年(昭和29年)7月1日 昭和28年10月1日 新商工会議所法が施行、特殊法人長崎商工会議所へ改組発足。
- ・1963年(昭和38年)3月7日 国道34号線の拡張工事で、長崎商工会議所の取り壊し始まる。
- ・1964年(昭和39年)2月17日 長崎商工会議所、長崎駅前大馬町の「長崎交通産業ビル」を閉所移、移転。
- ・1980年(昭和55年)12月 長崎商工会議所、桜町新所置「長崎商工会館」竣工。
- ・1981年(昭和56年)1月 長崎商工会議所、桜町新所置「長崎商工会館」落成式

エ) 長崎市庁舎別館 (旧桜町東側東部: 西彼杉郡役所跡: 長崎商業会議所-商工会議所跡東部: 籠屋舗(牢屋敷)跡: サンフランシスコ教会跡)

- ・1966年(昭和41年)11月21日長崎市庁舎別館 落成。

オ) 長崎刑務所

- ・1988年(昭和63年)4月-長崎刑務所、移転計画決定。
- ・1992年(平成4年)-現在地(早稲市小川町)に移転。(旧刑務所を設計した山下啓次郎はジャズピアニスト山下洋輔の祖父。以上 Wikipedia『長崎刑務所』最終更新2020年2月13日(木)12:54)
- ・2007年(平成19年)-旧長崎刑務所、一部(正門など)を残して解体。(Wikipedia『旧長崎刑務所』最終更新2017年11月26日(日)04:56)

2. 私連 当会の長崎地域の桜町地区遺跡群の現状への想定

(1) "土地の造形"(土地造成の遺跡)の現状への想定

私連 当会は、桜町地区の旧桜町の"土地の造形"(土地造成の遺跡)の現状について、近代に於いて、「長崎区役所-長崎市役所」の建築、「長崎税務監督局-長崎税務署-長崎商業会議所」の建築と土地造成があり、現代に於いて、1954年(昭和29年)桜町の立体的交差「桜橋」の完成により、北部の一端が完全に掘削され、1959年(昭和34年)「長崎市役所本館」竣工、1966年(昭和41年)「長崎市役所別館」落成の建築があり、土地の形質の変更が想定できる。中央道路の西側並びに東側共に、全体として、中世から近世にかけての西洋式城塞都市の市中としての"土地の造形"が、大略、遺存している、と想定します。

私連 当会は、旧桜町東側の"土地の造形"について、近世までの造形は、旧桜町東側西部が中央道標高を基準とする標高(高)に対し、旧桜町東側東部は東部道路標高を基準とする標高(低)であると推定する。1919年(大正8年)から1922年(大正11年)の旧桜町東側西部の元長崎税務監督局跡(当時長崎税務署)への長崎商業会議所への入居と改築に際して、桜町東側北部一帯に於いて、元長崎税務監督局敷地に連続して、東部への盛土による建築地所の拡張があり、1966年(昭和41年)1月21日長崎市庁舎別館落成へ向けて、当該の盛土部分の掘削があり、概略復旧した可能性がある、と想定します。

(2) 遺跡の現状への想定

私連 当会は、桜町地区の旧桜町の遺跡の現状について、一帯の、"土地の造形"(土地造成の遺跡)が、大略、遺存する、と想定する。本紙"1. 長崎地域の桜町地区遺跡群の性格"に記す、石器時代遺跡、縄文時代遺跡、弥生時代遺跡、古代遺跡、中世遺跡、近世遺跡、近代遺跡、長崎原子爆弾被爆遺跡、現代遺跡、都市長崎遺跡、が一定の密度を保持して遺存する可能性がある、と想定します。

3. 私連 当会の長崎地域の桜町地区遺跡群への認識

(1) 私連 当会は、長崎地域の桜町地区遺跡群について、以下、認識します。

① 私連 当会は、当該の遺跡群について、先史時代より今日まで、人類の活動が、広い時代に亘って重層し、様々に関連した活動により複雑した性格を保持する、豊かな遺跡群である、と認識します。

② 私連 当会は、当該の遺跡群について、都市長崎遺跡として、中世末期から江戸初期までに、ローマ・カトリックと有馬氏と大村市と様々な日本人によって形成された、長崎の丘の脊梁の西洋式の城塞都市、即ち、要害(石垣)と一ノ堀並びに大堀(一ノ堀)、二の堀、三ノ堀の内に形成する中世の自治都市、又、近世の長崎奉行在在所の城下町、長崎惣町八十番町のうち長崎奉行支配の「内町」(『寛永長崎港図』に見える)について、その両端に位置する外清町の峠の教会と広場一帯、又、糸割符宿老会所~長崎奉行所~長崎奉行所西役所等に相対し、二の堀、三ノ堀に囲まれ、その北端を形成する。重要遺跡である、と認識します。

③ 私連 当会は、当該の遺跡群について、サンフランシスコ教会、籠屋敷(牢屋敷)、町年寄高崎家、等、日本地域に於ける人類の特異な活動を証徴する複数の遺跡を包含する。重要遺跡である、と認識します。

私連 当会は、桜町の牢屋敷について、(南)馬町四郎、又、桜馬場西坂両所の牢屋敷を、桜町屋敷地に囚獄屋敷を移した、とされ、又、大村の本小路に大村牢が作られた、とされ、桜馬場に牢屋が並存した可能性が指摘され、浦上が馬込郷(古瀬)、浦上村かつい原の浦上(新瀬)が造られ、長崎代官付置の牢屋が小島郷の高島秋帆旧邸の南に建設された、とされる。当該の桜町の牢屋敷は、明治以降の行政に継承され、桜町四郎となり、長崎本獄、長崎監獄に改称、長崎監獄を、西南戦争に際して片淵に設置された長崎軍団仮病院の跡に移転、1908年(明治41年)長崎監獄を、北高来郡早村に五大監獄のひとつとして開設、1922年(大正11年)長崎監獄を、長崎刑務所と改称、1927年(昭和2年)長崎刑務所浦上刑務支所を浦上地区の雑木林を造成して新設したとされ、1945年(昭和20年)8月9日長崎刑務所浦上刑務支所は、アメリカ軍による長崎原子爆弾投下後に被爆、1992年(平成4年)長崎刑務所を諫早市小川町に移転し、現在、之が、存続する、と理解します。

私連 当会は、当該の桜町の牢屋敷の存在について、江戸の御公儀(幕府)によって、江戸初期に、それまでの施設を業約整備され、後、同時代の図面史料も豊富であり、当時の行政上の性格が推し測られ、且つ、近代現代の日本の行政機関としての監獄/刑務所に、近世初期より、連続して、直接に組織を継承する、唯一最古の明らかな発端である、と想定し得る。又、長崎地域に於いて、江戸幕府から明治政府への行政機構の推移が断絶ではなく連続的であることを示唆し、歴史上、且つ、学術上、極めて重要であり、同時に、希少である、と認識します。

④ 私連 当会は、当該の遺跡群について、近代の長崎市役所庁舎、長崎税務監督局-長崎税務署-長崎商業会議所-長崎商工会議所、現代の桜橋と立体交差、長崎市役所本館、長崎市役所別館、長崎市議会、桜町公園 等、を認識します。

私連 当会は、長崎地域の桜町地区遺跡群について、本紙3-(1)-①、②、③、④を同時に包含し、且つ、遺跡の存在と実態を補完し傍証する詳細な記録資料が複数現存し、一体として、希少であり、重要遺跡である、と認識します。

4. 私連 当会の皆様への長崎地域の桜町地区遺跡群についての提案と要望

(1) 遺跡の構想について

① 私連 当会は、皆様に、長崎の丘の脊梁を主たる"土地の造形"とする、ローマ・カトリックと有馬氏と大村市と様々な日本人によって形成された、西洋式の城塞都市の遺跡、又隣接する一帯、又近隣の関連地域について、本来の遺跡と歴史の関係の在り方に従い、漸次、踏査、資料調査より、発掘調査へと、漸次、計画的に、遺跡調査を実施し、その全体と個別遺跡の性格を明らかにしつつ、様々な開発との調整を行い、遺跡の現状保存を実施することにより、又は、徳測の余地のない再建によって、遺跡の全体を修復しつつ顕現すること、を提案し要望します。

② 私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群について、当該の西洋式の城塞都市の構成に於いて、両端を構成する峠の教会-糸割符宿老会所-長崎奉行所(西役所)等遺跡群と相対し、且つ、発展し拡張する市中の北端を構成する重要拠点と認識し、峠の教会-糸割符宿老会所-長崎奉行所(西役所)等遺跡群と同等の扱いにより、一体の遺跡の調査と保存と活用を形成すること、を提案し要望します。

(2) 長崎地域の桜町地区遺跡群の遺跡としての調査と保存と活用について

① 私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群について、現状保存することを提案し要望します。

② 私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群について、現状保存を前提とした活用のための発掘等遺跡調査を選択すること、を提案し要望します。

③ 私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群に関する現状保存を前提とした活用のための発掘等遺跡調査について、上層の遺跡の現状保存を前提として、より下層の遺跡を調査すること、を提案し要望します。

(3) 長崎地域の桜町地区遺跡群の土壌汚染の可能性と当該の調査について

私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群に関し、長崎区役所庁舎-長崎市役所庁舎、長崎商業会議所-長崎商工会議所、長崎市役所本館、長崎市役所別館、その他の過去の土地の利用について、土壌汚染、並びに、水質汚濁の由来、又、その有無の精査、又は、土壌汚染状況調査、を実施すること、を提案し要望します。

私連 当会は、皆様に、当該の土地の利用に関する、土壌汚染、並びに、水質汚濁の由来、又、その有無の精査、又は、土壌汚染状況調査、並びに、土壌汚染、並びに、水質汚濁の対策、並びに、当該の土地の遺跡の調査、保存、活用が、夫々、同時に、完全に両立する方法を選択すること、を提案し要望します。

(4) 第三者による調査指導委員会の設置と調査主体の連携

私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群に関する、遺跡の構想と現状保存を前提とした活用のための発掘等遺跡調査、並びに、土壌汚染、並びに、水質汚濁に関する調査と対策について、地上地下の建築物その他の建造物の解体と撤去、並びに、資料並びに発掘掘削等調査、対策に於いて、第三者による調査指導委員会を設置し、調査指導委員会と調査主体が情報交換し連携して、遺跡地の調査と活用と対策の方針と方法と行為と進捗とその管理を行うこと、を提案し要望します。

(5) 遺跡、並びに、土壌汚染、並びに、水質汚濁に関する調査、保存、活用、対策の過程の一般公開

私連 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群に関する、遺跡の構想と現状保存を前提とした活用のための発掘等遺跡調査、並びに、土壌汚染、並びに、水質汚濁に関する調査と対策について、地上地下の建築物その他の建造物の解体と撤去、並びに、資料並びに発掘掘削等調査、対策に於いて、遺跡地の調査と活用と対策の方針と方法と行為と進捗とその管理を、同時に、一般公開し、且つ、相互に情報交換すること、を提案し要望します。

5. 私達 当会の皆様への長崎地域の桜町地区遺跡群の保存と活用に関連する提案と要望

私達 当会は、皆様に、遺跡の地に於いては、遺跡たる事象を優先して、様々な行為を認識すること、を提案し要望します。

私達 当会は、皆様に、当該の長崎地域の桜町地区遺跡群の保存と活用に関連して、以下の変更を、提案し要望します。

(1) 長崎市が計画する長崎市役所別館土地への公用車駐車場(約170台)建設について

①私達 当会は、皆様に、長崎市魚の町遺跡を建設用地に、長崎市が計画し実施中の新しい長崎市役所庁舎の建設について、公用車駐車場設置を念頭に、比較的、広い用地面積を確保し、やすい、浦上川河口東岸域へ変更すること、例えば、MICE施設との合築、又は、三菱産工業株式会社長崎造船所町工場地に於ける民間再開発地域に於ける用地確保と建築、又は、各種民間施設との合築を計画し実施すること、を提案し要望します。

②私達 当会は、皆様に、長崎市魚の町遺跡を建設用地に、長崎市が計画し実施中の新しい長崎市役所庁舎の設計を変更し、公用車駐車場について、当該庁舎内に設置すること、を提案し要望します。

③私達 当会は、皆様に、当該の公用車駐車場について、現在の市営桜町駐車場を代用すること、を提案し要望します。

(2) 長崎市が計画する長崎市役所本館土地への文化芸術ホール建設について

私達 当会は、皆様に、当該の文化芸術ホールの建設について、私達 当会が、皆様に、『長崎国際歴史文化都市構想』(2019年(平成31年)1月18日 金曜日 改訂5版:2020年(令和2年)2月16日 日曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)で提案し要望している、長崎水辺の森公園一水辺のプロムナード一長崎県美術館一帯に於ける、オペラ・ハウス一シンフォニー・ホール(仮称)『長崎音楽堂』の新設に施設共用すること、を提案し要望します。

6. 私達 当会が、皆様に、桜町で、提案し要望している『長崎アーツ・センター構想』について

私達 当会は、皆様に、『長崎国際歴史文化都市構想』(2019年(平成31年)1月18日 金曜日 改訂5版:2020年(令和2年)2月16日 日曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)で提案している『長崎アーツ・センター構想』について、桜町地区遺跡群に於ける遺跡保存を優先して、之を、第二構案に取り下げ、長崎水辺の森公園地区への発展案と変更し、一帯に於ける、抽象文化分野芸術との連携、活動の発展を期待します。

私達 当会は、私達 人類の遺跡と歴史の真実について、之を、私達 人類の存在の本源で在り得る、と認識します。

私達 当会は、遺跡と歴史の真実が、私達 人類の遺跡の最大の活用となる、と認識します。

7. 私達 当会の遺跡群の調査と保存と活用への理解

(1) 遺跡の調査について

私達 当会は、遺跡の調査について、私達 人類が、私達 人類の活動の痕跡である、遺跡の実態と諸事象との諸関係とその性格を確認すること、と理解します。

(2) 遺跡の保存について

私達 当会は、遺跡の保存について、私達 人類が、遺跡の損壊と損耗を免れる措置を執ること、その結果として、遺跡が損壊と損耗を免れること、と理解します。

(3) 遺跡の活用について

私達 当会は、遺跡の活用について、遺跡がそこに在ること、同時に、私達 人類がその遺跡の存在を、意識し、認知し、認識すること、と理解します。

8. 参考資料

(1) 長崎惣町絵図 (長崎歴史文化博物館)

(2) 長崎市地番入分割圖 附 市内著名録 名所案内 發賣元 聖文社 長崎 大正八年七月十日 發行  
27 東中町、小川町 26 櫻町、勝山町、八百屋町、内中町 21 袋町、今魚町、本大工町、引地町、酒屋町 (2) (長崎歴史文化博物館)

(3) 最新精密長崎市街地圖 昭和26年 (長崎歴史文化博物館)

(4) 長崎商工會議所 絵ハガキ(長崎) 158 01 (長崎歴史文化博物館)

(5) 長崎西彼村郡役所 絵ハガキ(長崎) 689 01 (長崎歴史文化博物館)

(6) 『長崎おもいで散歩 昭和30年代の街角』1994年10月12日 初版発行 2004年7月8日 4版発行 著者 真木満 発行者 真木雄司 発行所 有限会社 春光社

(7) 『長崎市史年表』昭和56年3月20日発行 編集 長崎市史年表編さん委員会 発行 長崎市役所 長崎市桜町2番22号 印刷 藤木博英社 長崎市万屋町5番13号

(8) 『桜町遺跡 オフィスビル建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書 1998年3月 長崎市埋蔵文化財調査協議会』

(9) 『桜町遺跡 サンガーデン桜町マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書 2000年 長崎市埋蔵文化財調査協議会』2000年5月31日 発行 長崎市埋蔵文化財調査協議会

(10) 『アルバム長崎百年 葦の長崎 秘蔵絵葉書コレクション』2005年2月25日 初版発行 編者 ブライアン・パークガフニ Brian Burke-Gaffney 発行人 松田靖一 編集人 堀憲昭 発行所 株式会社 長崎文献社

(11) 『復元! 江戸時代の長崎』2009(平成21)年8月30日 初版発行 編著者 布袋厚 発行所 株式会社 長崎文献社  
P104-P105 第四章 絵図にみる町のうつりかわり 6 幻の内中町 秀吉の時代につくられた町の運命  
P128-P129 第五章 長崎の名所・旧跡 いま・昔 7 そこに構問所があった いまの長崎市役所別館は「桜町牢屋」の跡

(12) 『長崎惣町復元図』2009(平成21)年8月30日 初版発行 2012年2月20日 第3番発行 編著者 布袋厚 発行所 株式会社 長崎文献社

(13) 『中世長崎の基礎的研究』2011年12月11日 発行 著者 外山幹夫 発行者 田中大 発行所 有限会社 思文閣出版

(14) 『一米軍艦影一 長崎被爆荒野 被爆70周年に問う「戦争と平和」』発行日 2015年(平成27)7月30日 初版第一刷  
編著 長崎文献社 発行人 柴田雅孝 編集人 堀憲昭 発行所 株式会社 長崎文献社  
P38-P39 原爆投下前の長崎市の航空写真 P40-P41 原爆投下後の長崎市の航空写真

(15) 『長崎絵図帖の世界』発行日 初版 2018年5月20日 著者 大井昇 発行人 片山仁志 編集人 堀憲昭 発行所 株式会社 長崎文献社

#### 四. 養生所/(長崎)医学校等遺跡(“佐古の丘の地形”、“中核区域”、“運用区域”、“関連区域”)について

(ア) 私達当会は、当該遺跡地の“中核区域”内に於いて、遺跡を掘削して行う、長崎市立仁田佐古小学校建設、並びに、外周道路拡幅建設の計画の実施が進行する状況を勘案し、以下、A. B. C. D. E. F. 各案を例示します。

A. B. C. D. E. 案は、長崎市立仁田佐古小学校について、当初検討の複数の建設用地候補地等の当該遺跡地以外地への設置を前提とします。

私達当会は、A案について、原体である遺跡(非意図)、B. C. 案について、原体である遺跡を基盤とする、芸術(アート:意図)としての変奏、又は変奏の付加、と理解し得ると理解する処、当該小学校校舎等施設の部分的竣工と2020年4月よりの小学校としての共用開始により、人類の非意図たる遺跡と人類の非意図たる建設途中の小学校施設建物の建設取消たる途次の状態に関する人類の非意図たる一貫性が消滅した為、当該のB. C. 案を廃案とします。私達当会は、D案について、小学校校舎等施設の部分的竣工と2020年4月よりの小学校としての共用開始を受けて、又、E案について、2019年12月以降の世界的な新型コロナウイルス感染症の蔓延を受けての新常態(ニュー・ノーマル)を意図し、発展的に追加します。G. 案は、A. B. C. D. E. F. 各案に附随させます。

私達当会は、D. E. 案を採択して、之を、皆様に、提案し要望します。

A. 建設途中の小学校施設建物並びに外周道路の新築構造物の撤去、当該遺跡の中核区域(建物敷地と外周道路等)の遺跡の全域の調査、現状保存、原状回復、遺跡としての外周道路—土地建物通路の石造基礎構造物又は敷設物、並びに、甲種長崎医学校講堂建物の再建、保全と継承と活用。

[遺跡としての、空間の造形とその構造物、並びに、一部の建物再建]

B. 建設途中の小学校施設建物の途次の状態、並びに、遺跡再建を優先する一部破壊又撤去の状態の現状保存、補強改修、関連する教育研修、宿泊、展示説明施設、応接等への転用供用、外周道路の新築構造物の撤去、並びに、当該遺跡の中核区域(建物敷地と外周道路等)の全域の調査、現状保存、原状回復、遺跡としての外周道路—土地建物通路の石造基礎構造物又は敷設物—甲種医学校講堂建物の再建、保全と継承と活用。

[芸術且つ遺跡(アート:意図、且つ、その経緯としての痕跡)としての完成しない建築物、原体である遺跡としての、空間の造形とその構造物、並びに、一部の建物再建]

C. 建設完了の小学校施設建物の完成の状態、並びに、遺跡再建を優先する一部破壊又撤去の状態の現状保存、補強改修、遺跡とその関係事象に関連する教育研修、宿泊、展示説明施設、応接等への転用供用、外周道路の新築構造物の撤去、並びに、当該遺跡の中核区域(建物敷地と外周道路等)の全域の調査、現状保存、原状回復、遺跡としての外周道路—土地建物通路の石造基礎構造物又は敷設物—甲種医学校講堂建物の再建、保全と継承と活用。

[芸術且つ遺跡(アート:意図、且つ、その経緯としての痕跡)としての破壊される建築物、原体である遺跡としての、空間の造形とその構造物、並びに、一部の建物再建]

D. 建設竣工並びに建設途中の小学校施設建物並びに外周道路の新築構造物の撤去、当該遺跡の中核区域(建物敷地と外周道路等)の遺跡の全域の調査、現状保存、原状回復、遺跡としての外周道路—土地建物通路の石造基礎構造物又は敷設物、並びに、甲種長崎医学校講堂建物の再建、保全と継承と活用。

[遺跡としての、空間の造形とその構造物、並びに、一部の建物再建]

建設竣工並びに建設途中の小学校施設建物の遺跡とその関係事象に関連する教育研修、宿泊、展示説明施設、応接等への転用供用の可能性の検討。

[小学校施設建物の遺跡附随施設としての転用供用の可能性の検討]

E. 建設竣工並びに建設途中の小学校施設建物並びに外周道路の新築構造物の撤去、当該遺跡の中核区域(建物敷地と外周道路等)の遺跡の全域の調査、現状保存、原状回復、遺跡としての外周道路—土地建物通路の石造基礎構造物又は敷設物、並びに、甲種長崎医学校講堂建物の再建、保全と継承と活用。

[遺跡としての、空間の造形とその構造物、並びに、一部の建物再建]

建設竣工並びに建設途中の小学校施設建物の感染症医療又療養施設としての転用供用の可能性の検討。

当該検討は、新型コロナウイルス感染症出現による新常態(ニュー・ノーマル)を整備する意図を有する。当該検討は、当該遺跡の養生所/(長崎)医学校、並びに、明治14年8月(1881年)以降昭和28年(1953年)頃まで感染症たる梅毒に対する梅毒病院として運用された土地の利用の履歴を継承する実態を有する。当該地は、佐古の丘の南端頂部に位置し風通しもよく、当該地から長崎港や稲佐山方面への眺望もよく、遺跡地は散策等運動にも適すると考え得る。

[小学校施設建物の感染症医療又療養施設としての転用供用の可能性の検討]

F. 長崎市立仁田佐古小学校について、長崎市の現在計画による建物等主要施設の建設と当該小学校の運営、当該小学校付帯設備施工による遺跡破壊の防止、外周道路計画の廃止、並びに、旧学校敷地内の建物等主要施設の残余の土地、並びに、外周道路の土地での遺跡の再建。

G. 養生所/(長崎)医学校等遺跡の“運用区域”(病院西側)、及び、“関連区域”(大徳寺境内並びに庫裏、大楠社の一帯)、ポンペ・ファン・メルデルフォールの養生所/精得館たる近代西洋病院の要件を具現する“佐古の丘の地形”(佐古—仁田頭の丘、周辺一帯)、並びに、寄合町西南部の「佐古入口」より、後の養生所/精得館一帯を通り、北の「大村領」に至る旧道に於いて、遺跡の遺跡としての認知、確認、現状保存、活用、整備、公開、継承を実現する。

同時に、当該遺跡の土地の範囲について、文化財保護法による「周知の埋蔵文化財包蔵地」に決定する。

(イ) 養生所/(長崎)医学校等遺跡中核区域北部一帯遺跡について

i) 長崎医学校等正門両翼石垣等石垣

私達 当会は、皆様に、長崎医学校等正門両翼石垣等石垣について、一連の養生所/(長崎)医学校等遺跡の調査、保存、活用の要望の初期に、当該小学校建設の理事者に、当該遺構の歴史と当該遺構の性格に関する情報を提供し説明して現状保存を要望し、同時に、当該小学校建設の理事者より、「当該石垣に隣接する市道西小島稲田町1号線の北部については、所定の道路幅(2.7m)を確保できている為道路拡幅の必要と予定が無いことより、当該石垣も現状を変更しないことになっている」と回示があり、その後も、皆様に、詳細な遺跡としての情報提供を為し、現状保存の提案と要望を行ってきた処です。

私達 当会は、2019年(平成31年)4月の理事者との打合せに於いて、理事者より敷地全体図面の提示があり、当該図面に当該石垣の掘削の可能性を検知し、計画を確認した処、掘削の予定が判明し、改めて、2019年(令和元年)6月以降、皆様に、別途、理事者に説明し、要望書を提出し、また、定例議会に際して議会議長への陳情書にて、現状保存の提案と要望を明らかにしてきました。

私達 当会は、長崎医学校等正門両翼石垣等石垣について、その変遷が提示できる遺跡の実態の現状保存、又、原状回復、又、遺跡としての活用を提案し、要望します。

ii) 長崎医学校等敷地東部に於ける外周道路拡幅工事で発見した敷地境界一帯遺跡

私達 当会は、皆様に、a. 養生所/(長崎)医学校等遺跡の中核区域の北東部に位置する、2018年(平成30年)1月迄の試掘/発掘調査で検出された、旧長崎市立佐古小学校北部敷地屋外運動場東部に於ける長崎医学校等遺構又敷地境界線遺跡と想定し得る長崎医学校等北寄宿舎等建物敷地東突端部敷地及び当該敷地境界線南面法面遺構及び隣接する長崎医学校等敷地外周道路遺構等遺跡について、b. 2019年(令和元年)6月18日 火曜日 長崎市中央総合事務所地域整備二課が、市道西小島2号線北部に関する旧長崎市立佐古小学校北部敷地屋外運動場東部に於ける外周道路拡幅工事中に確認し、2019年(令和元年)6月19日 水曜日 夕刻、私達 当会が、確認した、長崎医学校等遺構又敷地境界線遺跡と想定し得る長崎医学校等敷地北部東突端部域の、石垣(石積)及びコンクリート及び陶管等により構成される複数の構造物によるV字型の遺構、について、2019年(令和元年)5月以降、理事者の皆様へ説明し、各々別途作成の要望書を提出し、また、定例議会に際して議会議長への陳情書にて、現状保存の措置を執ることを提案し要望しています。

私達 当会は、当該 a. 及び、当該 b. の両遺構は、連続する遺構であると推定します。

私達 当会は、当該 a. 及び、当該 b. の両遺構について、一体の遺跡として、遺跡の実態の現状保存、又、原状回復、又、遺跡としての活用を提案し、要望します。

# 五.『長崎市歴史的風致維持向上計画』並びに『国土交通省長崎港松が枝埠頭岸壁2 バース化』並びに『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』について

## 1.『長崎市歴史的風致維持向上計画』

2020年(令和2年)3月25日 水曜日 長崎新聞 第22面は、『長崎市歴史的風致維持向上計画』について、「政府は24日、歴史的な景観を生かしたまちづくりを支援するため、長崎市が申請していた「歴史的風致維持向上計画」を認定した。歴史まちづくり法に基づく制度で、歴史的建造物の改修や買い取りなどに、交付金を充てることができる。県内自治体の認定は初めて。……(手島聡志)」、と報道しました。

『長崎市歴史的風致維持向上計画』は、①「近世長崎の町人文化にみる歴史的風致」②「中国文化の伝来にみる歴史的風致」③「長崎居留地の海外交流にみる歴史的風致」④「外海の石積文化にみる歴史的風致」⑤「被爆継承と平和の祈りにみる歴史的風致」、の5つの歴史的風致によって構成し、長崎市の5つの歴史的風致のうち、2つの世界文化遺産の構成資産や重要文化財、重要伝統的建造物群保存地区等の価値の高い歴史的建造物が集積し、かつ、歴史的資産を生かしたまちづくりの取組みを速やかに図るべき区域として③「長崎居留地の海外交流にみる歴史的風致」の範囲において、重点区域を設定する、計画です。

『長崎市歴史的風致維持向上計画』は、その方針について「[歴史的風致の維持及び向上に関する方針]—[まちづくりの方針]歴史・伝統を守り、磨き、生かすことで、営みと賑わいが共生できるまち—(1)歴史的建造物の保存・活用に関する方針：【10年後に目指す姿】歴史的建造物が適切に評価・保存継承され、まちづくりと一体となった魅力的な活用が図られている。—(2)歴史的建造物の周辺環境の保全・形成に関する方針：【10年後に目指す姿】地域の歴史や自然、まちなみ等の個性を生かした魅力的なまちになっている。—(3)歴史的な営みや活動の継承に関する方針：【10年後に目指す姿】住みたくなる、住み続けられるまち、営みや活動を次世代に継承できる協働のまちになっている。—(4)賑わいの創出に関する方針：【10年後に目指す姿】長崎独自の歴史的風致が磨かれ、生かされることで、国内外の来訪者で賑わうまちになっている。」と記します。

(長崎市歴史的風致維持向上計画 概要版 令和二年三月認定 長崎市 より趣旨)

## 2.『国土交通省長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化』並びに『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』

2020年(令和2年)4月1日 水曜日 長崎新聞 第2面は、『長崎港2バース化計 島原道路有明一瑞穂も国交省予算配分 西九州道大幅増』国土交通省は31日、2020年度の予算配分を公表した。長崎港松が枝埠頭に大型船2隻が接岸できるようにする2バースの新規事業化を盛り込んだ。16万トン級の大型客船に対応できる410メートルの新しい岸壁や泊地、臨海道路、埠頭用地を6年かけて整備する。【22面に関連記事】国交省などによると、19年の長崎港のクルーズ船寄港は183隻で全国で4番目に多い。クルーズ客は55万人に上るが、一方で岸壁不足などで100隻程度を受け入れられなかった。クルーズ需要については新型コロナウイルスによる不透明感はあるものの、2バース化で背後地に集積する世界遺産と調和した都市空間の形成や、三菱重工業長崎造船所のクルーズ船メンテナンス事業との相乗効果が期待できるという。また、路面電車の松が枝方面への延伸など背後地の再開発構想も運動して動き出す可能性がある。総事業費は136億円で25年度に完成予定。20年度予算には2億円を計上し、岸壁や道路の調査設計を進める。……(豊竹健二)」、と報道しました。

長崎市まちづくり部都市計画課市街地整備係は、国交省が岸壁の築造を事業し、長崎県が埠頭用地の埋立造成を事業し、長崎県が『長崎県松が枝地区再開発構想』を提示し、新埠頭とその東と北に隣接する国道499号線の西側の一部の民有地等を含む土地の範囲に設定する再開発構想検討エリアに於いて港湾施設等整備とまちづくりを、並びに、路面電車の松が枝方面への延伸、を構想する、と説明します。

『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』は、〈将来像〉：海の国際玄関口～人々が交流する海陸のクロスロード～、〈開発コンセプト〉：A.クルーズ客船の受入拠点となる国際ターミナル機能の強化 B.国内外の観光客の快適な移動を支える交通結節機能の強化 C.来訪者に充実したサービスと楽しさを提供する観光・交流機能の強化 D.地域の安心快適な暮らしを支える都市機能の強化、【施設イメージ】：A)港湾旅客ターミナル、大型バス乗降場・駐車場、緑地(オープンスペース)、B)路面電車の延伸・電停、路線バスの乗降場、タクシー乗降場、C)観光案内所、飲食店(景色を生かした)、物産館(地元物産を扱う)、免税店 など、とする構想です。

(長崎県の広報より)

## 3.『小曾根築地遺跡』

『長崎市歴史的風致維持向上計画』の範囲と『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』の再開発構想検討エリアの双方に跨る範囲に、小曾根築地遺跡(東部の小曾根邸跡一帯並びに西部の海岸付一帯を一体の範囲とする、近世末期から現代に至る、切土と築地による土地の造成を基盤として構成される「土地の造形」と関係する人類の活動と土地の利用の履歴に関する痕跡の遺跡)が存在します。

### (1)『小曾根築地遺跡』の範囲

私達 当会は、『小曾根築地遺跡』の範囲について、概略、現在の長崎市の小曾根町全域と松が枝町南東の小曾根町に隣接する一帯の範囲に内包される範囲、即ち、現在の国道499号線の拡張以前の敷地一帯、国道499号線の東に於いて、隣接する宝製鋼株式会社/長崎市月極小曾根町駐車場(『小曾根邸遺跡』)/民家である小曾根町南端の一帯、国道499号線の西に於いて、吉弘医院/長崎自動車株式会社松ヶ枝営業所/長崎税務署の三件とその西側の道路、長崎自動車株式会社バス車庫の敷地と東側の民家一帯、びっくりドンキー小曾根町店並びにネットヨタ長崎ベイサイド南山手の敷地の東部の建物付近一帯、に仮定します。(『長崎港全圖』(明治3年)参照)

### (2)『小曾根築地』に関する推移並びに歴史上背景の概略

『小曾根築地関連年表(推移並びに歴史上背景の概略)』(2020年(令和2年)4月3日 金曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)を御参照下さい。

### (3)『小曾根築地遺跡』に関する土地の利用の履歴について

私達 当会は、皆様に、当該の『小曾根築地遺跡』に関する土地の利用の履歴について、之を調査し公開すること、提案し要望します。

(4) 『小曾根築地遺跡』の存在、又、意義又は価値、並びに、調査保存活用について

私達当会は、『小曾根築地遺跡』について、長崎の外国人居留地に先立って竣工し、長崎地域の梅が枝、南山手地域の長崎外国人居留地一帯の海岸埋立埠頭岸壁形成土木造成技術遺跡、長崎地域の治水土木造成技術遺跡、土地造成技術遺跡、の一環と位置付けます。

私達当会は、小曾根家御当主より小曾根家が長崎の佐古の丘の『養生所/(長崎)医学校(又は養生所/(長崎)医学校等遺跡)』の用地確保と造成工事に関係している、と伝聞します。

私達当会は、『小曾根築地遺跡』について、その形成、過程又は技術が、長崎地域の長崎外国人居留地又海岸埋立埠頭岸壁の形成、養生所/(長崎)医学校の成立、治水土木工事、長崎港内港外港一帯の台場形成、その他の広範な土木工事と相互の関係性を構成する、と仮定します。

私達当会は、小曾根家について、日本の中世から近世、近代、現代を背景に、貿易と商業活動を媒体として、世界とアジアと日本、平戸と長崎等の広範な長崎地域に関する、政治、経済、概念や技術の移転、文化の交流について、濱田彌兵衛や徳川将軍家や諸藩大名家や李鴻章との関係、又、米・フツェルトの造船所(乙)、英・アバディーン・ミツェルトの造船所(乙)、小曾根西洋船大工街、炭坑舎の存在にも顕在する、当該の交易の相互連帯(ネットワーク)や情報や思潮や行為の中継と創生と拡散、他諸事象の具体的事象と関係性を構成する、と仮定します。

私達当会は、『小曾根築地遺跡』について、当該の関連の諸事象の出来事、具体的事象と関係性、世界と日本の在り方、を証徴する、と仮定します。

私達当会は、『小曾根築地遺跡』の意義、又は、価値について、遺跡の存在並びに実態に関する調査を実施し、歴史上の出来事と関係性の調査を実施し、世界の各地域の現代の在り方との関係性を考察し、当該の『小曾根築地遺跡』の存在、並びに、その意義、又は、価値とも呼称される諸概念を明らかにし、公開し、遺跡の遺跡としての空間と存在の実態を調査し、破壊せず、保存し、公開し、文化財保護法上の保護の措置を執り、或いは、原状を回復し、又は、保守整備し、人々の生活の中での機能を与え(『世界遺産条約履行のための作業指針』(ユネスコ世界遺産センター・文化庁仮訳)：I. C 世界遺産条約締約国 15-b) (世界遺産条約第5条参照)、情報を発信し、諸般の制度上の認定や登録をも実現し、同時に、活用すること、を提案し要望します。

私達当会は、『小曾根築地遺跡』について、記念物 建築物、記念的意義を有する彫刻及び絵画、考古学的な性質の物件及び構造物、金石文、洞穴住居ならびにこれらの物件の組合せであって、歴史上、芸術上、又は学術上顕著な普遍的価値を有するもの、建造物群 独立した建築物の群又は連続した建造物の群であって、その建築様式、均質性又は景観内の位置のために、歴史上、芸術上、又は学術上顕著な普遍的価値を有するもの、遺跡 人間の作品、自然と人間との共同作品及び考古学的遺跡を含む区域であって、歴史上、芸術上、民俗学上又は人類学上顕著な普遍的価値を有するもの(『世界遺産条約履行のための作業指針』(ユネスコ世界遺産センター・文化庁仮訳)：II. A 世界遺産の定義 文化遺産及び自然遺産 45 世界遺産条約第1条「文化遺産」)、又、顕著な普遍的価値とは、国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性をもつような、傑出した文化的な意義及び/又は自然的な価値を意味する。従って、そのような遺産を恒久的に保護することは国際社会全体にとって最高水準の重要性を有する。委員会は、世界遺産一覧表に資産を登録するための基準の定義を行う(『世界遺産条約履行のための作業指針』(ユネスコ世界遺産センター・文化庁仮訳)：II. A 世界遺産の定義 顕著な普遍的価値 49)、又、(ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある時期にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである、(iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である、(v) あるひとつの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である(特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの)(『世界遺産条約履行のための作業指針』(ユネスコ世界遺産センター・文化庁仮訳)：II. D 顕著な普遍的価値の評価基準 77)、たる事象である、と仮定します。

4. 私達当会は、皆様に、『長崎市歴史的風致維持向上計画』、並びに、『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』について、以下、提案し要望します。

(1) 『長崎県松が枝地区再開発構想』について

私達当会は、『長崎県松が枝地区再開発構想』について、『長崎市歴史的風致維持向上計画』と計画範囲を重複し連続して有し、且つ、『長崎市歴史的風致維持向上計画』に對面して隣接する大規模開発であることより、『長崎市歴史的風致維持向上計画』の実態に与える影響が極めて大きい計画であり、『長崎市歴史的風致維持向上計画』と運動して計画され実施される筈の計画である、と認識します。

私達当会は、『長崎県松が枝地区再開発構想』について、以下、提案し要望します。

① 前提として

私達当会は、皆様に、長崎造船株式会社並びに新長ドック株式会社の二事業者が現在地での事業の継続を自由意志として保有し、且つ、長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化の計画が当該事業者の当該自由意志の遂行を何らかの事象により阻害する場合は、長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化の計画を、中止し、且つ、廃止すること、について、之を、明確に認識し、同時に、認知し、且つ、速やかに実施すること、を提案し要望します

② 遺跡として 『東山手外国人居留地遺跡』『南山手外国人居留地遺跡』『埠頭岸壁等土木造成遺跡』『治水土木造成遺跡』『小曾根築地遺跡』その他の適宜の遺跡

私達当会は、皆様に、宇宙と人類出現以前以降の地球の自然と遺跡(遺跡としての空間と“土地の造形”と建造物と遺物)は、人類にとって根源的な蓄積である如、之を調査し、破壊せず、現状保存し、公開し、文化財保護法上の保護の措置を執り、又は、原状回復し、保守整備し、人々の生活の中での機能を与え、情報発信し、諸般の制度上の認定や登録をも実現し、活用することを提案し要望します。

③ 私達人類の活動の空間として

ア. 私達当会は、皆様に、新しく築造される岸壁と新しく埋設される埠頭、並びに、その東に隣接し、且つ、国道499号線の西に隣接する土地について、遺跡を遺跡として、遺跡以外を長崎港松が枝埠頭岸壁第2バース並びにその関連施設として、それぞれ専用に土地の利用を企画すること、を提案し要望します。

イ. 私達当会は、新しく築造される岸壁と新しく埋設される埠頭について、長崎港松が枝埠頭岸壁2バース並びにその関連施設として、専用に運用される、と仮定します。

ウ. 私達当会は、皆様に、当該の計画範囲の北部に位置する、松が枝町南東の小曾根町に隣接する一帯と小曾根町の一帯について、在来の建築物を移転し、一体の空間として運用すること、を提案し要望します。

1) 私達当会は、皆様に、『小曾根築地遺跡』並びに『埠頭岸壁等土木造成遺跡』について、遺跡の調査を行い、遺跡として運用し、遺跡として保存し活用すること、を提案し要望します。

ii) 私達 当会は、皆様に、大浦警察署について浪の平町南部から古河町北部方面へ移転、長崎港湾合同庁舎/長崎県警察本部松が枝別館/長崎県警察松が枝第2別館/気象庁検測所/長崎税務署について浦上川河口東岸再開発地区の長崎県庁舎近隣方面へ移転、長崎自動車株式会社松ヶ枝営業所/長崎自動車株式会社バス車庫について小ヶ倉三丁目の国道499号線と県道237号線が合流する好立地にある柳埠頭へ移転すること、を提案し要望します。

iii) 私達 当会は、皆様に、私達人類の活動の空間に於ける遺跡に於ける機能の交織として、小曾根築地が公共交通の結節点でもあった土地の利用の履歴を継承し、遺跡の原状保存を前提とする範囲内に於いて、原則として、『小曾根築地遺跡』の土地の国道499号線に近似する当該国道の西に隣接する位置に、第二候補として、『小曾根築地遺跡』の西に水路を渡る土地の位置に隣接路面電車の線路と終着停留所を設置すること、を提案し要望します。(4-(2)『小曾根築地遺跡』について参照)

エ. 私達 当会は、皆様に、当該の計画範囲の南部に位置する、浪の平町北部の一帯について、以下、を提案し要望します。

i) 私達 当会は、皆様に、当該の土地の範囲に現存する長崎造船株式会社並びに新長ドック株式会社の二事業者の造船工場の建物について、之を市民生活の痕跡たる文化財、又社会的共通資本としての蓄積、公益として、之を破壊せず、保存し、又、リノベーション、例えば、工場空間内部に新しい建物を建設する、又は、建物間を空中歩廊により連結する等、によって、入国管理等施設、又は、小曾根築地博物館、又、海軍博物館等、に再生活用すること、を提案し要望します。

オ. 私達 当会は、皆様に、民有地並びにその利用形態の移転について、所有者に発生する経済的損失について、政策上の補填を計画し実施すること、を提案し要望します。

#### ④ 仮定としての懸念と提案と要望

私達 当会は、『長崎県松が枝地区再開発構想～港湾整備と一体となったまちづくり～』に於ける入国管理や通関等のパス運営管理等施設について、民間開発によって形成されるならば、民間による資本の運用効率を求めて、資本運用システムの収容装置として施設が高層化し、更に、資本主体が複数に渡る場合には個別の構想によって、複数の土地の区画に規定される新しい複数の独立した個別の作家性を伴う閉じた空間としての高層建築群が密集密接するスプロールとして出現する可能性がある、と仮定します。

私達 当会は、この場合、南山手の鍋冠山の山境と長崎内港に挟まれた南北に伸びる東西に狭い急斜面地に位置する遺跡である『南山手外国人居留地遺跡』並びに『海岸付地所埠頭岸壁土木築造遺跡』並びに『小曾根築地遺跡』に形成された在来市街の中間を東西を分けて南北に走る国道499号線の西に沿って、南北に長く東西に薄く高い街立のような複数の高層建築の群が大きなヴォリュームを以って出現し、新しく埋築される埠頭並びに岸壁の区域と山手の在来市街によって形成される筈の、一体の人類の活動の空間を見事に二つに分断し、さらに、人々の間に屹立する垂直の真新しく存在感のある身体的スケールとその由来を逸脱したヴォリュームは、遺跡の身体的スケールとその由来に従って立つ人々を圧迫する、と仮定します。

私達 当会は、さらに、身体的スケールとその由来によって成立している遺跡の中心に成立した、身体的スケールとその由来を逸脱したヴォリュームは、自身の隣接の一帯の空間に、自身と同様の身体的スケールとその由来を逸脱したヴォリュームを誘発する可能性がある、と仮定します。

私達 当会は、さらに、身体的スケールとその由来によって成立している遺跡への身体的スケールとその由来を逸脱したヴォリュームの成立は、身体的スケールとその由来を逸脱したヴォリュームがその存立の構造とする身体的スケールとその由来を逸脱している土木と建築の空間構造への変更により、身体的スケールとその由来によって成立している遺跡としての空間並びに“土地の造形”の空間構造を破壊して行われる、と仮定します。

私達 当会は、限定された閉じた狭い空間に長期的に起居する旅客船の乗客乗員の皆様が、陸地への上陸に際して、第一義に願望する事象について、限定解除された開かれた広い空間である、と仮定します。

私達 当会は、長崎港松が枝埠頭岸壁第2パスについて、旅客船の乗客乗員の皆様が、限定された閉じた狭い空間たる船内から、陸地へ上陸した瞬間に、目前に、高い街立のような真新しく存在感の複数の高層建築群が身体的スケールとその由来を逸脱した大きなヴォリュームをもって迫り、背後を振り返れば、外部空間より見上げる見慣れない高層建築より大きな旅客船のより巨大なヴォリュームが頭上に覆い被さり、狭い埠頭の空間の谷間の底に圧迫されたとすれば、予定した上陸への期待感とは、完全に裏切られる、と仮定します。

私達 当会は、当該の遺跡としての空間並びに“土地の造形”の空間構造の破壊について、遺跡の不可逆的な破壊である、同時に、遺跡の不可逆的な破壊を誘引する、と仮定します。

私達 当会は、当該の遺跡について、遺跡の遺跡としての実態を消滅し、資本の効率の実験場となる可能性がある、と仮定します。

私達 当会は、この結果について、即ち、遺跡の破壊であり、同時に、即ち、私達人類の活動の空間に於ける、私達人類の身体的スケールの破壊であり、以って、私達人類は、私達人類の身体的スケールの行為を破壊される、と仮定します。

私達 当会は、皆様に、当該の私達人類の活動の空間に於いて、遺跡が保全され継承され、同時に、私達人類の身体的スケールの破壊によって、私達人類の身体的スケールの行為が破壊されない為に、当該計画の主体が、私達人類の身体的スケールとその由来によって形成されている遺跡たる在来市街における、当該開発計画に於いて、当該の事象を、私達人類の身体的スケールによって構成する結果となるように、制御する措置を執り行うこと、結果として、一帯の遺跡を保全し継承し、同時に、当該の一体の私達人類の活動の空間を、私達人類の身体的スケールとその由来によって形成すること、を提案し要望します。

#### (2) 『小曾根築地遺跡』について

私達 当会は、皆様に、『小曾根築地遺跡』並びに之に包含する『小曾根埠遺跡』等遺跡の全範囲について、私達人類の活動の空間に於ける遺跡として、以下、提案し要望します。

① 私達 当会は、皆様に、遺跡としての空間と実態を、調査し、破壊せず、現状保存し、公開し、文化財保護法上の保護の措置を執り、又は、原状回復し、保守整備し、人々の生活の中での機能を与え、情報発信し、諸般の制度上の認定や登録をも実現し、活用すること、を提案し要望します。

② 私達 当会は、皆様に、遺跡の現状保存を前提とする範囲内に於いて、遺跡の岸壁を遺跡の実態を基盤に原状回復整備し、海水を導入して一帯土地に水路を形成して遺跡を復元整備すること、を提案し要望します。

③ 私達 当会は、皆様に、私達人類の活動の空間に於ける遺跡に於ける機能の交織として、遺跡の現状保存を前提とする範囲内に於いて、『小曾根築地遺跡』の土地とその西に水路を渡る土地を適宜橋梁で接続し、新しい埋築埠頭土地から『小曾根築地遺跡』土地に至る全面に広場を出現させ、『小曾根築地遺跡』の当該位置に炭坑舎建物を復元建築して諸般の活用を実施し、之に隣接する広場を客船の着岸に際する歓迎行事やその他の催事に運用すること、を提案し要望します。

④ 私達 当会は、皆様に、私達人類の活動の空間に於ける遺跡に於ける機能の交織として、小曾根築地が公共交通の結節点でもあった土地の利用の履歴を継承し、遺跡の原状保存を前提とする範囲内に於いて、原則として、『小曾根築地遺跡』の土地の国道499号線に近似する当該国道の西に隣接する位置に、第二候補として、『小曾根築地遺跡』の西に水路を渡る土地の位置に隣接路面電車の線路と終着停留所を設置すること、を提案し要望します。

⑤ 私達 当会は、皆様に、近代と現代の転換の狭間に、公に接収された範囲の、小曾根埠、現在の『小曾根埠遺跡』(長崎市月極小曾根町駐車場一帯)について、小曾根家に変換すること、を提案し要望します。

(3)『長崎市歴史的風致維持向上計画』の重点区域に設定されている「長崎居留地の海外交流にみる歴史的風致」について

私達 当会は、『長崎市歴史的風致維持向上計画』の重点区域に設定されている「長崎居留地の海外交流にみる歴史的風致」について、『長崎県松が枝地区再開発構想』と連動して計画し実施される等の計画であると認識します。

私達 当会は、『長崎市歴史的風致維持向上計画』の重点区域に設定されている「長崎居留地の海外交流にみる歴史的風致」について、『長崎市歴史的風致維持向上計画』の「歴史的風致の維持及び向上に関する方針」を総合的に鑑み、以下、提案し要望します。

① 私達 人類の活動の空間としての遺跡より

私達 当会は、皆様に、『東山手外国人居留地』並びに『南山手外国人居留地遺跡』並びに『海岸付地所埠頭岸壁土木築造遺跡』並びに『治水土木築造遺跡』並びに『小曾根築地遺跡』並びに『養生所/(長崎)医学校等遺跡』等一帯遺跡地並びに近隣市街地について、遺跡との事象に対して適切を欠く、又、不自然で異質なヴォリュームと肌理(テクスチャー)と意匠の建造物、又、遺跡との事象、その空間の身体的スケールと身体的スケールとその由来によって成立している遺跡の空間並びに“土地の造形”の空間構造に対して異質な高層建築物並びに異質な土木建造物、を築造しないこと、又、その為の措置を執ること、を提案し要望します。

② 長崎市の『グラバー園』について

ア. 私達 当会は、皆様に、長崎市の『グラバー園』について、当該施設を、建物等建造物の保存保全に対し、私達 人類の概念の時代的限界に起因する経過措置であると位置付け、その保有する建造物について、又は、旧東山手南山手外国人居留地に関する建造物について、漸次、原状位置又は敷地に復旧し、本来の姿であると考え得る現地に於て保存し活用すること、その為の措置を執ること、を提案し要望します。

イ. 私達 当会は、皆様に、当該の提案の措置に関し、『南山手外国人居留地遺跡』並びに『東山手外国人居留地』等関連遺跡地の市街に於いて、複数の個別の歴史的建造物を中心とした共時的通時的空間思想行為の連続性を保持する自然で自発的な経過を経由するにぎわいの創出、即ち、『グラバー園』たる制度として又範囲として閉じた空間である点から、各個別の歴史的建造物を中核として形成される近隣の面としてのにぎわいと、複数の個別の歴史的建造物によって形成される、個別のにぎわいの面と面との接触、接続、重複、交錯する動線の形成による、即ち、関連性、ネットワークによる、さらにおおきな面としての開かれた空間に於ける身体的スケールと共時的通時的空間思想行為の連続性による自然なにぎわいとその相乗効果(スパイラル)、周辺地域へのやわらかな拡散へのジャンプを形成すること、その為の環境整備としての様々な措置を執ること、を提案し要望します。

ウ. 私達 当会は、皆様に、当該の提案の措置に関し、『グラバー園』での次世代への展開について、遺跡としての“土地の造形”の保存と原状回復を前提として、同時に、『グラバー園』の従来の人為的人工的意図的な閉じた空間との性格を踏まえつつ、その制度と空間の構造を開鎖から開放へと転換し、例えば、劇場やステージやアトラクションの設置と活動により、文化財というより、より人為的人工的、意図的な洗練による芸術的效果を中核とする人類の活動の空間へ、博物館的で静的な空間から活動的で動的な性格の空間へ、とジャンプすること、その為の様々な措置をとること、を提案し要望します。

③ 私達 当会の仮定

ア. 私達 当会は、私達 当会の当該の提案について、『グラバー園』区域における遺跡としての存在感についてはもとより、『東山手外国人居留地』並びに『南山手外国人居留地遺跡』並びに『海岸付地所埠頭岸壁土木築造遺跡』並びに『治水土木築造遺跡』並びに『小曾根築地遺跡』並びに『養生所/(長崎)医学校等遺跡』等一帯遺跡の遺跡としての存在感を保全し、又は、向上する、と仮定します。

イ. 私達 当会は、私達 当会の当該の提案について、遺跡の遺跡としての存在感の保全と遺跡の遺跡としての存在感の点から面への拡張によって、身体的スケールと共時的通時的空間思想行為の連続性による自然なにぎわいとその相乗効果(スパイラル)を、点としての地域から、面としての地域へ拡張する、と仮定します。

5. 開発と遺跡、人為的人工的意図的なにぎわいと天為的自然的非意図的なにぎわい

(1) にぎわい又はその創出についての二つのタイプの仮定

私達 当会は、にぎわい又はその創出について、以下、二つのタイプを仮定します。

a. 空間に於ける身体的スケールとその由来の逸脱、共時的通時的空間思想行為の断絶、非日常、演出的、を経由する人為的人工的意図的なにぎわい又はその創出

b. 空間に於ける身体的スケールとその由来の保持、共時的通時的空間思想行為の連続、日常、非演出的、を経由する天為的自然的非意図的なにぎわい又はその創出

(2) にぎわい又はその創出についての二つのタイプの適用への仮定

私達 当会は、にぎわい又はその創出の二つのタイプの適用への仮定について、開発において、空間に於ける身体的スケールとその由来の逸脱—共時的通時的空間思想行為の断絶—非日常—演出的、を経由する人為的人工的意図的なにぎわい又はその創出を適用し、遺跡において、空間に於ける身体的スケールとその由来の保持—共時的通時的空間思想行為の連続—日常—非演出的、を経由する天為的自然的非意図的なにぎわい又はその創出を適用する、と仮定します。

(3) 提案と要望

私達 当会は、皆様に、遺跡において、空間に於ける身体的スケールとその由来の逸脱—共時的通時的空間思想行為の断絶—非日常—演出的、を経由する人為的人工的意図的なにぎわい又はその創出を運用せず、空間に於ける身体的スケールとその由来の保持—共時的通時的空間思想行為の連続—日常—非演出的、を経由する天為的自然的非意図的なにぎわい又はその創出を運用すること、を提案し要望します。

# 小曾根築地関連年表(推移並びに歴史上背景の概略)

元龜元年(1570年)この年 長崎開港の協定成立 大村の大村純忠(ドン・バルトロメウ)ーイエズス会日本布教長カブラル(メルシオール・デ・フィゲイレドの後任)によって開港の最終的決定がなされたと思われる。

元龜二年(1571年)三月長崎の町立で始まる 大村純忠家来友永対馬指揮 島原町大村町外浦町平戸町文知町横瀬浦町の六町

慶長八年二月十二日(1603年3月24日) 後陽成天皇 徳川家康に征夷大將軍の宣旨

慶長九年五月三日(1604年) 江戸御公儀 系割符制度を導入

慶長十年四月十六日(1605年) 徳川秀忠に征夷大將軍の宣旨

慶長十年(1605年) 小曾根家 家祖 平戸道喜(好夢) 本浦多町に居住

元和元年七月(1615年) 禁中并公家諸法度 武家諸法度 公布  
(世界最初の成文憲法と云います。徳川家広氏:2019年6月7日 木曜日 長崎和尊講演会 文化講演会)

元和九年七月二十七日(1623年8月23日) 徳川家光に征夷大將軍の宣旨

寛永四年(1627年)タイオワン事件(ノイツ事件) 台湾一濱田強兵衛一ピーテル・ノイツ

寛永十一年(1634年) 小曾根家 道喜 二十五町人出島乙名の筆頭として出島造成

寛永十九年(1642年)六月二十一日 小曾根家 道喜 没 五十九歳

正保三年(1646年) 小曾根家 道喜の妻 上筑後町の別荘を永昌寺に寄捨

寛政十二年(1800年)十一月四日 小曾根家 十二代六左衛門(竹彰) 誕生

文化五年(1808年)一月二十二日 小曾根家 十一代貞蔵(豊彰) 没 四十三歳

文政十一年(1828年)五月二日 小曾根家 十三代栄(乾堂) 誕生(六左衛門長男)

天保五年三月十一日(1834年4月19日) 橋本左内 越前国に生 越前藩 奥外科医 橋本長綱 長男

天保十一年(1840年6月) 阿片戦争勃発(英清)

1840年5月26日 オランダ領東インド総督が、対日貿易を総合的に見直すような決定を行う。(その一節案にて、オランダ領東インド総督は、殖民局長官に別段報告書を商館長の利用に供するために送付すること、商館長が日本当局へ別段風説書を通常の風説書の提供にもなつて書面の形で通知するよう殖民局長官から商館長宛宛命を付すこと、を指示)

1840年7月 殖民局長官のもとで作成された最初の別段風説書を搭載したコルネリア・エン・ヘンリエツテ号が長崎に向けてバタヴィアを出港

天保十二年五月九日(1841年6月27日) 高島秋帆 武州西台徳丸原で洋式砲術洋式銃陣の公開演習を実施

天保十三年(1842年) 南京条約調印(英清/阿片戦争終結)

弘化元年五月(1844年) 江戸城本丸焼失

弘化元年七月二日(1844年8月14日) オランダのコープス大佐がバレンバン号で長崎に入港(オランダ国王ウィレム二世の阿片戦争の実情を知らせ開国を勧告する国書を第十二代征夷大將軍徳川家康に奉呈/起草はファン・シールボルト/幕府は翌年遅れて回答/国王の厚意を謝し開国の勧告を拒絶)

嘉永二年三月七日(1849年) 老中阿部伊勢守が「近來蘭学医師追々相増世上にても信用いたし候もの多有之故に相聞候は風土も違候事に付御医師中は蘭方相用候儀制禁被仰出候旨御意堅く可被相守候 但し外科眼科等外治相用候分は蘭方相用致候ても不苦候」と布達

嘉永四年(1851年) 小曾根家 十四代辰太郎(星海) 誕生

嘉永五年(1852年11月) ドンケル・クルチウスが出島のオランダ商館長に就任

嘉永六年四月(1853年6月) 幕府は水野宗徳後守忠徳を浦賀奉行から長崎奉行とする

嘉永六年六月三日(1853年7月8日) アメリカ東インド艦隊司令官マシュー・ペリーが浦賀に入港(シンシッピ号以下四隻)

嘉永六年八月二十八日(1853年9月30日) 水野宗徳後守忠徳が長崎奉行に兼任

嘉永七年三月三日(1854年3月31日) 日米和親条約を武蔵国久良岐郡横浜村字駒形の応接所で締結 (神奈川条約)(アメリカ東インド艦隊司令官マシュー・ペリー、大学頭林復斎)

嘉永七年七月二十八日(1854年8月) オランダ東インド艦隊海軍中佐ファビウスがスーンピン号の艦長として長崎に来航。ファビウスは幕府の求めに応じて「地役人又は当地に在商工共之相撰」また黒田・鍋島両藩の家臣に三ヶ月の予備海軍伝習を実施し、長崎奉行水野宗徳後守忠徳の質問に答申して幕府近代西洋海軍創設を建言し、両者の応答の末に幕府閣の決議を得た水野宗徳の案、即ち幕府近代西洋海軍創設とオランダから日本へのスーンピン号の贈呈と幕府からオランダへのコルベット艦二隻の注文と長崎海軍伝習の実施とその方針を承知

嘉永七年八月二十三日(1854年10月14日) 日英和親条約を長崎で締結 (英国東インド・中国艦隊司令ジェームズ・スターリング、長崎奉行水野宗徳、長崎目付永井尚志)

嘉永七年九月(1854年11月) 幕府はオランダ当局にコルベット艦二隻を発注

嘉永七年九月二十一日(1854年11月11日) ファビウスは、オランダに帰国のためジャバに向けて出帆、帰国したファビウスは、幕府提案の要件の実現に努力し、国王ウィレム三世に拝謁しこれを実現する、また、ドンケル・クルチウスへの国王特命全権領事官授与、訪日国王特使として国王侍従ファン・リンデン伯爵の派遣が決定する

安政二年六月八日(1855年7月21日) 第一次長崎海軍伝習派遣隊司令官ファビウス中佐(ヘデー号に搭乗)と訪日国王使節である国王侍従ファン・リンデン伯爵とファン・ハルデンブルク男爵及び(第一次)長崎海軍伝習教官隊長崎港に入港(艦長ベルス・ライケン大尉(伝習教官隊長)以下伝習教官22名、スーンピン号:改名親光丸着:三本マスト・バーク型木造外車蒸気船(コルベット))

安政二年六月十一日(1855年7月24日) クルチウスは「和蘭国王ゴロートヘルトルファンリユクセムビルグより献賀物として蒸気船スームピング擧げ奉り候」と申出、スーンピン号をオランダ国王ウィレム三世の名において幕府に贈呈、幕府は直ちにこれを親光丸と改称、第一次海軍伝習は親光丸を練習艦に用いる

安政二年十月二十二日(1855年12月1日) (第一次)長崎海軍伝習開所式挙行(取捨永井玄蕃頭尚志(岩之丞))

安政二年十一月(1855年) 永井玄蕃頭尚志はファビウスに長崎製鉄所の建設を依頼

安政二年十一月十五日(1855年) ファビウスは長崎を出航しバタヴィアを経由してオランダ本国へ向かう

安政二年十二月二十三日(1856年1月30日) 日蘭和親条約を長崎で締結 (出島オランダ商館長ドンケル・クルチウス)

1856年初、幕府はオランダに対して引き続き第二次長崎海軍伝習派遣隊の選抜を依頼したので、オランダ本国では、新派遣隊の人選などの準備を進める、ファビウスは帰国してオランダ政府へ永井尚志の依頼の製鉄所建設を日本側の要請として報告して建設への協力を具申し政府当局は製鉄所建設への協力を可決する、オランダ政府は計画の取り纏めを、オランダ国立機関廠(Rijks Stoomvaartdienst)の海軍中佐ホイエンスへ示達し、計画され、機材類が手配される、ホイエンスは当時蒸気機関の権威と目されていた

安政四年八月四日(1857年9月21日) 夕刻 第二次長崎海軍伝習教官隊長崎港外高島嶼近海に碇泊(艦長カッテンディーケ大尉(伝習教官隊長)以下伝習教官37名、ヤバン号:改名威隆丸着:遡る嘉永七年九月(1854年11月)に幕府がオランダ政府に発注:三本マスト・バーク型木造内車蒸気艦(コルベット)、備砲十二門、百馬力、長さ二十七間半、幅四間)

安政四年八月五日(1857年9月22日) 第二次長崎海軍伝習教官隊長崎港に入港、出島に上陸、直ちに、長崎奉行荒尾石見守はオランダ商館長立合のもとにヤバン号を十万ドルで受取り、威隆丸と改称

上陸した伝習教官オランダ二等海軍軍医ポン・ファン・メルデルフォールトは、出島の植物園中の家に落付く

安政四年八月十二日(1857年) 製鉄所建設用機材類の鮎ノ浦等への陸揚を開始

この頃 ポンベは、幕府御目見御医松本良順等二三名の訪問を受け、松本良順に生徒取締を依頼

安政四年八月二十九日(1857年10月16日) 日蘭追加条約を長崎で締結  
(ドンケル・クルチウス、水野宗徳、荒尾成允、岩瀬忠康、自由貿易への移行を前提とした貿易規制の緩和、出島への商人の出入りと取引自由)

安政四年九月十五日(1857年11月1日) 第二次長崎海軍伝習教官隊長第一次教官隊より引き継ぎ

安政四年九月二十六日(1857年11月12日) ポンベは長崎奉行所西役所で就任披露講演をなす

安政四年九月二十七日(1857年11月13日) ポンベは長崎奉行所西役所で医学の講義を開始

安政四年十月十日(1857年11月26日) 幕府はハルデスにより長崎製鉄所を起工

安政四年十一月十二日(1857年12月27日) ポンベは大村町の医学伝習所に於いて始めて公開の種痘を行う(この時まで医学伝習は大村町の高島秋帆邸内の西北隅の一室に移転(大村町の医学伝習所))

安政四年十一月十六日(1857年12月31日) までにポンベは長崎奉行所に対して病院設立の申請をなし

安政四年中に解剖学教程の為に屍体解剖による解剖学教授を行いたい旨を建議

安政四年(1857年) この年 小曾根乾堂、松平善嶽公に拜謁、越前藩御用商人となる

安政五年五月二十一日(1858年6月30日) アメリカのフレガット艦シンシッピ号中国経由長崎に入港(コレラの伝染経路をなす媒体であった)

(安政五年(1858年) この年コレラ流行)

安政五年六月十九日(1858年7月29日) 日米修好通商条約調印 神奈川沖小柴のポーハン号

安政五年七月八日(1858年8月16日) 幕府は蘭方医の学習を公許

安政五年七月下旬(1858年)コレラの劇患者は減少

安政五年八月四日(1858年9月10日) 幕府は長崎奉行所からの「病院御取遣之儀」についての伺いに備後守より早川庄次郎を経て「何之通相心得御入用其外共巨細取調可被何候事」と覚を下附し許可を与える

安政五年八月八日(1858年9月14日) 戊午の密勅 孝明天皇は水戸藩に幕政改革指示の勅諭を直接下賜 安政の大獄の契機

安政五年九月下旬(1858年) 長崎のコレラは殆ど終滅する

安政五年(1858年) この年、ポンベ、パリにキュンストレーキ(精巧な紙製の人体解剖模型)を発注

安政五年(1858年) この年 小曾根乾堂、得軍家茂公に拜謁、自家の録書を献上、文房具と得軍自家筆「水菰」の書を下賜される

安政六年正月五日(1859年2月7日) 勝頼太郎(艦長)朝陽丸で江戸に出航

安政六年(1859年)に至って江戸より長崎に病院設立の許可が達せられる  
安政六年二月六日(1859年)長崎奉行はオランダ弁務官に海軍伝習中止の内密の予告をなす  
安政六年四月(1859年)小菅根築地着工(申請:堀の内の海岸約6000坪)  
安政六年六月二日(1859年)長崎・神奈川・函館を開港  
安政六年七月三日(1859年8月1日)この日ポンペは日本王国長崎医学学校を開始した。と記す。この頃までに大村町の医学伝習所に学生寮を備え医学学校としての体裁が整う  
安政六年十月七日(1859年11月1日)橋本左内(景岳) 佐馬町牢屋敷で斬首 二十六歳  
安政六年十月十日(1859年11月4日)第二次長崎海軍伝習教官隊カッテンディーケ以下、オランダ商船ボスティロン号に乗船して、威臨丸に先導され、礼砲の轟くなか長崎を出帆しジャ  
ワを目指して帰国。このときまでに幕府海軍が所有する蒸気艦は、親光丸、威臨丸、朝陽丸、蟠龍丸の四隻  
安政七年正月十三日(1860年2月4日)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が品川沖を出航(司令官木村図書守将、船長勝麟太郎、威臨丸に乗船)  
安政七年正月十九日(1860年2月10日)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が浦賀を出港(薪水積込完了)  
安政七年正月二十二日(1860年2月13日)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が品川沖を出航(正使外国御奉行新見豊前守、副使外国御奉行村垣淡路守、御目付小  
栗登後守、アメリカ軍艦ポーハタン号に乗船)  
安政七年二月二十六日(1860年3月17日)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊がサンフランシスコに入港  
安政七年三月三日(1860年3月24日)井伊直弼死去(享年46歳、櫻田門外の變)  
安政七年三月九日(1860年3月30日)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団がサンフランシスコに到着  
安政七年三月十八日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団がサンフランシスコを出港  
万延元年三月二十一日(1860年)小菅根家十二代六左衛門(竹影)妻英 没 五十五歳、栄(乾堂) 小菅根町に居を移す  
万延元年閏三月三日(1860年4月23日)奉行所は寺崎助一郎と橋本良之進を病院取違掛に任ず  
万延元年閏三月十九日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊がサンフランシスコを出港  
万延元年閏三月二十五日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が首都ワシントンに到着  
万延元年四月八日(1860年5月28日)両部駿河守常長は「病院場方の儀ニ付申上候書付」を幕府に提出し幕府は早川庄次郎を経てその遊進を受けここに養生所の名称が確定  
万延元年五月五日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団の随伴隊が浦賀へ帰還  
万延元年五月二十四日(1860年6月13日)付長崎代官高木作左衛門が長崎奉行所に「養生所御取違地所差支無御座儀申上候書付」を報告  
万延元年六月十三日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団が帰路に就く(アメリカ軍艦ナイアガラ号に乗船)  
万延元年九月二十七日(1860年)日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団横浜に到着したに品川沖に遭遇  
万延元年十月(1860年)小菅根築地竣工 地盤沈下の為半年程倉庫建築を遅延  
万延元年十月(1860年)第1次外国人居留地造成工事完成(大浦海岸水域の大半を梅香崎側に埋め立てる)  
1861年4月12日 アメリカ南北戦争 開始(南軍は連邦のサムター要塞を攻撃)  
文久元年三月十九日(1861年4月28日)付長崎代官高木作左衛門が長崎奉行所鎮木貫一に「養生所練医学所御取違地所差支無御座儀申上候書付」を報告  
文久元年三月二十五日(1861年5月4日)長崎製鉄所第一期工事竣工(積岸壁完成)  
文久元年三月二十九日(1861年5月8日)ハルデスが長崎を出港帰国  
文久元年七月一日(1861年8月6日)長崎市街の南の佐古の丘に養生所(病院及び医学所)が落成  
文久元年八月十六日(1861年9月20日)養生所が開院  
文久元年十二月下旬(1861年)南山手居留地(第2次外国人居留地造成工事:弁天崎から下り松地先埋立)竣工 小菅根築地に連結  
文久元年十二月末(1861年)長崎奉行所は、小菅根築地の土蔵を「当分御用につき明け渡すように」命ず、又、奉行所に無断で土蔵を英国商人マッケンジーに貸与の件、小菅根六左  
衛門と当時築地を担当する三男順三郎正雄を処分  
文久元年(1861年)この年、松本良順 小菅根家に寄宿  
文久二年初(1861年-1862年)長崎奉行所は小菅根築地のうち坪数約三千二百坪、築地総坪の過半数、修船場、地割を施した海岸付き一帯、火除け塙を残し、居留地に差し加え  
文久二年九月十日(1862年11月1日)ポンペはオランダ商船ヤコブ・エン・アンナ号に搭乗し、上海、香港、シンガポール経由で母国に向かう  
文久三年(1863年)六月七日 小菅根家 十二代六左衛門(竹影) 没 六十四歳  
元治元年八月(1864年)横浜製鉄所起工  
1865年4月3日アメリカ南北戦争(アメリカ連合国首都リッチモンドが陥落)  
1865年4月9日アメリカ南北戦争 終結(アボマトックス・コートハウスの戦いが発生;ロバート・E・リー将軍がユリシーズ・グラント将軍に降伏)  
慶應元年四月上旬(六日から十日までの間、1865年)長崎奉行服部左衛門佐常純は養生所を稱徳館と改称  
慶應元年八月十七日(1865年10月6日)長崎奉行服部左衛門佐常純は「長崎表小嶋嶺御積揚館構内江分理所究理所其外等新規御積請出来栄見分相済候儀申上候書付」を幕府に進  
達  
慶應元年八月二十四日(1865年)横浜製鉄所竣工  
慶應元年九月十六日(1865年11月4日)開港勅許(兵庫開港を留保)  
慶應元年九月二十七日(1865年)横浜製鉄所起工式挙行  
慶應元年(1865年)この年 薩摩藩 薩摩藩御用商人山田宗次郎、若松屋善助の個人名義で当局へ「手程のドック取違願」を提出(長崎の小菅地区に修船場を構想)  
慶應二年六月(1866年)幕府「手程のドック取違願」を認可(戸町村小菅浦)  
慶應三年五月 兵庫開港勅許  
慶應三年十月十四日(1867年11月9日)徳川慶喜大政奉還  
慶應三年十月十五日(1867年11月10日)徳川慶喜の大政奉還を勅許  
慶應三年十一月七日(1867年)付 坂本龍馬より陸奥源次郎宛書簡「長崎二於、比度取入候屋舖」(長崎の郷土史家福田忠昭氏はその場所を新町(現興善町)と指摘)  
慶應四年三月十三日-十四日(1868年)勝海舟と西郷吉之助(陸奥)が会谈  
慶應四年九月八日(1868年)より明治に改元  
明治元年十二月六日(1868年)小菅修船場 落成(修船架 Slip-way 方式)  
明治元年十二月七日(1868年)小菅修船場 一番船としてグラバーの所有船が入渠  
明治二年三月(1869年)長崎府 小菅修船場施設買上げに關し、中央当局へ伺い出申(大浦製鉄所に付記載:大浦製鉄所は、その頃長崎の大浦地区へ進出してきたイギリス系の  
造船業者ボイド社 Boyd & Co. を指す、上海に根拠地、長崎に機関修理工場として発足)  
明治二年三月(1869年)政府 小菅修船場を買上げ  
明治三年閏十月(1870年)明治政府 工部省を民部省から分離(殖産興業へ体制整備)、工部省は直ちに横浜と横須賀の両製鉄所を引継ぐ  
明治三年(1870年)この年 小菅根乾堂、上京、国璽、御璽の改刻の建白書を政府に提出  
明治四年四月(1871年)工部省 長崎製鉄所と小菅修船場を長崎県から移管、呼称を長崎造船所と改める「殖産」  
明治四年四月(1871年)小菅根乾堂、勅を奉じて天皇の御璽及び大日本国璽を宮中様の間で改刻  
明治四年五月(1871年)小菅根乾堂、教皇全權大使伊達宗城に随行して清国に行き、日清修好条約締結に参与(条文執筆)  
明治四年七月二十九日(1871年9月13日、同治10年)日清修好条約 天津で締結(日本国欽差全權大臣伊達宗城、清国欽差全權大臣李鴻章)  
明治四年(1871年)小菅根乾堂、李鴻章から「鎮鼎山房」の書を贈られる  
明治五年二月二十八日(1872年)兵部省を陸軍省と海軍省に分割、横浜製作所と横須賀造船所は海軍省の所管となる「建兵」  
明治五年六月十六日(1872年)明治天皇 長崎行幸、鮫の浦と小菅修船場に臨幸、小菅根埠頭に高張提灯を並べ歓迎す  
明治五年十一月九日(1872年)太陰暦を廃して太陽暦とするの詔勅  
明治五年十二月三日(1872年)を明治6年1月1日(1873年)とする  
明治7年(1874年)11月7日旧長崎医学学校(及び病院)が善地事務(支)局病院となる(征台の役のために公兵員病院とする)  
明治10年(1877年)2月15日 薩軍の一善大隊が鹿児島から熊本方面へ先発(西南の役開始)  
明治10年(1877年)2月19日 政府は、鹿児島県逆徒征討の詔を發出(西南の役)  
明治10年(1877年)5月3日博愛社が設立されます  
明治10年(1877年)9月24日 西郷隆盛が被弾して鹿児島島の城山で自刃(51歳)、午前9時頃、銃声が静止(西南の役終結)  
明治10年(1877年)この年、小菅根家は小菅根町にわが国最初のコンクリート民間住宅を建設  
明治10年(1877年)この年、小菅根家 乾堂 喜捨により新橋町の太平寺を浪の平に移す  
明治11年(1878年)1月11日 小菅根家 乾堂 小菅根町に私立小菅根小学校を創設  
明治18年(1885年)11月27日 小菅根家 十三代 乾堂 卒 五十八歳 鎮鼎山中に埋葬  
明治37年(1904年)6月5日 小菅根家 十四代 辰太郎(星海) 没 五十四歳

## X. その他

1. 私達 当会は、公共について、“皆が関わる他者”であり、同時代の人類の各個への便益の還元(又は、その総体)というより、未来の人類への社会的共通資本への投資への選択である、と認識します。

2. 私達 当会は、人類の様々な“分断”が形成する人類の不幸に関して、人類の、公共、即ち、“皆が関わる他者”、例えば、風土、又風土の再生、文化、遺跡、人類の歴史の理解、現代の文明の完成(私達 当会は、現代の文明について、持続可能(sustainable: サステイナブル)な社会が達成されていないとすれば、現代の文明は未完成である、と認識します。)の保存、継承、形成、への参加が、人類の様々な“分断”を緩和する、と仮定します。

3. 私達 当会は、皆様に、遺跡への行為について、遺跡の現状保存と継承、例えば、遺跡の発掘調査に関し、開発行為等による破壊を前提とした、遺跡を破壊しつつ行う「記録保存」を止め、遺跡を保存しつつ行う「活用のための調査」を選択し、之を前提とした開発行為を選択すること、を提案し要望します。

4. 私達 当会は、皆様に、既に、破壊され、滅失し、失われた遺跡を、私達 人類の活動空間に於いて、長期計画により、再建することを提案し要望します。

5. 私達 当会は、皆様に、本紙の記載について(長崎奉行所西役所等遺跡群、養生所/(長崎)医学校等遺跡と共に)、具体的な、遺跡の遺跡としての位置付け、認知、調査確認、現状保存、原状回復、活用、整備、公開、継承を行為すること、を提案し要望します。

6. 私達 当会は、皆様に、本紙の記載について(長崎奉行所西役所等遺跡群、養生所/(長崎)医学校等遺跡と共に)、長崎県が策定を検討する「大綱」に於いて、具体的な、遺跡の遺跡としての位置付け、認知、調査確認、現状保存、原状回復、活用、整備、公開、継承、またその計画 について、記載することを提案し要望します。

### 7. 国公立大学高校中学校小学校の講堂並びに体育館等施設の一般利用への開放

私達 当会は、皆様に、私達 人類、就中、一般の国民県民市民の文化芸術活動の為に、国公立学校の観覧座席のある講堂並びに観覧座席のない体育館等施設について、学校活動を全うしつつ、一般利用へ向けて、速やかに開放の実態を拡張すること、を提案し要望します。

私達 当会は、皆様に、当該の学校施設整備の今後の計画について、一般利用への開放を目的とする対策や利便や設備等を包含した施設整備を実現すること、を提案し要望します。

私達 当会は、① 発表展示修練創作活動の場一空間の拡大、② 活動の活性化、③ 広い地域に於ける活動利便の向上、④ 活動の裾野の拡大、⑤ 学校教育上の効果の高度化、に対する即時的効果を期待します。

8. 私達 当会は、当会より、過去に、皆様に申し入れた事項、並びに、皆様との“見解の相違”に係る事項、並びに、当該の陳情の詳細に係る事項について、継続的定期的な対話を提案し要望します。

私達 当会は、当該の対話に関する現状について、途中で中断している、と理解します。

### 9. 不確実な行為の選択の拡散に繋がる 遺跡への言説について

私達 当会は、長崎地域に於いて、事象、例えば、遺跡について、わからない(それがそうか確証が得られない)から保存しなくてよい(破壊してよい)、との旨の言説の複数即ち流布のある処、当該言説について、論理的でないか、又は、論理に自己矛盾があるか、論理に飛躍があるか、又は、非科学的な態度であり、より不確実な行為の選択の拡散蔓延に繋がる、と理解し、一方、わからない(それがそうか確証が得られない)から処置(破壊、廃棄、移動、言及、その他)できない、との概念について、例えば、お医者様におかれましても、わからないので検査しましょう、又は、様子を見ましょう(もう少し分かってから処置する)と行為されると理解し得る処、後者が、論理的であり、論理に整合があり、論理に飛躍がなく、科学的な態度であり、より確実な行為の選択の拡張伸張に繋がる、と理解します。

私達 当会は、皆様に、人類の世界に於いて、例えば、遺跡について、わからない(それがそうか確証が得られない)から保存しなくてよい(破壊してよい)、等の、論理的でないか、又は、論理に自己矛盾があるか、論理に飛躍があるか、又は、非科学的な態度であり、より不確実な行為の選択の蔓延に繋がる、と考え得る言説又はその流布を、停止し消滅するよう、監視しそう行為することを、提案し要望します。

10. 当該の書面(陳情書、又、要望書、並びに、各その添付資料)について

私達 当会は、私達 当会が、提出者即ち作成者並びに名宛人を明記して、皆様に宛てて提出する、陳情書並びに添付資料、又、要望書並びに添付資料について、之が、陳情書、又、要望書である処、同時に、「思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」であり、即ち、思想、感情(又、概念、発見)を、作成者(弊社並びに代表記名の個人)の個性により創作的に、記し、構成して、一体として、表現したものであり、著作物である、と認識します。(単なるデータ、表現される以前のアイデア等、単なる模倣、工業製品等ではありません)

私達 当会は、皆様に、当該の陳情書並びに添付資料、又、要望書並びに添付資料について、皆様の運用過程に於ける、変更、切除、宛先の変更、書面の寸断、その他の、著作者の意図に反する、意図的な改変のないよう、お願い申し上げます。

私達 当会は、皆様に、以下の事象について、① 本事項への個別の具体的な回答又は説明、対話、② 遡及して著作者の意図の回復、③ 今後の再発の回避、を要望します。

(1) 当会より、過去に、長崎市に提出した、長崎市長を筆頭の名宛人とする長崎地域の遺跡に関する要望書に対する、長崎市理事者の運用について

a. 私達 当会は、2019年(令和元年)7月1日 月曜日に長崎市長を筆頭の名宛人として長崎市秘書課に『養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する要望書 VII』『長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する要望書 III』の二件の要望書を提出した後、2019年(令和元年)7月4日 水曜日以降、当該要望書について、長崎市文化観光部文化財課より、当該要望書に弊会が関係者として名宛人として併記した長崎市文化財審議会長に、送達又情報共有されていない事がわかりました。

b. 私達 当会は、過去に、複数件、長崎市長を筆頭の名宛人とする長崎地域の遺跡に関する要望書について、長崎市文化観光部文化財課より、当該要望書に弊会が関係者として名宛人として併記した長崎市文化財審議会長に、送達又情報共有されていない事がわかりました。

c. 私達 当会は、本件につき、長崎市文化観光部文化財課長に当該の要望を行った後、2019年(令和元年)7月9日 月曜日以降、長崎市秘書広報部広報広聴課に、複数回、連絡し当該の要望をお伝えしています。

d. 私達 当会は、本件につき、長崎市議会事務局に問合せ、長崎市長宛宛要望書に関する担当理事者より当該名宛人への送達に於いて、弊会より議会議長宛てに提出した陳情書の市長部局へのデータ送達のデータについて、両社がほぼ同じ内容の為、担当理事者に、当該のデータ送達を以って書面送達の代替とする提案をしたい、との旨、了解を得て、2020年(令和2年)1月9日 木曜日 長崎市秘書広報部広報広聴課に連絡し、当該の経緯と長崎市文化観光部文化財課長宛の要望を、お伝えしています。

e. 以上、複数回、長崎市秘書広報部広報広聴課に、担当理事者よりの回示を問い合わせる処、当該の回示が得られません。

f. 私達 当会は、本件につき、『養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 X III (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として) 2019年(令和元年)9月6日 金曜日 長崎市議会議長 佐藤正洋 様』『長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する要望書 IV』に記載し、以降、複数回、関係陳情書に記載し、関係する長崎市議会常任委員会で審議されています。

g. 長崎市の理事者の皆様におかれましては、当件に付、速やかに、長崎市秘書広報部広報広聴課様を經由して御回答御説明いただけますようお願い申し上げます。

私達 当会は、長崎市の理事者の皆様に、本件につき、以下の通り要望します。

i) 私達 当会は、皆様に、長崎市長並びに弊会が関係者として記す名宛人様が、送達又はその他の手段により情報共有することを要望します。

ii) 私達 当会は、皆様に、過去に、長崎市長を筆頭の名宛人として長崎市に提出した要望書のうち、弊会が関係者として名宛人に併記する長崎市文化財審議会長に送達又情報共有されていない複数の当該の要望書について、速やかに長崎市文化財審議会長に送達又はその他の手段により情報共有すること、を要望します。

iii) 私達 当会は、皆様に、今後、長崎市長を筆頭の名宛人として長崎市に提出した要望書に連ねて記した当該関係の名宛人に対する、送達又情報共有が欠落することのないこと、を要望します。

※ 2020年3月5日木曜日に実施された長崎市議会環境経済委員会の直前に長崎市文化財課長より電話にて、2019年12月に長崎市文化財審議会会長が文化財課に来訪した際に陳情書を提示した旨連絡がありました。

私達 当会は、皆様に、過去長崎市文化財審議会会長に閲覧のない陳情書一式、また、今後の陳情についても、長崎市議会常任委員会での当該陳情の審査迄に、長崎市文化財審議会会長に当該の陳情書一式の閲覧のあること、を要望します。

(2) 当会より、過去に、長崎市議会(事務局)に提出した、長崎市議会長を名宛人とする長崎地域の遺跡に関する陳情書に対する、長崎市議会の運用について

a. 私達 当会は、過去に、長崎市議会事務局の担当者と、一連の長崎市議会議長への陳情書について、陳情書の本文について、全議員に配布する、添付資料について、審査する常任委員会の委員の議員諸氏、報道関係者に配布し、傍聴各席の閲覧資料に設置する旨、相互確認していました。

b. 私達 当会は、長崎市2019年(令和元年)9月以降、当会より、最近の、過去に、長崎市議会(事務局)に提出した、長崎市議会長を名宛人とする長崎地域の遺跡に関する陳情書について、陳情書の添付資料について、当該陳情書を審査する、長崎市議会常任委員会の議員諸氏、報道関係者への配布、当該審査の傍聴各席の閲覧資料への設置に対して、配布及び設置のなかったこと、がわかりました。

c. 私達 当会は、『養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 X III (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として) 2019年(令和元年)9月6日 金曜日 長崎市議会議長 佐藤正洋様』『長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する要望書 IV (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等) 2019年(令和元年)9月6日 金曜日 長崎市議会議長 佐藤正洋様』の当該の各陳情書の添付資料について、当該陳情書の長崎市議会の常任委員会の審査の終了後、長崎市議会事務局への確認で、長崎市議会常任委員会の議員諸氏に於いて、長崎市議会事務局より当該委員会の委員の議員諸氏に、当該陳情書に添付資料があり、長崎市議会事務局を通して閲覧可能との告知を行ったが、誰も当該陳情書の閲覧がなかったこと、がわかりました。

d. 私達 当会は、本件について、長崎市議会事務局に連絡して相談し、続いて、『養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 X IV (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として) 長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する陳情書 V (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等) 2019年(令和元年)12月2日 月曜日 長崎市議会議長 佐藤正洋様』に記載し、要望し、関係する長崎市議会常任委員会で審議されましたが、事態の改善はありませんでした。

e. 私達 当会は、皆様に、本件について、本項冒頭の趣旨を御理解いただき、本項 a. の措置を回復頂けますよう、提案し要望し、お願い申し上げます。

私達 当会は、長崎市議会の皆様並びに長崎市の関係者の皆様に、本件につき、以下の通り要望します。

i) 私達 当会は、皆様に、長崎市議会の陳情書審査に臨んで、長崎市議会の陳情書審査に参加する皆様が、当該陳情書の全体を情報共有すること、その為の措置を執ること、を要望します。

私達 当会は、皆様に、長崎市議会議長への陳情書について、陳情書の本文について、全議員に配布する、添付資料について、審査する常任委員会の委員の議員諸氏、報道関係者に配布し、傍聴各席の閲覧資料に設置する、ことを要望します。

ii) 私達 当会は、皆様に、当会より、過去に、長崎市議会(事務局)に提出した、長崎市議会長を名宛人とする長崎地域の遺跡に関する陳情書のうち、陳情書の添付資料について、当該陳情書を審査に関する、長崎市議会常任委員会の議員諸氏、報道関係者への配布、当該審査の傍聴各席の閲覧資料への設置に対して、配布及び設置のなかった、当該の添付資料について、当該の委員会の議員諸氏、報道関係者、傍聴人、即ち、当該委員会審査の参加者に、当該の既にインターネットに公開された陳情書の添付資料の閲覧を促す措置を執ること、を要望します。

iii) 私達 当会は、皆様に、今後、長崎市議会の陳情書審査に臨んで、当該の長崎市議会の陳情書審査に参加する皆様への当該陳情書の全体を情報共有する措置について、欠落のないこと、を要望します。

※ 2020年3月5日木曜日に実施された長崎市議会環境経済委員会での当該陳情審査の後、長崎市議会事務局議事調査課に再度確認した処、当該陳情書陳情書の取扱いについて都度議会運営委員会と確認しているが直近では、①議会運営委員会に陳情書(添付資料を省略)を提出、②「議会運営委員会協議結果報告書」の当該陳情書の送付先委員会の記載に関して、別冊資料を委員会室机上に設置する旨、別冊資料配布希望の場合議事調査課で対応する旨、記載している、当該報告書は長崎市議会議員全員に配布している、との説明がありましたので記します。

長崎市議会議員の皆様におかれましては、当該事項の趣旨ご理解いただき、議会進捗、又、委員会審査実施までに、当該の陳情書と共に添付資料についても、閲覧御一読いただけますようお願い申し上げます。

11. 2020年3月5日木曜日に実施された長崎市議会環境経済委員会の当会より提出の陳情審査に於ける長崎市文化財課長の答弁について

a. 2020年3月5日木曜日に実施された長崎市議会環境経済委員会の当会より提出の陳情審査に於いて、長崎市文化財課長は、2020年2月28日 金曜日迄に当会より長崎市の理事者に宛てて新たに個別の複数の要望書の提出があった件につき、当会の文化財課への提出に際して課長補佐より対応のあった件について「決着済み」と認識する以外の件について、要望書の提出者である当会と協議中である旨、答弁しました。

b. 2020年2月28日 金曜日迄に当会より長崎市の理事者に宛てて提出した新たな個別の複数の要望書に関して、要望の書「長崎地域の浦上地区遺跡群について」を提出した際に受け取った課長補佐より適切に措置する旨対応があった他、2020年3月5日木曜日以前並びに以降の全ての期間において、長崎市文化財課と協議若しくは経過説明のあった事実はありません。

c. 私達 当会は、長崎市文化財課長について、長崎市議会に於ける答弁に於いて、事実をもって答弁することを要望します。

d. 私達 当会は、長崎市文化財に、過去の私達 当会よりの陳情書又は個別の要望書又は個別の情報交換の過程に於ける様々な要望若しくは質問に於いて、協議もしくは説明、経過説明のない事象について、協議もしくは説明、経過説明のあること、を要望します。

## XI. 添付資料

私達 当会は、次に掲げる添付資料を、本陳情書の第二章として提示します。どうぞ、御一読下さいますようお願い申し上げます。

### 1. 『遺跡に関する提案と要望のお届けについて』

2020年(令和2年)3月11日 水曜日

長崎市教育委員会 教育長 橋田慶信 様 長崎市教育委員会 教育総務部長 前田孝志 様 長崎市教育委員会 教育総務部 施設課長 西原政彦 様 長崎市文化観光部長 股張一男 様 長崎市文化観光部 文化財課長 大賀史郎 様 長崎市企画財政部長 片岡研之 様 長崎市企画財政部 都市経営室長 岩永浩 様 長崎市企画財政部 長崎創生推進室長 山田尚登 様 長崎市企画財政部 大型事業推進室長 赤倉史明 様 長崎市まちづくり部長 片江伸一郎 様 長崎市土木部長 吉田安秀 様 長崎市中央総合事務所長 大串昌之 様 長崎市理材部長 小田 徹 様 長崎市環境部長 宮崎忠彦 様 長崎市原爆被爆対策部長 中川正仁 様 長崎市秘書広報部長 原田宏子 様 長崎市議会議長 佐藤正洋 様 長崎市文化財審議会 会長 下川達彌 様

養生所を考える会 代表 池知和恭

標記の件、下記別添資料をお届け致します。

当該資料に於ける提案と要望と趣旨につき、御理解を賜り、御検討、実施頂けますようお願い申し上げます。 記

#### 1. 別添資料 (各一通)

(1)『(長崎)医学校等正門両翼石垣等石垣群 並びに、旧長崎市立佐古小学校北西門前扇型石段に関する提案と要望』

2020年(令和2年)3月11日 水曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭

以上